

継承の鋼 2 ~空っぽの弾 薬庫~

アザロフ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

多くの、大切な仲間を失ってから七年。

血に染まった海の上で、艦娘達は今尚戦い続ける。

設定資料集的なものをPixiv側にあげております。

内容は本編のネタバレなど多大に含んでおりますので、先に本編を読まれてからどう

ぞ。

設定だけでも気になるとおっしゃられる方は是非に読まれてください。

https://www.pixiv.net/novel/show.php?i
d||11820606

目次

第一章一幕 戦艦武蔵 1

第一章二幕 歓迎会 13

第一章三幕 日常 23

第一章四幕 初体験 28

第一章五幕 初陣 39

第一章六幕 真実の欠片 45

第二章一幕 狂犬と飼い主 52

第二章二幕 コーヒー色の心 60

第二章三幕 守りの術 69

第二章四幕 始まりの合図 73

第二章五幕 武蔵VS不知火 83

第二章六幕 企み 90

第二章七幕 狂犬不知火 95

第二章八幕 狂宴の後 107

間章の鋼 北上の退屈 117

第三章一幕 列島強化 133

第三章二幕 かつての残滓は指輪とともに 138

第三章三幕 記憶と思いで 146

第三章四幕 新たな指令 151

第三章五幕 軍事訓練 157

第三章六幕 軍事訓練二日目 169

第三章七幕 吐いた唾の向かう先 182

第四章一幕 奈落の足音 198

	第四章二幕	雲の形	207	第五章六幕	後方の憂い	306
	第四章三幕	排他的經濟水域	218	第五章七幕	湿った笑み	316
	第四章四幕	波乗り伊勢	224	第五章八幕	世界で一番大切なもの	
	第四章五幕	極めしモノ	232			
	第四章六幕	新たな力	241	327		
	第四章七幕	別れの日	252	第六章一幕	続・継承の鋼	348
	第五章一幕	太平洋奪還作戦	260	第六章二幕	右翼戦線	353
	第五章二幕	明丸	269	第六章三幕	救う手は我が身	361
	第五章三幕	太平洋奪還作戦 発令!		第六章四幕	軽巡棲鬼・亜種	367
278	第五章四幕	空と海の境界線	289	第六章五幕	鋼の誓い	376
	第五章五幕	日本太平洋艦隊VSア号艦	298	第六章六幕	神速の刃	382
隊				第六章七幕	記録の中の住人	390
				第六章八幕	届かぬ過去	403
				第六章九幕	濡れた刃	411

第六章十幕 マリオネット — 421

第六章十一幕 掲げた旗をおとした日

428

エピソード — 443

あとがき — 450

闘争の綱 — 454

第一章一幕 戦艦武蔵

通されたのは簡素な部屋だった。

予め執務室として教えられていたが、実際にあるのは壁に貼り付けてある近海、日本、世界地図の三種類と、奥に執務用の机と椅子があるだけ。本来置くべき資料用の本棚といった類は何処にもなかった。

そんな室内に、現在自分を除いて十名もの艦娘と唯一の人間。池上剣造提督がいた。秘書官である木曾は執務室に案内するとそのまま提督の隣に立ち、一緒にいた明石は入って直ぐ左の壁伝いの奥へと行く。そちらには残りの艦娘がズラリと並んでおり、幾つもの表情でこちらを見てくる。歓迎しているような者がいれば挑戦的に見てくる者。不思議そうに見る者もいれば退屈そうにしている者もいる。

統率が取れていないのかと疑わしく思わないでもないが、少なくともちゃんとしていることを考えれば、最低限のことはできているのだろうと第一印象ながらも納得した。

全員に見られている中、武蔵はしっかりと地に足をつけ堂々と歩み、部屋の中央で止まり、椅子に腰掛けている提督と真つ直ぐに向き合う。

「名を聞こうか」

「私は大和型戦艦の二番艦、武蔵だ。本日よりこちらで世話になる。以後、宜しく頼む」
「俺は池上剣造。階級は中将。この臼杵鎮守府を任されている提督だ」

まだ春なのに。もう春だからか。冬用の紺色でなく真つ白い軍服を着ている提督は、事務的な言葉を連ね、所属している艦娘を紹介する。

明石や間宮を最初に、古株から順次名前が上がっていく。

重雷装巡洋艦、木曾。

軽空母、鳳翔。

重雷装巡洋艦、北上。

航空戦艦、伊勢。

駆逐艦、不知火。

軽空母、龍鳳。

戦艦、大和。

戦艦、長門。

機動性のある駆逐艦が少なく、潜水艦がないことから偏りを感じるも、火力の面では悪くないのではと一先ず安心するが、少しばかり疑問が残る。建造直後のことだ。木曾に他から無敵艦隊と呼ばれているのだと言う話だが、この数、この戦力で本当にそうなのか、些か信じられないものだった。

そんなことを考えていると、提督から信じられない言葉が飛んでくる。

「早速で悪いが武蔵。一つ俺と手合わせをやるぞ」

「——は？」

言っている意味が理解できず、眼鏡がズレてしまった。慌てて直して再度提督に尋ねるも、

「俺と手合わせをしろと言ったのだ」

聞き間違いないのではなく、同じ言葉を繰り返されてしまった。

軽く聞いた話ではこの鎮守府は深海棲艦との戦争が始まり、艦娘が戦場に出始めた頃より続く古株だと。となれば必然艦娘の膂力がどれだけあるかなど百も承知のはず。大和型となれば尚更だ。

冗談なのではと艦娘一同の顔を回し見るも止める者は一人もおらず、中には野次馬ように、ニヤニヤ笑っている者までいた。

「冗談ではないのだな」

「無論だ。加減はいらん。これは提督としての命令だ」

何故艦娘が組手の類をせねばならないのか。そのような無駄なことに思わずため息が漏れそうになるがグツと堪え、椅子から立ち上がり側まで近寄った提督と真つ直ぐに向き合う。

戦艦は高身長が多く、その中でも大和型は更に高いことから百八十センチはあるであろう提督を、僅かながらも見下ろす形で視線をぶつからせる。

提督の射抜くような鋭い目つきは、泣く子も黙らせるほど威圧感があり、口はキツく結ばれていた。肩幅からもそれ相応に鍛えられているのがわかるだけに、力試しでもしたいのかと思いつつ、拳を握ってから一度開き、自分の力を知識としてでなく体で覚える。

——幾ら提督の命令でも命に関わる。ならば本気でやるわけにもいかないな。提督を守るのが最大の目的である艦娘らしい思考をし、胸元まで腕を上げる。

「いつでもかかってこい」

挑発的な言い分に、どうしたものかと木曾に一度視線を向けるが、やれと顎先で伝えてきた。

ならばと腹をくくり、右の拳を提督目掛けて振るった。が、

「——ええ？」

ダンツという激しい音が背中から聞こえたと同時に、視界が百八十度回転していた。一瞬のことではあったが、艦娘に備わっている装甲のおかげか痛みはない。損傷も特に。ただただ驚きだけがそこにはあった。

「まさか……」

「投げられたのさ、提督に」

ニマニマと笑みを浮かべながら教えてくれたのは北上だった。

最初見た時は退屈そうにしていたが、今の出来事が余程愉快だったのか、憎たらしい笑みを浮かべている。だが、今は投げられたという事実には強かった。

投げられた影響で乗り上げてしまっていた机から降り、再度提督と向き合う。

「どうした。もう一度やるか？」

「無論だ。艦娘が人間相手に負けて良いはずがない」

「いい顔をしている」

初めて見る提督の微笑に誘われ、再度繰り出す右拳。今度は加減など無い。本能が必要ないと言っている気がしたため、全力で振るった。

重巡の一撃が人間が振るったハンマーならば、大和型の一撃はモンケンさながら。

勿論そこまで差があるわけではないが、それだけのイメージを抱きやすい程には差があるのもまた事実。人間など容易に貫け、引き裂けるといふもの。当然全力ならば繰り出す速度も上がる。にも関わらず、

「これは気持ちのいい投げられっぷり」

またしても投げられてしまった。

今度は加減などなかった。間違いなく本気の一撃だったのに完全に見切られ、仰向け

にさせられている。

艦娘に肉弾戦など不要だが、これほどまで綺麗に投げられると、どうしても一本取りたくなってくるが、どうやらお終いのようで、間宮が全員に指示を出していた。何でも、も少ししたら食堂のようなどころで自分の歓迎会があるとかどうか。そんなニュースのある言葉を並べている。

「どうだ」

提督と木曾を残し全員出ていく中、問いかけられる。

言うまでもなく先程のことだろう。逆さだった視線を正常に戻してから向き直る。

「どうもこうも人間を。提督を守る艦娘が提督より弱いのではお話にならないだろ。悔しい以前の問題だ」

「これでも俺が一番弱いんだがな」

「じゃあ私は更にその下というわけか」

嫌味を込めて言い放ち、一度視線を逸らす。

外の景色に向かって溜め込んでいた息を解き放ち、軽い気持ちの整理をしてから視線をぶつける。

「で、何の意味があるんだ。艦娘に接近戦をしろつても言うつもりか？」

「そうだ」

冗談のつもりで言った言葉なのに完全に肯定される。

「冗談にしては笑えないな。木曾さん。あんたからも言ってみてやってくれ」

声の上はおどけてみせるが真顔なのは崩せないようで、どういふことだと木曾に振るが、予想していた台詞と全く違うものが返ってくる。

「嘘でもなければ冗談でもない。最終目的は肉弾戦ができることだ」

自然と目が細まる。

つまりこの二人は言っているのだ。艦としての誇りを。大日本帝国最強の砲を持っている自分に向かって砲撃は行わずに腕っ節で戦えと。

これを侮辱と捉えなくてどのように受け取れというのだ。

気付けば艦装を済ませ、砲の角度を調整。秘書官である木曾に向けていた。

「大和型の主砲の威力、味わってみるか？」

「大和に比べて随分好戦的だな。まあいい。剣造、少し借りるぞ」

「構わん。お前に任せる。だが宴には遅れるな」

「当然だ」

短いやり取りを済ませ、木曾が小さく笑む。そしてこれから散歩にでも出かけるような軽い足取りで扉へと進んだ。

「これから海に行くぞ。お前が抱えている疑問にある程度は答えてやる」

教えてくれると言うのだから断る理由もなく、睨みつけたまま先行く木曾の背中を追う。四十六センチ砲の威力を味あわせてやると意気込みながら。

鎮守府から海までは基本的に近いため、時間はかからない。だが話し合いのみで済むならば陸であれば良いだけ。となると海に出る理由はただ一つ、砲雷撃戦をやるうとしているのだと予測し、自信たっぷりな木曾の鼻つ柱をへし折ってやる腹積もりでいた。

艦娘になつてからの処女航海をこのような形でするとはと小さな後悔がよぎるも、海に足を降ろしながら海中に沈めた。ここから先に浪漫など無いからだ。

海をかき分けながら全砲門に弾を込めて木曾が止まる瞬間を待つ。だが、やや気が逸りすぎていると自分と戒め、細く息を吐き出して落ち着かせる。

砲雷撃戦をするならば少なくとも数キロは沖にまででなければ万が一ということもある。仮にも古参である木曾がそれを考慮しないはずもないと思っていると、急に止まるよう指示が来る。海に出てまだ一分と経っていない。陸まで四捨五入して始めて一〇〇メートルは行くかという程度の距離で武蔵は待機を言い渡された。木曾はもう少しだけ沖へ進んでから振り返り、何でもないかのように言い放つ。

「御託を並べるのも悪くはないが、百聞は一見に如かずとも言う。つーわけで武蔵。その主砲を今からオレに向かって撃て」

「ハイ、か？」

てつきり沖でやるものなのだ。そしてもつと二人の距離が離れて始めるのだと思っていただけに、虚を衝かれる。

木曾と武蔵の距離は精々三〇メートルがいいところ。撃った感触が体を駆け巡るより先に相手に当たる程近すぎる距離。相手が戦艦ならばまだしも、重雷装巡洋艦など一撃で沈めてしまう恐れのある距離だ。

「正気か？」

「だから言っただろ。御託は良いと」

「だが……」

流石に建造された初日に仲間を轟沈させるなどやるわけにもいかず、怒りは消え失せ、躊躇いに支配される。が、

「安心しろ。その程度じゃオレに傷つけることさえできない」

「なんだと」

マグマが大地を割って吹き出るかのように一瞬で怒りのメーターが振り切った。

「後悔するなよ」

最後の良心が言葉となって現れるが、それ以降は何もない。ただ撃つのみ。

冷めた目つきで照準を合わせるが、距離が距離だけに初弾命中のイメージしか沸かない。そしていつ撃てと言われていないため、準備ができた直後に躊躇いなく引き金を引

き絞った。

音速を越える砲弾は衝撃を海へと残し、更に突き進む。

空気を割り、風を突き破り、木曾を穿たんがために。

決着は一瞬だった。

「なにを、した？」

その距離ゆえ風の影響程度でどうにかなるものではない。

なのに何故。

「何であんたは立ってるんだ？」

無傷のまま木曾はそこにいた。

傷ついた痕跡はない。避けたような素振りも。ならばどうやって？

積もる疑問だったが、たった一言で木曾は教えてくる。

「受け流したんだよ、お前の砲弾を」

洒落の利いたジョークだと一蹴したかった。が、それを否定できない自分がいるのも事実だった。

否定出来ないことが更なる困惑を呼び寄せるだけで、何一つ見えてこない。

「まだ納得してないようだな。もう一回試してみるか？」

木曾の誘いにまたとない機会と即座に了承。今度こそ何があつたかを見るべく、艦娘

としての機能をフル活用して木曾の動きを、一挙手一投足を見逃さないと神経を過敏にする。

狙いを定め、確実に当たる位置に照準を合わせて、再度撃ち放つ。

四十六センチ砲だからこそ来る強い衝撃を装甲が受ける中、砲弾の行方を探すが、またしても木曾は無傷のまま立っている。

「何がどうなっているんだ……」

「まだそこまでは見れないか。良いだろう。今度はお前でもわかるようにやってやる」

もう一度撃つてこいという木曾に最早投げやり気味に撃つ。

何が違うのだと消えない疑問をいだいていると、距離を空けていた木曾が近寄ってきた。そして一つ何かを投げってくる。

「それ、何だと思う」

受け取ってみるとそれは硬く、何かを貫きそうなフォームをしており、何よりも見覚えはなくても知識としては完璧にあった。

そんなはずはないと否定するも確かにそれは、自分が放った砲弾の弾頭部で間違いなかった。

トリックだと言いたかったが、砲弾から伝わる熱が今し方撃ったばかりの証拠として誇示している。

逃れようのない証拠に、武蔵は力なくその場にへたり込んだ。

「何なのだこれは。私は夢でも見ているのか」

「現実だ。だが安心しろ武蔵。お前も修行を重ねれば同じようなことが出来るようになる。オレ達は艦娘であつて艦ではないからな。できることが違うのだと思つておけ」

「違いすぎるだろ。」

言葉にすることもできず落ち込みもするが、途方もない現実について清々しいまでに打ちのめされ、自分の中で何かが変わつた。

「木曾さん。あんたが何をやろうとしているのかはまだわからないが、取り敢えず言わせてもらおう」

水上であぐらをかき、一気に頭を下げる。

「舐めた態度を取つてすまなかつた」

「気にするな。お前はまだ可愛い方だ。それよりもそろそろお前の歓迎会の時間だ。早くと戻るぞ」

差し伸ばされた手を受け入れ、立ち上がつてから木曾の後を着いて行く。今度は睨むこともなく、ただ純粹に慕う人に向ける眼差しで。

第一章二幕 歓迎会

乾杯の音頭を取るためか、提督は一人立ったまま一度ぐるりと見渡し、口を開く。

「それでは武蔵の歓迎会を執り行う」

食堂マミヤに臼杵鎮守府の面々が集まった。キャパシティが四人がけテーブル二つとし字のカウンターが七席であるため、全員が席につくと椅子の殆どが埋まってしまっている。そのため元々あまり広い方でないマミヤの中がかなり窮屈に感じられるが、今日が初めての武蔵は取り敢えず流される形で提督の隣に腰を下ろしていた。

「弁舌はあまり得意ではないため、長々と話すつもりはない。まずは武蔵。うちに来てくれたことを感謝する」

真つ直ぐな目のまま礼を述べられ、悪い気はせず、表面上何でもない風に取り繕いながら、内心ほくそ笑む。

「今日は急な案件でない限り連絡が来ないようになっていいる。故に昼間ではあるが楽しんでくれ。全員グラスを手に入」

各々自分の呑む物。酒の種類が決まっているのか違うグラス、違う色の液体が入って

おり、見た目はバラバラだが、何故か一体感があった。

武蔵も目下にあつた生ビールの注がれたジョッキを目元まで掲げる。妙にそわそわする空気に当てられ、鼓動が少し早くなるのを感じ取る中、

「それでは乾杯」

「「「「「「「乾杯！」「「「「「「「「「「「」

遂に宴は始まった。

あちらこちらからグラスやジョッキ等をぶつかる音は歪ながらも不快さはなく、寧ろ高揚させる心地よささえあつた。

武蔵も誘われるままに右の提督、左の木曾と音を奏でてからジョッキを煽る。味覚情報として予めあつた生ビールの味は、実際に知ること具現化する。苦味があるのに爽やかで、後を引かないキレのある味わいは意外と悪くない。

「いきなり一気飲みとは豪快だな」

ただ好みかと言われるとそうでもないため、ビールを一気飲みすると、木曾の呑んでいる物に興味が湧く。

「それは何だ」

「ウイスキーだが、試してみるか？」

木曾が呑みかけのグラスを渡してくることからそのまま受け取り、舌先に乗せるよう

にして味わう。

香りや味わいは悪くないのだが、これも惜しくはあるも、求めている味ではない。

「気に入らなかつたか？」

「悪くはないが、もうちよつと違う物が好みなようだ」

「近いか。となるとウイスキーの中のどれか。もしくはブランデーかもしれないな」

「ならば近いうちに人里で幾つか見繕うか」

木曾と提督は話をしながら慣れた手つきで煙草を取り出し、口に啜えた。それが合図だったかのように武蔵を除く全員が煙草の類を取り出し、吸い始める。

マミヤの中は一瞬にして紫煙によつて支配された。

目の前に出されていた料理の匂いよりも煙草の臭いの方が強かつたが、不思議と嫌な気持ちにはならなかつた。

「こいつもやつてみるか？」

物珍しそうに見ていたからか木曾に吸いかけを渡され、一つ口内で吸つてみると、

「存外に悪くないな」

思っていた以上に気に入る、このまま貰おうかと思つてみると木曾から新しい物を渡される。一言例を述べてから木曾から受け取つたのは、ゴールドシルシガリ口。何でも数年来吸い続けているとか。

通りで手慣れているわけだ。

軽く香りを鼻先で感じ取りながら微笑を浮かべてから火をつけた。やはり味は悪くない、どころか好みなようで、想像と味がシンクロする。

「最近は何だの香りだの大体持つて建造されるから損だよな」

「損なのか？」

唐突に話題を振られ、首を傾げる。既に知っていることが当たり前な武蔵としては、知らないことに対し、逆に戸惑ってしまうのではとさえ思うほどだ。

「ああそうか。最近の艦娘は日常に含まれる情報。嗜好品の類まで手に入れたのだったな」

「なんでこんなことになったのか知らないが、はた迷惑なことだよ。お陰で未知じやない未知とか意味不明な状態になってるし」

「その影響で艦娘間によるデータリンクが行われたのでは。などと勘ぐる者もいたな」
くだらなそうに提督は煙草を吐き出し、ジョッキの中の液体、麦茶を流し込む。

木曾は木曾で自分がそのようなことになり、あまりいい印象がないようで、フライドポテトを噛みちぎるように咀嚼していた。

何でも過去の艦娘には自分のことと、人としての最低限の常識程度しか情報がなく、五感の類は何一つ持つていなかったそうだ。だが一年ほど前を境に唐突にその手の情

報が最初から持っている状態にされたのだとか。

ただどうせならば、

「情報が追加されたのならば、装甲の扱い方も増えていたら良かったのだがな」

今日見せられた誘導性艦装装甲（インダクティブアーマー）を使う術が含まれていないことに、疑問がないわけではない。あれだけの力を見せられたのだ。あつて困るものではないのは肌で感じ取っているだけに残念でしかない。

「そっぴやどうだったのさ、武蔵の相手は」

「字カウンターの角を境に不知火と二人で吞んでいた北上が急に話を振ってくる。態度が態度だけに会った初日だが、やや癪に障る言い方も相まってあまりいい印象はない。

「どっかの誰かさんよりは大人しかったな」

「うっへ蕨蛇」

木曾の言葉に軽いかめつ面を浮かべているのにいい気味だと満足げに浸る。

「そんなに好戦的だったのか？」

「ちよつと新人黙つてようか」

「凶星だったのか険のある物言いをしてくる。が、

「ほお、オレの前でそういう態度をとるか」

「うっごめんなさい」

木曾に窘められ、大人しく引き下がった。自分には強気だが木曾には弱いようで、その反応に思わず笑ってしまっていると、北上の隣りにいた不知火からガンを飛ばされて、いることに気付く。

「今、北上さんのことを笑いましたか？」

「つい可笑しくてな」

心境を正直に答える。師弟といった類の関係なのかと思ひ、軽い気持ちで言ったのがどうやらその程度の間柄ではなかったのか、大人しい雰囲気から一変、殺気が溢れてきた。

「北上さんのことを馬鹿にするのなら、不知火が黙っていないですよ」

静かに置かれたグラスとは相反するように感情が迸っている。

他の艦娘も殺気に気がついたのか、先程まで和気藹々とした雰囲気は消え去り、耳に重い静けさが落ちる。

唐突な変化に武蔵は焦りを感じ、反射的に唾液を嚙下した。

不穏な流れとなり、どうするべきかと思案していると、助け舟がやってきた。

「北上」

木曾の指示に従い、頭を掻いてから北上は不知火と向き直った。

「しようがないなあ。はいはいどうどう」

「でもアイツは北上さんのことを」

「あの程度問題ないっていつも言ってるじゃん」

「ふにゃ」

尚も反発をしていた不知火だったが、北上に頭を撫でられた途端に情けない言葉を漏らしながら殺気は霧散、真つ赤ながらもだらしない表情で受け入れていた。宛ら犬猫の類だと思いつつもまた噛みつかれては厄介なために、大人しく酒と一緒に飲み込んだ。

再び喧騒の戻った食堂内。武蔵は酒を数口呑んでいると口の中が寂しくなり、近くにあったホタテのカルパッチョに手を付ける。新鮮だからか味は申し分なく、磯の香りと共に歯ごたえも楽しんでいると背後に気配を感じた。

「おーっす武蔵。呑んでる〜」

背後から抱きつかれ、驚きつつも真横までやってきた顔に視線を向けると、そこには柔らかな表情をした伊勢がいた。

「誰かと思えば伊勢さんか。見ての通りだ」

取り敢えずとして自分用に出してもらったジャックダニエルを掲げてみせる。氷が溶けてきたことから子気味よい音が奏でられた。

「私のことはさんとかつけなくていいよ。そのまま呼び捨てで呼んで」
「……わかった。今後伊勢と呼ばせてもらう」

良いのかと聞き返そうかとも思ったが、本人がそうしろと言うのだからと、そのまま受け入れて呼び捨てで名を口にする。

本来先に建造された者へは敬称である《さん》をつけるもののだが、どうやら伊勢は敬称で呼ばれるのが嫌なようだ。

「で、伊勢は呑んでいるのか」

「そりゃ勿論！ 生もいいけどジンって最高だよね」

抱きついたままジンのロックを器用に呑む。喉の音が聞こえるくらいの飲みっぷりは、感心してしまいそうなほどであった。

ジンのロックをそのように呑むものなのかはやや疑問は残るが。

「ところでさ、武蔵は装甲のことちゃんと言明受けた？」

「誘導性艦装装甲のことか？ まあ簡単にだが」

「そっか。じゃあ覚えたい気持ちもあつたり」

「無論だ。使えて損はないだろ」

詳しい説明はまだ受けていないが、それでも力として有益であることは目の前で見せられているため、もっと知りたい気持ちはそれ相応にある。今日は自分の歓迎会という

ことで後日に教えるからと先延ばしにされているが、知りたい欲求は消えていない。

「へえ、じゃあこれは成長が早いかもね。ね、木曾さん」

「まあな。自尊心(プライド)を持っていてるが否定的じゃない。新しい物事を飲み込もうとする意志もあるから今後が楽しみではあるな」

目の前で褒められ、むず痒い感じがしながらも悪い気はせず、口角が緩むのを隠すためにグラスを傾ける。

「そうそう。特に長門には苦労したもんね」

「む、私がどうかしたのか」

話題を振られ、一人静かに呑んでいた長門が顔を上げる。

生真面目そうな見た目は顔に表れており、最初見た時はつけていたヘッドギアは邪魔なのか外されており、長い黒髪を垂らした姿は大和撫子よりも提督に近い、軍人や武人といった雰囲気を漂わせている。

「ん、長門が装甲を覚えるのに時間がかかった話」

「……それは致し方ないだろう。あのような力があるとは知らないのだから」

真顔を曇らせている辺り、覚えるまでの苦労が垣間見えた。

「どれくらいかかったんだ?」

「どつちの意味で?」

これから習う身として、参考までにどれだけ時間を有したのか気になり尋ねてみたが、逆に質問で返され困惑する。

「どつちとはどういうことだ」

「力を意識して使えるまでになったのか、力を受け入れた時のどつちかかってこと」

「受け入れる？」

伊勢の言葉に尚更困惑する。あれだけの物を見せられたならば受け入れも何も無いのではないだろうか。それが武蔵の感覚なのだが、長門は違つたのだろうかと思し見すると、渋面を作っていた。

「そ。長門はねく。受け入れるまでに二ヶ月もかかったんだよ。苦労したなく」

「因みにだが伊勢は口で説明しただけで受け入れたな」

伊勢の遠い目にも気にはなるが木曾の捕捉にも中々に驚かされる。

「口だけでということとは見てもいないのに、と言うことか」

「ああ。教える側としては楽でいいが拍子抜けでもあつたな。最初は否定的な奴が多いから余計に。まあその分じゃ武蔵は楽な方だ。その日に受け入れているからな」

「ほお。もつとその辺を詳しく聞きたいものだな」

中々に興味深い話に根掘り葉掘りと聞くことに。

まだかと回りに飽きられつつも続けていたため、気付けば一同は夜まで呑んでいた。

第一章三幕 日常

武蔵が建造されて一週間。特に何かがあつたということではなく、大凡標準的な艦娘としての訓練と座学を繰り返すだけで、出撃することは一度もなかった。

装甲の指導といった類も何一つ無く、尋ねても後ではぐらかされるだけで直接的に教えてもらつたのは建造された日のみだった。

「で、どうだ。俺以外の人と会うのは」

現在は臼杵市の更に奥。人里がある宇佐方面から帰ってきている最中だった。

買い出しも含め、戦場に出る前に守るべき存在を見せるために連れ出された訳だが、正直なところピンとこない。

「特に何も。ああ、一応生きてはいるんだなといった程度だ」

見て、触れて、それでも尚武蔵には守るべき対象には映らなかつた。艦娘はあくまで提督を守るための盾であり矛盾なのだから当然ではある。そして提督もそれがわかつているからか、そうかと軽く流すだけで、指摘したり補足することもなく会話は打ち切られた。

手持ち無沙汰になったことから、武蔵は木曾に貰つたシガリ口を取り出してから火を

つけることに。窓を空けていなかったことから一気に車内はシガリ口の香りで満たされる。ただそのままにすると提督に悪いため、適度に香りを楽しんでから窓を開けて煙を逃した。

吸い込まれるように外へと逃げていく紫煙を視線だけで追いかけると、瓦礫の山が最初に目につく。人間が住んでいた時の名残がまだ微かに残っているが、大部分は雑草が生え、緑に覆われ始めている辺り、自然に還りつつあるのでは無いだろうかと何気なしに思う。

現在通っている道路もひび割れたアスファルトから一部飛び出している辺り、自然の強さというものを目の当たりとする。

そこでふと気づく。小さな違和感に。

「えらい道路が綺麗だな」

つい思考が口から漏れ出たが、気にせず先を続けた。

「歩道とかは雑草ばかりだが道路上は少ないし舗装した後も見えるが、まさか提督がやったのか？」

「それこそまさかだ。舗装は昔艦娘お前達に頼んでやってもらったのを維持してるだけだ。雑草が少ないのもその一環で引き抜いているからだな」

言うのは簡単だが距離が距離であり、他にも花壇に菜園等もやっている。当然ながら

提督としての業務を並行してやっているのだから仕事量が多いのではと疑問に思っていると、提督から察してか補足してきた。

「木曾達にもたまにやらせているし、間宮が率先して動いている。俺一人でやっているわけではない」

まだ全員がどのような日常を過ごしているかは把握していないが、先日間宮が一人、陸路で鎮守府外に出ているのを思い出し、嘘ではないのだろうと納得した。その内自分もそこに交じる未来を想像しながら。

程なくして白杵鎮守府に到着すると、そこで待つていたのは鳳翔と大和だった。ここ数日見ている限り、どうやら大和は鳳翔を慕っているようで、北上と不知火の関係程ではないが、離れている姿を見かけたのは二度くらいだろうか。

二人で仲良くポニーテールを揺らしながら歩み寄って来、下車した提督に向かって頭を下げた。

「提督。買い出し有難う御座います。後はこちらで片付けておきますね」

「頼む。他に帰還した者は」

「木曾さんでしたら既に。龍鳳と長門も先程戻ってきました」

柔らかい所作と物言い、それでいて凜とした立ち振舞いはこれこそ大和撫子なのではないかと思えるほど美しかった。大和が慕うのも頷ける。

「明石さんはもう少し釣りをするので遅れるそうです。北上さん、不知火さん、伊勢さんの三名はもう直終わるそうです」

鳳翔の言葉を引き継ぎ、大和が現状報告をした。

物腰の柔らかかった鳳翔とはうって変わり、ハキハキとした物言いに、性格の差が伺える。

身長差で大和のほうが圧倒的に高いにも関わらず、一つ一つの行動を見てみると鳳翔が大和の母親に見えなくもないのが何とも可笑しく、頬が緩む。

「武蔵どうしました？」

「いや何でもない。提督。この後私の予定はどうなっている？」

大和に目ざとく見られていたため、話題をすり替えることに。

少なくとも決まっていなかったことは事実なだけに後ろめたさはない。

予定の確認のためか、手に持っていたクリップボードに目を落としながら暫し思案をしていたが、決まったのか視線がぶつかる。

「武蔵。お前も片付けを手伝っておけ。基礎教養は終わっているから今日は残りの時間を自由に使って構わない」

一度言葉を区切り、クリップボードとを目が行き来してから決定事項を告げられる。

「明日はお前の初陣だ。敵艦と戦うことはまださせないが、心構えだけはしておけ」

「無論だ」

不敵に笑んで見せる。

まだ海戦は許可されないが、それでも装甲を使った戦いを生で見られるのは、この一週間お預けを食らっていた武蔵としては興奮を抑えろというのが無理な話。心臓の脈動を感じ取りながら、早く明日が来いと海を睨みつけた。

「気持ちには分からないでもないけれど武蔵。先ずは食料品を運びますよ」

高揚した気分を台無しにすることを姉妹艦に言われ、ジト目で見ると鳳翔にクスリと笑われてしまい、なし崩しで落ち着いた興奮をしまい込み、ため息混じりにトレーラーから荷物をおろし始めた。

第一章四幕 初体験

ブリーフィングルーム
作戦会議室にて、明石と間宮を除いた全員が集合していた。武蔵は新人ということも有り、最前列の木曾の隣に腰を下ろし、一人前に立っている提督を目で追いかける。

「今回は四面作戦を実行する。振り分けは以下の通りだ」

提督は板書に長方形のマグネットを貼り付けていく。マグネットには黒いマジックで名前が書かれており、同じく板書に貼り付けられている日本近海の地図の上に名前が並ぶ。

四面作戦と言っているだけあって四つのグループができており、向かう場所の近くに名前が貼り付けられているようだ。

「私は沖繩か……」

姉妹艦がどのような最後を遂げたかを知っているため、思うところが無いわけではないが、大和を盗み見ても特別気にしている素振りはないことから、他に意識を回すような心がける。

よく見れば大体が遠くまで出撃指令が下っており、一番の遠方だとロシア領付近まで北上する艦隊もあるほどだ。おまけにあくまで白杵鎮守府内の艦娘だけで行うため、一

艦隊につき一名から三名と、かなり心許ない数での作戦行動となるようだ。

まだ本格的に戦場を経験していない武蔵としては正気を疑わざるをえないが、回りを見回しても、誰一人怖気づくどころか緊張している素振りさえなかった。ちよつとした仕事を片付けに行くような空気だったり、北上のように遠征すること自体を面倒臭がっているような者がいるだけ。

これが白杵鎮守府では当たり前なのだと言いつつ霧囿気が教えてくれた。

「先日の繰り返しとなるが、武蔵。お前は何かあった場合、自分が助かることをだけを考えて行動するんだ」

「身の程は弁えているつもりだ」

「ならばよし。木曾。そちらは頼んだぞ。長門も無理はするな」

「あいよ」「承知した」

同じく沖縄へ行く木曾と長門に確認を取り、満足がいったのか、全員の顔を見回す。

「作戦は特に無い。いつも通り殲滅したら良いだけだ。では皆の無事を祈る。全員出撃だ！」

「「「「「了解」」」」」」

普段噛み合わないことが多々ある鎮守府だが、それでも提督命令になるとズレのないキビキビとした対応へと変化する。艦娘としては当たり前ではあるのだが、それでもこ

れから戦場に赴く身としては一つの安心感を覚える。

「それじゃあ武蔵、これからが本当の歓迎会だ。着いてこい」

先行く木曾と長門の背中を追いかけるため、武蔵も席を後にした。

「いいな。私もたまには木曾さんと一緒に行きたいな」

外に出ると、春風と一緒に届いたのは伊勢の声だった。

「そう言うな。北上と不知火の面倒を見れるやつはそういないんだ。頼むぞ伊勢」

「わかつてるよ。でも一緒に出撃するの、約束だよ」

風のように言うだけ言って、風のように防波堤に向かって走っていき、そのまま海に飛び降りる。

「今日は鳳翔さんと一緒に無いですね……」

「提督がお決めになられたことですよ。それに龍鳳だっているではないですか」

「軽空母としてまだ鳳翔さんの域には達しておりませんが、頑張らせて頂きます！」

飛び降りていった伊勢の艦隊とは打って変わり、三名とも階段を使って海に向かう。

その後を木曾が続くため、武蔵もまた階段を使って海面付近まで下降し、海へと足を差し出した。

陸で感じる潮風を数倍濃くしたむせ返りそうな程の臭い。これから戦場へ向かうという心持ちが神経を過敏にしているのか、訓練時よりも更に強く嗅覚が働いているよう

だった。

「全員いない、か」

平静を心がけるために周囲を見回すが、先に降りた面々の姿はとうになく、海面に波紋が残っているだけ。

「あれが縮地」

望遠機能を使い遠くへ目を向けるとやっと存在を捉えることができたが、短時間であの距離まで移動できる事実には、改めて装甲の便利さには舌を巻く。

「どうする武蔵。お前も体験してみるか」

「体験と言われてもな。私は装甲の使い方など知らないぞ」

「そんなことはわかっている。オレがお前を担ぐだけだ」

担ぐと言われ軽く想像してみるが、木曾の身長は一六〇センチに満たない。一八〇センチを有に超えている武蔵を担ぐにはアンバランス過ぎて、思わず表情が曇る。

「なんだ不満そうだな」

「いやそうじゃないんだが。実際体験してみたかも知るがどうもな」

「体格差なんて関係ないだろうに……長門ならいいか？」

「む、確かにそれならば」

同じ戦艦。同程度の体格なため気持ち的にもスッキリするだけに頷いてみせた。

「ならそれで決まりだ。長門。悪いが頼む」

「問題ない。が、どう担げばいいのだ？」

「手つ取り早くいくならおんぶだろ。艦装の上でも気にしないならそこでも良いんじゃないか？ お前改二になってから砲台の部分が平になってたろ」

白杵鎮守府の武蔵を除く艦娘は改以上しか存在しない。そして武蔵より一つ前に建造されている長門ですら、改二と呼ばれる二度目の改造を施されている。

木曾に言われるまま、長門はまだ出していなかった船体部分を出現させた。各艦は予め資料で見っていたために驚きはないが、それでも実物を見たのは今日が初めて。資料とはまた違った力強さを感じさせられる。

「ふむ、確かに乗れそうだな。武蔵が良いのなら私は構わないが」

「それはこちらの台詞だ。良いのか？ 主砲の上だぞ？」

同じ戦艦であるために主砲にどれだけの誇りがあるかはわかる。木曾に軽くない言葉はしたが、それでも完全に諦めたわけではない。だからこそ長門も同じなのだとばかりに思っていたが、

「鍛錬にもなるし問題は何処にもない」

あつさり違うのだと否定され、少なからずショックを受けてしまった。戦艦の主砲はそれ程までに意味のないものなのだとされているようだ。

「本人が良いというのならば否定するつもりはない。失礼させてもらう」

不機嫌を隠しながら軽く跳躍。体重を分散させること無くドカリと左側の三連装砲の砲台に横向きで腰を降ろした。

「風圧は調整出来ない故、気を付けてくれ」

長門は特に気にした素振りも見せず、体幹がズレてしまうようなこともなくあつさりと受け止めた。それが尚更シヤクに触るのだが、雰囲気としては何でもないかのように振る舞う。

「ケツはオレが持つてやるから長門は自分のペースで進め」

「承知した」

「武蔵も何かあれば通信を飛ばせ。それじゃあ出港のお時間だ」

木曾の言葉に合わせ、武蔵を乗せた長門が跳び出した。

これまで経験した物を全て過去に置いていくかのような出来事が、武蔵の身と心を襲う。

突き抜ける風。流れていく景色。

あんまりな衝撃に思わず上半身を後ろに持つて行かれるも、何とか堪え耐えてみせるが、二度目の跳躍で再度持つて行かれそうになる。

『おいおい大丈夫か?』

『こゝ、これくらい問題はな』

余程危なげに見えたのか木曾が心配して通信越しに尋ねてくるが、大丈夫だと強がってみせる。

その間に三度目の跳躍がやってきた。余裕そうに座っているゆとりはなく、砲塔を両手で握りしめてしまっているが、ツツコまれたりしない辺り、木曾と長門の氣遣いに感謝しつつ耐え忍ぶことに。

『この調子なら三時間程度で着きそうだな』

片道三時間もかかる事実にした笑いさえ出さず心の隙間もなく、懸命に耐え続けた。それからノンストップで進み続けた武蔵達は、二時間五十分後には沖繩本島を視界に入れた。

数時間振りの自分の足で海の上に立てることに、安心感と同時に懐かしさを覚える。

「相変わらず寂しい場所だ」

げっそりした武蔵の隣で木曾がポツリと呟いた。

深海棲艦との争いが始まって十三年もの月日が流れている。最初の二年は殆どが深海棲艦側による人間の虐殺だった。沿岸部に住んでいた人は老人から赤子まで皆等しく殺され、辛くも生還出来た者は故郷を離れ、内陸地へと移住を余儀なくされた。

僅か二年の間に人類はその人口を三割りも削られたのだ。

だがそれはあくまで世界全体的話。島国である日本は違う。日本の総人口、その五割りも減らされている。全てが深海棲艦にやられたものではなく、家を失って凍え死んだ者、食が足りず飢えて死んだ者、自ら命を絶った者もいたのだとか。

港は死に、空港は沿岸部に造られることが多いため、その殆どが潰された。物資の供給は陸路が主となり、大量の輸入品に頼っていたそのツケが回ってきたのだと時の政治家は言っていたそうだが、艦娘である武蔵達には関係ない。

ただ艦娘とはかつて存在した、人によって造られた艦艇がベースとなっている。故人の生死には提督以外頓着はないが、作られた物にはそれ相応に思うところがある。

そして視界内には人工物の廃墟。沖繩の街が見えている。

沖繩はかつてアメリカとの戦争で激戦区の一つとして上げられる。その影響からか深海棲艦の出現数が異様に多く、現在は人一人住んでいない。立ち入り禁止区域として扱われている。

海岸沿いには無数の砲撃痕が見られ、どれだけの深海棲艦に襲われていたのか容易に想像ができた。

「もう少し南下するぞ」

木曾の指示に従い、見ていたうるま市や沖繩市から視線を外し、今度は自分の足で進む。

「今日は長門に頑張ってもらうから気合い入れとけ」

「初耳だがあいわかった」

「武蔵の参考にさせるからそのつもりでいろよ」

「なるほど。それは同じ戦艦の先達として恥ずかしいところを見せられないな」

慣れているのか特に気負った空気はなく、それでいて集中しているのがわかるだけにちよつとした嫉妬を湧き上がる。まだ初陣の癖に何をと思ひもするが、こればかりは致し方なかった。

「ところで何故沖繩まで来たんだ。沖繩には人が住んでいないのだろうか？」

ふと気付いて疑問を投げかける。

艦娘が戦場に立つのは提督を、ひいては人類を守るための行為だ。意味のない戦地に行く理由はない。

「あーその辺は色々ややこしいんだが、取り敢えず沖繩へは臼杵鎮守府^{うすきちんしゆ}だけでしか対応していない」

「どういふことだ」

「結論だけ言うなら練度向上に役立つから剣造は出撃させている、だな。他にも理由はあるが細かく言うとなんか大当りまで絡むからパスだ。どうしても知りたきや剣造に聞け」

思っていた以上に複雑な理由があるようで、今度気が向いたら聞いてみるかと思考の

片隅においておくことに。

南下を初めて二十分程経過。これまで深海棲艦と鉢会うこと無く進んで来れたが、これは結構珍しいことなのだ。木曾が教えてくれた。が、遂に水平線に影が映る。

沖繩には鎮守府がない。正確にはあったのだが、悉くが潰されているためここ数年、新しく提督が着任したことはない。そう、深海棲艦がどれだけいるか、どのような艦種がいるか等の情報は何一つない。

情報を手に入れる術はただ一つ。直に見ること。

そして今武蔵の視界には五百もの深海棲艦が映っていた。

「ちよつと待て。あれ全部相手にするのか!？」

「何を今更。創造にも教えられたろ」

「いや、だが……」

気を紛らわすためのジョークと受け取っていただけに、目の前の現実に言葉が続かない。

「あれは重巡棲姫か。他はflagship止まり。改まではないし空母もなしか。これは長門だけで方付きそうだな」

「ああ。それでは行つて来る」

呆然とする武蔵をよそに、何でもないかのように縮地を使って長門は単身で跳び出し

た。敵艦隊もこちらの存在に気付いたようで、その中でも突出した長門に注意を奪われたのか、武蔵達に砲撃が来ることはない。

「ま、のんびり見物していいようじゃないか」

「い、良いのか。あれじゃあ」

「安心しろ。あの程度なら長門でも一時間以内には終わらせられる」

事も無げに言い切られ、信じてよいのか疑ったほうが良いのか考えている間に、最初の結果が現れた。

第一章五幕 初陣

長門を狙ったと思わしき砲弾は、その全てが長門に当たることはなく、近くの海面に叩きつけられ水柱を上げていた。

「あの距離を外した？」

「違ふよく見ろ。あれは長門が受け流したんだ」

隣に立つ木曾に言われ、特定の敵に砲塔の角度から着水場所を予測。長門は迂回するでもなく真つ直ぐに突き進んでいることから、動きは早くはあつても計算は簡単なものだった。

——flagshipだと確実だな。あれなら絶対だ。

当たる角度だと自分でも確信して見続けていると、マークしていた複数の敵艦が一気に砲塔から火を吹かす。

完全に見切れてはいないことから途中の軌跡は追いきれていないが、それでも外れるとは思えない砲弾が、またしても長門に当たること無く反れる。

「装甲つてのは艦娘であれ深海棲艦であれ常に使い続けている。ただその強弱を理解して使える奴は最近増えてきてはいるが、それでも数が限られている。大半は未だに無意

識に任せているという有様だ」

「常に。ならば私もか？」

「その通りだ。だからこそ艦娘は一撃で沈むことはそう無いと言われているわけだ」

シガリ口を取り出し吸い始める木曾。戦場での煙草に一言苦言を出したい気持ちにもなるが、敢えて黙って続きを待つ。

「んでここからが重要だが、初日に言った通り装甲の本質は反発にある。だが残念ながら射程は体ないし艦装から十センチ先が限界。その結果肉弾戦するハメになつてるわけだ」

シガリ口を差し出してくるが、断ることに。今は煙草を楽しむ余裕等何処にもない。「でだ、初日にお前の砲弾を掴んでみせたのはちよつとした曲芸じみた物で、実際戦場ですることはないから安心しろ。おまけをつけるなら武蔵、当然だがお前の主砲は無駄じゃない。十分有効な武器だ」

「簡単に掴んで見せた人に言われてもな」

「あれはオレもお前も動いていない。撃つタイミングも角度もわかっているからできることだ。でなければ初速の早い四六センチの主砲を、あの距離で掴むなんてオレでもできな」

誇りとしていた砲を褒められ、悪い気はせず思わず口角が緩む。

それを気取られたくなくて、目に力を入れて無理に真顔を作る。

「重巡以上の砲ならば装甲を使いこなしている深海棲艦相手でも、目くらまし以外にも使えることが多い。大和型の戦艦なら尚更な。その辺は既に大和で実証済みだから一度詳しく聞いてみると良い」

大きく紫煙を吐き出し、潮風と一緒に空気中に消えていく。

「話は戻るが装甲の本質は反発だが、方向は一つじゃないつてのがミソだ」

「ん？ 相手に返すんじゃないのか」

「それは反射だ。反発と反射の違い。説明が必要か？」

「ああ、そういうことか」

反発はあくまで自分に来る障害に対して跳ね除けること。反射は自分に来る障害を障害の発信源に戻す行為。似ているようで異なることを改めて強調され、理解した。

「わかったのなら先を続けるが、装甲は反発だからこそ自分が好きな方向に反発する力場みたいなのを出せる。例えば今長門がやっている拳の先に出して真っ直ぐ殴るのが一般的だな」

いつの間にか敵艦隊の陣形内に入り込んでいた長門は、拳を振るって深海棲艦を沈めていた。時折砲撃音を鳴らしていることから、装甲を使った肉弾戦一辺倒ではないと知れただけでも今日の収穫としては十分だった。

「拳を突き出しても反発の方向を調整すれば色々できるぞ。例えば首の動きだけで避けられても、十センチ以内なら装甲の射程範囲だから、再度拳を振るわなくても装甲を当てられたりとかな」

慣れるまで難しいがと補足はつけられるが、それでも力がどんなものか想像し易いだけに大変ありがたかった。

「つまり反発を上手く使うと、砲撃に対し真つ直ぐ装甲をぶつけなくてもいいと」

「そういうことだ。これも慣れだが防ぐより受け流すほうが簡単だったりもするぞ。装甲ってのは使える量が艦種毎に違うが、それでも一度に使う量を調整しなきゃ次の瞬間に使えるなくなることもある。受け流すほうが装甲を使う量が少なくて済む分有効というわけだ。まあ角度を間違えたりすると大惨事になるがな」

木曾はクツクツと笑っているが武蔵には笑い話には思えず、釣られて笑うが引き攣ってしまい、乾いた声が漏れ出るだけだった。

「何はともあれ、初めて装甲を使った戦闘を見るのはどうだ。悪くないだろ」

「ああ。私も早く使えるようになりたいと思える程度にはな」

「そいつは重畳だ。因みに武蔵、お前という存在がいけない時の話だが、長門はうちの艦娘だと一番弱いから、お前はアイツを超えられるように頑張れよ」

「一番弱いだと？ あれでか」

齒を食いしばって装甲で砲弾を受け止め、反撃に主砲を一斉射。追い打ちに拳を振るって沈めている長門の姿に、最弱という言葉は不似合いにしか思えない。が、それが臼杵鎮守府での当たり前なのだ。今は無理矢理に納得した。

「ところで木曾さんならあの敵艦隊。どれくらいで片付けられるんだ？」

長門が最弱ならば木曾は最強。少なくとも提督から木曾が一番強いことは聞いているため、参考までにと聞いてみたが、耳を疑うようなことが飛び出した。

「そうだな。あの程度なら十分いるかどうかとてところか」

「冗談、だろ」

「ま、近いうちに実際見せてやるよ。見えたら、だがな」

予想の斜め上に行く言葉が次々に出てきて、最早想像すら出来ない。虚偽なのか真実なのかわからない内容に、驚きを通り越して呆れてしまっている。

「二本、もらっていいか」

ここまで来ると気を紛らわせていなければ此処から先、全て流してしまいそうな心境に一度断ったシガリ口を要求するが、木曾は快く差し出してくれた。

気分を紛らわすため、口内喫煙しかしてこなかった武蔵は肺にまで煙を送り込み、吐き出す。少々キツくはあるが、それでも気分転換には丁度良く、今尚一人戦い続けている長門には悪いが喫煙を楽しませてもらった。

そこで初日から思っていたが、つい聞く機会がなく、今日まで引き伸ばしていたことを思い出し、気分転換代わりに問いてみることに。

「なあ木曾さん」

「なんだ」

「最初に言われたが無敵艦隊って恥ずかしくないか？」

暫しの沈黙が落ちる。聞こえるのは遠くで鳴り響く砲撃音のみ。次に木曾の口が開くまで数秒要した。

「……………気持ちにはわからんでもないが回りが勝手に言ってることだ。オレ達じゃどうしようもない」

大人しく受け入れろと、どこか遠い目をしている木曾の横顔に、もしかして気に入っていたのかななどと邪推しつつも声には出さず、紫煙と一緒に飲み込んだ。

第一章六幕 眞実の欠片

「報告は以上だ。何か不備はなかっただろうか」

「問題ない。後はこちらで纏めておくから自由にしてくれて構わない」

「それでは失礼する」

沖繩戦の報告を終え、長門と木曾は退室していく。

それを見送ってから武蔵は改めて提督と向き合う。

「今日はどうだった。艦娘としては初の戦場なわけだが」

「そうだな。取り敢えず既存の概念が崩壊したってところか」

「大体そんなものだ。あれは艦娘の戦い方を変えた力だからな」

提督は窓の外へと首を向ける。武蔵も何となく向けてみるがまだ夕方には早いため、

淡い色合いはそこになく、山の緑が見えるだけだった。

「なんでわざわざ沖繩なんかに出撃させたんだ？」

「木曾から聞いていないのか？」

「練度向上の為とは聞いたが、それ以外は全部提督に聞けと」

「その辺りまで似たものだな」

ため息混じりの提督の視線を感じ、武蔵も戻してから何のことだと首を傾げる。

「まず練度向上は事実だ。ある程度の艦隊が、あそこには定期的に出現して拠点にするからな。お陰で昔に比べて艦隊を強くするのに困らなくなつた。だが聞きたいのは人が住んでいないところまでわざわざ出向く理由だろう？」

「その通りだ。こちらを襲つてこない場所を攻め入つて何がある」

危険を犯してまでやるにはメリットが薄いとさえ武蔵には思える。敵の規模がわからない場所に行くのだから、通常の戦場とは全く持つて異なる。これで死んでしまつては笑い話にもならない。

「あそこは人が住んでいた場所だ。そして深海棲艦との戦争。棲艦戦争が終わればまた人が戻る場所でもある」

「それは終わったらの話だろ。今はそれどころじゃないはずだ」
「最もな意見だ……ここは順を追つて話そう」

提督は湯呑みを傾け、口を潤してから先を続けた。

「知つての通り沖繩に人は現在住んでいないが、それでも生き延びた人もいる。その生き延びた人達が懇願したのが始まりだつた。もう一度故郷に戻りたいと。だがそれを許すわけにもいかない。それでも諦めきれなかつたのだらうな……艦娘が表れてからのことだ。同郷だつたり同心を探して署名まで行われた。その資料を手には大本営と直

接交渉をしに行つたというわけだ」

「それ程なのか。故郷というものは」

「立ち入り禁止になつてゐる区域は、大概軍の許可を貰えば行くことは許されてゐるが、沖繩といつた島民は不可能だからな。尚更なのだろう。そして提督が増えていくにつれ、優遇されていることに不満を覚える者が増えていったものがある。幾つかの要素がぶつかり合い、最終的に折り合いとしてつけられたのが沖繩の深海棲艦を全滅させることだつた」

「簡単に言つてくれるな。で、実際どれだけの被害があつたんだ」

予想するのは簡単だ。定期的に倒してゐる現状ですらあの数ならばその時はもつといたはずである。更に言えば装甲の使えない艦隊が気軽に相手をしていい数ではない。

ここ数年深海棲艦が活発化し、数が増え、実力も増してきてゐるそうだが、その差を鑑みても戦うには分が悪すぎるといふもの。しかし提督からの返答は信じられないものだつた。

「被害はない」

「いやそんなはずはないだろう！ 今日が初めての戦場ではあるが、あのような艦隊がいた海域だ。多少なりとも想像はつく」

提督が嘘をついてゐるようには見えないが、それでもおかしい。しかし、そこまで考

えてあることに気付く。

「実際幾つかの鎮守府が特別に連携を組んで向かったが、あまりの規模にそのまま引き返したのだ」

「成る程。そしてここにお鉢が回って来た」と

「その通りだ」

便利屋もいいところな扱いに思わず頭を抱えてしまう。

つまりは自分達の体裁を保ちつつ、最小限の被害で抑えたい。その結果の人柱として白杵鎮守府が選ばれているというのは、全く持って面白くない。

そもそもそこまで頼るくらいならば何故認めていないのか。一つの疑問が消えると別の疑問が湧き上がる。

「何故大本営はあの力を認めないのだ。装甲さえ使える艦娘が増えたならば沖縄の件も含め、深海棲艦などもっと早くに殲滅出来たかも知れないだろうに」

生で装甲を使った戦闘というものを見たために。だからこそ抱く。

「恐れているからだ」

「それは前にも聞いた。だがそうは言っていないだろ。先日オーストラリアの鎮守府が全て潰されたのに悠長なことを言っていられる状況なのか？」

そう。武蔵が建造されてから三日目のことだ。

鎮守府は世界中に存在し、艦娘も同じくいる。オーストラリアは第二次世界大戦にも参加していた国だけに、それ相応の艦娘を保有していた。その数四万。だが、ある日。たった一日でその全てが消え去ったのだ。

以前から深海棲艦の大規模艦隊が目撃されていたが、今回はその比ではない。アメリカの衛星が捉えた画像はまだ一部の鎮守府にしか回っていないが、それでもあまりにもショッキングなものだった。

敵艦隊数、大凡二〇万。

それが今太平洋を支配している深海棲艦の中で最も巨大な艦隊であり、恐らく地球上最大の艦隊でもある。

オーストラリアの一件以来、敵艦隊名は《タルタロス》と呼称された。

ギリシャ神話に出てくる神の名であり、地獄と同一視されている存在。皮肉が利きすぎて笑うことも出来ない。日本名では《あ号艦隊》とだけ言われている辺り、まだ愛嬌があるというものだ。

正直なところ武蔵はその画像を見た時、まだ信じていなかった。加工されたものだと軽く流していた部分もあるためだ。

だが今日、五百の敵艦隊を見て、そしてあれでもまだ少ない方だと木曾に教えられた。だからこそあり得ないと断じることができなくなり、次第に焦りばかりが募る。

「安心しろ……とは言えないか。しかし前から少しずつ変わってきてな。最近ではうちから指導をしに行くよう大本営から直々に言われている。オーストラリアの件以降大本営もざわついていることから、そう遠くない内に大規模な指導要請が来るだろう」

真偽の程は兎も角、少なくとも提督その眼には諦めや恐れなど無く、絶対に勝ちに行くという意志が感じられた。それだけでも武蔵の心の荒波は、落ち着きを見せ始めるくらいには安堵する。

「俺とて無意味にやられるなど真つ平御免だ。だがそれでも今直ぐ日本が襲われるのならば、お前達に出撃命令を出さなくてはならないのも事実。だからこそ武蔵、お前にも期待をしている。一日でも早く強くなれ」

「その言い方は狡いんじゃないか？」

視線を落とし、頭を掻く。

「こんなことを言われて嫌がる艦娘は存在しない。提督が期待していると知られて気分が高揚しないなど有りえはしない。

「なら明日から本格的に誘導性艦装装甲の扱い方を教えてもらえるんだろうな」

「当然だ。知識のないものに気軽に教えて良いものではないからな。そしてそれは今日で終えた。後は上を目指してもらおうだけだが、教えてもらいたい奴はいるか？」

「私が選んでも良いのか」

「教える内容やその時の状況によるが、メインで教えてくれる者くらいは覚える側が指定したほうが楽だろうと思ってな」

誰が教鞭を取るのか。北上や不知火だったら嫌だななどと考えていただけに、嬉しい誤算だった。

ならばと、とある艦娘の名を告げ、提督の了承を得てからその場を後にした。

第二章一幕 狂犬と飼い主

「おいおい最初の勢いはどうした。そんなんじや同じ戦艦どころか駆逐艦すら倒せないぞ」

「——くうつつ」

武蔵は目の前にいる木曾を眼鏡越しに睨みつけ、一步、足下の地面を踏み抜く勢いで前に出し、左拳を振るった。大和型の全力の拳は人体ならば問答無用で貫けるほどの豪腕だが、木曾は放り投げられた小石を避けるかのような軽い動きで避ける。

「遅い」

突き出した手首を引かれ、体勢の崩れたところを木曾の裏拳が炸裂。鼻にクリーンヒットしたことから鼻骨が折れ、ジンとした痛みが遅れて手で抑えた隙間から鼻血がこぼれ落ちてきた。

「もう止めにするか？」

「つまだまだ！」

やられたままなど気に入らない。例え相手が白杵鎮守府最強の艦娘であっても。

「その意気やよし」

鼻をこすって血を飛ばし、大地を蹴る。

アドレナリンを大量に分泌しながら果敢に攻め込む。

右拳を振るう。払われる。

左足で蹴り上げる。屈んで躲される。

足の軸を素早く入れ替えて右裏拳を放つ。受け止められ背中を突き飛ばされる。

何をやっても赤子を捻るかのような振る舞いに苛立ちが募り、がむしやらに突進した。身長差を考慮して低空に構えたタツクルは、木曾の腹部にぶつかるように突き進む。ぶつかる寸前に艦装も済ませ、総重量を増してからのタツクルだ。軽巡クラスとの重量差で確実に押し切れる。おまけとばかりにまだ出力はないが、ある程度使えるようになった装甲を前面に展開。

闇雲ではあったが、それでも自分が今持てうる限り最大の威力を誇る攻撃だった。それに対し木曾は、

「そんな、馬鹿な」

その場から一歩たりとも動くこと無く、防ぐこともなく、ただ立ったまま受け止めていた。

焦りとも恐怖ともつかない汗が額ににじみ出る。

「発想は悪くない。大和型の総重量は三百キロに近い。だが、肝心の装甲が薄いんじゃない」

まだ甘い、なっ」

「ぐあっ」

強烈な衝撃が胸部を襲う。

胸元に膝蹴りが入った影響で上体が跳ね上がり、たたらを踏んで堪えていると、その隙に木曾が直進してきた。

「——シッ」

短く息を吐くとともに出された左拳は脇腹を強襲。突き刺さった拳は肋骨を折り、臓器へと突き刺さっていく。

「があああああああああっっっ」

「つとすまん。ちよつとやりすぎた」

激痛に叫び声を上げている武蔵に軽い謝罪が落ちてくるが、そんなもの聞いている余裕などない。臓器に突き刺さった骨の影響で逆流し、口から黒っぽい血液を吐き出す。

「あくこれは結構重症だな。ドッグまで運ぶからジツとしてるよ」

痛覚を調整し、断ろうかとも思ったが、それすら痛みで思考が上手く纏まらず、言われるがままに抱えられて送られた。

——くそ……これで通算三十七敗、か。

ただ負けているわけではない。有効打を与えられていないのだ。ただの一度たりと

も。その為、悔しさが涙の代わりに止めどなく溢れでる。

「安心しろ武蔵。お前は強くなる」

慰めなのか励ましなのか、それとも本当にそうなのか。少なくとも今はそのどれとも受け取れず、沈められた液体の中で静かに意識も思考も消えていった。

沈んでしまった太陽。

暗く染め上げられた風景が、武蔵の視界を支配する。月が淡い光を落とし浅黒い肌を照らす様は、慰めてくれるかのようにも感じる程度に参っていた。

木曾との装甲の訓練を初めて早一月。訓練の合間など暇を見つけては勝負を挑んでいるが、三十七回も戦っておきながら、まともに木曾の体に触れられるのは受けたり払われたり投げられたりする時だけ。ダメージなど、皮一枚どころか臙装さえ傷つけることができていない。

八年も艦娘として生きてきているし、その分の経験やそれに見合った実力を持っているのはわかっているが、それでも一月経って差が縮まるどころか離れてしまっているのではないかと不安になる。

装甲の扱いはまだまだ未熟。縮地はできない。だが砲撃くらいならば防げるようにはなった。

それが自分の成長の証ではあるが、ただそれだけでも言えた。

自分で木曾に教えて欲しいと言っておきながら何たる様だと、自嘲気味に笑い声が漏れる。

そこへ予期せぬ声がかかった。

「そこで何をやっているんですか」

「海見ながら一人で笑うとか引くわー」

一人防波堤で黄昏れていたことから気が付かなかつたが、たつた今任務から帰還したのか、北上と不知火が艦装までしている状態で海面に立っていた。

二人は階段を使つて上がることはなく、海を蹴つて跳び上がりながら艦装していた部分を解除。綺麗に陸へ着地してみせる。未熟さに打ちひしがれていた武蔵にはそれ自体が嫌味にしか思えず、そつぽを向いて関わらないように流した。が、

「不知火はそこで何をやっているのかと聞いたのですが、聞こえませんか？」

どうやら不知火にターゲットにされたようで、そのままその場を去らず、わざわざ近寄つてまできた。

「何でもない」

今は一人になりたい気分なため。そして二人にあまりいい印象を未だ抱いておらず、やや棘のある口調で突き放す。

「なんですかその言い方は」

ただでさえ落ち込んでいて心の余裕の無い時に絡まれるほど疲れと、そして苛立つこととは無い。そんなこと不知火は知らないだろうし、自分がコントロールできていないのが悪いのだろうけれど、頭でわかっても感情というものは風のように揺れ動くもの。

不知火に喧嘩を売られたような気がし、立ち上がって彼女に詰め寄った。

「これでいいかい不知火さんよ」

「ふん。まだ満足に装甲も扱えない。デカいのは凶体だけかと思いましたが、態度もデカイようですね」

「駆逐艦が小さいだけだろ」

「心が狭い人に言われても説得力ありませんね」

徐々に高まる苛立ちは、いつの間にか怒りへと変化し始め、気付けば拳を硬く握りしめていた。

不知火もそれは同じなのか、見た目も体格も幼いながら、眼光だけは提督といい勝負しそうなほど鋭く、冷たかった。

そんなにじり寄る二人を止めたのは、意外な人物だった。

「はいはい。仕事片付けたばっかなんだから増やさない」

「で、ですがこの人は」

「後で聞いてあげるから。ああそれとも私よりその新人の方が大事だったりする？」

「そ、それだけは絶対に有りえません！ 北上さん以上に大事なものなんて有りませんとも！ 仮に上げるとしたら提督くらいなものです！」

「そっか、なら良かった。んじゃマミヤに行こうか」

「はい！」

先ほどまでであった不機嫌そうな顔などどこ吹く風。焦り顔を浮かべたかと思えば笑顔を浮かべ、北上の隣に並ぶ。

唐突な変わりように一人取り残された武蔵はどう反応したらいいのかわからず、握った拳の行方を探すも遠ざかるのみ。背を向けた二人を呆然と見つめていると、北上の足が不意に止まった。

「新人。えつと武蔵だっけ？ そういうのは提督か木曾さんにちゃんと見つめてくれる。でないところちも面倒なんでね」

言うだけ言い残し、北上と不知火はその場を去っていった。

「何なんだよ……」

いや、わかっている。そしてあの短い間で悟られたのだ。自分がどのような状態でい

たかを。ただ人を小馬鹿にするような性格だと思っただけに、その気遣いが嬉しい反面やや納得がいかず、灰色のため息が漏れ出た。

第二章二幕　コーヒー色の心

明くる日、武蔵は談話室にいた。

マミヤから持ってきたお湯でマグカップ内のインスタントコーヒーを溶かす。砂糖や牛乳といったものは入れず、黒々とした液体を自分と、そして向かいの席にいる木曾へ差し出した。

「珍しいな。いつもなら訓練の締めには模擬戦を言ってくるのに」

「まあたまには、な」

言葉を濁し、四人がけのテーブルに腰を下ろしてからコーヒーを啜る。

色といい苦味のある味わいといい、自分の心を表しているかのようで、ある種客観的に見れてどこかホツとした。

「たまにはインスタントも悪くないな」

普段コーヒーを飲む時は間宮か鳳翔が生の豆から淹れてくれるため、あまりインスタントは飲まない。今日もお湯を貰いに行った時に間宮から後で持つていくと言われたが、味を知っているだけに、そのようなしつかりしたものは似つかわしくないと丁重に断った。

「で、話つてのはなんだ」

「それが、その……」

折角木曾から切り出されたが、いざ本人を目の前にすると言葉が浮かびはするも、口から出ようとしてくれず、目が泳ぐ。

マグカップを握つては放し、握つては放しを繰り返すだけで一向に先へと進まない。

把握しているのだ。自分の自尊心が勝っていることくらい。

わかっているのだ。恥ずかしがっているだけなことを。

昨夜散々考え、何度も誰に相談しようか。本当に言つてもよいのか。言うならば提督が楽だなどと考えた末にこの場を設けたのに、一步も先へは進んでくれない。

いい加減何か言わなければ木曾が呆れて帰つてしまうのではなどと、関係のないことまで思考に現れ、最早何が言いたかつたのかすら消え去り、真つ白となる。

これは不味いとなんでも良いから口を開こうとした時、先に木曾が言葉を紡いだ。

「慌てなくても直ぐいなくなつたりしないぞ。まあ一度自分が淹れたコーヒーでも飲んで落ち着け」

そこで自分が手に握っていた物がコーヒーだったことを思い出し、煽る。だが、ゆっくり飲まずに一口で飲み干す勢いでマグカップを逆さまにしたため、器官に入り込んでしまい、思いっきりむせてしまった。

「だから落ち着けと言つたらうに。仕方のないやつだ」

「ゲホツす、すまゲツホツすまない」

喉に痛みを覚える程度には何度か咳き込む。幸いなのは艦娘だから淹れたばかりのコーヒーでも火傷しなかつたことと、吐き出さなかつたことだ。もし仮に吐き出していたら相談を持ちかけた木曾に向かって吐くところだったからだ。

「落ち着いたか？」

「ケホ。多少は」

「じゃあ落ち着いたついでにこいつを飲んでおけ。また取りに行くのは面倒だろ」

そういつて木曾は自分が飲んでいたマグカップを差し出してくる。まだお湯は残っているため新しく淹れたら良いのだから断ろうかとも思うも、折角の行為を無下にしないため、大人しく受け取つた。

やつと本当に心身ともに沈静化したのを把握し、細い息を吐き出してからいざ言おうと思つたところで、またも木曾から先制される。

「相談したいことの内容、当ててやろうか」

余興だろうか？

それが武蔵の正直な感想だった。木曾にはまだ相談事があるとしか言っていないだけに、当たるとは微塵も思つておらず、どうぞと先を促した。すると、

「装甲のこと。正確には武蔵。自分が本当に成長できているか不安で、といった所か」

ニアピンどころか完璧なまでの答えに思わず立ち上がってしまう。

「何で知ってるんだ。まさか北上さんに」

「北上がどうかしたのか？」

「あ、いや何でもない……」

どうやら昨夜の北上との一件は木曾には伝わっていないようで、平静を心がけながら腰を下ろす。

「だがどうして」

率直な疑問を通す。

かすっている程度ならばまだわかるが、文句のつけようがないほどの完璧な内容に、興味が湧いたためだ。

すると意外な言葉が帰ってきた。

「簡単だ。俺も昔そうだったからだよ」

「どういうことだ？」

「どうもこうもない。オレもお前と同じようなこと考えていたんだ。だからこそわかる」

「いや、でも、木曾さん……が？」

こちらには触れさせず、自分は一方的に相手を攻撃する。疲れた素振りなどただの一度も見たことがなく、日によってはシガリ口を吸いながらこなす程の余裕のある状態にいる。

あれだけの強者の風格を出しておきながら同じだったと言われても、少したりとも想像ができなかった。

「当たり前だ。最初からこんなに色々できるほど器用じゃないつての。言っちゃ何だが武蔵。オレはお前が一月かけてできていることが三ヶ月近くかかったんだぞ」

「そんな馬鹿な」

「嘘じゃない。何だったら鳳翔に聞いてみるか？ あいつはオレの半月後に建造されたが、先に装甲を伝えるようになったの鳳翔の方だぞ。ああ、明石さんの方が早いかもな」
そう言いながら通信を繋げたのだろう。武蔵の方にも通信が飛ばされているのに気付く。

『木曾どうかした？』

「明石さん、ちよつと時間貰ってもいいか」

『今は糸垂らしてるだけだから大丈夫だよ』

木曾がちゃんと聞いとけよ目で訴えかけてくるため、姿勢を正して音の意味を逃さないとばかりに傾ける。

「今武蔵と話しているんだが、どうもオレが昔弱かったことが信じられないようで、明石さんから教えてやってもらえないか」

『あーそういうことか。だから武蔵とも。それで武蔵、どこまで知りたい』

『どこまでつてそんな幾つもあるのか?』

『そりやああるよ。もう何十度ドッグに運んだから覚えてないくらいポツコポコにしちやつてるし。今じゃ完全に立場が逆だけど、昔は私の方が断然強かったんだから』

「信じられん……」

今日の前にいる人物と話が全くシンクロせず、違和感しかない。別の次元の話なんじゃと疑いたくなる程度には現実味がなかった。それほどには木曾の力を信じていると言つてもいい。

だが、過去は本当にそうだったようで、明石の思い出話は止まらない。

『それでね、縮地を初めて教えたときなんてまーったく上達しなくてさ』

「あれは明石さんが自分で教え方悪かったつて言つていただろ」

『木曾は私の弟子でもあつたんだからそこは察しないと。それでね、縮地をやつと覚えたかと思うと私に向かつて水かけてきちやつてさ』

「あれだつて教えてないほうが悪い。後装甲で十分防げたら」

『むー最近の木曾可愛くない。昔はあんなに明石さん明石さんつて、後ろ着いてくるく

らいだったのに』

「いつの話だそれは」

『私にとつては昨日のことですー』

思い出話なためか中々止まる気配はなく疎外感を覚えるが、それでも二人の間に信頼関係があり、そして嘘がないのがわかるだけに受け入れるには十分だった。

「二人共仲良いんだな」

自然とこぼれ落ちた言葉だった。

混ざりつ気のない純粋なまでの言葉が二人に溶け込み、返ってくる。

「あれでもオレの師匠だからな」『これも私の弟子だもの』

息の合った掛け合いに可笑しくて、思わず笑ってしまう。

『ほら木曾のせいで笑われた』

「何でオレのせいなんだ」

『私師匠だし?』

「意味がわからん……」

『そこはつとごめん糸引き始めたから一旦切るね。また何かあれば言つて。武蔵も遠慮せずにね。それじゃ』

謝辞を述べるより先に通信が切られてしまい、かといつて再度繋げるには憚られ、口

端を緩めながら木曾と視線を交わす。

「とまあこんな感じだが信じられたか？」

「それなりに。少なくとも木曾さんにも似たような時期があつて、努力を重ねて今に至つただんだということは」

「それだけわかれば十分だ」

そう、十分だった。伸び悩んでいるのが自分だけだと思つていたのが若干恥ずかしい気持ちにはなるが、同じなのだ。同じだったのだと教えられただけに、心は清々しさに満ちていた。

我ながら単純だとは思ふが、それでも心が軽くできたのなら寧ろ褒めるべきだと前向きに捉えられるようになる。

「昨日も言つたが武蔵、お前は強くなる。これに嘘はない。お前はオレにそっくりだからな」

「そうなのか？」

「ああ。明石さんも言つていたから多分間違いない。そしてオレがこの域まで成長したんだ。お前にだつて可能性は十分にある」

まだ推測の域を出ない、空想の産物にすぎない自分の成長した姿だが、それでもそんな子供じみた物を笑つて受け入れられる余裕があつた。

今なら昨日より確実に強くなっていると、自信を持つて言えるくらいには絶対的な違いが出来上がった。

そんな心も顔もほくそ笑ませていると、木曾から新たな指示が出される。

「今まで通りの訓練を続けてもいいが、どうせなら違うやり方をするぞ。そうだな、一週間後には行えるよう調整しておくから楽しみにしておけ」

なんだろうと首を傾げるが、今直ぐ教えてくれる雰囲気ではないため、その場は諦めることに。

まだ木曾も時間の余裕があることから問宮にコーヒを淹れてもらうよう依頼し、折角このような機会が持てたのだからと木曾や白杵鎮守府の過去話を色々尋ねるのだった。

第二章三幕 守りの術

今まで装甲の扱い方を習ってきたが、木曾の言っていた約束の日までの間教え方が変わり、攻防一体から防御メインの指導へと変化していた。

「防ぐ時のイメージは鎧よりも盾だ。そしてインパクトの瞬間に逆に押し返すくらいの勢いで装甲を出せ」

言われたことをそのままに実演に入った。

乗算記号のように胸の前で両腕を交差させ、来る攻撃に対して最大限の注意をする。

眼の前にいるは白杵鎮守府最強の艦娘。勿論加減はされるがそれでも一撃が、一瞬の油断が命さえ撃ち抜く可能性があるだけに、へらへらなど微塵もしていられない。

「……………来るっ！」

先日自分の弱さで見つめ合ってから一つ上のステージに上がったのか、攻撃が来る瞬間というのがわかるようになった。まだ連続の読み合いなどはできていないものの、それでも始りが何となし知れるだけ心構えも違えば、

「……………ふっ」

全てを貫きそうな木曾の拳とて受けられる程度には、装甲の展開ができるようにも

なった。

とは言えだ。まだあくまで防いでいるところへ殴ってきてくれるからこそできていくこと。実際これがランダム性のある攻撃ならば、恐らく気付けただけで終わってしまうだろう。加減状態の木曾相手でもまだまだ自由に動きながらの防御は、武蔵にとつて高等テクニックといえた。

木曾の連撃は常にクロスされた腕の中心に集まり、一撃一撃が兎に角重い。装甲をさせるようになったからこそわかるが、砲撃時にも装甲が無意識に強く展開されるようになっており、衝撃を拡散させている。四十六センチともなればその反動も大きく、わざと和らげると全身を揺さぶるほどの衝撃に襲われるのだが、木曾の加減した拳はそれと同程度か、それ以上だった。

それから二十分は続けていたのだろうか。時間の感覚が消え去るほどの重圧に耐え続けたが、遂に終わりがやってきた。

「(苦勞さん)」

今までであった重い空気が風と消え、紫煙が鼻先をかすめる。

目を上げると木曾は構えを解いた状態でシガリ口を吸っていた。

終了したことに安堵を覚えるよりも先に、恐る恐るながら自分の腕がまだなんとも無いか確認してみる。防御の訓練を始めた初日は自分が気を抜いたことから、両腕どころ

か胸骨までもへし折られた。その翌日も同じく。昨日はやつと無傷で終わることに成功したが、どうやらそれは今日も継続できたようで、傷跡もなければ艤装へダメージが流れた形跡もない。

文句の付け所のない状態で本日の訓練は終了できたようだ。

「まあこれだけでできているなら問題はなさそうだな」

今日の手応えに小さくガッツポーズを取っていると木曾にも合格点を貰え、自然と頬が緩む。一度成果を反芻してから浮かれてしまいそうな気持ちを切り替え、まだ聞いていない特別な訓練の内容を問いかけてみた。

「明日の件か。そういうえば結局何をやるか聞いてないんだが、戦場で盾役でもするのか？」

「明日になってからのお楽しみと言いたいところだが、教えても構わないか。取り敢えず出撃はない。明日はお前にとある奴と実戦形式の組手をやってみよう。流石に相手までは教えられないが」

木曾がニヤつきながら言うてくるがどうも胡散臭さが見え隠れし、先程まであった達成感が消え、一抹の不安を覚える。

「……本当に大丈夫だろうか」

「安心しろ。何かあっても最悪オレが止めてやる」

「つまり何か起こる可能性がある」と

「もしくは何かさせるかもな」

「尚悪いわ」

言い方から察するに、相手の名を聞いてもどうせ教えてはくれないだろう。

呆れてため息が溢れるが、気にしたところで自分が今できることをやりきる以外何もないため、大人しく引き下がった。

「ただやらせるわけじゃないから経験にはなる。それだけは保証してやる」

そうでなくては困るとは口にせず、代わりにシガリ口を啜って安っぽいガスライターを取り出して火をつける。

ルールが予め決まっているようで、軽く内容の説明を受けてから解散した。

その後は今日の成果を体で思い出しながら、残りの時間をのんびりと過ごすことに。

第二章四幕 始まりの合図

翌日、武蔵は午前中特に何もなく、出撃にする者達を見送るだけで手持ち無沙汰なことから、書庫で本を読んで時間を潰した。

普段は午前中が訓練に割く時間で午後が自由時間なのだが、今日は午後からできないと木曾に言われたためである。

午前だろうが午後だろうが武蔵としてはどちらでも良いため、特に気にすること無くのんびりとした時間を味わった。

「待たせて悪いな」

木曾がやってきたのは昼食が済み、食後のコーヒを飲め終えた時だった。

朝から木曾は出撃していたのは見送ったことから知っているが、どうやら何事もなく帰還したようで、外套一つ破損した形跡はない。

「いや、最近少し自分でも根を詰めすぎていたようだ。丁度ゆつくりできていい気分転換になった」

「それは何よりだ」

「で、相手は誰なんだ？」

現在鎮守府に残っているのは帰還したばかりの木曾。今日はオフだった龍鳳と伊勢。間宮と明石の五名で残りはまだ出撃したままだ。

そこまで考えて、木曾の出撃時を思い出す。

——木曾さんは一人で出撃してなかったな。確か一緒にいたのは……。

杞憂に終わってくれと願いつつも、木曾が告げるより先に答えがマミヤの入り口から顔を出す。

「ぬいっちお昼どうする?」

「まだ入りません。もう一つ仕事が残っていますから」

現れたのは北上と不知火だった。

北上はいつもの片側だけのおさげと、草色のセーラー服に身を包み、締まりのない顔をしている。不知火は赤いタイが特徴のブレザーのような格好に、白い手袋をしており、緊張感を持っていた瞳は更に鋭くなりこちらを見てくる。

「ただ直ぐに終わると思いますので、北上さんは先に召し上がっていても問題はありませんよ」

明らかに挑発的な物言い。

そのようなことを言われたならば間違えようもなかった。今日の実戦形式の相手の相手とは不知火だろうと。

「やる前からにらみ合いとはお盛んだな。その様子じゃ相手を誰か言う必要はなさそうか」

「で、今からやるのか？」

「当然です。北上さんの食事を遅れさせるわけにはいきませんから」

「へえ。まるで秒殺でもできる言い方だな」

「まるで、ではありません。できるから言っているのです」

「大層な自信だな。体型の割に」

売り言葉に買い言葉とはまさにこの事か。

今ここで始まってもおかしくない空気を纏う二人。

武蔵は緩やかに立ち上がり、不知火は木曾より前に出て手を握りしめる。

確かに不知火は格上だが、木曾の訓練のおかげでそれなりに実力がついてきた自信のある武蔵には、些か癩の触る言い方に苛立っている。何より訓練をつけてくれた木曾を馬鹿にされているような気がしたのが、特に気に入らなかつた。

拳を握り、艦装を済ませようといざ出そうとした瞬間、殺気に襲われた。

「お二人とも、そこで何をしてるんですか？」

奥で仕込みをしていた間宮がついと現れ、カウンター越しに微笑みながらも殺意を飛ばしてきていた。

戦闘状態にシフトしていた武蔵の心であつても食い殺されそうな程の圧に、冷や汗が浮き出てくる。

ハッキリ言つて怖い。

「ま、まだ何もしていません」

「まだ？」

どうやら不知火もこの自体が果てしなく不味いことを理解しているからか、懸命に弁解をしているが、言い方が悪かつたのかより一層間宮の圧が強まつた。

「いえ、これからものです！ この後海でちよつと訓練をすることになっていきますのでそれで気が昂ぶつていただけです」

「そ、そうそう。この後不知火さんとはちゃんと外でやるから。この中でやるだなんて有りえませんかよ」

不知火に遅れながらも武蔵もことの説明と云うなの言い訳を並べ、安全の確保を最優先する。

完全にやる気でいたことから後ろめたさも少なからずあるが、それでも命に比べたら安いものと無意識に出た敬語を並べていると、背中にあつた悪寒が一気に消え去つた。

「ふう。なら宜しいです。次はないようにして下さいね」

「あ、有難う御座います！」

綺麗に被った二人は、頭を下げつつ睨み合う。

「どうやら不愉快に思ったのは自分だけではないようだ。」

武蔵と不知火が小さな火花を飛ばしていると、間宮の殺気が再度飛び出した。木曾と北上に向けて。

「それから木曾と北上。止めなかった二人は今夜、わかっていますね」

「いや流石に本気で始めそうなら止めたって間宮さん」

「うんうん。だからお酒無しはちよ〜つと勘弁してもらえないかなあなんて」

完全に飛び火したようで、自分にとつて強さの象徴のような木曾でさえ、台所を預かる間宮には頭が上がりたくないようだ。北上も今まで見たことのない、あからさまに焦りを見せながら言葉を並べていく。

結局二人は今夜の楽しみのため、説得するのに三十分も時間を要した。

「間宮さんって本当この手のことになるって怖いわ〜」

「同感だ。戦場なら余裕だが、あそこで戦った場合オレでも勝てる気がしない」

説得疲れでも起こしたのか、帰還直後よりも疲弊した顔で二人は先に行く。

「前一回やられたけど本当にしんどかった。知ってる？ あの人怒る時って何故か料理がやたら美味しくなるんだよ。しかもその理由が、これから怒るので料理くらいは良いことがあった方が良いでしょうね、なんだって」

「ほおそうなのか。だが前の件は完全にお前がやらかしたただけだろ」

「あの時はくほら、まだ若かったし……」

なんの話をしているのか想像の域を出ないが恐らく、以前好戦的だと言ったことに繋がるのだろうと勝手に解釈し、疑問は口にしなかつた。また睨まれても。特に今から本格的な組手をする武蔵としては、少しでも心身の負担は避けたいからだ。

四名は海に降りてから数分、通常の航行をしながら沖へと進んでいく。

「ここらで良いか」

鎮守府から見て沖合三〇〇〇メートルまで進んだところで、先頭にいた木曾が止まりながら振り返り、静止を促す。

近くに津久見島が見えるところまで来たところで、これから行うことの最終確認に入った。

「ここまで来たならわかると思うが、組手とは言うが実際は一对一の演習と言ったほうが正しい。縮地を除いた全ての行動と兵装を許可する」

「ま、それくらいはハンデがないとね」

縮地。

足の裏に多くの装甲を瞬間的に発生させて移動する技術だが、まだ武蔵はできないためのルール。不知火の実力はまだ未知数だが、恐らく使われた場合一方的にやられてし

まうからだろう。

武蔵としては経験の一つとしてそれはそれで有りなのだがと思案していてもう一つ、武蔵の知らない別のルールが告げられた。

「それから頭部への砲撃は構わんが、不知火。お前は明丸での首から上への攻撃は禁止する」

「それはわかりましたが、明丸という俗称ではなくて、ちゃんと固有名称である『グラスホッパー』と呼んで下さい」

「明丸？ グラスホッパー？」

唐突に現れた知らない単語にオウム返しをしてしまう。明丸に関しては何処かで聞き覚えがあるような気がしたが、グラスホッパーに関しては直翅類。つまりバツタといった類の名称が思い浮かぶだけで、それが今何に関係しているのかサツパリだった。

「ん？ 明丸関連は最初の座学で習ってるはずだが覚えてないのか？」

「いやそれが全くわからん」

おかしいかと木曾が腕を組むと、予想外なところから解説が入った。

「先程言いましたが明丸は俗称です。正式には明石性特殊艦装、もしくは明石改造特殊艦装が正式な名称です。グラスホッパーは不知火の使っている明石性特殊艦装の名前です」

「ああ思い出した。そう言えばそんなこと言っていたな」

不知火の膝下にある鈍色のレックアーマーを見ながら、座学の時に言われたことを思い出す。明石改造特殊艦装は艦娘が持っている物を基に改造し、別のギミックを追加したりより硬くしたりと何か手を加えた物。明石性特殊艦装は明石が一から作った物で、成功率は低いのだとか。

明丸も本来は明石の明を円で描いているのが本来言われる所以なのだが、艦娘は艦艇。つまり船だからか、いつからか明丸という字面が定着してしまったのだと。

「へえぬいつち優しいじゃん」

「別にそういうわけでは。知識も満足にない人が一緒に鎮守府にいることが不愉快なだけです」

「じゃあ覚えてなかった私も不愉快なんだ」

「そ、そんなことは!! 北上さんは不知火がいるので問題ありません!」
「囁んでる囁んでる」

不愉快はこっちの台詞だと言い返したかった武蔵だが、目の前で始められた漫才に何も言えなくなり、目で木曾に助けを求める。

木曾も木曾で付き合うつもりはないのか、手を叩いて二人の視線を集めてから空気を切り替えさせた。

「準備はいいか」

「いつでもいけます」「問題ない」

「なら北上。オレ達は離れるぞ。始める瞬間はオレが合図したらだ」

「了解」

木曾と北上は離れていくのを見届けてから深呼吸を挟み、武蔵と不知火は互いに距離をとった。近すぎても離れすぎても演習としては意味をなさなくなるため、一〇〇メートルの距離を空けてから二人は向き合う。

武蔵はまだしていなかった艦装を済ませ、全砲塔に砲弾を込める。

不知火も同じく艦装を済ませ、まだ始まつてもいないのに照準を既に合わせようと砲塔を動かしていた。

——あちらさんもやる気。いや、殺る気満々つと言ったところか。

さっさと片付けて北上と一緒にいたいのだろう。纏う雰囲気を楽しさよりも煩わしさを見せている辺り間違えようもない。

だからこそこれまでの態度を改めさせるため、そして自分の今の実力を認めさせるために直ぐには終わらせてやるつもりなど毛頭ない。

今か今かと待つ二人の耳に、

『それじゃあ演習開始だ』

遂に始りの音が届く。

第二章五幕 武蔵VS不知火

開始と同時に不知火は何の躊躇いもなく砲塔から火を吹かす。

沈める気のある凶弾は、ほんの少し前まで武蔵の頭部があつた場所を通過していった。

通信も繋いでおらず声も聞こえない距離だが、舌打ちをしていそうな形相でこちらを睨みながら再度砲撃体勢に不知火が移るが、武蔵も負けじと四十六センチの全砲門を開く。駆逐艦のような砲撃とは比べ物にならないほどの重低音を鳴らし、衝撃が海面にまで到達する。近くに人がいたならば衝撃波だけで死ぬ可能性のあるほどだ。

そんな強烈な勢いを持って吐き出された砲弾、計九発は至近弾が七、直撃が二という結果となった。被弾した不知火はまだ一ミリたりとも動いていない。動くことを予想して撃つていた武蔵としてはいきなりの想定外なことではあるが、戦場では常に場は変わりゆくもの。多少の差など誤差の範囲内の切り捨て次弾を装填する。

煙の向こうで不知火が無傷なのは百も承知だからだ。

『四十六センチ砲の威力。初めて受けましたが、さすがは世界最大の艦砲射撃といったところですか』

煙の晴れた先から唐突に差し込まれた通信に返事をする事もなく、徐々に距離を詰めながら主砲の照準を修正する。間に副砲で挟みつつ、一旦横つ跳びをした。

——いつの間に魚雷を。

軌跡の見え辛い酸素魚雷が足下までに迫っていた故のとつきの反応。完全に狂ってしまった照準を合わせるより先に、不知火の砲撃が再開された。

『ですがこれだけでは不知火は沈みませんよ』

砲撃を行いながらの前進。

不知火は迷うこと無く真つ直ぐに距離を詰めに来る。

今度は放つ瞬間がハッキリ見えた。魚雷は逃げ道を塞ぐためか、武蔵に放たれることはなく、扇状に広がっている。

魚雷に狙われていないのは武蔵としては好都合で、駆逐艦の砲撃だけならば撃つ瞬間さえわかれば、例え距離が近かろうと防ぐことは容易であり、主砲の狙いを付けるにも十分な時間と余裕があった。

「この武蔵の主砲、伊達ではないぜ」

一発二発が防がれるならばそれ以上を叩き込めば良いだけの話。しかも近接戦になった方が武蔵としては優位とさえ言えた。

木曾によると装甲の一度に使える量は戦艦ほど多く、駆逐艦程少ない。その分再使用

までの時間は逆になるそうだが、その影響で駆逐艦や軽巡だと縮地の連続で相手を攪乱してから決めに行くそうだが、今はその縮地を封じられている。後は自分が不知火の近接戦に対応さえできるならば十分勝機はあるというもの。

不知火の攻撃の瞬間を冷静に見極めながら主砲を斉射。砲塔の向きから射線が読まれたのか、殆どを避けられてしまったが、二つの仮説が生まれる。

——避けるほどの威力だった。もしくはそう思わせるためのブラフか。

どちらにせよ武蔵にとつてやることは変わらない。攻防の隙間を縫って主砲を叩き込む。

装甲の安定性がまだない武蔵にとつて、当たれば必ず一定の成果が出る主砲の一撃の方が確実。何より木曾が認め、そして先に建造された大和が装甲が使える相手に戦果を上げたのだと聞いていることから、自分の主砲への信頼は元通り厚いものとなっている。

——いや、装甲が使えるようになってより一層か。

互いに距離を詰めていたことから距離一〇メートルまで狭まり、数度目の主砲の一斉射をする。だが不知火には完全に読まれているのか、臂力だけの跳躍で避けられ、空中で反撃の砲弾が飛んできた。

こればかりは不知火の技量を認める他無く、歯を食いしばって耐えながら次弾装填。

ここからは不知火の一挙手一投足見失わないよう高まつていた神経を更に過敏にする。「砲撃は中々ですね」

最早肉声が届く位置まで来たことにより、通信はない。通信越しと肉声の違いなどないと言えるくらいには艦娘の通信機能はすっかりとしていたのだが、肉声を聞いた瞬間。不知火の存在を大きく感じる程度には五感以外の何かを感じ取る。

「ですがまだまだ甘い」

距離七メートル。

艦娘ならば十分間合いと言える距離まで二人は近づいた。

武蔵はそこで航行を止め、純粋な脚力だけでジグザグに跳ねる不知火を迎え撃つ。

「——シッ」

短い呼吸が吐かれる音と共に、ハイキックが放たれた。

これまで足技を受けたことのない武蔵は、攻撃の来る瞬間を感じ取り、反射に任せて腕を上げながら装甲を展開した。

「明丸での頭部攻撃は禁止じゃなかったか」

「何を言っているんです。これはただの蹴りです」

紙一重で防いでみせたハイキックは不知火も予想外だったのか、一旦距離を取って様子を見ているようだった。

武蔵としても今の一撃の威力。そして速度から吟味し、不知火の技量を暫定的に決める。

——威力は、木曾さんの加減した一撃に近いか。だが深く突き刺さる感じがしない。速さは完全に木曾さんが上だ。これならば。

行けると確信一步手前の感情に突き動かされ、今度はこちらからだど体が前へと出る。

自分から近寄るのは良いが近寄られるのは嫌うのか、不知火は円を描くようにして距離を一定に保とうとしながら砲撃を行ってくる。だが不知火の加減がないであろうハイキックを耐えた以上、駆逐艦の砲など効くはずもない。蹴りの精々半分が良いところだった。

完全に予定が狂った不知火は眉間に皺を寄せながら睨んでくるが、受け流さずに真正面に突き進み拳で返事をした。

突き出した右拳はあっさり和外に流され、不知火がお返しとばかりに腹部に向けて拳を突き上げる。だが、そう来るのはわかっていただけに受け止めるのは容易。反撃に懷まで来てくれた不知火に肘打ちを落とすも、一步半程距離を取られて避けられてしまう。

舌打ちをしようとしたところで不知火が回し蹴りのモーションに入る。距離をとつ

てから少したりともこちらに踏み込んでいないのだ。

不知火の足の長さならばまず届かない。凡ミスと言える行動に、したり顔を浮かべるより先に瞬時に次の行動を決めた。

胴の高さで振るわれている蹴りが通過したら仕掛ける。

そう思った瞬間、全身の毛が総毛立つ程の寒気が走り、気付けば装甲を腹部周辺に全力展開していた。

振るわれるは不知火のミドルキック。

位置との兼ね合いから絶対に届くはずのない蹴りは、迷いのない動きから一変。中頃まで振るわれたところで海面に叩きつけるような変則軌道を取った。

「まさか不知火にグラスホッパーを使わせるだけでなく防ぐとは」

今何が起きたのかと確認するべく、一旦距離を取って落ち着こうとしたが、それよりも先に腹部に痛みが走る。蹴られたことによる鈍痛ではない。細く鋭い何かで裂かれたかのような感覚が武蔵を襲う。

「切られただと」

遅れて傷口に沿って火傷でもしそうな熱を感じ取り手で抑えるが、隙間からは血がこぼれ落ちていく。

視線を落としたことで衣服にも目が行き、一部破損してしまっているのが見て取れ

る。

「初見でグラスホッパーのブレードを防いだことは称賛に値します」

釣られて不知火の足ともに目をやると、先程までなかった刃物がレッグアーマーの側面に一振りずつ付いており、羽のように広がっていた。

——さっきの変則的な蹴りの軌道は防げていたからか。

無意識に対処したとは言え、自分がやったことに自ら褒め、大きく息を吐く。

「ここからはもう加減はしません。貴女を格下と蔑みもしません。ただ北上さんの食事を遅くさせるわけにもいきませんので、全力で相手をします」

最後が本音だろうとは茶化さず、奥歯を噛み締めた。

表情は冷ややかでありながら、言葉の端々に熱を感じる。

チラリと腹部に目をやられたが、

「こんなのかすり傷だ」

手を振るって血を飛ばした後、砲塔を不知火へと向ける。

腹部の傷はあまり深くはなかったためか、既に血は出ていない。

鼓動が一つ大きく鳴るのを感じ取りながら、それに応えるよう主砲を撃ち放った。

第二章六幕 企み

遠くで鳴り響く砲撃音を耳にしながら北上はパイプをくわえ込む。

やや湾曲しているプリンス型の物に予め葉を詰めて携帯していたことから、後は火をつけるだけ。湿気対策の施されたマッチケースを取り出し、ワンタッチで開いてから差し込まれているマッチを一本取り出し、内側についている摩擦シートで擦ってから火を灯す。

今日は風が穏やかなため何本も使用する必要もなく、一本でパイプに火を移せたことに満足する。

呼吸するように煙を吸い込み、空気に溶け込まずように吐き出す。

隣でシガリ口を吸う木曾を軽く流し見てから再度演習風景に目を戻した。

距離を最低でも一キロ以内をキープしているが、肉眼では見辛いため望遠機能を使いながら観戦している。

始まる前、縮地を封じられていたとしても戦力差を考えるならば七対三で不知火が有利。そう思っていたのだが、いざ始まってみると予想は覆され、現在では五分五分の戦いを眺めるハメとなっていた。

——直ぐ終わるかと思つてたんだけどなあ。

北上の予想では二ないし三合もやりあえば終了すると踏んでいただけに、未だ続いてゐる二人の戦いは、あくびが出そうなほど退屈なものだった。

「ちやんと見といてやれよ」

「あははやだなー。ちやんと見てるつて」

こちらの顔を見ずに内心を完璧なまでに言い当てられながらも棒読みで返す。仕方ないとなあなあに眺めながらパイプを抛り所にこの場は耐え忍ぶことに。

「今日久々にお前達と出撃したが、不知火のあれにはお前気付いてるのか？」

何のことだ？

などと素知らぬ顔でいようかと一瞬思つたが、即座に煙と一緒に吐き捨てる。この姉妹艦。妹でありながら先輩というちぐはぐな関係を持つ木曾に、その手の嘘は通用しないのは長い付き合いからわかつてゐるため、正直に答えた。

「まーねー。一応主に育ててるの私だし」

「面倒臭いからとかほざいたら張り倒すぞ」

「いや、木曾さんの張り倒すは洒落にならないから勘弁」

煙を吸い込み、遠くで見える硝煙に重ねるように吐き出しながら言葉を続けた。

「まあ何ていうか、あの手のは自分で気付けてなんぼかなと」

「お前らしいと言えばらしいか。だが不知火は教えられたほうが伸びるタイプだろ」

「私もそう思うけど、人に教えられて強くなるだけじゃ、この先危ういかなって思つてこれは正直な感想だった。」

不知火は特別優れているわけではない。他の鎮守府ならばエースになれるが、残念ながら白杵鎮守府では没個性と言えるほどだ。

北上の持論としては、ユニーク差はそのまま戦力に直結するものだと思つている。生真面目すぎる不知火はその辺が欠如していることから伸びないのだとも。

今回の演習とて最初不知火は渋つていたのだが、北上としてはほんの少しでも刺激を得られることがあればと思つて薦めたのがやる切っ掛けなのだが、

——ホント、気まぐれでやるとろくなことないね。

決着がまだ付きそうにない二人だけの戦場に後悔する。

「さっさと帰りたいそんな顔だな」

「事実帰りたい」

「昔のお前なら喜びそうな光景だろうに」

「や、未だあの状態なら今頃海の底だろうし」

あんたの手によつてとは口が裂けても言えず、軽い世間話を挟んだ。

「それにしても武蔵はかなりやるね。まだ建造されて二月も経つてないのにさ」

「アイツは才能があるってのもあるだろうが、後は相性か。多分オレと馬が合うんだろう」

「相性ね〜」

才能は確かにあるのだろう。でなければ四年も先に建造されている不知火とあそこまでやりあえないだろう。だが成長するのに相性はそこまで関係するのは甚だ疑問だった。装甲の扱い方など軽く教えられただけで使いこなせるようになった北上としては尚の事に。

だが否定する要素もないため、取り敢えずはぼかすように流した。

位置が位置のため、時折流れてくる砲弾を装甲で弾きながら見続ける。もう始まって十分は経過しただろうか。退屈で仕方のない北上に、木曾から一つ提案を持ちかけられる。

「暇でしようがないんだろ？」

「まねー。もう先に帰っちゃおうかと思う程度には」

特にいることは強制されていない。木曾さえいけば何も問題ないからだ。しかし木曾の誘いは北上としても存外悪いものではなく、心揺さぶられるものだった。

「ならお前、武蔵の砲撃を受けないか」

その言葉だけで全てを察した。木曾が何をやろうとしているのかを。

退屈をしていた北上としても刺激的な誘いに、思わず口元がニヤける。

「へえいいの。そんなことやっちゃって」

「寧ろあの状態で戦えるようになったらアイツ自身の成長にもなるだろうしな」

「そのかわりに沈んじやうかもね」

「そうさせないためのオレがいるんだろ」

自身たつぷりな物言いに触発され、これはもうやらないわけにもいかず、いや寧ろ自分がやりたいし見たいという感情に駆られ、パイプを仕舞い込んでから戦い続けてる二人に近づいていく。

不知火の本性を表に出すために。そしてつまらない演習をぶっ壊すために、笑みを浮かべたまま北上は弾道方向を予測し続けた。

第二章七幕 狂犬不知火

向かってくる不知火の飛び蹴りをしゃがんで躲し、アツパーカットによる反撃に移るが、反対の足で肩を蹴られたことにより姿勢が崩れて外す。先に体勢を整えた武蔵は着水直後の不知火向かって全速力で進み、砲塔の仰角を調整しながら直前で拳を振るうように見せかけてからの横っ飛びをする。

着水したばかりだったからか、拳に対しての左腕のみのガードのしようとしていた不知火の不意をついて全砲門を叩き込む……つもりでいた武蔵だったが、一本の棒のようなものが眼の前に投げられていた。

それが何か気付いた時には即座にバックステップを踏みながら前面に全力で装甲を展開する。

直後、視界が爆発によって染め上げられた。

舌打ちをしながら追撃がないかを確認し、距離を取りつつ気持ちを整える。

完全に好機とみて攻め込んでいたが、どうやら勘違いだったようだ。

「まさか魚雷を手掴みで投げてくるとはな」

「木曾さんの真似事です。それよりもまさか、はこちらの台詞です。今を防ぐとは。

今日は悉く上手くいかない日ですね」

魚雷は放つてから海中を進ませるのが本来の使い方なのは言わずもがな。だが、艦娘及び深海棲艦の扱う魚雷は人の扱う物とは少々異なる。衝突によつて爆発することに変わりはないが、一番の違いはお互いが使っている装甲に反応した瞬間に爆発するようにできている点だ。

両存在とも常に周囲に微弱ながらも装甲を展開している。だがそれで砲弾が防げたりするような強度ではなく、人が扱う小火器程度を防げる出力でしかない。

しかしこれはあくまで意識して使っていなければの話だ。

まだ武蔵は装甲を使いこなしているわけではため、強弱にも限度がある。逆に不知火は操作できているからこそ、魚雷を放つた後に可動するセンサーにも引つかからず手で掴み取り、放り投げるといふ行動までできていた。

それでも尚互角にやれているのは縮地を封じられているのと、自分が戦艦であり装甲の使える限界値が駆逐艦に比べ高いからに他ならない。

「お褒めに預かり光栄だ」

「その減らず口を叩ける実力があることは認めてあげます、よつ」

言い終える前に両手に握った魚雷を投げつけてくる。それと同時に本来の使い方である魚雷も放ち、追いかけるように前進してきた。

クロスしながら空中を飛ぶ八本と海中を横並びに泳ぐ八本。計十六もの魚雷。防ぐのは容易。問題はその後にある。確実に不知火が爆発の影からやってくることだが、そこまで対処できる自信はない。空中の魚雷を撃ち落とすのは尚の事不可能。

現在の武蔵に取れる行動はただ一つ。

「そう来ると思っていましたよ」

艦装を一旦解除。

重量を軽くしてからの跳躍による解除だったのだが読まれていたようで、不知火の砲塔が容赦なく火を吹く。

——魚雷に比べたらこのてい、ど!?

砲撃を受け、今の不知火の動きならば着地を狙ってくるものとばかりに思っていた武蔵だったが、その期待を裏切るように空中にいる武蔵の眼の前まで迫ってきていた。回転を加えて。

最初に受けたハイキックの二割り増しと言える回し蹴りの威力は、展開された装甲を貫き、艦装の一部を吹き飛ばすには十分な威力が込められていた。

——縮地が使えない代わりに威力の底上げのためといったところか。

装甲を貫かれたことにより生じた手のしびれを振るって飛ばす。

蹴りを受けたことによりバランスを崩し足先が空へと向いていたが、先に着水しなけ

れば後が不味いため艦装を再度済ませ、落下速度を早めた。

初めに手を先に水面に当ててから装甲で弾き、無理やり上下を逆転させて海上に足を下ろす。勢いがついていったことから海面をスライドするがその間を利用して体勢を整えていると、不知火が突撃してくる。

牽制用にと三門開き、自分と不知火の間に落とす。大きな水柱を立たせ、視界を無くしていたのだが、不知火は関係ないとばかりに突き破って拳を振るってきた。

不味いと思った時にはとつきに体が動いていた。何時ぞや提督にやられた一本背負い。

受けた行動を体が覚えていたのか、顔面を狙われた拳を避け、それに合わせて不知火の腕を取り、全身を使って体を浮かして投げる。浮かす際に装甲で弾くところまで完璧だったが、体がついて行かなかったのか、手からするりと離れ十メートル程投げ飛ばすだけに、終わらせなかった。

「そこだー！」

チャンスだと気付き、瞬時に照準をあわせる。撃つことに躊躇いなどない。全砲門を容赦なく不知火に向けて放った。

さしもの不知火も着水前、何もできない空中では分が悪かったのか、引き締まっていた表情を苦悶に変え防いでいた。慌てて向けたことから幾つか反れてしまったのはこ

の際贅沢は言えまいと、再度装填しながら不知火の下へ向かおう。そう思った時、不意に通信が飛んできた。

『いったく。まさかこつちまで飛んでくるとは思わなかつたよ』

半ば棒読みじみた声だったが、心身ともにどつぷりと戦闘状態に浸かつていた武蔵はその差に気付かず、何事だとばかりに視線だけを左右に振る。

しかし不知火は違つた。着水と同時に全方位を見渡し、声の主が丁度真後ろにいたように一目散に向かつていった。武蔵に隙だらけの背中を向けながら。

自体の把握ができていない武蔵は撃つべきか一瞬躊躇い、さすがにその考えは卑怯且つ恥ずべきことと自ら断じ、縮地で向かつた不知火の後を追う。

望遠機能を調整し、声の主がいるであろう場所を見ればそこには向かつたばかりの不知火と木曾。それから艤装一部損傷と、肌にも煤コケた痕を残している北上がいた。

北上の姿を見た瞬間、心臓がドクンと大きく跳ねたのを感じ取る。

ここは演習の場であるが実弾を使用している。当然近くで見れば流れ弾に当たることは有るだろう。それは全員が承知していることだ。だが、声が上がったタイミンと武蔵の放つた砲撃に差がないことから、まず間違いなく自分のものだと言える。予定外想定外の連続が続く今日だが、こればかりは許容量を越えたのか、焦りを感じている自分を嫌でも認識してしまう。

——何であんなところに。私は悪くない。そもそも防げるはずなのに何でだ。

自分の思考が言い訳なのか弁解なのか、はたまた防げていないことへの怒りなのか被弾させたことへの恐れなのか、ぐちゃぐちゃになり始め、纏まりがない。

冷や汗をかきながら遂に三名の側まで寄ると、肉声が耳に届く。

「本当に怪我はありませんかっ」

「だから大丈夫だつて。ちよつと肌が焦げちゃつたくらいだからそんなに痛みとかもないし」

「馬鹿。気を抜いてるからだ」

「むく後輩が傷ついているのにその言い方はないんじゃないかな」

「それよりも早く戻つてドッグに」

のほほんとした木曾と北上。その姿を、声を聞いただけでも内にあつた重たい空気を吐き出すには十分だった。

一人慌てふためいている不知火が異様に浮くぐらいには温度差があり、それが尚の事焦りを緩和させてくれる。

「北上さん大丈夫か？」

「武蔵か。悪いね、演習の邪魔しちゃつたようで。結構いい線いつてたのにさ」

武蔵としてはあまり好ましい性格していない北上。人を見下したような目や言葉が

飛んでくることが多いだけに、率先してこれまでコミュニケーションを取ってきたことはない。そんな北上が初めて、自分の戦いを褒めたことが嬉しく思っていることにシヨックを受けながらも、どこか違和感を覚えた。

空気感もそうだが、何よりあの北上がこんなに素直に人を褒めるような奴だったかと。

一週間程前は確かに助言は貰いはしたが、ここまで柔らかい対応をしただろうか。疑心暗鬼が物陰から顔を出し始めた時、横槍が入る。

「で、どうする。まだやつとくか」

「そりゃあやらせるでしょ。大した怪我じゃないし」

「お前達二人はそれで良いか？」

木曾が再開するかどうかの旨を聞いてくる。否。さっさと続けろと急かすように言ってくる。

武蔵としてはまだ決めあぐねていると、不知火は決まっていたようで、即返事をした。

「やりませぬ。北上さん。少しだけ待っていて下さい」

薄ら寒い気配を全身から溢れ出しながら。

「直ぐに終わらせませぬので」

先程までずっと背中を見せていた不知火が二分ぶりに見せたその表情は、戦闘中に見

せた冷ややかでありながら熱い何かを感じさせせるものから一変。重く冷たい、殺意に満ちた顔へと変貌していた。

喉が引きつるのが分かる。

北上に被弾させた時の焦りなど可愛いものだと言えるくらい寒気を。内臓から皮膚に向かつて瞬時に凍りつかせていくような錯覚に陥るほどの重圧を感じ取る。

「不知火はやる気のようなだ。なら武蔵も諦めろ」

頼みの綱と思っていた木曾は言い終えると縮地でその場から離れる。北上も軽くふらつくような素振りを見せながらも同じく縮地で離れていった。

——何なんだ一体。くそっ！

内心悪態を吐きながらも頬を両手で叩き、何もかもをリセットさせる。

こうなったらやるしかないかと割り切り、両拳を握りしめた。

不知火も武蔵がやる準備ができたことを把握したのか、体よりも先に口が動いた。

「貴女が撃った砲弾で北上さんは傷ついた。傷ついてしまった」

「だからなんだ」

完全に切り替えの済んでいる武蔵に今更精神攻撃など意味をなさない。堂々と開き直って言い返すと、不知火はポソリと呟く。

「五体満足で戻れると思わないことですね」

瞬間、不知火の姿が目の前から消えた。

何事か。

そのような思考を回すよりも先に横つ飛びをする。

数瞬遅れて感じる左腹部の衝撃は、肋骨にヒビを入れるには十分だった。

「がはっ」

何を受けたのか、痛みの延長に存在する物体に何とか目が追いつく。そこには足があった。つまり蹴られたのだとわかる。但し位置がおかしいのだ。足先が武蔵の背中に向かって伸びているのならまだわかる。正面から蹴られたのなら必ずそのようになるからだ。だが、その足は武蔵の腹部から先に向かって伸びていた。つまり、

——あの一瞬で背後に回られたのだとつ。

縮地を使い高速に移動してからの蹴りだったのだと予想がつく。

予想がつきはするがこの先どのように対応したら良いかなど何も思いつきはしない。

縮地は禁止ではないのかといったことを言う暇さえ不知火は与えてくれなかった。

ほぼ水平に近い形で、右腕を垂らせば海面にあたるような状態で飛ばされた武蔵を追いかけるように不知火は再び縮地で飛び出した。

今度はなんとか動き出す瞬間が見えたため、右砲塔を動かし放つ。海に向かつて。

立ち上る水柱で視界を奪いながら崩れた体勢を取り戻すために無理やり、装甲の纏つ

た右手を使つて海を掬うように引つ搔いて軌道を反らしながら着水する。

遅れて水柱から縮地の勢いを乗せて飛び蹴りを放つた不知火が現れるが、既にそこに武蔵はいない。ここが狙い目だと空振りに終わった不知火へ主砲を一斉射しようとした。が、砲塔からは何もでなかつた。

——撃ちすぎていたか。

僅かな静止。

小さな空白。

そこを今の不知火は見逃さなかつた。

「——しま」

気付いた時には後の祭り。

肉薄され、がむしやらに出した拳は躲され、代わりに腹部へと拳が突き刺さる。

「おうっ」

痛みと声とが混じり合い、情けないものを口から漏らしながら膝から崩れ落ちる。直後にきた右ハイキックが頭上を通過した時は運がいいとしか言いようがない。

だがこのままでは追撃でやられるだけ。奥歯を噛み砕かんとする勢いで食いしばり、膝先に装甲を展開。崩れ落ちる勢いを利用して起き上がった。但し微調整が利かなかつたようであたらを踏むように後ろに下がることとなつたが、それも功を奏したよう

だ。連撃に放たれた左の足刀蹴り。これのギリギリ射程外に逃げる事ができた。

そう、思っていた。

「ぐ、が」

腹部を貫通する銀の刃。

不知火の脚部にある明丸《グラスホッパー》が武蔵の胴を真っ直ぐに刺し、貫いていた。

冷たい銀の刃と不知火。恐ろしいまでに似ていると脳の何処かが思う。

ぞりりと引き抜かれた後には、臓器を寸断された感触があった。

しとどとこぼれ落ちる血液の感覚も。

脊髄までも切断されたのか下半身の感覚が全て消え去る。

自らを支える感覚が消え失せたことから真後ろに、船体に引きずられる形で武蔵は倒れ込んだ。

今度こそ立ち上がるのできない決定的な一撃を、今武蔵は貰ってしまった。

やられたのだと。誰の目から見ても完璧な敗北を喫したのだと、心が訴えてくる。

肉体の動きは封じられ、やり返す気力は脊髄と一緒に絶たれた。虚空に投げた視線と同じく心の中も空虚と化していた。

視界に映った不知火が影を落とし、更に足を振り上げているが、それさえどうでも良

いと思える程に心の波風は凧となっている。

「はいぬいっち、ちよつとやりすぎかな〜」

——接吻……？

空白の心に見えた情景を理解しようと脳が動いていたのか、北上がした行動を処理しようとするが、泡と消えていく。

「生きてるか武蔵」

僅かに遅れてやってきた木曾に何か言おうとして口を開くが声が出ない。

「あーいい無理するな、今連れて帰るから。少し痛いかもしれんが十秒二十秒、我慢しろよ」

正面から抱きかかえられたのか、胸元と背中に木曾の温もりを感じ取る。

下半身の感覚があったならば支えのために回されている腕の感触も感じ取れただろうにと、少しばかり残念な気持ちが出てきたが、小さく。ほんの小さく笑い、視界と思考が流れていく景色に置いていかれるように消えていった。

第二章八幕 狂宴の後

静けな夜だった。

風はなく、いつもはコンクリートの壁にぶつかる波の音も、今は鳴りを潜めている。

空を見上げれば真円に近い月が浮かび、人工的な光がほぼ無いことからか、月光に負けじと星空が広がっていた。波打ち際で寝転がっている武蔵にとつてはさながら宇宙にいる気分させるほどの大海原が空には存在した。

そちらを海と勘違いしないためにもと、雲の見当たらない空に向かって吸っていたシガリ口の煙を勢いよく吐き出す。

不知火との演習からドッグヘ直行。途中で気を失ったことから何時間経ったのかは把握できてい。

——今は八時くらいだろうか？

月の位置から大まかに予測するだけで正確性にはややかけるが、今は動く気分ではない。そのためにも通信を使うかとも思いはするが実行には移さず、紫煙と一緒に空へと吹き飛ばす。

煙草でさえ啜えたまま煙を吐き出すような有様。

はつきり言ってしまうえばだらしない状態で横になっていた。

原因はなんだろうと考えるが、不知火との演習が原因なのはどうでもないだろう。ならば負けたことが悔しくてとも思うが、そうではない。気がする。

どうも先程から思考がシャボン玉のようにポツと浮かんで割れ、浮かんで割れを繰り返すだけで、一向に形とはなってくれない。

それでもいいやと投げ出した直後、頭上より声がかかった。

「そんなところで何やってんだお前」

まず最初に見えたのはブーツ。それから健康そうな足。そこから順にスカート、両腰の刀剣、外套と見えて最後には右目に眼帯のついた木曾の顔が両目に映る。

「木曾さんか。何ていうか、何となく？」

何もする気が起きず、何もしていない。故に何となくとしか答えようがなかったのだが、木曾は返事を聞くなり何か思い当たる節でもあったのか、一声残してその場を去っていった。

何処へ向かったのか、それも見る気はせず、何をしにちよつと待つてろなどと口にしたかも考えることもせず、ただポーツと夜空を眺め続けた。

恐らく時間はそれ程経っていないだろう。程なくして木曾は瓶とグラス、アイスペールを持って戻ってきた。おまけにその後ろには北上と不知火を連れて。

「やーやー武蔵どうしたのさ、そんなところで」

「進んで見張りをすると、は殊勝な心がけですね」

二人も片手にグラスともう片方には皿を手にしていた。

これ以上はさすがに一人だけ横になっているのはどうかと思うことができ、丁度吸い終えたシガリ口をポケット灰皿に捨ててから、無い気力を振り絞って上半身を起こした。

「ほら。まずはこれでもやつとけ」

渡されたのは一個のグラス。月明かりの下であるため色は鮮明に見ることは適わず、中に注がれている液体が何なのかわからない。だが匂いに覚えがあり、一口含むと脳が刺激されたのか、記憶が掘り起こされたかのようにでてくる。

「ヘネシーか」

思わず呟いた言葉に、木曾はやつぱりかといった風な顔をしてから北上が持っていた皿を受け取り、差し出してくる。皿の上にはチーズや干し肉といったものが盛られており、おずおずとながらもチーズを一切れ取ってから口内に入れる。柔らかく、さしたる抵抗もなく噛み切れたチーズは、口に中全体に広がっていく。発酵品特有の臭いと濃厚な味わいは尾を引きながらも嚙下していった。途端、今まで何だったのだろうかと思えるほど、本来艦娘には無いはずの空腹のようなものを覚え、チーズを三切れほど一気に

口内に放り込んでヘネシーで流し、干し肉でも同じように噛みちぎって流しとを繰り返す。

気付けば三杯もおかわりを所望したことに気付き、慌てて居住いを正してから謝罪した。

「すまない。木曾さんにお酌なぞさせてしまった」

「気にするな。それよりも落ち着いたか？」

何に對してだろうかと小さく疑問がよぎるが直ぐに気付く、体の怠さも思考の鈍さも数分前までに比べ、段違いなほどなくなっていたことに。

「どうやらそのようだが、原因は何だったんだ？」

建造されて一月と半月が経過した武蔵だが、落ち込むようなことはあっても無気力状態になったのは初めてである。

どうも木曾にはなった原因とやらをわかっているようで聞いてみたが、あっさりと答えが返ってきた。

「簡単だ、疲労。お前は疲れていたんだよ」

「だが艦娘は疲れなどないだろ」

「それは肉体の話だ。人間ならば乳酸がどのとかあるようだが、艦娘の疲労は精神のみを指す。お前は緊張のしすぎで心の方が参っていたんだよ」

経験がなかったために失念していたが、艦娘の食事や睡眠が精神の疲労を取り除く効果があるということを出す。

——そうか、これが精神の疲労なのか。

疲労を確かめるように小指から親指まで順に閉じていき、開く。

肉体の疲労は艦娘には存在しないが、精神の疲労はある。それは知っていたがまさかここまで肉体に影響を受けるとは露程も思わず、中々に興味深かった。

「まああれだけやったんだ。いい経験にはなっただろ」

再度グラスに酒を注がれ、木曾も自分用にと酒の入ったグラスをぶつけて呑み始める。

不知火や北上は煙草を吹かしながら関係ないとばかりに既に呑んでいた。

「ところで不知火。お前武蔵に言うことがあるよな」

ここからはダラダラと酒の時間が続くのだとばかりに思っていた武蔵だが、唐突に木曾から名を上げられ、戸惑う。

同じく名前が上がっていた不知火は酒が器官に入ったのか、少しばかりむせた後、バツの悪い顔をしながら一度こちらの顔を見てから目だけ反らしていた。

——何だ？ 演習の札を言っただけでなかったからか？ いやでも不知火さんが言わなくちやいけないことだよな。

皆目見当のつかない武蔵には、急に焦りと羞恥心を緬い交ぜとした表情を浮かべる不知火に、どう反応したら良いのか困惑する。

「あの、後日は」

「却下だ」

武蔵以外の者は何を言うのか把握しているのか、木曾はぶつきら棒に、北上はニマニマと笑顔を浮かべながら不知火が何かを言うのを促す。

「できればその、武蔵と二人で」

「へえ、私との約束破るんだ」

「ち、違——」

「あーあ残念だなく。ぬいっちのこと好きだったのに裏切られるなんて残念すぎるわ
く」

「あ……あつ……」

北上に言われたことが余程ショックだったのか、普段冷たい雰囲気醸し出している者とは思えないほど呆然とした表情をしながら涙目を浮かべていた。それでも平静を保とうとしているのか、奥歯を噛みしめる素振りをするも、ワナワナと震えているのが見て取れる。が、

「これじゃあもうぬいっちを止めて武蔵にしよっかな。元々駆逐艦ってそんなに好き

じゃないし」

北上の言葉に反応し、こちらを睨んできた。

「北上さんに手を出したら殺しますよ」

「いやいや、私は関係ないだろ」

薄つすら殺気を混ぜた眼光を飛ばしてくるが、特別怖くはない。

——涙目で睨まれてもなあ。

指摘してあげるべきか悩み、触らぬ神に祟りなしという言葉を思い出し、放置するこ
とにした。

やや間を開けて落ち着いたのか、不知火がボソリと呟く。

「先日はすみませんでした」

「何のことだ?」

今日は疑問ばかりが浮かぶ日だなと思いつつ、不知火に問い返す。

「ですから昨日の演習の件です。あれは不知火の落ち度です」

昨日何かあっただろうか?

演習の前日に不知火と特にやり取りした記憶はなく、疑問符が頭に浮かんでいると、
木曾から補足が入る。

「気付いてないかもしれないが、武蔵。不知火との演習は昨日のことだ。三十時間程お

前はドツグにいたんだよ」

「そして今ぬいっちが謝ってるのはルール破って縮地を使ったのと、トドメを刺そうとしたから。私が止めなかつたら今頃お陀仏」

感謝してよくなどと言いながら笑みを浮かべているのを見て気付く。あの時の不自然な負傷がわざとであることに。不知火でも防げるのに、その不知火より強いであろう北上が防げない道理はない。

言い返そうか一瞬悩むが、したところで北上は軽く受け流すだろうと思いつつ堪え、頭を抑えながらため息を吐くだけにとどめた。

そこで思い出す。不知火のトドメを刺されかけた時に見かけたあの光景を。

「まあやられたことは私の力不足だから仕方ない。ただ一つ、気の所為かもしれないが、最後二人は接吻をしていなかったか？」

そう。やられたことはさしたる問題ではない。ゆくゆく成長すれば良いのだから。ただ見間違えでなければ演習中に不知火と北上は口づけをしていた。やっていたにしろやってないにしろだから何だといったところだが、気になるものは気になるのだから仕方がないと開き直り、真つ直ぐ北上と不知火を見ていると何でないかのようにならされた。

「ああキス。してたよ」

そうかしていたか。そこまで二人の仲は密なのだなど納得しかけて首を振る。プライベートの時間ならばいざ知らず、あのような場でやるようなことではないからだ。

「気付いてると思うが不知火の奴は北上に入れ込んでいてな。北上が怪我すると暴走しがちなんだよ。暴走の止め方は幾つかあるがあれが一番手っ取り早いからやっているといったところだ」

「ま、普段はそれ以上しちやつてるけどね」

どうでもよい追加情報まで貰い、呆れ果てる。

仲がどれだけいいとかどこまでやっているとかは本人達で終わっているならば問題はない。それが他に飛び火していることが問題だ。

暴走状態は確かに強い。船体をすり抜けての脇腹への蹴りなど縮地分を差し引いても鋭さが段違いで尊敬できなくもなかったが、逆恨みに近い形でやられたとなればその念も失せるというもの。

「暴走はどうにかならないのか」

「不知火は別にこのままでも問題ありませんが」

「当人が直す気がないのなら尚更である。」

「回りが困ると言っているんだ」

「まあ簡単には無理だろう。慕っている北上が暴走してたくらいだしな」

木曾の興味深い単語に引かれつつ、流れ弾をうけた北上がパイプを落とし掛けながらも抗議を上げる。

「ちよつとちよつと木曾さん、何で私の話になるわけ？」

「もしかして例の好戦的だった時代の話か？」

「はい武蔵はちよつと黙ってようか。というか時代つて、人を年寄りみたいに扱わないでくれる」

「面白いぞ。こいつの時はな」

「あーもーどうしてそう人の恥ずかしい過去話したがるかな」

やいのやいのとやり取りをし、騒ぎつつも遅くまで呑んだ。

結局北上の恥ずかしい過去とやらを聞くことはできず、不知火の暴走の件も有耶無耶となり終始騒ぐだけ。色々聞いてみたいことがあったがこの空気を壊すのも憚られ、残念に思いつつもまた今度聞いたら良いかと、その日は楽しむよう心がけた。

問章の鋼 北上の退屈

木會にはネタにされ、武蔵にはあれこれ聞かれたことから嫌でも昔のことを思い出す。

北上は自分が特別なのはわかっていた。

誘導性艦装装甲も教えられた日には使え、その翌日には縮地までできるようになっていた。

教えてくれた木會も驚いていたほどの成長。

それが北上にとっての当たり前だった。

所謂天才と言われる類の素質があるのは回りと比較して一目瞭然。近い時期に建造された伊勢は最初の飲み込みこそ北上の上だったが、後の成長度合いは離れていく一方で、そうであるが故に退屈な毎日が北上にはつきまとい続けた。

毎日のように出撃しては酒を呑んで寝るといふ繰り返しにはうんざりする。続けられたのは単純に提督の指示であること、艦娘としての最低限の矜持があったこと、戦闘自体が少しばかりの憂さ晴らしになること。そして何より木會という強者が側にいたからに他ならない。

ただ木曾は全くとしていいほど本気ではやりあつてはくれず、いつものらりくらりと躲かされていた。そんな折にたまたま死にかけた不知火を助けたことで懐かれ、ベッドに押し倒したのはただの気まぐれであり、少しでも刺激が欲しかったがための行為。特別同性が好きだとかその手の趣味があるわけではないし、不知火だったのはたまたまに過ぎない。

しかし不知火にはその日以降ずっと付き纏われ、反応を見るからに心酔ないし依存した様を見せつけられ、追い払うのも面倒だったことから放置していた。直ぐに離れていくだろうと思つていたからだ。その結果そこから三年後の二〇一七年になつても離れる気配がないどころか、共依存に近い形にまでなるとは完全な誤算であつた。

二〇一四年七月。

初春に不知火に手を出したのは良かったが、思いの外暇つぶしにもなつた気はせず、退屈は増すばかりの毎日を送つていた。

これ以上鬱憤を溜めるようじゃ何をするかわからないからと、木曾に本気でやろうと数十度目の誘いを出すも、あつさりとは断られる。

何度も頼んで断られると猜疑心に駆られるのが人というもの。

木曾は確かに強い。動きを見ていればそれだけでわかる。だが、自分の誘いをこうまで断られ続けると、負けるかもしれないから受けないのではないかと思ひ始めていた。努力などしなくても成長し続けた北上は、今ならば木曾といい勝負ができると思っているからこそ最近は何れも熱を入れて誘っているのだが、結果は全敗である。

ただ負けるのが怖いからやらないのか、などと直接言うつもりはない。木曾より強くなつたとはまだ思えていないからだ。だが同格程度には実力をつけたと自負しているだけに尚更気に入らない。

実力が近ければ後はセンスの差で皮一枚の差ができる。そして自分は天才型であり、木曾は努力型。才覚としてのアドバンテージが自分にあるだけ木曾は不利な状況なのは確かだが、勝敗など北上としてはどうでもいいだけにただ勝負をしてほしかった。いや、正確には勝負には勝ちたいが、その後のことはどうでも良いというのが正しいか。ただ勝つて自分の強さを証明できれば、それだけで退屈を一時的に無くせると思つている。

浅はかだとは我ながら思ひはするが、それでもそろそろ我慢の限界が近く、少しばかり強硬策を取ることにした。

「明石さんつてさ、木曾さんを鍛えたんだよね」

「今更どうしたの？ まあ前にも言った通りそうよ」

「へえ……」

口元が緩む。

これから行う楽しいことを想像するだけで、ここ暫く経験したことの無い高揚感が胸の内に現れた。

「じゃあさ、明石さんって強いってことだよな」

「そういうことか。だから談話室とかじゃなくて外なんだ」

納得のいった顔に頷いてみせる。

現在二人は外。鎮守府の裏に相当する位置で落ち合っていた。今この辺りには二人を除き、近くに待機させている不知火くらいしかいない。

「悪いけど相手はできないわ。知ってるとは思うけど、私じゃ北上の相手は荷が勝ち過ぎてるから」

そう。明石は確かに強いし白杵鎮守府においても上位に位置する実力はある。だが今の北上相手では十回戦って三回明石が勝てたならば良い方だ。殺し合いとなれば更に下がるだろう。その程度には差がある相手を選んだ理由は二つ。

「うん知ってる。だからさ、暇つぶし程度に付き合ってくれないかななんて」

一つはただ単に退屈しのぎがしたかったこと。そしてもう一つは、明石という存在が

木曾にとつて特別であること。

もしその特別な存在が痛めつけられていたら木曾はどうなるだろうか。

——そこまでやれば流石に私の相手、してくれるよね。

全ては自分の欲求を満たすために、同じ鎮守府の仲間を殴ることになるが知ったことではない。

「といつてもまだ私も仕事あるんだけど」

これまで我慢し続けたのだから、多少の犠牲は付き物。困った表情を浮かべている明石に向かつて問答無用に拳を繰り出した。

「ちよ、ちよつとだからやらないつて」

「その程度は避けられるんだから十分十分」

「人の話全然聞いてないし……あーもーちよつとだけだからね」

無理やりにはいえ、本人の了承も得たことに満足しつつそのまま攻める、ようなこととはしなかつた。

突如鳴り響く砲撃音。

明石の足下を抉つた一発の砲弾は完全に油断していた彼女の意識を誘導するには十分だつた。

「今のはな——」

明石が北上への注意がなくなった瞬間。無言で北上は明石の足に向かって蹴りを放つ。

完全に不意をついた一撃は、明石の両足を折ってしまうには十分だった。

「なん——で」

明石は信じられないといった風な顔をしながら、蹴られた勢いそのまま地面に背中から倒れる。

恐らく理解が追いついていないのだろう。痛みよりも困惑の色が強く、倒れた後も痛がる素振りを見せない。

「ぬいっち」

だが北上は止まらない。止まらない。

砲撃を行わせた不知火を呼び寄せつつ倒れた明石に馬乗りする。呼び寄せた不知火に両腕を抑えさえようとすが、一度装甲で不知火は弾き飛ばされた。北上は予め防いでいたため問題はなく、逆に腹部に向けて装甲を展開する。地面と装甲の間に挟まれた明石の肋骨は幾つも悲鳴を上げ、そこにきてやっと苦悶の顔を浮かべた。

痛みが口から漏れ出る明石に対し、北上は容赦なく顔面に向かって拳を振り下ろす。

経験から来るものか。痛みを訴えておきながらも装甲でしっかり反らしている辺り、実力が伺えるが、今は時間が惜しく苛立ちを感じる。

——砲撃を行ってから六秒前後。そろそろ誰か来るかな。

逸る気持ちに押されて控えめにやるつもりだった装甲と筋力は想定以上に力が入り、次に振るつた拳には嫌な感触が手に伝わった。

「……………え？」

グシヤリと何かを潰したかのような感触。骨を砕いたのが手から肘、肩、背中、脳と刹那の時を走るのに反比例するかのよう、思考は重鈍で、まるで時が止まったかのような錯覚さえした。

「き、きた、北上、さん」

不知火の震える声にハツとし、振るつた拳を取り除くとネチャリツと粘性のある音が耳の中を撫でる。

拳の先にあつた明石の顔は頬骨辺りから左半分が陥没しており、その結果左眼球が固定できなくなっているのか空洞となっていた。

まだ生きているようで呼吸音は聞こえているが、そう長くはないだろう。

流星に不味いと思つた北上は冷や汗を浮かべながらも立ち上がり、ドツグへ運ぼうとしたところで全身に寒気が走る。

「何、やってんだお前ら」

「き、木曾さん」

待ち人であるはずの木曾が最悪なタイムリングで顔を出す。

「答えろ北上。何やってんだ」

「あ、あのですね木曾さんこれには」

北上より木曾に近かった不知火が慌てて弁解をしようとしてゆつくり近寄るが、

「お前に聞いてないだろうが！」

「き、そ、さ……え？」

木曾の振るった拳によつて物理的に止められた。

不知火の腹部に放たれたはずの木曾の拳は、不知火の背中から飛び出るといふ形で。

「不知火！」

抱いて以来敬称として呼んでいた名さえ口にする余裕は絶たれ、完全に臨戦状態で一旦距離を取る。不知火の生死は気になるが艦娘ならばまだ生きているだろうと除外し、木曾だけを見る。

「明石さん。今ドッグに連れて行くからな」

が、肝心の木曾は北上のことを見向きもせずに明石を横抱きにし、何か言葉を交わしているようだが上手く聞き取れない。

「木曾さんこれは何が」

「鳳翔か。悪いがそこに転がつてる不知火をドッグに放り込んで。訳は後で話す」

「もしかして……わかりましたが程々にお願ひしますね。提督には私から言っておきます」

付き合ひの長い二人は皆まで語らずとも察しあつてゐるのか、鳳翔がこちらを一瞥するだけで、地面に倒れ伏していた不知火を抱えてその場を後にした。

「北上。お前は海で待つてろ。オレもすぐに行く」

返事も待たずに木曾も鳳翔の後を追うようにドッグのある方へ向かった。

遅れてやつてきた他の艦娘には目もくれず、全身に溢れ出た冷や汗と激しく打ち鳴らす鼓動を振り切るように、木曾達が向かった方向とは反対側から海へと走つていった。

初めはあそこまでするつもりなどなかったのだ。やつても精々口内を切るとか青たんなができる程度しか痛めつけるつもりはなかった。両足は予定通り。腹部はヒビが入つた程度で抑えられているはずのためこちらも問題ないが、顔は本当に想定外だった。

これが自惚れや自分の力を過信しすぎたということだろうか？

自分の才覚は理解しているつもりだったが、所詮はこの程度だったということなのだろうか？

焦る気持ちを振り切るように海へと飛び降り、着水と同時に海面を力いっぱい殴りつけた。

くぐもつた音に遅れて海底が露出し、足場を失った北上は自由落下している最中に波が戻り、底にぶつかる前に海に遮られる。落ちる際に装甲を一切使用していなかったことから波に揉まれ、冷静さを失った頭と同じように体もみくちやにかき回され、どつちが海面なのかも一瞬わからなくなる。

日中なのが幸いし、明るい方へと装甲で押し上げながら浮上すると、冷や汗も不安も水に流されたかのようにスツキリし、迷いは消え失せた。

——やってしまったことは仕方がないよね。

やったことを忘れたわけではない。まだ手にも感触は残っているし、思い返せば直ぐに同じような状態に戻るだろう。今はただ割り切っただけにすぎない。一つ別の自分へとシフトさせたとも言える。

濡れた髪をかき上げると、丁度木曾もやってきたようで外套をはためかせながら着水、四メートルほど距離を開けた状態で改めて対峙した。

先ほどまでであった怯えなど微塵もない。あるのは今からこの人と戦い、そして倒すことだけだった。

「何であんなことやったか、なんて聞いたところでしょうがない。オレとやりたかったんだろ？」 来いよ。相手になってやる」

「それは何よりなことだ」

陸地まで十メートルも離れていないが、二人はそのようなことは気にしない。此処から先、砲撃など一度たりとも使うことがないとわかつているからだ。

北上はゆらりと体を揺らしてから縮地による跳躍を三度行い攪乱しながら木曾の右手に回り、拳を顔めがけて振るう。だがそちらはあくまで牽制。木曾が幾ら眼帯をしていたところでそれが完全に命中するとは思ってなどいない。良くて防がれる。悪ければ避けられて反撃をもらうこととなるだろう。

それだけの経験をしてきているのは北上も熟知している。故に本命は足。

上への攻撃と見せかけての足への強襲。ほんの僅かでも機動力を奪えば確実に勝てると見越しての最速最高の初撃を繰り出した北上だったが、

——そんな、避けられた!?

顔への攻撃は首を反らすだけで避けられた。こちらはまだ良い。だがローキックを片足上げただけで回避されるとは思ってもなく、反撃を恐れて一旦離れることに。

「おいおいどうしたあれだけ熱烈に誘ったんだ。飢えていたんだろ？ だったらもつと本気で来いよ」

「妹艦の癖に馬鹿にしてっ」

動揺しているところに木曾の煽りが重なり、カチンと来る。

誘導されているのはわかっている。それでもこの場この状況を望んだのは紛れもな

く自分であり、応える義務があつた。何より自尊心が傷つけられたのがいたく気に入らない。

二つ呼吸を置き、再度跳び出す。

風圧を水面に軌跡として残すほどの縮地を連続で行う。フェイント兼牽制用に木曾の正面付近で着水。衝撃を木曾に向けて流すことで水柱を発生させ、視界を奪いながら木曾の左手に回りつつ小回りを利かせ、右手側からしかけた。

短く切れる呼吸音を置き去りにしながら繰り出す拳の連撃。顔目掛けて何度繰り出しても避けられてしまう。ならばと動きが少ないボディに振るうが、一歩だけ右に移動され容易に躲されたのを見計らつて跳躍。縮地を移動ではなく回転に利用して高速の跳び後ろ回し蹴りを叩き込みに行くが、避けることなく差し出された左手の平から十センチ先で北上の足は止められていた。

歯噛みしながらも体勢を整えつつ縮地で移動を開始する。

内心苛立ちよりもこいつは本当に艦娘なのかという疑問。いや、恐怖に近い現実逃避が生まれ始めた。

「どうやらオレもお前を買いかぶっていたようだな」

どう攻めるべきか思案していると、木曾からこぼれ落ちた言葉がゾワリと背中を撫でる。

「攻撃っていうのはこうやるんだよ」

寒気を感じ、来るべき攻撃に備え全神経を防御に傾けていた。

これを防げなければ死ぬ。

直感がそう囁いていた。

先程まで避けるばかりで攻勢に出ることのなかった木曾が遂に動き始める。腰を低くし、殺気を洩い交ぜにした気配を発露させながら、今飛び出した。

消えた、とまではいかない。十分目で追うことのできる範囲の動きだった。そう、目で追うことはできた。

——はやっ。

フエイントに釣られて動かされた眼球は、一瞬だけ木曾の動きに遅れてしまった。その遅れが全てを終わらせた。

目が遅れるものに体がついていくはずもなく、木曾が振るった拳をギリギリ出した装甲で防ぎに行くが容易に貫かれ、腹部へと突き刺さる。

不知火のように貫かれることはなかったものの、肋骨どころか腰骨まで折られながら振り抜かれる。

殴られた衝撃は倒れることも許さずに北上の体を水平に飛ばし、波打ち際のコンクリートの壁へぶち当てられた。

「かはっ」

激突のダメージを装甲で緩める余裕もなく、ボロボロとなった衣服を更に散らせながら、肺の中の空気を全て外へ出される。

後頭部も激しく打ち付けたのか生暖かい物を感じながら視界と思考は明滅を繰り返した。

何かしなくては。でも何をすれば。

自分が何をやっていたかも飛ばされていると、一つの物体が高速にこちらへ飛び込んでくるのがわかった。

直後に走る両肩への痛み。

それが木曾が両腰に持っていたサーベルと日本刀であったことに気付くのに、暫く時間を要する。

「これが今のオレの実力だが、お気に召したか」

「は、はは。まっね」

磔宛ら、深々と突き立てられた刀剣を抜く気力さえ絶たれ、力なく壁に寄り添う。

まさかコレほどとは思いもしなかった。普段でさえ十分な強さを持っている。戦場を何度も同じくし、近くで見えてきたのに、その状態ですら三味線を引いていたとは誰が気付けようか。

「今回の件はオレにも否があるだろう。今度からちゃんど相手をしてやるからこれに懲りたら二度とあんなことはするな。良いな」

力なく頷き、ここに完全な敗北が決まった。

こんなやつに勝てるはずがない。

これほどのやつが同じ艦娘なんて信じられない。

——化け物め……

何をしたらこれほどまでに強くなれるのかなどどうでもいい。ただ二度とこいつには逆らうまいと心に誓った。

こいつには誰も敵うはずがない。

そう確信をしながらこの日以降、北上が木曾に戦いを申し込むことは無くなった。

「そういえばさ、あの時明石さんと何話してたの」

珍しく二人つきりでマミヤで呑んでいた時、かつてのことを思い出しながら木曾に問いかける。

「あの時っていつのことだ？」

「あくほら、私が色々やらかした日のこと。お姫様だっこしてた時になんか話してたから」

あれかと呟きながら木曾もその時のことを思い出したのか、小さく笑っていた。

「何、ちよつとした仕返しだ。気にするな」

「ええ。折角恥を忍んで聞いたのにそれはないでしょ」

「気になるなら明石さんにでも聞いてみな。教えてくれるかは知らんが」

どうやら話す気はないようで、木曾は氷を鳴らしながらグラスを傾ける。

結局明石に聞いても赤面しながら躲されるだけで、教えてはくれなかった。

謎は深まるばかり。だがそれ以上追いかけてもまた面倒なことになりそうな気がし、

北上は大人しく引き下がり、今日とて退屈な日を送るのだった。

「はあ、はあ、はあ。今回も、私の勝ちだな、武蔵」

海面に背中から倒れ伏した武蔵は、ボロボロながらも自分を見下ろす長門を目にし、自らの敗北を知る。

「手を、貸そうか」

「ついでらん」

負けた悔しさと、一人になりたい気持ちとをセットに拒絶する。

我ながら子供っぽい反応を示すも長門はそうかただけ溢し、その場を去っていく。その背中を目で追うようなことはしない。今武蔵がするべきは負けた敗因を知ることにあるからだ。

建造されてから早半年。武蔵も改となり、一度に装甲が使える量も増え、砲撃の威力も向上した。縮地も覚え、一人で出撃する機会も増えてきたが、未だ尚臼杵鎮守府内において最下位の座に居続けていた。

大日本帝国が誇る最強の戦艦が最下位とは笑い話にもできない。「わかつている。まだまだ未熟なのは」

何で負けたか。理由は幾つかある。

一つは純粋に経験が少ないことにある。長門は一年早く建造されたことからその差は大きい。

二つ目は装甲がどこまで扱えているかだ。最後の殴り合いは相打ちとなったのだが、押し負けたために敗北している。つまりまだ無駄が多いのだ。

そして最後に、最近長門が成長しているのが分かる。何があつたのかは知らないが、確実に強くなつており、動きのキレがここ数ヶ月で格段に良くなつている。

武蔵自身も急激に成長しているためお互い様と言えるが、それでも負けるのをよしとするつもりはサラサラない。

「今日は中々惜しかったんじゃない?」

首だけを上に向けてとそこには伊勢が立っていた。

「見ていたのか……だが惜しくても負けたらそれまでだ」

「そうかな。最近の長門を追い込めるだけ十分だと思うけど」

確かに接戦をこなせるようになってるのは、それだけ自分に実力が付いた証拠でもある。

「言っちゃうとき。今の長門だと私でもいい勝負しちゃうくらいには強いよ?」

「そんなに、なのか?」

「そりゃああれだけ急成長されたらねー」

伊勢の中々に興味深い言葉に反応し、勢いよく起き上がる。仕舞うのすら億劫だった船体を即座に消し、正面から向き直った。

「やはりあいつの成長はかなりのものなんだな」

「武蔵に比べたらまだ可愛いものだけど、多分今の長門は大和や龍鳳、通常の不知火相手じゃ負けないんじゃないかな」

以前木曾の計らいで全員と一度手を合わせることがあったが、皆が皆本気で相手をしてくれていたわけでないのは承知している。あの時は縮地も満足に使えていなかったのだから尚の事手心があつただろうからだ。それを差し引いても強さは十分に伝わっていた。

「んでね、私の見立てじゃ武蔵は大和か龍鳳なら十分勝てると思うよ。悪くても引き分けにまで持っていけるかなー」

それらを相手にまともにも打ち合えるようになった長門を、疲弊させるまで成長自分に少しばかり褒めたい気分になる。伊勢が本当のことを言っているのならばだが。

「少しは気が晴れたかな?」

「今の言葉さえなければな。乗せられた気分だ」

やや胡散臭い話になったため半眼で睨むも、前向きに捉えるには十分なことだっただけに、釈然としないながらも取り敢えずは納得した。

「それは失敬。でも提督が呼んでるからその辺は勘弁してね」

「提督が? 今日には特に予定などなかったはずだが」

「さあ？ 私も内容までは聞いてないから知らない」

小首をかしげ、今日から数日先までの予定を思い返すが、やはり呼ばれるようなことはない。問題になるようなこともしていないことから余計に疑問が募る。

——とはいえ行かない訳にもいくまい。通信を使わないということは火急なことではないのだから、人を使つて知らせに来た以上待たせるのも悪いか。

長門とのやり取りで艤装はボロボロ。体もあちこち痛めつけているのを半ば無視して向かうことに。

「報せに感謝する」

「いつてらつしゃーい。多分まだ花壇のところにいると思うから」

見送る伊勢を背を向けながら手だけ振り、その場を後にした。

第三章二幕 かつての残滓は指輪とともに

「草むしり終わりました」

「私も土の入れ替え完了です」

「わざわざすまなかつた。龍鳳に大和」

朝早くから始めた花壇の土いじり。暇を持て余していたのかいつの間にか二人が加わり、賑やかな空気の中作業が進んだ。予定では午後までかかるはずだった内容も、昼まで二時間も残して終了してしまった。

「作業も一段落しているようですし、お茶をお一つどうぞでしょう」

振り向くと、そこには鳳翔が立っていた。背後に何か隠し持っているのか、両腕を後ろに回している状態で。

「鳳翔か。そうだな、せっかくだ。ここで茶にでもするか」

「そうおっしゃられると思いました」

こちらの考えなどお見通しか、鳳翔は背にやっていた腕を前に出すと、片手には水筒が持たれていた。もう片方の手には土いじりで汚れた手を拭く用だろう、濡れタオルを持参しており、受け取るよう促してくる。

「至れり尽くせりで悪いな」

「好きでやっていきますから」

タオルを受け取るとやややひんやりとしており、十月となったばかりの気温下では丁度良かった。手の平、手の甲、指の間としつかり拭いていくが、爪の間に入った土ままでは落とせないため、諦めて使用済みのタオルを鳳翔に返す。

「はい、こちらお茶です。冷ましてありますので一気に飲み干しても大丈夫ですよ」

差し出された水筒の蓋。内側が黒いため注がれた液体が本当にお茶かどうか判別がつかないが、少なくとも鳳翔は悪戯をするようなタイプでもないため、お言葉に甘えて一気に煽った。

口内へと侵入した液体は程よく温い状態となっており、何の抵抗もなく喉の奥へと流れていく。

「熱くもなく冷たくもなく、飲みやすく助かる」

「お粗末様です」

たおやかに頭を下げる鳳翔は、素直に美しいと思えるほどであった。

「お二人とも夫婦みたいですね」

小さく心臓が跳ねた。

ふしだらな事を考えていただけに、龍鳳に突拍子もないことを言われて思わず目に力

が入り、口を固く結ぶ。

特別恋愛感情等を持つてゐるわけではないが、異性として美しいとは思つていただけに少なからず動揺をしてしまう。

「あら、嬉しいこと言つてくれますね」

当の鳳翔も満更でない反応が更なる追い打ちとなつて、戦場でも経験のしたことのない程の鼓動をしはじめた。

「確かにお似合いです」

「大和さんもそう思いますか。でももう木曾さんと結婚しちやつてますから、これ以上は重婚になつちやうのが残念です」

「私より、木曾さんの方がお似合いなので致し方ありません」

明らかに男が一人で居て良い空気ではなくなり、眉間に深い皺を作りながら、この場を退避する瞬間を探す。内心、かなり居心地が悪かつた。いつそ目の前まで深海棲艦が迫つてゐる方が気持ち的には楽と言える。が、一つだけ訂正はして置かなければならぬことに気付き、バレぬよう細く息を吐き出しながらズレてもいない軍帽を左右に動かし、気持ちいを落ち着かせる。

「お前達忘れてゐるかもしれないが、俺と木曾は結婚はしてゐない」

「あれ、そうでしたか？」

「でも木曾さんが胸元に指輪をネックレスにして下げていたような」

やはりかと、今度はため息を吐く素振りをしながら堂々と平静を保つために酸素をしっかりと取り入れ、以前教えた内容を繰り返す。

「艦娘と人の結婚はまだ法律が存在していないからできない。俺からすればお前達は人と何ら変わりはないのだが、一応は物扱いだからな。そして大本営も艦娘との結婚は認めていない。辺に優遇したりでもしたら全体の士気関わるためだ」

「あーそういうええ言われてましたね。確かに好きな人を戦場に出したくはないでしょうし」

「龍鳳にもわかるのか？」

好きかどうかは別として、剣造も大事な人はもう二度と失いたくないため同じようなことをしてしまうのではと思っただけに、大本営の考えには賛同していた。だが艦娘は独自の解釈をすることがややあるため、似たような思考に落ち着いたのは素直に驚いた。

「当然です。私達艦娘にとってそれは提督なのですから」

「大和も同じく」

「そういうことです。私達にとって提督が鎮守府で待っていてくれることが何より嬉しいことですから」

ここまで好意を持たれて悪い気はしない。艦娘とはそういう存在なのだと言ってしまえばそれまでなのかも知れないが、こうも言われるならば応えたくなくなるのが人情というもの。少しでも彼女らが住みやすい環境を作つてあげたいと思える程だ。

「ところで結局木曾さんの指輪は何だつたんですか？」

大和が頬に人差し指を当てながら小首をかしげ、思い出すように視線を空へと投げている。

結局そこへ戻るのかと緩んでいた口元がへの字へと変わる。

致した方ないかと言おうとしたところで、鳳翔によつて遮られた。

「あれは二年ほど前に明石さんが作られた結婚指輪です。正確には仮なんて補足がつくそうですが」

「仮つてなんですかそれ。結婚指輪は結婚指輪で良いんじゃないですか？」

「でもあれはあくまで艤装の一部。提督の気持ちか籠つていない、なんてことはないでしょうが、本当の結婚指輪は取つてあるはずです。だから木曾さんも指輪を片方ずつでなく、両方とも首に下げています」

「よくわかりません。木曾さんの指輪には他に何か意味があるんですか？」

龍鳳の問いに鳳翔は柔らかな笑顔を浮かべ、

「指輪には艦娘をもつと強くできる効果があるそうです。最もそれは限られた存在だけ

が得られるようですが」

そしてどこか遠くを見るように目を細めた。

「もう一つ。これは以前木曾さんに教えてもらいましたが、自分より付けるに相応しい相手がいる。その人が帰ってくるまで預かっているだけだそうです」

「相応しい相手？」

「そこは教えてくれませんでした」

小さな苦笑いを浮かべ、やんわりと嘘をつく鳳翔に、心の内で礼を述べた。

鳳翔が嘘をついているのを知っているのは他でもない、木曾に直接剣造は言われ、そしてその場に鳳翔もいたからだ。何故嘘をつく必要があったのかは不明だが、なにか考えがあつたのころだろうと追求も補足説明も省く。

誤算だったのは、ここ最近薄れつつあつたかつての白杵鎮守府をハッキリと思ひ出し、郷愁の思いに駆られたことだ。夜ならば酒に逃げられたのだが、昼間だとうしろもなく、落ち着かせるために帽子を深くかぶり目をつむって呼吸を意識して行う。

謝罪の言葉が溢れそうになるのを懸命に押さえ込んでみると、そこへ新たな声が飛んできた。

「皆そこでどうしたの？」

「あ、伊勢さん。花壇の手入れが終わったのでお茶をしました」

航空戦艦伊勢。その二代目がそこにはいた。

先代とは似ても似つかない口調に雰囲気だが、それでも見た目はそっくりなことから重なって見えることが多々あったが、今日は一際大きいようだ。

そのため意識して見ないようにし、今だけは伊勢を少しでも離すため、一つ頼み事をすることに。

「伊勢。今長門と武蔵がその海で手合わせをしていると思うが、終わったら武蔵をここに呼んでもらえないか」

「無線じゃ駄目なの？」

「急ぎじゃないからな」

「ふくん。今日は暇だし了解了解」

伊勢が離れていく足音を耳にするとその分だけ気持ちが悪く落ち着け、そこでやつと自分が全身に汗をかいてしまっていることに気付く。薄っすら寒気すら感じているが、今はこのまま居続ける気力もなく、ゆっくりと立ち上がった。

「何処か行かれるんですか？」

大和に他意はないのだろう。純粹に問いてきているだけのはずだが、今の剣造には煩わしく感じられ、どう言おうか考えていると、助け舟が入った。

「私達はまだこちらにいますので、もし先に武蔵が来たら通信で報せますね」

「すまない鳳翔。それからありがとう」

「提督は私達に気を使い過ぎなだけです」

全てお見通しなのだろう。何も言わずに送り出してくれた鳳翔に小さく。ほんの小さく頭を下げてから鎮守府の中へと入った。

第三章三幕 記憶と思いで

歩みを止めず向かう先は、右手に伸びる通路の奥から二番目の部屋。左右の部屋に押し潰されたかのように間取りが狭いため、一時期は物置としてすら使われていなかった空白の場所。

その扉の前に創造は立ち止まり、両手を一度強く握りしめてからいざドアノブを握りしめ、開いた。

初めに五感へ訴えてきたのは臭いだった。

鼻腔へ入り込む重くも揺れ動く香りは、線香が放つ独特なもの。もし浮ついていたら、心を鎮めてしまうような空気を、部屋の中全体に作り出していた。

一歩足を踏み入れ扉を閉めると、そこは一つの異界。窓はなく、明かりは照明があるがつけていない。完全になくなった視覚情報を放棄。触覚と聴覚に神経を集中させる。記憶を頼りに手を差し伸ばし、触れたものの感触と音に目的の捜し物であることを確信しながら手慣れた動作で擦りつけた。

パツと灯されたのはマッチの明かり。隙間風もないことから揺れ動くことのない先端の火だが、燃え続けるには限度がある。心許ない弱々しい光源にいつまでも頼る訳に

はいかないため、溶けかけではあるが安定感のあるローソクを灯した。

三つ明かりをつけたことで視界は確保され、身の回りの景色がハッキリと映る。

室内は廊下側から見る以上に狭く感じられる。中の広さが二畳程度しかないので圧迫感が酷い。扉を締めたことで外の空気とは隔絶され、むせ返るような香の匂いが尚の事重圧となつてのしかかってくる。

左手には壁に押し付けるように真っ白なクロスのかかった重厚なテーブルが鎮座しており、その上には申し訳程度に置かれた花と写真が複数並べられていた。そしてその前には香炉が置かれており、燃え尽きた線香の残り香を周囲に残し続けている。

剣造は一度深呼吸をしてから足を二歩ほど前にだし、九十度左へ向き直る。姿勢を正し、生真面目を貼り付けたような顔のまま口を開いた。

「日に二度も来てすまない。驚いているかも知れないが少しだけいさせてくれ」

自分以外は存在しない空間で、見た目とは裏腹に力弱く呟く。

「どうやら少しナーバスになったようだ」

備えられた線香にローソクの火を移し、香炉に挿しながらゆっくりと写真立てに収められた顔を見ていく。

軽巡洋艦、神通。

駆逐艦、綾波。

駆逐艦、電。

まだ見た目若い。駆逐艦の艦娘に至っては小学生に近い見た目をしており、そのような者を前線に出していた事実が胸を抉るようだった。

「このことをお前が知ったら笑われそうだな。伊勢」

最後に置かれた写真。伊勢の香炉に線香の他にP E A C Eを挿しながら、薄い苦笑いを浮かべて漏らす。

ここは簡易的な仏間。

本来艦娘は船として扱われるため、このような場合は認められていない。艦娘の死を弔うことは容認されているが、仏壇まで鎮守府に置くことは禁止とされている。死が隣にあるということは引きずり込まれる可能性もあるためだ。

そしてこれは剣造が破った唯一の軍規でもある。

「お前達には迷惑をかけてばかりだな。昔も今も」

帽子を取り、四名の写真に向かって頭を下げる。

「すまなかつた。などと聞き飽きているかもしれないが、それでも聞いてくれ。お前達の死は俺の戦局の見誤りが原因だ。本当にすまない」

自分の犯した罪を、取られた帽子の下が剣造の全てを物語っていた。

七年前まで確かにあった頭髮は、現在一本たりとも生えてはいない。あの日を境に

徐々に抜け落ちていった頭髮は、気付けば影も残さず消え去ってしまった。

軍部からは病気の可能性もあり診断させられたが、結果はストレスであることが判明している。そのようなこと診断されるまでもなく剣造自身わかっていたため、驚きもなかつたありのままに受け入れた。これは一つの罰なのだと。

「だから見ていてほしい。お前達に。お前達だからこそ、この戦争を終わらせるその時まで。そして今尚戦い続けているあいつらを見守ってやってくれ」

三人は花のような笑顔を浮かべ、一人だけ澄ました顔の写真に向かって、思いと願いを告げる。

凶々しいのは百も承知。だがそれで木曾達が無事に帰って来られるならば言うに越したことはない。その代償を自分が払わなければならないのなら喜んで支払おう。

——その前にお前達を過去として扱っている事自体、何か罰が下るやもしれないな。戦争は未だ続いている。故に思い出とするにはまだ早すぎると剣造は捉えていた。なのに薄れていっていった自分の弱さを嘆き、叱咤する。

上に立つものが弱みを見せるなど。

「お前達を出しに使ったようですまないな」

ここに来て謝ってばつかりだなと苦笑いを再び浮かべてから帽子をかぶり、平静が保てていることを確認する。

もう大丈夫だと確信し、静かに歩みドアノブに手を伸ばしてから静止した。

「伊勢。お前は本当に死んだのか？」

肩越しに伊勢の写真に目をやりながら誰に言うでもなく虚空へ投げる。

しかし、答えが帰ってくることはない。そこには写真があるだけで、誰も事実を口にすることもない。

今になつても信じられないと、鼓動が大きく鳴り響く。

木曾の胸に下げられた指輪を思い出し、自分の想いを確かめる。

正直伊勢のことを好きかと言われてもまだわからない。もう四十に近い歳となつて
いるが、恋愛経験などほぼ皆無なため確証とはなりえなかつた。

ただ創造自身が二つ思つた事がある。

——伊勢。またお前の顔が見たい。声が聞きたい。

確かな気持ちがあるそこにはあつた。草原の中ポツンと一つだけ、目を離れた瞬間見失つてしまふ程慎ましい、それでいて確かに咲いている花のような好意が。

——……些か女々しくて口にはできそうもないな。

しかし創造は自分の中にある感情に気付くこと無く、過去に引つ張られそうになるのをしつかり床に足をつけて踏ん張り、新たな覚悟と共に外へと出ていった。

第三章四幕 新たな指令

武蔵が陸へ戻った頃何か用事でもあったのか、提督は鎮守府内から出てくるところだった。

「伊勢から話があると聞いたのだが」

「伝えておかなければならない案件を思い出してな。ドッグ入りは少し遅らせてもらおうが構わんか？」

「中破程度だ。問題ない」

「ならば丁度花壇に鳳翔達もいる。そちらで話すでしょう」

——これは、線香の匂い？

前をキビキビと歩く提督からほのかに漂ってくるのは間違いなく香の香りだった。早朝提督と顔を合わせる時は時折あるのだが、日中にこの匂いをさせたのは初めて。今回の呼び出しも合わせて多少違和感があったが、提督におかしなところは見られないことから辺に突っ込むことはなく、後を追うことに。

「お茶飲まれますか？」

鳳翔達と合流するやいなや、水筒を手に飲み物を薦めてくる。

「後ほど頂く」

「私は少し貰うとしよう」

提督は断つたものの、武蔵は伊勢に実力を褒められたことで舞い上がっている可能性を考慮し、気持ちを入れ替える意味でも鳳翔の厚意を受け取ることにした。

彼女は微笑み、水筒の蓋ではなく湯呑みにそそいで渡してくれた。湯気も出ておらず器越しに熱が感じられないことから冷めているものと判断し、啜らずに中身の半分を口内に流し込む。

緑の香りと後を引かない味は、スツと喉の奥へと消えていく。それと同時に熱のこもっていた心臓が冷やされる感覚がした。

二口目で全て飲み干し、礼を述べてから鳳翔に湯呑みを返したところで提督は話を切り出した。

「鳳翔には予め伝えておいたが、二週間後に行われる軍事訓練に武蔵も同行させるつもりだ」

遂にかと内心溢す。

武蔵は提督に言われたことを反芻しながらも胸の高鳴りを感じ取る。

軍事訓練とは他の鎮守府の艦娘を複数集め、来たる決戦に備えて誘導性艦装装甲の扱い方を教えるのが目的だ。当然半端な者に任せられるものではないため、これまで武蔵

だけ除外されていた。

それが今日。今この瞬間。お前ならば大丈夫だと提督に認められたのだ。嬉しくな
いわけがなかった。

「わかっているとは思いますが、武蔵はまだ教育する側の経験がない。次までにどうしたら
良いか教えてやってくれ」

「それは構いませんが、確か次は」

「ああ、大和の心配も最もだ。これまでより規模が大きくなる。現状召喚がかかっているのは五十の鎮守府だな。艦娘の数だけで言うならば三百は越えている」

鳳翔は知っていたのだらう。涼しい顔をしているが、大和に龍鳳、そして武蔵も同じく動揺していた。規模の話は酒の席で愚痴と一緒に聞いてきてはいたが、それでも百前後が精々だった。それがいきなり三倍になったのだから、初めてやるにしては大規模過ぎないかと少なからず気後れしてしまう。

「当日多少数の変動はあるだろうが、大和と龍鳳は七十ずつ担当するつもりでいる。武蔵は残りを鳳翔と共に。基本は鳳翔にやらせる。お前は補助をしながら鳳翔の立ち回
りを見て、次回以降の参考にするのが一番の仕事だ」

そう言われ、やや安堵する。

想定では多くても二十ないし三十人程度見れば良いのだろうという考えは、見通しが

甘かったようだ。

「でもその人数ですと一日では厳しいのでは？」

龍鳳の疑問は最もだった。

武蔵として今の状態まで成長できたのは、毎日のように教えてくれる人が近くにいたからこそだ。それを三百を超える数をたつた四人でこなすには、時間が圧倒的に足りない。

これまでは艦娘の数は少ないものの、コンスタントに行われてきた軍事訓練だからこそ成り立っていたものをそこまで広げれば、必然拾えない部分が出てくることはわかっているはずだ。

「龍鳳の言う通り一日では足りない。そのため今回は三日間行われる。それだけが誘導性艦装装甲を受け入れただけということだろう」

どうやら大本営もお飾りだけがいるわけではないようだ。三日あるならば基礎の基礎を教えるには十分だろう。過去の訓練に参加した艦娘ならば一つ先に進める可能性もある。

贅沢を言うならば一週間だが、防衛の穴を考えれば妥当だろう。軍事訓練に参加条件が、一定数の功績を上げている鎮守府に限るのだから尚更。

何より鎮守府間で衝突する確率が一緒にいる時間が長いだけ上がるというもの。そ

ういった意味では三日は理想なのだろうと、武蔵は一人頷く。

「そういえばまだ場所は決まっていなかった覚えがありますが、そちらは？」

「そちらも先日決まった。場所は静岡県の南伊豆町だ。恐らく人里から離れ、海が近く、大本営からも遠くないという理由で選ばれたのだろう」

「静岡の伊豆ですか。温泉が有名なところですね」

「らしいな。最も今じゃどこも営業していないから期待しても温泉には入れんぞ」

「少なからず考えてはいたのか、大和は自分から話を振っておきながら目をそらしていた。」

「同じ大和型として情けない……とまでは言い切れない。武蔵もまた温泉には興味があつただけに、少々後ろ髪が引かれる思いとなる。」

「だがそうだな。戦争が終わった暁には、お前達とゆっくり旅行の一つでもやりたいものだ」

「良いんですかそんなことを言ってしまったも。本気にしますよ？」

鳳翔が悪戯つぽく反応を示すのに対し、提督は大きく頷き、ハッキリと答えた。

「本気にしてもらって構わない。まあ、お前達さえ良ければだが」

「もうバッチリオツケーです！」

「大和もいつでも行けます！」

歓喜の声を上げながら提督に詰め寄る二人に、提督は気が早いと窘める。

盛り上がる龍鳳と大和を鳳翔は微笑ましく見守り、それらを見ながら武蔵は一人夢想する。そのような平和な時が来る瞬間を。

十三年にもなる、長い戦争が終わる時を夢見て。

第三章五幕 軍事訓練

晴れ渡る空。

雲は遠くに見えるだけで、快晴と言つて問題ないほどの透き通つた青が上空に広がっている。

波も穏やかなもので、時期が時期ならば海水浴にはもつてこいな気候条件を叩き出しているだろう。

週間天気予報でも一週間は晴れ間が続くようで、今の時期ならばそろそろ紅葉狩りなども楽しめそうな陽気だった。遊ぶ暇があればの話だが。

「武蔵、コツがわからないのだがどうしたら使えるのだ？」

「武蔵、イメージは何となくつくのですが、上手く再現できないのですがどうしたら」

「武蔵、これもうちよつとシンプルにならないものなのか？」

軍事訓練一日目。

予定は変わらず、三つのグループに別れての教育を開始したわけなのだが、あまりの多さに武蔵はてんやわんやとしていた。

参加している艦娘の数は三百三十九名。

振り分けは大和と龍鳳に七十ずつ。残りを鳳翔と武蔵が受け持つこととなったのだが、やはりと言うべきか、武蔵にも多くの艦娘に詰め寄られていた。

他と違い今回参加が多いこともあり鳳翔が最初に説明、艦載機からのピンポイント爆撃による装甲の実演デモンストレーションを見せたもののこの有様である。

半年前の自分も似たような立場だったのだが、それを懐かしむ暇もなく、慌ただしくも振り回されていた。

積極的なのは悪いことではないため無下にもできず、再度装甲の使い方を説明することにした。

「最初にも言ったが装甲は反発だ。攻撃に対して打ち返すんじゃないが主となる」

「ちよつと抽象的すぎる」

「もつとわかりやすくはできないの?」

「ん〜いまいちピンと来ません……」

ああ言えばこう言うとはこういう状況を言うのだろうか、武蔵はうんざりしながらもへこたれること無く続ける。ここで止めたならば提督の名を傷つけることになるからだ。

「装甲はまず攻撃でなくて防御だけで考えろ。そうだな、イメージは盾だ。突き出した

手の平の先に盾があるつもりで力を意識しろ。それでもわからないやつは手を握って、実際に盾を持っていてるようにするのも一つの手だ。艦娘といえど感性は各々違うのだから自分にあつたやり方を見つuckerんだ」

やつと納得がいったのか、周囲に群がっていた者達は最初に整列した位置まで戻っていく。

各々が執行錯誤を初めたことにより一息付ける時間ができたことから、凝つてもいない肩に手をやり、首を回す。それだけでも幾分開放された気持ちとなり、もう一度嘆息を吐くと声がかかる。

「すみません武蔵。本当ならば補助くらいの手定だったのに全面的に任せてしまつて」
振り返つた先には鳳翔が申し訳なきさうに立つていた。

チラリと鳳翔が教えているグループを見れば武蔵側と同じく質疑時間は終わつており、実践に移つていた。

「ま、この数ならば致し方ないんじゃないか？ 多すぎて端まで確認するにはかなり辛いだろうし」

大和と龍鳳が七十ずつ受け持つならば、必然鳳翔が受け持つのは残りの百九十九もの艦娘となる。いかに艦娘が人間より優れた機能があろうとも、限度は有る。確かに通信を使えば端まで聞くことはできるが、全てを見ることはできない。そのため武蔵が五十

程受け持つよう提督に進言し、今に至る。

「私も少々甘く見ていました。過信は禁物ですね」

「それには同意だ。他者に教えるのがこうも難しいとはな」

自分が教えている者達をざつと見る。

二人一組を基本とし、突き出した腕の先で装甲をぶつけ合う者。トイガンで装甲が使えているか確かめている者。座つて石やボールを手の平に落として練習している者と多種多様だ。

武蔵としては意外と刺激になるため悪くはないのだが、如何せん気苦労が多く、かなり疲労が溜まってしまふのがネックといえた。

「ただまあ今の所問題もないようので安心だな」

「気持ちばかりですが、そういうことは口にするものではありませんよ。口は災いの元と言いますからね」

「今の時代だと確かフラグと言うんだったか。何にせよ言霊にならないよう気をつける」

ことわざの通りにならないよう、少なくともこの三日間だけは気を張っておこうと肩に力を入れたところで、更に別の声がかかった。

「お久しぶりね、白杵鎮守府の鳳翔。今回木曾は来ていないのね」

声の方へと顔を向けるとそこには明るい笑顔をした長門型二番艦、戦艦陸奥がいた。
「……また貴女達ですか」

二人のやり取りに面識があることが容易に伺えるが、それよりも鳳翔がまぶたを閉じて重い溜息を吐くなどという、明らかに辟易している態度はこれまで見たことがなかっただけに、内心驚きを隠せない。

「もうそんなに邪険にしないでよ」

苦笑しながらも応える陸奥だが、どうやら取り巻きとして来ていた赤城型一番艦、正規空母赤城と古鷹型二番艦、重巡洋艦加古は鳳翔の態度が気に入らなかつたようで、身乗り出してきた。

「そうです。陸奥さんが顔なじみだから声をかけたのになんですかその態度は」
「もしかしてあたし達舐められている？」

今から一戦交えそうな雰囲気醸し出しながら睨みつけてくる。が、武蔵としては困惑する以外の反応ができなかった。

率直に言えば死にたいのかと。

鳳翔の強さは白杵鎮守府において二番目だ。つい最近、教育のやり方を教える一環として、組手形式になった場合を想定し一度手合わせをさせてもらった。それも武蔵は本気で。加減なしの全力で挑んで、まともに触れることさえさせてもらえなかつた。

強い人ばかりの中で成長してきたため、強者の雰囲気というものを感じ取れるようになったのだと、軍事訓練に参加して自覚できた。

そしてこの陸奥達は弱い。

初参加組に比べたら幾分マシな雰囲気は醸し出してはいるが、今の武蔵でも特に苦勞することなく組み伏せられる程度のものだ。

だというのに、

「前回木曾にやられちゃったから今回こそはと思つて来たのだけれど、残念ね」

選りにも選つて最も強い木曾をご所望な様子。

もしこの場に北上がいたならば、腹を抱えて笑いこけていることが容易に想像できる無謀な発言が飛び出す有様。

困惑を通り越して呆れ返つてしまうほどだ。

「あんた正気か？」

だからこそつい余計な一言を口にしてしまう。

鳳翔が目で咎めてくるがもう遅い。陸奥の耳に届いていたようで、張り付いたような笑顔とぶつかりあつた。

「それはどういう意味かしら」

目は笑つておらず、気に入らないことを言われたのだと。今言つたことを取り消せば

まだ許してやると顔に書いてあったが、このままこの世間知らずに頭を下げるのも癪なため、あえて突っ込んだ。

「言葉のままだ。鳳翔さん。ましてや木曾さん相手に勝つ気でいるみたいだが、あんたらじゃその千倍数を用意しても不可能だ」

「へ、へえー。大きく出たわね。千倍だなんて……」

相当苛ついているのか、笑顔のつもりなのだろうが、顔筋の到るところがピクピクと震えている辺り、何一つ隠しきれていない。

取り巻きは取り巻きで怒りを全面的に出しながら詰め寄ってくる。

「面白いこと言いますねあなた。沈めますよ」

「あんた確かまだ建造されて半年程度のヒヨッコだろ。お仲間が強いからって調子こくんじゃねーよ。ぶっ飛ばすぞ」

どうやらこちらの情報はある程度知っているようだ。だが悲しいかな、思いつきり凄まれたところで恐怖関連の感情が湧き上がることはない。臼杵鎮守府の不知火に散々やられてきているから、今更この程度で怖気づくほど可愛い精神はしていなかった。

「でしたらあなたがお相手してくれるのかしら」

何と返そうか悩んでいると、陸奥から誘いがかかる。

話の流れ的にこれまで何度かちよつかいをかけられているのはわかる。鳳翔がうん

ざりする程なのだから、もしかしたら軍事訓練外でもあったかもしれない。

ならばと強さとしても下から数えたほうが早い武蔵とやって負けるならば、その嫌がらせ地味な挑戦も消えるのではないだろうか首肯した。

「ああ良いぞ。今からやるか？」

「意気がったことを後悔させてあげる」

最早笑顔を取り繕うこともせず、眉間にシワを寄せる陸奥。

少しはマシな雰囲気変わったが、さりとて力の差はいうに及ばず。

やや離れた海に向かって歩き出す三名を追うように武蔵も後に続こうとして、

「武蔵、忘れたのですか。私闘は禁止だと提督にも言われたでしょう」

鳳翔に止められた。提督からの命令を添えられて。

艦娘にとつて提督は絶対だ。お願いの類ならばまだしも命令までは無視できない。忘れていたならばいざしらず、思い出されてはこのまま命令を放棄するのは憚られた。

「何だ口だけか？」

加古に煽られるがやるわけにもいかず、ここは相手してやれないと頭を下げる他ないと腹をくくり、口を開こうとしたところで別の存在が割り込んできた。

「お前達そこで何をやっている」

白杵鎮守府の提督。池上剣造だった。

「鳳翔に武蔵。俺が言ったことを忘れたのか？」

どのようなやり取りをしていたか察したのだろう。即座に注意してくる。本当に忘れていただけに反論などできるはずもなく、大人しく提督の言葉を聞き入れた。

「お前達はどこの所属の艦娘だ」

「中津第二鎮守府のものですよ。白杵鎮守府の提督さん」

消えていた笑顔が戻った陸奥は、上機嫌に答える。忘れたのかと言いたげな嘲笑が見え隠れしつつ。

「そういうことか……ここは訓練をする場だ。他の者達が気にして訓練にならない。遊ぶならば後日にもらおう」

言われて辺りを見回すと、武蔵が教えていたグループは全員手が止まっており、他のところもチラチラを遠目に見ているのがわかる程度には目立っていた。

「そうですね。うちに悪評が立つても問題ですし、今日のところはこの辺で引き下がりますよ。赤城、加古。行きますよ」

陸奥に言われるがまま、取り巻き二人はその場を離れていく。後で覚えていろよと視線を残しながら。

「曰下部誠くさかべまこともしつこいですね。まだ諦めていないご様子で」

「今のあいっつならば自分の息がかかった連中を毎回ねじ込めるだけの権力は持ってい

る。どちらにせよ、これは俺の不始末だな」

背を向けた三名に向かってポソリと呟く鳳翔に、提督はすまなかつたと謝罪を述べた。

「二度木曾と相手をすれば実力差で諦めるかと思つたのだが、どうやら加減をさせすぎたようだな」

ため息が漏れている辺り、もしかすると提督間でも何かあつたのではと推測するが、聞かずに聞いた。

「日下部って大分海軍施設のトップのやつだろ？　なんでうちばかりにカマかけるんだ？」

日下部誠。現在階級は少将。本来ならば中将以上でなければつけない席である大分海軍施設の司令官の座を、特例で座っている存在。約八年前に臼杵鎮守府にいた先代伊勢に頼り切つた防衛を危惧し、轟沈した場合の対策案を水面下で用意。その後本当に沈んでしまったことから、大本営は自分たちの采配ミスを帳消しにするべく日下部の案を採用し、功績を上げたことにより異例の四階級特進。その功績から尊敬するものも多いと聞く。

二年ほど前に階級を一つ上げ、更に近い内中将になることが決まっているのだとか。提督でないものがこれほどのスピード出世は日下部以外に存在せず、いわば時の人状

態。

そのような人物が同期とはいえ、一鎮守府の提督を気にかけて続けるのもおかしい話である。

「それは俺もわからん。立場はあいつの方が上なのだが、何故か目の敵にされていな」「たまたま上手くいったことがあっただけで階級を上げるなんて、大本営もどうかしてますね」

今日はつくづく珍しい鳳翔を見聞きする日だなと武蔵は驚きながらも思う。ここまですぐで鳳翔などこれまで一度たりともない。常に柔和に対応しているイメージしかないだけに意外過ぎた。

「あまり度が過ぎるようなら通信を飛ばしてくれ。自分の提督からの命令ならば艦娘も無視できない」

「そうするしかないようですね」

「武蔵もそれで頼む」

これ以上は艦娘同士だと下手したら。それこそ提督のことを馬鹿にするような発言が一つでも出れば殺し合いになりかねないため、それが無難かと領いてみせた。

「それでは引き続き訓練を頼む。一人でも多く艦娘が生き残れるために」

司令部へと戻っていく提督を見送りながら鳳翔と目を合わせ、どちらともなく短く息

を吐いてから各々の持ち場を見回ることに専念した。

第三章六幕 軍事訓練二日目

軍事訓練二日目。

一晩経つと情報が処理され一日で急成長する者がいれば、逆にどうして良いかわからない者も出てくる。

午前中は昨日と同じグループに別けて再確認。どれだけ力を身に着けたかを直接見定め、力の差から上、中、下と三つに別れてから午後の訓練を始めた。

「リクエストに応えてやるんだ。見逃すな」

武蔵はその中でも一番多い中のグループを龍鳳と二人で教えていた。

「準備は宜しいですか？」

「ああいつでも来い」

手の平をやや地面に垂らすようにしながら龍鳳に向かって左腕を突き出す。

龍鳳の構えた二丁拳銃。『ラヴ&ピース』による砲撃で、装甲の実演を再度行うところだった。

そう砲撃だ。

見た目こそごく普通のオートマチック拳銃だが、その実龍鳳のために作られた明丸。

火力も一四センチ単装砲相当であり、装甲をまともに使えなければ確実に怪我をしてしまふ代物だ。普段戦場では艦載機の動きに合わせて精密射撃をしたりするわけだが、今は武蔵の手の甲へと照準が合わさっている。

一瞬の静寂。

そこにある無音に追いつくように響く砲撃音。

大気を押しつけながら飛翔する砲弾は、武蔵の手の甲に当たる皮一枚上を舐めるように進み、大空に向かって上昇してから武蔵の背後に広がる海へと落ちていった。

続けて二発、三発と二つの銃口から飛び出す砲弾は、ほぼ同一のルートを辿り海へと消えてく。計十二度繰り返し返したところで重い砲撃音が風に流され、静けさに割り込むように拍手が鳴り響いた。

「凄い凄い！」

「今のどうやったんだ？」

「装甲って防ぐだけじゃないんですね！」

続いて離れてみていたはずの者達が一斉に駆け寄り、周囲を囲まれてしまう。

興奮しているのか腕を掴み揺さぶってくる者もいれば、しきりにどうすればいいのかと問うてくる者もいる。

「み、皆さんおお落ち着いて」

「どうやら龍鳳も囲い込まれているようで、もみくちやにされそうになりながらも懸命に声を張り上げていた。」

頼まれ事とはいえ余興としてやったようなもので、まさかこれほど反応されるとは思ってもよらず、そして倒していいような者達ではないため、無理に引き剥がすことも躊躇われた。救いを求めようにも鳳翔に大和も各々の担当があるため言うに言えない。

「どうしたものかと、取り敢えず離れてもらうよう叫ぼうとした矢先、通信が割り込んできた。」

『面白い遊びをしてるのね。そんなまやかしでこれまで人の心を掴んできていたわけか』

聞き覚えのある声だった。

落ち着いた声色に見せかけて自惚れに満ちた音。

「何故あそこまで鳳翔が苛立ちを見せていたのか、二度目にして武蔵もようやく理解した。」

「中津の奴らか。お生憎とお前らと遊んでいる暇がなくてな。すまないが自分達のグループに戻ってくれないか？」

「まともに相手をする気はなく、かといってそこにいること自体が癪に障るため、自然と言葉には棘が出ていたが、言い直すのも取り繕うのも面倒なためそのまま放置する。」

「なんだなんだ？ 昨日はあれだけ喧嘩腰だったくせに一日経ったら日和ったってか？」

自分の周囲にいた者達がやってきたものに恐れてか、徐々に道が開けられ、肉声が耳に届く距離まで近寄ってきた。

「まあ、まだ半年程度の新顔ではそれも致し方ないでしょうね」

眼の前まで近づき歩みを止めたのは、中津第二鎮守府の陸奥に、取り巻きの加古と赤城だった。しかも昨日と違い楽しげな笑みではなく、不敵な笑みを浮かべて。

「困ります。規則で許可なくグループの外に出ることは許されていません」

龍鳳も困いが解かれたのか、駆け寄り武蔵の隣でこの場を去るように促す。だがそれで回れ右するほど聞き分けが良ければ、この場にいるはずもない。

「私達は上の更じょうに上にある特別グループだね。戦闘でなんの支障もなく使える者ばかりが集められたところにいたのだけれど、全員今ドッグ入りしているの。だから特例で認められているのよね」

しかもどうやらお墨付きなようで、上に聞いてみたらと挑発までしてくる始末。

いい印象は受けない相手だが、その辺の根回しには皮肉を込めて称賛する。

「で、なんのようだ。あんたらが暇なのは勝手だが、こっちはまだ教えている最中だな。残念だが構ってるほど時間の余裕はない」

「それがそもいかななくて」

何をする気だ？

面を向かって話していたかと思うと、今度は周囲を見回し、息を大きく吸い込んだ。「誘導性艀装装甲とは力！ 力とはより上手く扱える者が教えてこそ意味がある。そう思いませんか！」

通信も使わず、声を張り上げての宣言。

「今教えているのは白杵鎮守府の方々ですが、本当に彼女らが一番強い存在なのでしようか！ 私はそうは思いません！ そのことを今日、ここで証明してみせましょう！」
おまけとばかりに宣戦布告まで添えてのその発言に、グループ外にまで聞こえていたのか、ギャラリーが増えてきたのが見ずとも気配でわかった。

「そんなことしても提督からの指示だからな。相手してやれんぞ」

「ええ、正攻法ならば、ね」

「どういうことだ」

問いたただす武蔵を受け流す陸奥。してやったりと本当に顔に書いているのでは思えるほどの不愉快な表情を浮かべていた。

「またお前達か。昨日も言ったが遊ぶなら後日にしろ。ここは訓練の場だ」

「失礼ですね。陸奥達は遊びではやっていませんよ。心から思っていることを口にした

までです」

参加している殆どの提督が駆け寄ってくる中、剣造が更に一步前に出てその場を諫めようとするが、別の提督が苦言を口にする。

ものの数秒で混沌としだしたこの空間に、どのように対処したら良いのか、剣造へと視線を投げかけると、俺に任せろと言うように頷いて見せた。

「それはすまない。だがここでの争いは原則禁止となつている。止めるように言え」

相手は准将だからだろう、普段口にする事のないキツめな口調で相手に命令するが、

「残念ながらその命令には従えません」

突つ張り跳ね除けられた。

軍隊において自分より上の階級の者へ意見を述べる程度ならばまだしも、真正面から拒否することはありえない行為である。下の階級が当たり前のように拒絶できるならば、軍は統率が取れなくなるため、トップダウン型を大事にしている。

剣造としても意外だったのか、眉間に皺を寄せながらも険を含めながら問いかけていた。

「なんだと？ どういうことだ」

「私とはある方からの指示で行っている。そう言えばわかつてもらえますか？」

そこまで言われ理解した。誰の思惑でこのような状態になつてゐるかを。これは特例として地位が認められてゐる存在。日下部誠からの命令で動いてゐるのだと。

集まつた提督達に目を向けて尚の事自分達の甘さに気付く。ほくそ笑んでゐる者が複数見て取れた。明らかにこの状況を待ち望んでいたと言わんばかりの表情。

つまりこれは最初から仕組まれていた流れなのだろう。誰が、何処が優秀なのかを見せつけるために用意された場所。それがこの軍事訓練の最大の目的なのではと武蔵は推測する。

「ご理解いただけただけで何よりです」

返事をしない剣造にこの場は見逃すという意思表示と受け取つたのだろう。中津第二の提督は振り返り、後ろにいた他の提督達に向かつて声高らかに問うた。

「オーストラリアが落とされてから数ヶ月。未だ太平洋に在るであろう《ア号艦隊》がいつ日本に攻めてくるかわかりません。そのためのこの軍事訓練ですが、このようなのでびりと。そして本当に一番優れてゐるのかわからない鎮守府に任せるだけで良いのでしょうか？ 私はそうは思いません。私は日本を守りたい。何が何でも。それが私と、私の尊敬する者の考えです」

一呼吸置き、提督達の顔を伺うように首を左右に回してから更に演説は続く。

「私の鎮守府の実力は本日見てもらつたとは思われませんが、あの通りです。他の鎮守府

より強いです。ですが白杵鎮守府は成績だけが先行し、実際に見せてくれることはお遊デモ・ス・トレーションびばかり。私は思います。白杵鎮守府は本当に強いのかと。このような場ではより優れた者が指導するべきと私は考えます。故にこの場をお借りして、どの鎮守府がより優れているか、一度確かめる必要があると私は思います」

——まさか本当にこれが目的だったとはな。

中津第二の提督の演説終了を堺に僅かなざわめき後、声が上がりに始める。そうだと。まったくもってその通りだと。私も前から疑問だったのだと。これまで何一つ言っていなかった者達が次々に賛同し、白杵鎮守府に対して批判的な声を上げ始めた。

「お聞きになられましたか？　これが回りからの白杵鎮守府への評価です。今回の演習の申し出、受けてもらえますよね」

背後に味方をつけ、逃げられない場を作つてからの誘い。先導する者としては上手いと言わざるを得ないが、不愉快極まりないのも事実。だが、劍造が何もしていないのだから、その艦娘である自分が手を出すことも口をだすこともするべきではなく、グツと手を握りしめて抑え込んだ。

その意思を代弁するように劍造は応えた。

「断る。お前のところの艦娘にも言ったが、悪いが遊びに付き合つていられるほど時間はない」

キツチリと、キツパリと断つてみせ、訓練を再開するよう促す。

流石はうちの提督だと内心喜んでいたが、相手方も引き下がるつもりは毛頭ないのだらう、更に突っ込んでくる。

「これほど疑問に持たれておきながらそれでは白杵鎮守府の名声も落ちますよ?」

「名声? そのようなもの戦場では不要だ。必要なのは死なないための技術を身につけることただ一つ」

「それをより優れた鎮守府で行うための演習だと言っているのですが。そんなに今の地位を独占したいのですね」

「そんなつもりは毛頭ない」

平行線をたどる一方の二人のやり取りにしびれを切らしたのか、今まで黙っていた陸奥が遂に口を挟んできた。

「ふう、どうやら白杵鎮守府の提督は臆病なようね。そんなに負けるのが怖いのかしら」
「なんだと?」

一番近くにいた武蔵にはハッキリ聞こえてしまった。艦娘においての最大の禁忌^{タブ}の言葉^{ワザ}を。

「ええ、もう一度言つて差し上げます。自分の地位にしがみつくのが必死の見苦しい臆病者、と言つたのです」

一度ならば気の所為と流してやることもできただろう。だが二度目は許せない。しかし提督からの命令で私闘は禁じられているため、理性を最大限まで引き上げて、手を出す許可を貰うべく、齒を食いしばりながら剣造に視線を投げるが、首を横に振られてしまった。

なんでだと詰問するより先に陸奥の言葉が続く。

「大方昔いた伊勢も数を誤魔化して戦果報告していたのでしようね。でなければ沈んだりしなかったでしょうし。本当に無様ですね」

かつて臼杵鎮守府にいたという伊勢のことだろう。会ったことがないとはいえ同じ鎮守府の先輩を馬鹿にされて苛立ちが募らないはずもなく、皮膚を突き破らんばかりに拳を握り込んでいたが、不意に開放された。

「———今、何をほざきましたか?」

人は自分より怒っている者がいる時、冷静になれると聞いたことがあったが、自分があるような立場になるとは思いもしなかった。特に今回は臼杵鎮守府において温厚な者達が来ているが故に、不意打ち意外の何物でもなかった。

「へえ、何。貴女が私の相手でもしてくれるのかしら?」 鳳翔

その中でも一番優しいと思っていた鳳翔から飛び出た言葉よりも、その全身から醸し出す殺気が不釣り合いすぎて、自分が相手をするわけでもないのに冷や汗が出始めた。

周囲も本能的に気付いたのだろう。その者を通すかのように道が一瞬にして割れ、鳳翔が姿を現す。

「提督。申し訳ありませんが」

「いい。皆まで言うな。だが先に言っておく。絶対に殺すな」

長い付き合いだからか、何をしようとしているか。お互い何を思っているか熟知しているのだろう。平行線だった物を飛び越え、重なり合う。

「はい。それだけは必ず。明石さんいらっしやいますか」

「はいはいここにいますよ」

鳳翔に呼ばれて明石が顔を出す。

明石は衛生兵としての役割があるため、一緒に来てはいたものの軍事訓練において教鞭を取ることはない。だからこそ歯がゆかったのか、表情は不気味なほど笑顔を浮かべていた。

「『夜桜』を使います」

「だと思つて持つてきておいた」

明石の手に持たれていたのは、折りたたみ式の薙刀。鳳翔専用に使われた明丸である。

それを持ち出すこと自体稀なだけに、どれだけその内に怒りと殺意が込められている

かを示していた。

「どれくらいあれば間に合いますか？」

「ん〜。即死さえさせなければ大丈夫かな」

普段の明石ならば確実にお手柔らかにと言うか、もしくは苦笑いを浮かべているところだろう。しかし今は満面の笑みでいる辺り、相当に頭に来ているのが嫌というほどわかった。

「最終的な意思確認が取れていませんが、これはうちからの挑戦を受けるということで宜しいですか？」

「ああ。これ以上我慢させるのも忍びないのでな。正式に受けさせてもらおう」

これからお互いに承知した上で演習が始まるのだと、二つの鎮守府間で確約された。

「それは何より。陸奥、加古、赤城。正式に許可が降りました。場所は艦娘ですし海が良いでしようが、あまり遠いと提督方に見えませんかし海岸付近が良いでしょう」

自分の艦娘に指示を出しながら確認してくる辺り、これは確定事項だと言いたいの一言外に伝わってくる。

剣造も否定する要素がないからか首肯しながらもルールを追加させる。

「武装は全て許可して良いな？」

「はい問題ありません。ところでそちらは鳳翔以外に誰を出されるんですか？」

明丸の使用も認められた以上こちら側から聞くことはなにもない。

中津第二はどうかやら他にも戦う者がいると勘違いしているようだが、残念ながら臼杵鎮守府から出るのは唯一人。

「鳳翔だけだ」

中津第二だけでなく、他の提督達にも同じく動揺が走る。無謀だと。正気ではないと。

「二隻の艦娘だけ？ 冗談……ではないようです。いやはや見くびられたものだ」
その見くびりがどちらなのか、直ぐにわかることとなった。

第三章七幕 吐いた唾の向かう先

場所を海へと移し、一方的とは言え決められた通り海岸のそばで、鳳翔と陸奥達は三十メートル程距離を開けて向き合った。

ギヤラリー側は持ち運び可能な簡易ドッグを浜に設置し、流れ弾から提督を守るように艦娘が前を固め、最悪臼杵鎮守府の者達がカバーに入る形でもしもの事を考えての布陣となっているが、必要ないだろうと確信しながらも鳳翔は始まる瞬間を待っていた。

「木曾ならまだしもあなたが一人で戦おうなんて、無謀じゃないかしら」
「知っていますか？ それを人は傲りと言うのですよ」

時間が少しばかりおいたため、幾分心に余裕が生まれたが、それでも爪先ほどの隙間が空いた程度。疑問へは皮肉を込めて返した。

「は、傲りはどつちだ。一人でどうにかなると本当に思ってるのか？」

「軽空母風情で。後悔してももう遅いですよ」

「私が軽空母かどうかで強さを計っているならあなた方はその程度です。お忘れですか？ 木曾さんは重雷装巡洋艦。それに負けたのはどなた達でしたか？」

事実を突きつけただけに二の句が続けられないのか、歯噛みしながら押し黙った。

陸奥もいつかのことを思い出しているのか、苦虫を潰したような顔でこちらを見るが、鳳翔としてはどうでも良かった。顔の見せあいをしたくてこのような場を設けてもらったのではないからだ。

「お喋りはこの辺りで終わりにしましょう。私達は演習をするためにこの場にいるのですから」

「ええそうね」

淡白な声と顔に怒りを滲ませる陸奥。

顔を歪めさせたことに小さな愉悅感を覚えていると、加古が一步前に出てきた。

「その鼻っ柱、あたしがへし折ってやる」

どうやら陣形として前に出たのではなく、一人でやる意思表示としてそのような行動に出たようだ。

「先鋒というわけですか」

「三人でやったら直ぐ終わるだろうからな。実力差を見せつけるならこの辺が丁度いいだろ。三人だから勝ったと言われても癪だしな」

——それが傲りだと何故気付かないのでしょうかね。

不愉快さを表すように折り畳まれた状態の明丸『夜桜』を思いつきり振るい、本来の姿を見せる。各関節部分は小さくなっているため動きの障害にはならず、ぱつと見ただ

けでは折りたたみ式だと気づけないようになっていた。気に入っているため、普段戦場では使わない。本気の戦いをする時以外は持ち出さないようにしており、基本近接戦は合気道を用いて戦っている。

本来ならばこのような相手に使うことなど絶対にはないのだが、今回だけは例外として抜かせてもらった。

この者らを。人の提督を馬鹿にするような者達を、このまま野放しにするなど艦娘として許せなかった。

「さあ、いつでもどござい」

「吠え面かくなよー」

艀装を展開し息巻く加古だが、いざ動き出しても縮地は使えないのか、酷くどろいように感じた。

通常の航行に比べたら装甲が使えている分倍近くの速度が出せているが、所詮その程度。仕方ないと目と鼻の先まで縮地で跳んで距離を狭めてあげると、鳳翔の動きに驚いてか、驚愕しながら慌てて拳を突き出してきた。それを空いている左手で掴み、片腕だけで小手返しを行った。腕が足りない分は装甲で補いつつ放ったわけだが、威力が強すぎたのか、水面につく前に二回転してから盛大に着水。装甲で防ぐ暇もなかったのか艀装の一部が壊れたが、気にせず加古の背に向けて薙刀の石突を突き刺すように落とす。

石突は加古の皮膚を、肉を、骨を貫通し、鳳翔がそのまま石突側を持ち上げると加古も一緒に釣られた魚のようについてくる。

「加古！」

誰かが叫んだが、鳳翔はお構いなしに上空に加古を放り投げ、跳躍してから船体部分目掛けて後ろ回し蹴りを叩き込み、陸奥達の側に蹴り落とした。

「まずは一人目」

ボソリと呟いたつもりだったが、どうやら聞こえていたようで、陸奥と赤城はビクツと体を震えさせていた。だが、今更怯えたところでもう遅い。既に演習は始まっているのだから。

「はーいどいてねー」

明石が即座に現れ、気絶でもしているのか、物言わぬ加古を担いでその場から離れていった。

連れて行かれる加古を目の前にしても今起きた光景が信じられないのか、静まり返る。それはギャラリーでも同じようで、多少話している気配が感じられていたが、今は完全に消え失せていた。

「まだお一人ずつ来られますか？」

じつとしていても埒が明かないため鳳翔の問いかけると、一瞬体を震わせながらも四

つの瞳とかち合う。

呆然としていた自分が悔しかったのか、陸奥が齒ぎしりをしながら睨みつけて来る中、赤城が身を乗り出してきた。

「赤城！」

「……は私にやらせて下さい」

陸奥の責めるような叫びに芯を持って赤城は受け止め、弓矢へと手を伸ばした。

「あなたも空母なら艦載機で勝負しなさい」

「艦載機ですか？ ええ構いませんよ」

鳳翔は誘いに乗り、薙刀を畳み、袴に引つ掛けるように通す。まだ出していないかった飛行甲板と弓に矢を出現させ、感触を確かめる。『夜桜』は確かにお気に入りだが、やはり使い慣れたこちらの方が手に馴染むと思いつつ、いつでも放てる準備をした。

「お互い真上に放ち、宙返り後に戦闘開始で良いですね」

「問題ありません。いつでもどうぞ」

自分の領域に連れ込んだからか、口元が緩くなっているのが見て取れた。

基本艦載機は正規空母の方が搭載できる数が多い。すべての装備を戦闘機に割り振ったとしても鳳翔では四十二機が限界に対し、赤城ならば八十二。倍の数を出すことができるのだからどちらが有利かは言うまでもない。

そう、本来ならば、だ。

「攻撃隊、全機発艦！」

「さあ、お行きなさい。空はあなた達のもですよ」

同時に放たれた矢は空に向かつて突き進む最中に弾け、複数の艦載機へと変貌した。双方はお互いに腹を見せながらもぐんぐん青空へと飛翔してから宙返りを決め、真正面から向き合ったところで空戦が開始された。

——予想通り、赤城は全て戦闘機でしたか。最初からこの状況を狙っていたのですから当然といえば当然ですね。

八十二もの戦闘機が上空で編隊を組みつつ、鳳翔の航空隊に向かつて距離を詰めてくる。

「数が、四十……いえ五十？ 鳳翔なのに？ どのような手品を使ったのかはわかりませんが、それでも数はこちらの方が上です！」

「いえ、違う……」

この戦いは貫つたと確信しているのか、赤城の目を見ると自信に溢れていたが、逆に陸奥の顔は怯えていた。それが行う者と見る者の視点の違いなのだが、赤城は気付くことはなかった。

「そこです！」

「待ちなさい赤城。鳳翔はまだ一本しか射ってない！」

「え？」

陸奥の叫びに遅れ、すれ違う艦載機達。相当数被弾したのか、幾つも煙を上げて次々と落下していく。

「そんな。私の艦載機達が……」

但し、撃墜されたのは全て赤城側のみ。

鳳翔の艦載機も幾つか被弾は見られるが飛行に支障はなく、全機健在だった。

正規空母が軽空母に負ける。全く無いとは言わないが、それでもこの多くの提督に見られている中での敗北は、通常の敗北以上に重たい意味があった。

「何をやったの。あなたの艦載機は昨日爆撃機だったはず！ それにそんな数飛んでいなかった。なのに何故！」

信じられないとばかりに体を戦慄かせながらも声を荒げる。

それに対し、鳳翔はただ事実だけを突きつけた。

「簡単ですよ。昨日は数を搾って放っただけです。そしてあの子達は皆戦闘機ではありません。戦闘爆撃機です」

「戦爆!!? そんなのおかしい。第二次世界大戦中ならまだしも艦娘(わたしたち)で使えるなんて聞いたことがない！」

「おかしいと言われましてもこの通り私は使えています。勿論、それ相應の努力はさせてもらいましたが」

「努力なんて皆やつてる。でもそんなことには誰もなつてない！」

「そうですか。ところで話は変わりますが、赤城は何度手足がなくなつたことがありますか？」

「てあ……ええ？」

鳳翔の投げかけた話題についていけないのか、荒げていた声は途切れ、オウム返しができないほど困惑している。それを冷めた目で見つめながら同じ言葉を繰り返す。

「手足を何度失つたことがあるかと聞きました。臓器はどうですか？ 骨ごと引き千切られる感触や脇腹を抉られたことは何度経験したことが？」

「け、経験も何もそんなになるまで出撃なんて」

「ええ、そうでしょう。それが普通のはずです」

ごく当たり前の反応に、小さな羨ましさや落胆を混ぜつつ、言葉が続けた。ああ、やはりその程度なのだと。

「私はこれまで、何度。何十度となく手足をなくしました。装甲で削り落とされることもあれば、集中砲火を防ぎきれずに砲弾で撃ち抜かれたことも。特に一人で戦場に向かった時に重症を負うと生きた心地がしませんでしたね」

「何を言つて」

「はい。ですからあなたも少しはそういう経験をした方が宜しいですよ?」

「え?」

間延びした反応を見せる赤城の眼前まぜ一足で跳び、弓と飛行甲板を虚数へと送り、薙刀を一振りで展開。足元からすくい上げるようにして振るつた。途中海面に接触したからか、いくらか水しぶきを上げつつ、そこへ赤いものが混じるまでそう時間はかからなかつた。

「え、あ、手が。足、が? ああああああああああああああああ!!」
「赤城!」

一刀で両断された赤城の右腕と右足は僅かに浮遊した後に、石を投げ込んだような軽やかな音を立てて海へと沈む。ここは海岸から近いため探せば見つかるだろうが、ドツグに入りさえすれば元通りになるのだからその必要はない。

片足を失つたことでバランスが取れなくなつたのか、後ろへと倒れていく赤城に石突で腹部を突き破る。

「がぐつあ」

「どうです?、これが手足をなくす感覚と臓器を潰される痛みです。これを何度も経験するとあなたも強くなれますよ、きつと」

「鳳翔！　そこまでする必要が何処にある！」

仲間がやられてか、怯える素振りを見せていた陸奥が遂に激高し船体部分を出現、砲弾を撃つてくるが、いくら戦艦の砲撃と言えどその程度で傷を負うほどヤワな鍛え方はしていない。そのまま戦闘続行しても良かったが、あえて距離を開けて明石が来るのを待つ。

「赤城、気をしつかり！」

「陸奥さん、すみません。何もできずに終わってしまつて」

「いいえ、あなたは頑張つたわ。私が保証する」

「それは、よかつた……」

「それじゃあ連れて行くね」

別れの挨拶をしている二人の間の空気を、明石が砲弾さながらに撃ち抜き、攫うように赤城を担いで即座に轉身した。

残されるは二人。

冷めた鳳翔と怒りに満ちた陸奥という対極の表情を浮かべながら睨み合う。

「あそこまでする必要あつたかしら」

「必要はないです」

「だつたら何でつ」

「何度も何度も誘ってきたのはそちらですよ。ちゃんと、真剣に、あなた方の気持ちに応えた結果です」

自分達がこれまでどのような相手に対して戦おうと。勝とうとしていたのかを思い出してか、齒ぎしりしていた。

「ましてや提督への暴言並びに伊勢さんへの侮辱。沈められないだけ良かったと思つていただききたい程です」

「何かと思えば。伊勢が沈んだのは事実でしょ。死んだということはその程度の実力だったからじゃないかしら」

「————黙りなさい」

今まで理性を総動員して殺さないためにと抑えていた殺気が再び溢れ出す。陸ではまだ鳳翔の実力を知らない時だから受け止められたのだろうが、この僅かな間に肌で感じたことについて理解したのか、表情こそ怒っているようだが足は一步後ろに下がっていった。

「伊勢さんは。今の私ですら足元に及ぶかどうかと言えるほどの強い方でした。それをあなた程度が侮辱するなど。立場をわきまえない！」

鳳翔の圧に押されてか、体をビクリと震わせ、反論すらできない陸奥にこれまであった不満をぶちまける。

「あなたにわかりますか？ あれほどの方を失った後、その戦力を期待されていた鎮守府がどのようになるか。飛んでくる救援の数々。助けることのできない命を何度も聞くこととなり、その上で断るために徐々に精神がすり減っていく。罪悪感に苛まれながらも、どれだけ自分達が伊勢さんに依存していたかを突きつけられ、尚更申し訳なくなる」

薙刀を折りたたみ、袴に引つ掛けてから空を見上げて深呼吸を一つする。いつか感じた雨の気配はそこにはない。

「でも木曾さんだけは前に進み続けました。ひたすらに進み続けたあの人は、もう追いつけないほど強くなされた。本当に。そんな人を宿敵のように扱うなど、冗談にしては笑えませんか」

「わ、私が木曾をどのように思っているよと、あ、あなたには関係ないでしょ」

「ええ。ですからせつかくなので一つ提案をします」

「てい、あん？」

困惑、不安、恐怖。投げかけられた言葉の真意を測りながら伺っているようだが、残念ながら陸奥に選ぶ権利など最初からない。

「木曾さんがかつて強くなるためにやっていた訓練方法があります。これを切り抜けたら今回の件は忘れましょう。内容は簡単です。私の艦載機の攻撃を防ぐか避けるかを

したらいいだけです。もつとも、それに合わせて私自身も攻撃に加わりませんが、それを二十秒耐えたならあなたの勝ちです。どうですか？」

「それを拒否したら」

「拒否権があるとお思いですか？」

笑顔で言つたつもりだったが動きたのは口元のだけなようで、目は冷たいままだったためか、その歪な笑みに陸奥が喉を引きつらせていた。

「では始めますね。死ぬ気で頑張つて下さい。あの子達の強さは並ではないですよ」

上空で待機させていた艦載機達へ、一斉に攻撃指令を下す。それまでバラバラに飛行していた妖精達は一糸乱れぬ編隊を作り上げ、一度距離を取つてから反転。先程のつまらなかつた空戦の鬱憤を晴らすように、艦載機から唸り声を撒き散らしながら急降下を始めた。

「つ今更爆撃如きで！」

怯えていた自分を鼓舞するためか、嘯み付くように気持ちを吐き出し、迫り来る物を睨みつけている。だが、相手はそちらだけではない。

「言いましたよね？ 相手は艦載機だけではないと」

縮地を使い陸奥の背後へ回り込み、膝裏を軽く蹴つてみせる。

全身硬直させていただけに、一箇所。たった一箇所穴を開けられてしまったために、

それは凄惨な光景だった。

全身到るところが黒く焦げており、皮膚が爛れている箇所からは流血が見られる。特に酷いのは腹部と左腕に右足だ。腹部は貫通する前に爆発したのか、弾けた皮膚の奥が露出しており、崩れた臓器と折れた骨が露出している。左腕と右足も爆発でちぎれ飛んだのか、左腕は肘から先が。右足は太もも辺りからなくなっていた。

「これは思いつきりやったものね」

「これでも加減はしました」

「わかってる。そもそもしてなきやとうに沈んじやつてるし」

「ここまですべても生きてるのは、自分で近い状態を経験したためにやったギリギリの塩梅だ。最も、満足にうめき声さえ上げられないのは想定外だが。」

「——実力を見誤っていましたか。もう少し下方修正してあげないといけませんね。次があれば、ですが。」

結果を受け止めつつ、次回のことを考えて首を振る。もう二度と挑んでくることはないだろうと。もし再び目の前に立つ気骨があるならば、こんなことにはなっていないはずだからだ。

『終わったか』

「はい。これ以上続行は不可能でしょう」

通信を飛ばしてきた剣造に演習の終わりを告げる。

『わかった。ご苦労だ。後は俺に任せて暫く休憩しておけ。恐らく直ぐに再開はできないだろうからな』

「了解しました。何か必要があればお呼び下さい」

『その必要がないことを願う』

剣造との通信を終え、周囲を見れば先程まで側にいた明石と陸奥が消えていた。浜を見れば丁度簡易ドッグに陸奥を放り込んでいるところだった。

一人取り残された鳳翔は今は人の多いところに戻る気にはなれず、その場で空を眺めることに。

「伊勢さん。私は少々大人気なかったでしょうか？」

意味のない呟きは誰が拾うでもなく、見ている方向とは逆に、ただこぼれ落ちるのみ。

もう狂おしいまでの怒りはない。消してしまいたいほどの殺意も。

燃え上がった感情の後は焼け野原が広がるばかり。燻った気持ちは自分の行いを責めるようだ。

そんな心境の最中に風がさわりと吹き抜けていく。それが自分を慰めてくれているようで、悲しくて、けれどどこか嬉しくて、一滴涙がこぼれ落ちた。

第四章一幕 奈落の足音

吹き抜ける風。

遮蔽物の存在しない海上において風を避けるすべなど存在しない。幾ら着込んだところでこの冬の風はわずかにでも見える素肌に容赦なく襲いかかる。人であるならば、まず間違いなく低体温症になるであろう凍てつく息吹も、艦娘の前には春一番が過ぎ去った後の気持ちの良い風にすぎない。

「そこだ」

南とはいえ空気も張り付きそうな中、武蔵は砲撃を放ち、寒さで静止しそうな空間をぶち壊していく。

大和型の主砲。四十六センチ三連装砲から吐き出された鋼鉄の塊は風を切り、二〇〇〇メートル先の目標へと邁進する。

「残念ハズレ」

「まだわからなっあぁー！」

明石に茶々を入れられ言い返すもつかの間、砲弾は切り裂いていたはずの風に誘われ

るように、目標物の八十センチ隣へと落下する。

「むうおかしいな。風の影響は計算に入れて撃つたはずだが」

「そりやそうだよ。風は一定じゃないんだし。当然海も」

「ちい、これは評価に響きそうだな」

眉間にシワを寄せながらも次のテストへと移行する。

現在武蔵が行っているのは艦娘の性能テスト。

同名の艦娘であっても性能差があるのは勿論のこと、得意不得意も変わってくる。元々は各鎮守府の提督がそれらを纏め、レポートを出すだけで終わっていたのが数年前までの話。現在は陸軍が各鎮守府へ赴き、実際に見てから評価が下されるように変わった。

「くそ、今回はいまいちだな。で、どうだった榛原」

全てのテストが終わってから後片付けをしている明石を置いて先に陸へ上がり、視察していた榛原神戸に声を掛ける。

なんでもかつて白杵鎮守府（うち）の提督の下について深海棲艦相手に戦った中だとか。

「そうですね。概ね問題ないかと。砲撃制度はB、耐久性はA+、航行はC。ですが遅さは艦種の都合上いた仕方ありません。装甲でカバーできますし、その問題の誘導性艦装

装甲は文句なしのAランクですから」

クリップボードに書かれた評価を、ニコニコと笑顔で言われるのはややむず痒くある。

一番親しい軍人が池上剣造であるために。それが元部下となれば尚更堅物を想像していただけに、初めて会った時は驚いたものである。だが最近ではもう慣れたもので、肉体は軍属らしく鍛えているのかドーベルマンのような感じではあるが、表情を含めた雰囲気は柴犬に近い人懐っこさをこれでもかと醸し出していた。

「未だに謎ですよ。装甲の性能を加味するなら、そこから得られる性能も評価しないといけないはずなのに、結局まだ別々に評価しているんですから」

全員の性能テスト——提督は評価試験と呼んでいるが——も終わり、仕事からプライベートにでも切り替わったのか雑談を初めた。

「そうは言うが装甲を加味しだすと収集つかなくならないか？」

「その辺は装甲が使える方々用に変えたら良いだけです。無理に一緒に評価する方が返って不都合なくらいです」

多少私情も入っているだろうが、武蔵は自分が評価を下す側でないため、それも一理あるかと頷く。

「大体池上中將の評価が低いのも納得いきません。どう考えても日本を支えているのは

池上中将与皆さんなんですから。そりゃあ最近は装甲が使える艦娘も増えてきましたけれど、それでもですね——」

「神戸、その辺にしておけ」

「木曾さん。ですが」

「誰が聞いているかわからんだろ」

榛原は食い下がりがそれでも木曾は論じた。

「陸軍がどういう扱いを受けているかは知っているが、それでも今は波風を立てていい時期じゃない」

何故陸軍が海軍の代わりに評価を下しに来ているか、理屈は単純だ。かつて陸にまで深海棲艦に攻め込まれた経緯から陸の兵力を一定数常備している。主となるのは機甲師団だが、それでさえ艦娘が戦線を押し返して以降出番らしい出番はない。だが全てが不必要だと切り捨てることはできず、予備兵力として扱われているのが現状だ。更に物資の運搬等は幾ら内陸へと避難しているとはいえ、危険を伴うことから基本陸軍が行っているため、運び屋と揶揄されることもある。ただ運びをするだけでは暇だろうからと回された仕事が視察というわけだ。

「木曾さんがそう言うなら……」

渋々とながらもしつかり頷いている辺り、今後頭が上がることはないだろうと内心

ほくそ笑んでいると、話は変わりますがと前置きを入れてから、榛原が別の話題を投げかけてくる。

「結局あれから音沙汰なし。どう動くつもりなんですか？」

「さあな。深海棲艦の考えていることなんてオレらでもわからない」

一月前。秋が終わりかける時期のことだ。その日、世界は大きく動いた。最悪な方に。

オーストラリアの艦娘を殲滅させた深海棲艦最大の艦隊《タルタロス》の次の目標となったのはアメリカ合衆国だった。アメリカは艦娘保有数が世界最大で、その数は八十万を超えている。日本は約十六万と言われていることからその差は歴然と言えた。東海岸に現れた《タルタロス》に投入された艦娘の数は半数の四十万だが、それでも深海棲艦の数が二十三万。倍近い数なことから世界中の誰しもが思っただろう。これでもまた一つ、海が静かになるだろうと。だが現実は違った。アメリカ太平洋艦隊は四日間もかけて戦い続け、結果壊滅的被害を受けてしまった。逆に《タルタロス》側は十五万もの兵力が健在。数を増やすためか、それとも傷ついた艦を直す期間なのか、アメリカとの一戦以降姿を表わすことはない。

「不気味ですね。今どこにいるかもわからない存在というものは」

「そうか？ 来たら叩く。それだけだ」

あつさりと言つてのける木曾だが、残念ながら武蔵としては榛原よりの心中でいた。《タルタロス》には姫クラスが万単位で存在し、他の駆逐艦等にしてもflagshipから下のタイプは存在しない。全てがflagshipだ。flagshipとなれば装甲などごく当たり前のようにつけてくるため、数が揃うと面倒に感じるほど。それが十万を超えているのだから肝が冷えるというもの。

正直武蔵としては、アメリカはよく八万も沈めてくれたと褒めてやりたいほどだ。

「さすが。肝が座つてますね」

「人を怖いもの知らずみたいに言うな」

「で、本当のところはどうなんですか？」

戯けてみせる榛原に、木曾はトーンを少し落とし、影が零れ落ちた。

「怖いものくらいある。仲間をこれ以上失うのは沢山だからな」

そこに冗談は欠片も混じっていないなかった。ただ本当にナクしたくないという思いが、武蔵の心を打つ。

「ですね。無駄なことを聞いてすみませんでした」

「剣造にとつてお前も同じように思っているだろうから、迂闊なことはするなよ」

「はは、池上中将にそのように思っていたらただけなら光栄です……と、ところでなんですが」

木曾に視線を合わせていた榛原だったが、急に泳ぎだす。

握られたクリップボードにも力がこもっているのがわかる。しかし理由は知つていないため、わざわざ尋ねたりすることはしない。

「き、木曾さんはわ、わた……僕が死んでしまったらどう思われます、か？」

武蔵も他の者に言われるまで気が付かなかつたが、どうやらこの榛原神戸という人間は、艦娘である木曾に惚れているのだ。

艦娘にとつて基本親しみを持つのは自分の提督だけなのだが、知らぬ仲であるためか、武蔵としては応援してやらないでもないという心持ちだ。

無論榛原は艦娘と提督間で行われる仮のケツコンを、木曾がやっていることも重々承知している。その上で惚れ込んでいるのだから、背中を押して上げるのはやぶさかではない。

ただ提督でもない人間に艦娘が好意を抱くにはやはりハードルが高い。

「下らんことを聞くな。言つただろ。剣造が悲しむと」

人とは提督が基準に考えられるため、結局一番にはなれないのだ。武蔵自身もやはり提督が中心に来る。提督にとつて利益となるか不利益となるかがまず始めに来て、そこからやっと相手を見ることになるためだ。

「池上中將は関係ありません！ 木曾さんが僕個人をどう思っているか知りたいんです

！」

軍属であるのだから。そして艦娘と頻繁に接する機会があるのだから榛原も熟知しているだろうに、それでもと食い下がる。

——それ、殆ど愛の告白じゃないのか？

さすがに野暮であるため口にはしないが、苦笑いは隠しようがなかった。

「どうした藪から棒に……まあそうだな。お前とは何だかんだで付き合いが長い。オレ個人の気持ちとして、死んでほしくない一人ではあるよ」

「本当、ですか」

「聞いてきたのはお前だろ。それともオレの言うことは信じられないか？」

「い、いえいえいえ。信じます！ 絶対信じます！」

首が取れそうなほど左右に降ってから、腹部の辺りで抱えられたクリップボードをつぶさん勢いで握っている辺り、どれだけ嬉しかったのかが伺える。

「大袈裟なやつだ。だが本当に死ぬなよ。運び屋なんて言われているが、ライフラインだつて主に維持しているのはお前たちなんだ。頼りにしている」

恐らく木曾は思ったことをそのまま口にしたのだろう。最後には手の甲で胸元を叩いていた。本人は無自覚なのかもしれないが、あんなことを言われ、されたら武蔵でも舞い上がってしまう自信はあった。

「はい、有難うございます！」

案の定榛原も快晴が如き笑顔を見せてから、では次があるのでと残し去っていった。見送った背中越しに上機嫌なのが伺え、思わず眩く。

「あんたは卑怯だな」

「何のことだ？」

「そういうところが」

「意味わからん」

無自覚なのだろう。それがより一層惹きつけているとも知らずに。

当人は困惑しているが言うのも悔しいため、何も言わずに放置した。

いつか自分が追いつけた時に教えようと心に決めて。

第四章二幕 雲の形

退屈だ。

こんなことを思うようでは北上のようだと他の者に笑われてしまうかも知れないが退屈だった。

そもそも退屈の原因が北上と不知火のペアにあるため、思わず口をへの字に曲げてしまふ。

——なんでサボって遊びに行っちゃうかな。私だって我慢してるのに。

仕事自体はちゃんとこなしたものの、先に遊んでいたことがバレてしまい、それ以降伊勢がずっと同伴している状態だ。

二人の監視を言い渡されて一月。その間他の者と出撃することはない。もつと具体的に言えば木曾と出撃できていないのが伊勢には堪らなく嫌だった。

木曾と出撃する時が一番伊勢としては落ち着くのだ。自由で、のびのびとでき、何より木曾に我儘を言っても聞き入れてくれる。

以前北上に甘え過ぎだと注意されたことがあるが、木曾の優しさが心地よいのだから

仕方のないことだ。自分は悪くない。

自分は何も悪くないので早速打診しようと執務室へと向かった。

「提督ーいるー」

ノックをすることなく開けた戸の先に投げかける。

この後のお約束は「ノックの一つくらいしたらどうだ」と続くのだが、あいにくと不在のようで、小言はキャンセルされた。

「ん〜どこだろ。隣かな」

戸を締めてから一つ隣の資料室へと向かう。

戸の作りは執務室も資料室も特別変わらない。木製の扉にドアノブが一つだけついた簡素なものだ。

そちらをガチャリと音を立てて回し、室内へと入っていく。

先程の執務室は机と椅子以外家具は置かれていない酷く殺風景な部屋だが、資料室はそれとは打って変わり、幾つもの本棚が置かれており、所狭しと本やらファイリングされた資料が並べられていた。

それらのうち大半が兵法書であり、海陸問わず並べられている辺り、提督の勤勉さが伺える。

資料室はパツと見ただけでは奥が見えないため、声を上げ、いるかどうか確認しても良

かったのだが、しんと静まり返った空気がそれを許してくれそうもない。それに芳しい香りが誰かがいることを指し示しており、無理に呼びかけずともよいと考え直し、一歩足を動かし奥へと向かった。

「ん、伊勢か？」

奥へ顔を覗かせると同時に探していた人物から声がかかった。

「えーなんでわかったの」

見つけはしたが、提督は椅子に腰掛けた状態でこちらに背を向けており、振り返った形跡はないにも関わらず、誰か言い当てられたのは少しばかり釈然としなかった。

「何年一緒にいると思っている。戸を開ける際ノックをしないのは木曾に北上、それからお前だけだ。そこまで絞れたら後は歩調でわかる」

「相変わらず素晴らしい慧眼ですこと」

軽口を叩きながら提督の向かいに腰を下ろす。

対面式のテーブルの上には幾つかの資料と紙、ペン、それからコーヒーの入った白いマグカップが置かれており、更に提督の手には深海棲艦の資料があった。積み上げられている資料も背表紙をよく見ると、深海棲艦の艦種毎に振り分けられたファイルだった。

「なんで今更そんな物に目を通してるのさ」

しかしその手の資料は新情報上がる度に大本营より追加、送られてくるが、ここ暫く新種など見かけたなどという話は聞かないため何も変わっていないはずだ。

「なに、再度目を通し直しているだけだ。情報が何度も変わっているのだ。古い物を覚えていた可能性もある以上やっておいて損はない」

「そうはいつでも今の私達とまともにやり合える深海棲艦なんて殆どいない？」

「否定はせん」

提督が一口コーヒーを啜る。動くマグカップに釣られるように匂いもまた揺らいだ。

「だが、戦場に絶対はない。何より」

「融合棲姫がいるから、でしょ。耳タコ耳タコ」

「八年前を堺にやつの情報もパツタリなくなっている。だが沈んだとはどうしても思えないのだ」

自分を見る提督の目に憂いが混ざる。自分を通して別の人を見ていような感じだ。

——ような、じゃなくて本当に見てるんだらうな。

自分以外を見られていることがちよつぴり悔しくて、敢えて軽い口調で聞いてみることにした。先代伊勢の強さというものを。

「そういえば前にいた伊勢って強かったって聞いてるけどどうだったの？ 木曾さんはオレより遥かに強かったーって。今でもまだ勝てるかどうかかわからないとか言ってた

けど」

口にはするものの、木曾が負けるとは微塵も思っていない。負けるはずがない。負けるわけがない。

昔ならいざ知らず、今のあの人は絶対的だ。

他の追隨を許さないだけの力を持っている。

だからこそ結果などわかりきっていた。つもりだった。

「そうだな。俺もあいつの戦っている様を見た数は少ない。全力ならば尚更。だがそれを踏まえても五分五分だろう。あいつと今の木曾ならば」

しかし返ってきたのは同等の強さだった。

圧倒的でもなければ一位とも言い切らない。

「それ本気で言ってる?」

わずかに身を乗り出し、提督相手ながらも眉間にシワを寄せながら思わず険を含んだ物言いとなる。

提督もそれを予期していたのか、すかさず補足してきた。

「俺よりも木曾に聞いてみたらどうだ? あいつなら、まだ伊勢さんには追いつけていない、とか言いそうではあるが」

ぐうの音の出ない完璧な返しに伊勢は複雑な心境と面持ちとなる。

以前気まぐれで木曾に聞いたことがあったのだが、その時に今まさに提督が言ったことを木曾が口にしたのだ。その時は謙遜しちやつてと流してしまつたが、少し考えを改めないといけないのかも知れない。直ぐには無理そうではあるが。

「じゃ、じゃあさ、それだけ強い伊勢に勝つたかも知れない融合棲姫はもつと強いつてことになるわけじゃん？　どうやって倒すの」

「それに関しては何とも言えん。当時はあいつも頭部を怪我していたらしいからな。それがどこまで影響したかは未知数だ」

「行き当たりだつたりだね」

「すまないな」

謝罪する提督だが、糾弾するつもりで言つたわけではないため、即座に謝ることを止めようかとも思つたが、先程の意趣返しではないが、ちよつぱり不満顔見せる。

「別に良いけどさ……ところであの噂つて本当なの」

「噂？　どれだ」

どうやら提督には幾つも該当する噂話があるようで、眉を顰められてしまつた。

仕方ないとはかりにあまり口にはしたくなかつた単語を零す。日本とは切つても切れないあの兵器を。

「アメリカが核爆弾を使う準備をしてるつて話」

アメリカの太平洋艦隊が壊滅的被害を受けてからだ。そんな噂話が人里に行った時にされだしたのは。それまでだつて無いかつたわけではない。それでもあの日を境に増えたのは間違いなかつた。

「そのことか……表向きにはまだ公表されていないが既に準備はできている。次に《タルタロス》が現れたら使うと各国政府にも打診したそうだ」

「何それ。自分たちのところにもう現れる可能性が低いからつて、なんでまたあんなことができるの！」

「伊勢……そうかお前は」

「別に本当に体験したわけじゃない。そうじゃないけど」

かつて伊勢という人型ではない、艦艇の形をしていた頃の記憶だが残っているものがある。それは個体によつて様々らしいが、伊勢は原爆の雲を覚えていた。幾つもの命を焼き払った兵器。まだ深海棲艦相手には試されていないためどれほど効果があるかは定かではないが、それでも無駄に終わることはないだろう。

海を犠牲にするという部分に目を瞑るならば、という前提条件があるが。

恐らく艦娘ならば被爆する心配も無い。残つた戦力を掃討するならばそこまで戦力はいらない。それがアメリカの考えなのだろうが、

「あれは、嫌だな」

伊勢にはそれを受け入れ難かった。

項垂れた先に見える自分の手は、簡単に人一人を殺せてしまう力がある。だが原爆の一瞬でその数万倍の結果を出す。

当時の犠牲者の数をこの資料室で知った時には息を呑んだほどだ。二次被害を含め、一個人として到底認められる行為ではない。

「アメリカは大義名分を得ている。自国の戦力、その半数近くを失ったがために。そしてアメリカが敗北したことで世論も変わり始めている。もうそれしか無いと」

「じゃあ、提督も賛成なの」

続けるように上目で提督を見る。

自分の主人があんな物を使うことに同意しているのか、恐恐とながらも見つめ続けた。

すると提督は首を横に振った。

「馬鹿を言うな。核兵器は抑止力としてならまだしも本当に使ってしまったては駄目だ。そのためにやれることを今のうちにやっておくんだ。日本が攻めて来られる場合は日本が敗北するまで核の使用は避けるようにと政府は返したそうだ」

「それってつまり」

「お前たちが《タルタロス》を倒しきれば使われることはない」

「そつか。えへへ……」

俯いていた頭の代わりに笑い声が零れ落ちた。

「あ、でも来なかつたらどうしよう」

「そればかりは神頼みしかないな。他国に出られたら救援は間に合わないと見なされ使われるだろう」

「むーそれは困る。絶対に来てもらわないとー」

「そうだな。何か惹きつける要因さえわかれば良いのだが」

提督も本気で悩んでいるのだろう。だからこそ資料を見返していたのかも知れない。それが嬉しくて、だからこそ自分の意志を示したかった。

「どうなるかはわからないけどさ。来たら絶対勝つよ。あんな物を二度と使わせないめにも」

「ああ、期待している」

提督も満足がいったのか、薄くはあるが笑みを浮かべ、コーヒーを飲み干していた。

「ところで何か用事があつて来たんじゃないのか？ 別に世間話をしに来たわけじゃないだろ」

マグカップを置く提督に向けて思わずあつと漏らしてしまった。

今日ここに来たのは世間話のためではない。無論最強議論などでも。

「そうそう提督に言いたいことがあつて来たんだつた。最近私木曾さんと全然出撃してないんだけど。こここのところずっと北上さんと不知火のお守りばつかじやん」

「それはお前も了承しただろう。木曾から頼まれて任せると言い切つていたぞ」

「え、そんなこと私——」

言われて再び思い出す。そういえば木曾に面倒見てくれと言われ二つ返事してしまつたことを。

「言つてたよな、言つてなかつたよな……」

乗り出していた上半身を反らし、無駄だと知りつつも目を泳がせながらはぐらかす。

そこは我らが提督。気付いているのだろう。溜め息混じりにファイルを閉じ、一つ提案を投げかけてきた。

「お前達を組ませてやりたいのは山々だが、まだ武蔵の教育も完全に終わつた訳じやない」

「えー。でももう十分強い気がするけどな」

「それには同意だ。だがあいつはまだ強くなれる。本人の希望もあるため木曾と別行動は極力なくしておきたい。《タルタロス》がいつ動き出すかもわからないため、猶予がどれだけあるかも不明だ。そこでだ。武蔵を入れた三名でなら許可を出せるがどうだ」

「ぶー。二人がいいのにい」

「そうか嫌か。ならこの話はなかったこ——」

資料を整理し、腰を上げかけた提督の手を掴み、押し止める。

「はいはいやりませう！ ぜひやらせてください提督殿！」

逆らいませんの意思表示を最大限にし、義憤を押し込め笑顔を見せつける。

やや呆れ顔を浮かべられるがこの際四の五の言っていられない。折角のチャンスを自分から不意にするわけにはいかないからだ。

「ならば一部作戦を変更するか。今日明日中には追って知らせるから少し待っている」

「サーイエツサー」

席を立ち、わざとらしく敬礼を決めてからその場を離れていく。これ以上いたところで別の何かでボロを出さない自信はない。

足早に出ていこうとした伊勢の背後に声がかかる。

「伊勢。すまなかつた」

何に対してだろうか？

疑問には思うがわざわざ聞き気にはなれず、

「別にいいよ」

さつくりと流し、今度こそその場を後にした。

第四章三幕 排他的經濟水域

「やつほ————」

縮地を繰り返しながら喜びと開放感から伊勢は大声を上げた。

しかし山彦が起ることはない。近くに陸地が見えない大海原のど真ん中なのだから当たり前だが。

「なんであの人奇声上げているんだ？ もう何度目かわからないぞ」

「ストレスでも溜まっていたんじゃないか？」

「確かにお守りばつかだったしわからないでもないが、あのテンションでい続けるほうが疲れないか？」

「それがあいつだ」

一人喜びを全身で表している伊勢からやや後方にいる二人は、冷静に分析をしていた。何かあった時のために常に通信を開いているため筒抜けである。

今までの苦労を考えたら多少のはしやぎようは目を瞑ってもらいたいものだ。

このままでは折角の心身ともに開放された状態に水を刺されかねないため、その場で静止してから勢いよく振り返り弁明する。

「二人にはわからないだろうけど本当に疲れてたんだよ。不知火は何だかんだで聞き分け良いけど、北上さんなんて私を出し抜こうとするし、場合によつては実力行使に出てくるんだから大変のなんのつて」

「おかげで助かったよ」

「むくなら良いけど」

愚痴を木曾が軽く受け止める。

伊勢は伊勢で声こそ寂然としないけど取り敢えずは納得した風を装うものの、頬が自然と緩み、抑え込むよりもニヤけ面が勝っているのが自分でもわかった。

それだけこの時を楽しみにしていたのだからしょうがない。

「浮かれるなどは言わないが作戦まで忘れるようなことはするなよ」

武蔵に釘を差されるが勿論そんなことを忘れるほど愚かではない。そう忘れるほど

……

——あれ、そういえば何だっけ？

どうやら愚かだったようだ。

懸命に脳内をこねくり回すが出てくる気配はない。

これ以上考えても仕方ないため、諦めて白旗を上げること。

「あ、あはは。作戦ってどんなだっけ」

敵を倒す。だったような気がする。むしろそれ以外に作戦など殆どないのだから当たり前前だが。問題はどの海域にどの程度敵がいるかだ。

両手の人指でこめかみ辺りをグリグリとやるが、何一つ浮かび上がる物はない。

「おいおい冗談は行動だけにしてくれ」

「それいつも冗談にされたら困るが。おい伊勢、気分が上がっているのはわかるがそろそろ絞めろ。これも仕事だ」

「はいごめんなさい」

こればかりは誰にも文句は言えない。完全に自分が悪かった。

心を入れ替えるつもりはサラサラ無いが、それでも少しくらいは落ち着くよう深呼吸をした。

濃い潮の香りが鼻から駆け抜けて肺へと送られ、口から吐き出される。

火照った頭が冷めるような涼やかな吐息が心を落ち着かせてくれる。

「少しは頭冷えたか？」

「たはは、おかげさまで」

「作戦に関しての記憶はどうだ」

「そつちは面目ない所存でして、実は全く……」

気持ちが悪く落ち着いたところで覚えていないものが簡単に出てくるわけでもなし、ここ

は正直に答えた。

「そんなことだろうと思った。武蔵」

「なんか言われる気はしていたよ」

諦めに似た表情を浮かべてから親指でメガネのフレームを押し上げ、作戦概要を語り始める。

「まず現在位置から言うが、ここは千葉から大凡東に三、〇〇〇、〇〇〇メートル。まあ三〇〇キロ先といったところだ。最近ではあつてないようなものだが排他的經濟水域付近でもある。そして私達の目的は更にその先の公海まで行くことだ」

「公海って確か」

「どの国でも自由に航行や飛行、漁が認められている海域だな。もつと言うなら日本という国の領土外だ」

「そうそれ。でもなんでまたそんなところに。人里どころか国外じゃん」

確かに臼杵鎮守府の面々は色んな所へ遠征に出かけている。それでも行くには限度を設けられていた。深追いしすぎることへの警戒もそうだが、深海棲艦は拠点と言える場所を持たないため、遠くまで行ったところで陸地付近に出現する艦隊より少ないなんてことも十分有る。

提督とて。提督だからこそ知っているはずなのに何故太平洋のど真ん中まで駆り出

したのか。

そう思ったところで、小さな違和感に気がついた。

「あれ、太平洋？」

「そう。今回の目的は《タルタロス》だ」

「本気で？ 少人数であの艦隊を相手する？」

あまりの事柄に、真つ直ぐに受け止められなかった。

敵の艦隊規模を考えたらこんな片手間で相手をしていい数ではない。それは最早自殺願望としか言いようがない。そう思ったところで、木曾が呆れ顔を浮かべていることに気付く。

「アホ。何年創造の下についてんだ。あいつがそんな無謀なこと言うかよ。今回の主目的はあくまで誘導だ」

「誘導？」

「そうだ。そのためにここまで足を伸ばしてんだ」

木曾が武蔵に目配せをする。

「提督から告げられた作戦は二つだ。一つは現在の太平洋にどれだけの敵艦が他にいるかの確認。もう一つが今木曾さんが言った《タルタロス》の誘導。これには敵を見つけるか見つけなければ不可能であり、最悪このまま日本に引きつけての開戦も有り得なく

もない。が、そうはならないというのが提督の結論だ」

「理由は？」

「オーストラリア襲撃からアメリカへ行くまでがあまりに長すぎるのと、先遣隊のような奴らとアメリカは何度か小競り合いをしたことがあったそうだ」

「つまり見つかつたところで直ぐに攻めてくる心配は薄いと」

「あくまで予測の範疇だが同意できる部分も十分にある」

二人共頭で考えて納得しているのか、目に僅かのズレもなかった。

「どちらでもできる範囲で構わないそうだ」

そこらは流石に抜かりなかったか。ありがたい補足をいただき、伊勢も改めて気持ちを入れ直したところで、もう一つ気になることが思い浮かび、何気無しに投げかけた。

「それにしてもなんで私達だったの？」

「本当は別の日にオレと鳳翔で行く予定だったがお前がねじ込んだからだ」

「ああそういう……」

藪蛇だつたと言つてから悔み、

——後悔しながら航海して公海に行くのかあ。

自分で考えておきながらつまらなすぎるダジャレに、乾いた笑いを口端に漏らしながら今度は先行く二人の背中を追いかけるように飛び出した。

第四章四幕 波乗り伊勢

更に二〇〇キロ東へ移動したところで木曾の指示により、一旦小休止を入れた。

互いに向き合いながら木曾と武蔵はシガリ口を取り出し、伊勢はマルボ口を啜えて火をつける。

煙を大きく吸い込み、肺を循環させてから吐き出す。

やっていることは至極単純ではあるが、それが気分を良くしてくれた。

太平洋のど真ん中。三六〇度全てが青い海。波も穏やかで風も強くない。空も雲が時折影を作るが、雨雲の類は一切なく、青空が伊勢達を見下ろしていた。

「この開放感はたまらないね〜」

「同感だ。椅子かハンモックでも置いてのんびりしたいもんだ」

「ハンモックとかまた微妙なところを……そういえば椅子で思い出したが、海外艦の中には艦装自体が椅子の艦娘もいるらしいな」

「なにそれ羨ましい」

紫煙を吐き出しながら口先を尖らせる。

艦装は明丸のような作ってもらうものならある程度自由がきくが、元々艦娘。それも

一種の艦に与えられる艦装に変更はできない。近頃ではコンバートと言って一部艦装が変化するものもあるが、それでも根本的に変わることはない。

仮に明丸として作ってもらったところで、

「木曾さん。私達も明石さんに作ってもらおうよ」

「どうやって持ち歩くんだよ。邪魔でしかないだよ」

戦闘には完全に不要な物であるため、文字通りお荷物にしなければならない。武装を取り付けたところで重量が増すことからデメリット部分も増えてくる辺り、諦めるのが得策だ。

「あーあ。私の船体も椅子だったらなあ」

「そうは言うが伊勢の飛行甲板も似たようなものだろう」

武蔵に突っ込まれるが、それはそれ、これはこれである。

何より伊勢の持つ飛行甲板は明石に改造してもらってはいるが、所詮可愛いギミック。椅子とは比べ物にならない。

現在非武装状態であるため仕舞っていた飛行甲板を出現させるも、想像上とはいえ、やはり腰を下ろせるか否かの差は大きかった。

「一緒に見える?」

「あー、なんというかその……悪かった。少し話を盛ってしまったかも知れない」

追撃とばかりに謝られてしまい、より虚しさが増した。大人しく甲板を消してからため息混じりに煙を吐き出す。

——早いところ敵艦出てきてくれないかな。

完全に八つ当たりであり、気晴らしにしたく深海棲艦の出現を待つ。

今こうしてわざわざ警戒海域の中で第一種の更の上に、特種警戒海域内で小休止しているのには理由があった。

幾ら縮地が使えるとはいえ太平洋は広すぎる。移動するにしても見つけるにしても逆に見つかるにしても。そのため自分達を撒き餌に《タルタロス》を釣るとするのが今回目的だ。

「つと奴さんのお出ました」

噂はしてないが影はあった。

伊勢から見て右後方、一二〇〇メートル先に艦隊が出現。いきなり砲撃してきた。

「よし今度は私がやっちゃうから」

まさか本当に出てきてくれるとは思ってもみず、状況確認するよりも先にやる気全開で宣言した。

「まあ待て。数は……六百いるかどうか。小規模だな。通信は」

「良好。通信不能どころかノイズも何もないな」

「改flagshipも一隻のみで他はflagship止まりか。おし、なら伊勢、気晴らしに行つてこい」

木曾から許可も下りたため、迫る砲弾を軽くいなし、遠慮なく縮地で一気に飛び出した。

幾つもの水柱を上げながらポケット灰皿に吸いかけのタバコを押し込み、船体部分を出現。全砲門一斉射。

砲撃による衝撃が良い意味で刺激となつたのか、血がたぎりだすのがわかり、ほくそ笑みながら急接近し、敵の砲撃に合わせて大きく跳躍した。敵本陣にめがけて。

「イヤッホー！」

船体出現時に同じく出しておいた飛行甲板。それをスライドさせ、長い板状にしてから脚部艤装を解除し、その上に伊勢は乗った。

迫りくる砲弾を全て受け止めながら落下。敵艦を一つ潰しながら着水し、そのまま航行を。否、ライドイングを始めた。

「テイクオフ！ さあ張り切っちゃうよ」

飛行甲板。もといサーフボードと化した明丸《三津峰》を装甲で操りながら伊勢型に標準装備されている日本刀を抜き、すれ違いざまに切り捨てていく。

「斬り捨て御免。なーんちゃって」

気分が上がるのと一緒に舌も回り始める。

それなりに練度は高いのか、陣形内においても敵艦は砲撃を止めることはない。それどころか魚雷まで放ってくる辺り、よほど自信があるのだろうか。

「ま、関係ないけどね。ほらほらもつと気張らないとどんどん減っちゃうよ」

ボードに乗ったまま装甲で跳ねて魚雷を避ける。その際に回転を加え、独楽よろしく近くにいた三隻ほどを切り伏せ、着水後装甲によるライディングを再開した。

それから三十分ほどし、あらかた片付け、四〇メートル先に敢えて残しておいた改flagship、リ級と向き合う。

一隻だけいた改flagshipも複数いると厄介ではあるが、一隻程度敵ではない。それでも全く遊べないわけではないため、どうやってしまおうかと決めあぐねる。

改flagshipクラスになると縮地を使ってくる個体も珍しくなくなってくるが、どうやらこのリ級は使えないようで、専ら砲撃を行うのみ。

その代わり防ぐことの装甲が匠なようで、現状傷一つついてはいない。意図的に残したとは言え、回りを蹴散らすまで全く手を出さなかったわけではない。幾つか砲撃を行ってもすれば、軽くひき逃げでもやってやろうかと突っ込んだこともあるが、尽く防がれている。

——向こうの火力じゃ沈むことはないけど、こつちもジリ貧になったらやだなー。

正直言えば真正面から殴ればそれで沈められる。装甲の使い手としてはこちらの方が数段上を行くのだから当たり前だ。ただそれをするのは面白くない。戦闘には適度なユーモアが必要だと伊勢は常々思っている。ただそれは回りを楽しませるためではなく、自分の気に入つた行動ができるかどうか大きい。

他の者にとってはそれが予想外の動きとなり、予測がつかなくて厄介だなどと言われるが、そんなこと知つたことではない。自分が楽しむ。それが一番だ。

「うん決まつた!」

この一ヶ月の鬱憤を晴らすべく、最後の仕上げにと、ボードを走らせた。

り級の顔がより引き締まるのが見て取れる。

果敢に砲撃を行ってくるが、被弾する前に全て装甲によつて弾いてしまつてゐるため、怪我などしようもない。

それはこちらの同じで牽制用に放つてはいるが、有り難いことに砲撃だけで倒すのは無理なようだ。そのため、仰角をズラし、手前の海へ鉄の塊を撃ち放つ。僅かな間を開けてから立ち上る海水。それに目掛けてボードの底に装甲を展開。前方に高波が発生するよう調整する。

ぶつかり合う波と柱は一秒にも満たない間だけ、新たな道を作り上げた。

船体部分を仕舞い、ジャンプ台となつた高波に迷うことなく伊勢は乗り、縮地との合

わせ技で大きく飛び上がった。

り級も改flagshipだけあつてさすがと言ふべきか。即座に頭上まで迫つたボード目掛けて砲撃する。が、

「残念だけでもうそこにはいないんだな」

伊勢はボードを踏み台に更に跳躍していた。

足元でボードが砲弾の衝撃によつて弾かれ、砲弾自体はボードによつて跳弾し明後日の方へと飛んでいく。完全に予測の範囲外だったのか、ボードの影から見えたり級は、目を見開いていた。

慌てて再度砲撃の準備をしていたがもう遅い。

「必殺、呉落とし・改!」

船体部分を再び出現。自由落下に重量を加算させ、おまけとばかりに柄頭に装甲を展開。思いつきりり級の頭部目掛けて振り下ろした。

耐久面は得意なだけあつて一瞬抵抗を感じたが、それでも容易く貫き、頭部から股にかけて潰してみせた。

軽く残党がないか周囲を確認しても見当たらず、これで終わりだと悟り、少し残念に思いつつ達成感が胸を暖かくしてくれる。

「やつほー終わったよー」

通信越しに終わったことを伝える。どうせなら次もやらせて欲しいなど考えていたが、一向に返事が帰ってこない。

よく見れば木曾達が声を上げ、こちらに向かって慌てて来ようとしているのが見えた。

遅れてやってくる寒気。

全身を蛇が絡みついたかのような不快な冷たさが、伊勢を包み込む。

まずいと思った時には木曾達に向かって縮地を使い前転。途中捻りを入れて視界を前後入れ替え、何に対して恐怖を覚えたのか見ようとすると、それは距離を取った伊勢の目の前にいた。

「あ、あ」

寒気、気後れ、恐れ、畏怖、恐怖。

幾つか負の感情を思い浮かぶが、これは。こいつはそんな生易しいものではない。

あるのは唯一つ。

「伊勢逃げろ！」

——絶望だった。

第四章五幕 極めしモノ

時間が遡ること数分。伊勢がまだ取り巻きを倒している時のことだ。

「相変わらずあの動きは参考にならないな」

武蔵は伊勢の戦い方にタバコを啜えたまま肩をすくめる。

「そりやそうだ。あいつの動きを真似できる奴はそういない」

「木曾さんでもか？」

「言っちゃなんだがオレは結構不器用だぞ。真似してみろ。下手したらお前にすら負けかねん」

そんなもんかと木曾を見る。

身長差から必然見下ろすような形にはなるが、それでもこの小柄な体ながら強さは圧倒的。武蔵が建造されてから早八ヶ月経つが、未だに被弾した姿を見たことがない。

そんな人が負ける姿なぞ到底想像もできなかつた。

「たまに勘違いされるがオレは最速で動いて敵を倒しているだけだ。悪い部分を上げるなら力の向き方が下手くそなんだよ」

「言われてみると確かに」

木曾の動きは無駄が少ない。フェイントにおいてもそうだ。真つ直ぐ行っているものばかりで、搦め手のようなことはしない。フェイントのつもりがそれで相手を沈めてしまうことがあるくらいだ。

「だろ？ その点伊勢のあれは天性のものだ。動き自体は殆ど全て隙だらけだが、隙だらけだからこそ相手は誘い込まれやすく、気付けば狩られてしまっている」

伊勢視線を戻せば、丁度飛行甲板から跳ね、敵艦に着地。縮地で倒しながらの高速移動でついでに動線上にいる敵を斬り倒しつつ、沈みかけの飛行甲板に戻り戦闘を続けていた。

あんなトリッキーな動きを目の前でされたら翻弄されるなどというのが無理な話だろう。

現に敵艦隊は一〇〇〇メートル程度しか離れていないこちらに目が行くことなく、伊勢ばかりを狙っていた。

「北上も似たようなタイプだな。正確に言えばオレと伊勢の間で感じではあるが、最小限の動きで相手を誘導してから倒す。伊勢のような攻撃を誘発させない分スマートでオレにも再現できないはないが、あいつあれを勘だけでやってやがるからな」

忌々しげに言い放つ。

やや嫉妬を含んでいるが、武蔵からすれば全員格上であるため似たようなものなのだ

が、木曾が啞えているシガリ口が齒先でやや潰されるのを見て、言葉を飲み込んだ。

伊勢も掃討し終えるところだったのか、何やら必殺技と称して妙な動きをしていた。

「何だよ呉落とし・改って」

「あれだ。呉落としが最大仰角で砲撃わけだが、自分自身がその砲弾になつてると言いたいんだろ」

呉落としは最大仰角からの砲撃後、自由落下する砲弾を敵の頭上に当てる行為だ。装甲は常に全方位貼り続けているものではないため、油断したところに被弾させるのが目的だ。

今の伊勢の動きは油断を誘うかもしれないが、些か博打がすぎるのではなからうか。少なくとも真似はしたくないものである。

「増援もなしか」

「後これを何回繰り返し返すんだらうな」

ここに来るまで既に七度の海戦を挟んでいる。だが一向に当たりを引く気配はない。「ボヤくなボヤくな。今度は少し南下してみるか」

「了解。伊勢、移動するぞ」

二人してシガリ口の火を消し、伊勢に声を掛ける。

常に通信は開いているため今更繋げる必要はなく、ただ喋るだけで相手に届く。はず

なのだが、伊勢の反応がない。それどころか伊勢が何か言っているようだが、その声が聞こえてこない。

「木曾さんこれって」

武蔵が視線を送るより先に木曾は飛び出していた。

遅れて武蔵も縮地で追いかける。

——来たのか。遂に。

常に通信を開いていたのは状況判断をしやすいするため。これはどこの鎮守府でも行われている行為だろう。ただ今回の作戦にはもう一つ理由があった。

アメリカより提供された情報によると《タルタロス》の艦隊と思わしき奴らと交戦した時、毎回通信障害が発生していたそうだ。事実アメリカと《タルタロス》が正面からぶつかった時、通信は不能となり、それが敗北の原因の一つと言われているほどである。そして今武蔵たちの間で通信障害が起きた。

つまりいる可能性が凄まじく高いのだ。今ここに。

周囲に目配せをしながら縮地の一步目を終え、二歩目に移ろうとした瞬間。全身を寒気が襲った。

突然のことに二歩目がバランスを崩しそうになるも立て直しつつ、再度踏み込んだところで、伊勢の後ろに何かがあることに気付く。

「後ろだ！」

聞こえる保証はないものの、それでも叫ばずにはいられなかった。

幸い聞こえたのか直感からか、伊勢は距離を取ろうとする。ただ咄嗟であつたため、そして反転も加えてしまったことから距離は短く、おまけに相手の動きはあまりにも早すぎた。

距離を取つたはずの伊勢にぴたり張り付くように近付き、手を差し伸ばした。

「伊勢逃げろ！」

今度の声はちやんと聞こえたのか、一瞬動きが止まっていた伊勢がハツとするような動きを見せてからバックステップを踏む。

それでも相手は上をいったのか、顔も見えないのに笑っている気がし、更に増した寒気を振り払うように全力の縮地をするが間に合いそうもなかった。武蔵は。

先行していた木曾は違つたようで、今度は明らかに殴りに行つた敵艦から避けるように伊勢にタツクルをかまし、距離を取つた。

「二人共無事か！」

「武蔵動くな！」

返事ではなく、木曾による命令が飛んできた。

何故このタイミングでと思うが、軽く木曾達の方へ視線を投げて愕然とする。

伊勢は健在だ。怪我はなさそうである。

問題は木曾だった。

木曾が抑えていた右上腕部。そこからは血が緩やかに落ち、海を赤く染めようとしていた。

「木曾さん……」

「気にするな伊勢。あれは相手が悪い」

怪我した右手で伊勢の頭を二度叩き、木曾が真正面から敵艦と向き合う。

「まさか当たりを引くことになるとはな——よう久しぶりだな、融合棲姫。また会えるとは思わなかったぞ」

——なん……だと？ 今木曾さんはなんと言った？

聞こえたのが幻聴でないのならヤツに対して融合棲姫と言わなかっただろうか。

現在融合棲姫の生存は不明だ。

かつていた先代伊勢と相打ちしたとも言われていた。何より資料や聞いている話と見た目が全く違っているのだ。

頭が離島棲鬼。腕部が港湾棲姫。体が軽巡棲鬼のはずだが、今は戦艦水鬼に近い見た目をしていた。違いを言うならば一本角が端ではなく真ん中にあり、全体の色が黒ではなく白。服装もドレスに分厚い装甲がついていた。おまけに資料にはあった腐敗臭が

全くしてこない。

新種の姫を疑った方が早いくらいのはずだが、木曾は断言してみせていた。

「ギ、ギ——オマエハイツゾヤノキソカ」

——喋った?! いや、それどころか会話をしただと！ それにこの声は。

「は、覚えていてくれるとは光栄だな。まさか話すことまでできるようになってるとはな。ところでその声。お前伊勢さんを取り込みやがったか？」

木曾も気付いたようだ。

そう、やや濁りのある声ではあるが、それでも融合棲姫の声は伊勢と同じ声色をしていた。

「イ、セ……? アアムカシニクツタヤツカ。ソウダクツテヤツタ。タダスコシシツパイダツタ。アレカラアイツイジヨウニタノシメルヤツガイナクテ、アタシハタイクツシテイタヨ」

暇だという概念が深海棲艦にもあるのかは不明だが、少なくとも眼の前にいるこの敵は退屈というものを知っているのか、呆れた素振りを見せる。

「はは、アタシ、ね。おまけに退屈ときたか。どうやら、本当に伊勢さんは……」

木曾の最後の言葉は憂いを帯びており、普段見せる自信たつぷりな声とは明らかに違っていた。更には視線を落とし、胸元を強く握りしめ、なにかに耐えるような素振り

を見せる。が、それも一呼吸分だけ。次に顔を上げたときは、いつもの芯のある表情をしていた。

「良いぜオレが相手になつてやるよ。お前はあの伊勢さんを倒したんだ。つまりお前を倒せば、間接的にもオレは伊勢さんを越えたつてことになるよな？」

「デキルトオモツテイルノカ」

「できるかどうかだと？　ぬかせ。オレはあの人を越えるためにこれまで死に物狂いで鍛えてきたんだ。お前こそ鈍っていないだろうな」

「タメシテミルカ？」

にらみ合う二人。

木曾は船体を出現させ、日本刀とサーベルを抜き放つ。

融合棲姫は背後に中間棲姫のような半球体状の黒い艦装を展開。

臨戦態勢のまま睨み合っていた二人は、次の瞬間、消えた。

——何処にいつ!?

慌てて見ることに意識を向けて注意深く確認すると、戦っている姿を捉えることに成功した。

至近距離で撃たれた砲撃を避けてから木曾は右手に持った刀を振り上げる。融合棲姫は上半身を反らして避けながら後を追うように左ハイキックを入れてくるが、木曾は

空振った腕を引き戻し、肘打ちで防ぐ。追撃にと左のサーベルを振るうが球体の艤装に阻まれ、更にそのまま突進して来たために跳躍で飛び越えながら避け、頭上付近で魚雷を一気にばらまく。魚雷の幾つかは刀の峰で押しつぶすようにぶち当て、反動を利用してやや距離を取りつつ、着水直前に迫る融合棲姫を蹴り飛ばす。生憎と防がれてしまうが、着水からの移動する時間は稼げたため、右手まで垂れてきた血を振るって飛ばし、滑らないようにしながら尚も二人の戦いは続く。

ここまでで自分ならば一体何度死んだらうか。

そんなしようもない思考ができてしまうほど二人の戦いは圧倒的だった。

拮抗する二人。

同レベルだからこそ決めきれない。

確かに木曾は負傷こそしているが、活動限界までは時間的に余裕があった。

だからこそ安心してしまっていたのか、それとも未だ恐怖に駆られ動けないのか。武蔵と伊勢はただボーッと見続けてしまっていた。

——自分達が標的になるとも忘れて。

第四章六幕 新たな力

「ナカナカヤルナ。コレナラバ、スコシハタノシメソウダ」

「ずいぶん余裕があるじゃねーか。お前もお前で腕を上げたか？」

特別会話をするつもりはないのか、返事を待たずに二人は再度距離を縮めた。

木曾は器用に刀剣を持ったまま指先に魚雷を挟み込んで放り投げる。融合棲姫は装甲に反応して爆発する魚雷を物ともせず突き進むが、爆炎が無くなる前に木曾が横に繰り出す。顔と足への同時攻撃を融合棲姫はスライドするように素早い動きで横にズれる。それを追いかけるようにして木曾は突きを横薙ぎへと切り替え両断しに行くが、敢え無く防がれてしまい、お返しとばかりに砲弾が飛んできた。計八門もの砲弾を木曾は高速ターンで相手の背後に回りつつ回避し、艦装ごと右の日本刀で斬りに行くが、装甲の出力が同等だったのかお互いに弾きあう。木曾は体勢を崩すのを嫌ってか、自ら跳んで距離を開けた。

苛烈なまでのせめぎ合い。

永遠を切り取ったかのような戦いは、この瞬間動いた。

「伊勢ー」

誰が叫んだか。伊勢の名を呼ぶ。否、警鐘を鳴らす声。
一瞬だった。

ほんの瞬きに等しき時間が動いた時、誰かの左腕が空を舞っていた。

——あれは、腕？ 誰が？ 誰の？

唐突に脳が退化したのではと思えるほどに視界に映る物を処理してくれなかった。

「セツカク、センジョウニフヨウナモノヲカタツケテヤロウトシテイタノニ、ヨケイナコトヲ」

「あつ——木曾さん！」

喉を震わせ側に寄ろうとする伊勢。

「下がれ！」

離れるよう木曾は声を上げるが、伊勢は知らないとはかりに片膝を着く木曾の隣まで駆け寄る。

先程までなかった木曾の額にはびつしりと脂汗をかいており、代わりに本来あるはずの左腕が、肘の先から消え去っていた。

「早く止血しないと！ そうだ服！ 服は艦装の一部だから下手な紐より頑丈に」

「馬鹿早く離れろ！」

手当しようとする伊勢を装甲で弾き飛ばし、迫り来る融合棲姫に日本刀を振るった。

「オソイ」

しかし容易に回避されるだけでなく、反撃に振るわれた手刀が木曾の顔を襲う。

寸でのところで首を反らすだけで避けることに成功するも、右の眼帯が触れられていたのか、紐が引きちぎれ右目が顕となつてしまった。

縦に入った傷跡と薄つすら光る瞳は、苦渋に染まる顔であつてもまだ闘志は衰えていなかった。とはいえ不利な状況に変わりはない。現に反応が一步遅れており、融合棲姫が一つ攻撃を繰り出す度に生傷が増えていく。

「木曾さん……」

ポツリと呟く。

これだけ窮地に立つておきながら加勢に出られない自分。

出ない訳でもなく、出たくない訳でもない。出られないのだ。

相手と自分の戦力差など比べることが馬鹿らしいほどあり、今前に出たならば木曾をより追い詰めることになることはわかっている。だからこそ耐え忍び、いつでも縮地で離れられる準備をしていたのだが、

——本当にそれで良いのか？

浮かぶ疑問。

今直ぐ離れるべきという思考と、少しでも手伝うべきだという感情。

どちらが正しいかなど考える必要もないはずの考え。理性は常に待てと、引けと言う。が、

——そんなことは知ったことか！

正しい行動など一歩前に出した足で踏み潰し、持てうる装甲の技術を総動員し、全力で自らの身体を前へと押し出した。

遠く離れていた融合棲姫。それを眼の前まで近寄せ、全力の右拳を繰り出した。

驚異とも障害物とも見なされていなかったのか、横合いからの攻撃は完全なる不意打ちとなり、回避されるよりも先に相手の艤装に激突し、数十メートル吹き飛ばす。

「武蔵なんで前に出た！」

「今の木曾さんなら私でも倒せそうだったんでな」

「馬鹿野郎っ。今は冗談言ってる場合じゃ」

「わかっている！　だがこのまま背を向けるなどできるはずがないだろ。それにあんたを失ったら日本は、提督はどうなる」

所詮後付の言い訳。でも木曾には十分すぎる文句だったのか、左手にいる木曾を横目で見ると歯ぎしりをしていた。

「ナンダオマエハ？」

融合棲姫が不審そうに見てくる。

艦装の殴られた部分が崩壊しているものの、機能になんら支障はなさそうで、内心舌打ちをする。

「大日本帝国が誇る戦艦の中で最強の一角である武蔵だ。覚えておけ」

「ザコニヨウハナイ。キエロ」

景気よく出てきたは良いが、やはり遠くで見ている見失いかけるほどの速さを至近で体験すれば、影を追うことさえ難しいのは道理か。なんとか先行する殺気に気付けたために二発、三発と放たれる攻撃を捌けるが、そう長くは保ちそうもない。

砲撃を当てようにも照準を合わせる暇も与えてくれず、仮にあつたところでダメージは期待できないだろう。

ならばと体を懸命に動かし、装甲で対処をするが出力そのものが違うのか、装甲が貫かれた反動で艦装が徐々に破損していく。

奥歯を噛み締め、直感を頼りにしていたが、それももう終わりを迎えた。

「シズメ」

底冷えする無慈悲で刃物のような声は、武蔵の胸部を貫く動きをする。

先程までは見えなかったはずの動きがハッキリ見え、しかしそれに対応するだけの技量が存在しなかった。

——ああ、これで私は死ぬのか。

死が見えた。

逃れようのない左の手刀。

死の直前は時間を切り取ったかのように進むと言われることがあるが、こういうことかと一人納得し、受け入れかけたその瞬間である。武蔵の内に何かが入り込む感覚を心が感じ取った。

何だ？

思うより先に体が動いた。

融合棲姫の手刀を右手で反らし、カウンターで左掌底が顎へと決まる。

「ギッ——ア——？」

どれほどの損傷を与えたか、確認するよりも先に融合棲姫は距離を取り、周囲に目配せをしていた。

武蔵にやられたよりも他の誰かに邪魔をされたと思つたからの行動だろう。

それは武蔵自身も同じだった。

今何が起きたのかさっぱりわからない。

何故反応できたのか。

何故捌けたのか。

何故、まだ生きているのか。

わからないことだらけ。ただその中でも一つだけはわかることがあった。

「武蔵、お前……」

少し前まで左手にいた木曾が背後にいるが、不思議とそれは声をかけられるより前にわかつていた。

木曾の呼吸が、脈が、思いが、武蔵の中に広がる感覚。

どうしてあれが融合棲姫と気付けたのかも。

「そうか。気配が一緒だったんだな。歪で、存在すること自体がイレギュラーだとわかるだけのものがあいつには」

木曾が初めて融合棲姫を見てから八年の歳月が流れている。

見た目は変わり、喋るようになってきた。およそ同じ存在だとは思えないのに同じだと言いつけるだけのもの。

これだけ強烈な存在感がありながら、融合棲姫は空っぽなのだ。それも全てを飲み込んでいしまいそうなほどに。

これは他の深海棲艦にはない、かなり独特な感覚。

人混みの中でそこだけがポツンと空白になってしまっているような違和感。

「これなら確かに一発でわかつてしまうな」

「どうしたんだお前」

「木曾さんちよつとだけ待っていてくれ。倒して……は少し難しいが、退けるくらいならできる気がする」

一度も後ろを振り返ることなく緩やかに前進する。

「ナンダオマエハ」

ほんの二分かそこら前に言われた言葉と同じことを融合棲姫は繰り返す。

「さあな。私にもよくわからん。ただ一つ言えることは、少しはお前を楽しませてやるってこと、だっ」

返事をしながら縮地を使って攻め込んだ。

今までが最速でも時速八百から九百キロが精々だったが、現在は容易に音速を越えていた。

「——ナツ」

海上には移動の余波で波打ち、融合棲姫は表情を驚愕に変えていた。

「っっ」

細く鋭く吐いた息に乗せるように突き出す右拳。

忌々しげに受け止める融合棲姫。

お返しとばかりに右のハイキックが跳ね上がろうとするが、左腕を振り下ろし叩き落とす。頭部を狙われた砲撃を首を反らすだけで回避し、反撃に右のミドルキックをお見

舞いするが逆に弾き飛ばされてしまった。

バランスを崩しかけたため左足だけで跳ねつつ、連撃に來た融合棲姫の隙をついて角を左手で掴み取り、手での縮地を使い上へと逃れつつ、飛び越えざまに半球状の艦装に捕まりそこを支点に反転しながら蹴り飛ばした。

「ナニガドウナツテイル」

余程納得がいかないのか疑問を口にする。

「安心しろ。当人の私もわからん」

しかしそれは武蔵本人も一緒だ。どういう経緯で今これほどの力を操れているのか皆目見当もつかない。ただ、体から溢れ出る力はそれだけで高揚させ、今ならば何でもできそうな万能感さえ与えてくれる。

「どうした。かかってこないのか？」

だからか、無意味に煽り、扇動する。

自信が過剰となり始めたと自分でもわかるが、どうも止められそうもなかった。そのため、敵ながら融合棲姫のこの後の行動は大いに助けられた。

「イヤ、ヤメテオコウ。ドウセモウジキクラウノダ。ナラバイマデアルヒツヨウハナイ」

「どういふことだ」

見ることに専念していた木曾が近付き問いかける。

「コノアイダノ、ア、メ、リカ？　ダツタカ。クラツテヤツタ。ツギハオマエタチダ」

「ああそういうことか。ア号艦隊。《タルタロス》を纏めているのはお前か」

「アゴウ？　タルタロ、ス？」

「この海で一番規模の大きい艦隊の名称だ。お前達のことなんだろう」

「グクツ。アゴウカンタイタルタロスカ。ニンゲンハオモシロイコトヲスルナ」

「いや別にそれは繋げて言うもんじゃないんだが」

「思わず武蔵がツツコミを入れてしまうが、融合棲姫は聞いていないようで、一方的に宣言してきた。」

「サンドメノマンゲツノヨル、オマエタチノトコロヘイコウ。ソレマデシズマナイコトダナ」

融合棲姫は言うだけ言うと、一度縮地による跳躍後、音を立てて海中へと潜り消えた。

先ほどまでであった殺伐とした喧騒は消え失せ、一気に静寂が辺りを、覆わなかった。

「木曾さん木曾さん木曾さん！」

「なんだ伊勢。泣きながらしがみつくな」

「だってだって。その腕、私が。私のせいで」

「両目いっぱい涙を溜めるどころかこぼれ落としている伊勢が、木曾の前で膝をつき腰元に抱きつく。」

「つてそうだよ木曾さん。あんたその腕は流石にまずいだろ。ここには明石さんだつていないだぞ」

「安心しろ。筋力と血流操作で帰るまでは保つ。入渠すりゃあこんなもん幾らでも生えてくるんだ。むしろオレを殺したくなきやさつさと帰るぞ。何しろ報告することが腐るほどある」

伊勢の頭を撫でながらチラツとだけこちらを見てきた。

恐らく先の戦いのことを言っているのだろう。

確かにそれを報告しないわけにもいかないが、果たしてそれをどう伝えるべきか頭を悩ませる。

海の色と同じ内心になりつつも疲労による重い足を上げ、武蔵達は帰路に着いた。

第四章七幕 別れの日

融合棲姫との一戦から数時間後、白杵鎮守府へと戻った武蔵達は、一人怪我らしい怪我もおっていない伊勢を残してドツグに入った。

慣れ親しんだ青色の液体、ではなく、高速修復材を入れた緑色の液体の中へと倒れ込んだ。

入渠中は本来昏睡状態へと陥るのだが、高速修復材を使用しているときは、直るまでの間全身を針で突き刺したかのような痛みに襲われ、意識を手放すことを許されない。代わりに入渠時間が数時間だろうと数十時間だろうとものの数秒で終わらせてくれる。

今回は報告することが多いため、備蓄として最近持て余していた高速修復材を使用したわけだが、やはりと言うべきか、この痛みには慣れそうもなかった。

時間にして三秒ないし四秒の痛みを覚えた後、消え去ったのを確認してから身を起し、縁に手をかけてから膂力だけで体を押し上げる。入渠したことで強制展開されていた船体を仕舞い込む。

コリなど無いが体の感覚を確かめたく、軽く背伸びをしてから右手を見ると、丁度木曾も出てきたところだった。

「生きてて何よりだ」

「アホ抜かせ。手足の一本や二本。無くなつたのはこれが初めてじゃあるまいし、簡単にくたばるか」

「相変わらず基準がおかしいな」

苦笑いを浮かべながらも無事であつたことに安堵する。

少なくとも武蔵にとつて衰弱した木曾など初めてみたのだから当然であつた。あの圧倒的な強さを誇る木曾が重傷を負うなど考えられない。

ただそこまで考えて、ふと気づく。武蔵にとつての木曾のように、木曾にとつて先代の伊勢は同じ存在だったのではと。それだけの存在を亡くした心境は、今の武蔵に凶れそうもなかつた。

「どうした？ 報告に行くぞ」

妙なことに思考が回つたなと軽く頭を振り、先行く木曾を追いかけようとした直後のことだ。

「ふざけるな！」

聞こえる怒号。

遅れて届く誰が殴られた音。

何事かと木曾と目を合わせ、ドッグの扉を開け放ち、外へと飛び出した。

「すっかり日の落ち切りは真つ暗となっていた。満月もとうに過ぎていくことから些か月明かりも寂しいものの、全く見えないわけではないため、目標を補足する。

白杵鎮守府の面々が集まった中にそれはいた。

「あんたが着いていながらなんでああなつた。言いなよ伊勢。ねえ！」

「ちよつと北上その辺にしときなつて」

「明石さんは黙ってくれないかなあ」

「これは俺からの命令だ。北上、今直ぐ伊勢から離れろ」

伊勢に馬乗りとなつていた北上は、舌打ちをしてから掴んでいた胸ぐらを乱暴に離し、取り出したパイプを噛み砕かん勢いで啞え、マツチを点けようとすが力みすぎているのか、次々と折っていく。見かねた不知火がオロオロしながらも予め持つておいたパイプ用ライターで灯してもらい、一息入れるが、イライラは収まっていないうだ。

「剣造。何があつた」

「木曾か。まずは無事で何よりだ。武蔵もご苦労だつた」

「勞いを挟む。普段口にする事務的な物言いでない、本当に無事であつたことを喜ぶ声音だつた。もつとも、池上剣造という存在を知らないものにはわからない程度の差異だ
が。」

「今伊勢から軽く話を聞いてな。直後に北上が」

「殴ったわけか。ったく。おい伊勢大丈夫か」

「木曾さん。私は大丈夫。それより今日は本当にごめんさない」

「またそれか。もう良いって言っただろ。北上」

「……何」

煙を吐き出し、北上はぶつきらぼうに答える。その眼光は鋭いもので、破壊衝動に駆られた。単純に言えばムシヤクシヤしているのが嫌というほどわかった。

「お前と伊勢はほぼ同じ時期に建造された。だから伊勢がどういう存在でどれだけ実力があるかも把握している。わかってるんだろ？」

「だから何がっ」

苛立ちが募るのか、返す言葉のトゲが荒々しくも一層鋭くなる。

「融合棲姫相手に伊勢が何もできなかったのは仕方がないことだ」

「仕方がない？ 冗談も休み休みに言ってもいいものだね。艦娘は戦い沈んでいくのが定めさ。おまけにうちの主力の足を引っ張るようなのを仕方がないで済ませろって？」

「ああそうだ。この際だからハツキリ言っておこう。北上。お前じゃ融合棲姫には勝てない」

「ふざけるな！ だったら切り捨てれば良いだろ！ それとも何、先代伊勢を重ねてるからその伊勢に激甘なんでしょうがあんたは」

考えが纏まらないのか、感情任せに口走る北上の言葉に、木曾が気配を冷たいものへと変える。

「北上。オレへの侮辱なら一向に構わん。だがな、仲間を簡単に切り捨てるなんぞ口にするな」

「——つ。ああそう好きにしたらつ……ぬいつち行くよ」

「でも報告が」

「後で聞けばいいよ」

構わず鎮守府へと入っていく北上。それをこちらを振り返りながらも不知火は着いていった。

嵐が過ぎ去った後のように静まり返る。

誰も口を開かず、あまりに暗い雰囲気だったためか、間宮が一つ意見を述べた。

「あの、このままですと提督の体にも触りますし、マミヤでお茶をしながら話しませんか？」

誰も断る理由がないため一同は賛成し、マミヤの中へ向かった。

艦娘であるために外気温との差など特別代わりはしないのだが、マミヤの中に入った瞬間、何とも言えない温かさで安心感が胸のうちに広がった。

「はこぶつぱ」

「早いなおい」

「木曾達が帰ってくると通信もらいましたから、いつでも出せるようにお湯は沸かしておいたんです」

「間宮さんには敵わないな」

木曾がお茶を呑むのを見てから武蔵も湯呑を手に取り、口へと運んだ。

熱い液体が口内いっぱいに広がり、喉を通り胃へと向かう。

何とも言えない感覚に、これがホツとする味なのだろうかと一人思った。

「まずは情報を整理する。お前達は融合棲姫と出会い、そしてそれを撃退した。間違いないな？」

「ああ。まあ撃退したのは武蔵だがな」

「何だと？ 詳しく話せ」

「面倒だが最初から全部言うぞ」

そう切り出してから木曾は今日あった出来事を包み隠さず伝えた。融合棲姫にあったこと。木曾がやられたこと。武蔵が突然強くなって退けたこと。来年の三月に《タルタロス》が日本に攻め込んでくること。そして先代伊勢が融合棲姫に取り込まれたことを。

「そう、か。あいつは融合棲姫に……」

「ああ。と言つてもやることは変わらない。奴を潰す。それだけだ」

「そうだな。ところで武蔵の件はなにか心当たりはないのか？」

「それがサツパリだ。武蔵はどうだ」

「同じく。なんでああなったのかは欠片も。ただあんな風になる直前に木曾さんの存在は何故か手に取るようにわかつたな」

「ああ、それはオレにもあつた。武蔵の考えてることとか色々流れてきた」

思わずギョツとする。

考えてみれば一方通行だと思ひこんでいる方がおかしいのだが、自分の思考が相手に流れるなど心中穏やかではない。おかしいことを考えている、いないの問題ではなく、ただ単純に嫌なのである。尊敬している相手だからこそ尚更。

「まあと言つても全部が全部わかるわけじゃないけどな。武蔵はどうだったんだ？」

「私か？ ……言われてみれば融合棲姫に関することや先代伊勢のことはわかるが、それ以外はそうでもないな」

「なんだお前もか。てことはその時強く考えてることだけが伝わった感じか？ どちらにしろ再現できるかもわからんから考察して意味あるかはあれだがな」

確かに木曾の言うとおりである。まだあの時何かしらの偶然が重なり偶々できたというのが無難だろう。何しろ戦闘が終わつてからは木曾の存在は武蔵の中から抜け落

ちているのだから、もう一度やれと言われても不可能というもの。

小さく安堵のため息を吐いてからお茶を啜る。

「なるほど概ねわかった。後は俺の仕事だ。疲れたら、今日はゆっくり休め」

「そうさせてもらおう。わからないことがあれば通信飛ばしてくれ」

「ご苦労だった」

短くやり取りをし、誰一人酒を要求するでもなく、ごねることもなく、静かに退出した。

提督が今どのような心境のかなど武蔵には察することさえ難しい。

ただ今日くらいは一人静にさせてあげたい。そう思い、静かにマミヤの戸を締めた。

第五章一幕 太平洋奪還作戦

月日の流れというものは兎に角早い。予定が数ヶ月前より決まっているなら尚の事そのように感じさせられる。

融合棲姫に告げられた予定日。

融合棲姫と出会ったのが二〇一五年の十二月末。

各月によつて満月になる日は少しずつズレるが、十二月の満月は十六日だったため、そこから三度目の満月の夜となると、必然三月となる。

今日は二〇一六年三月十三日。

三日ほど前に武蔵が建造されて一年経ち、そしていつ《タルタロス》が攻め込んできてもおかしくない時期となっていた。

波打ち際でシガリロを吹かしながら空を見上げれば、ほぼ満月と言つて差し支えないほど丸い月が浮いている。

《タルタロス》が必ず満月の日を守るとは限らないため、日本全体が現在調整に入っている。具体的に言うならば武蔵達は二日ほど前から大本営の指示により、出撃を止められていた。いたずらに戦力を消耗させないこともそうだが、艦娘は精神の影響が戦果に

大きく出るため、そのような措置が取られた。

とはいえ日本にいる全ての艦娘が止められているわけではない。対《タルタロス》用
に起用される鎮守府及び艦娘だけが該当となっている。その数約二万。

日本が保有する艦娘の数は大凡十六万だが、その内からたった二万。相手は十五万も
いるのだから七、五倍もの数の差がある。しかも日本側は実質その中で一万は数合わ
せのようなものだと言われている。

全戦力をぶつけろという声も勿論あつたそうだが、《タルタロス》が来るからと言って
その間日本が他の深海棲艦に襲われない保証は一つもない。事実アメリカは別口で進
行した艦隊に幾つか鎮守府が潰され、提督にも死傷が出ているほどだ。

数が少ないことにも意味がある。相手の数を見れば一目瞭然だが、単純に砲弾の数が
足りないのだ。アメリカも弾薬補給に何度も帰っては出撃を繰り返していたという話
だ。となれば砲弾が無くなっても戦える者がいた方が効率が良い。

つまり選ばれた二万もの艦娘は、誘導性インダクティブ装甲アーマーを使って深海棲艦を倒すことが最低
限保証されている者ということとなっている。

「十五万、か」

「怖いですか？」

思わず呟いたものに、言葉が帰ってきた。

「大和か。珍しいな、鳳翔さんと一緒にいないなんて」

「私だつて年がら年中いるわけではありませんよ」

「そういうことにしといてやる」

紫煙を吐き出す武蔵の横に腰を下ろし、大和が煙管を取り出すのを見て、火を差し出す。

「有難う——ふう、こうやって波風に当たりながら吸う煙草は美味しいですね」

「同感だ。昔じゃ一本の煙草を全員で回して吸ってたくらいだったのに」

「そうですね。あの頃は娯楽も今ほどあつたわけじゃありませんし、科学技術も全く別物なほど変わってしまいました」

郷愁の思いを抱いているのか、二度目に吐き出す吐息は、何処か重い物を感じた。

「なんだもしかして最後のことで思い出しているのか？」

「そうですね。無いとは言いません。あの時に今ほどの技術があればとか考えないでもないです」

「それだけじゃないだろ」

バレちゃいましたかと言いたげに大和は苦笑いを浮かべる。

常に行動をともししているわけではないが、これでも姉妹艦だ。纏う空気を察せる自信は他の者より遙かにある。

「私の最後は特攻のように送り出されることでした。当時の人にどのような思惑があったかは完全に把握することは不可能です。それでももう帰ってくることはできないだ」という思いは有りました」

武蔵も大和の最後は資料で知っている。だが所詮それは資料だ。都合のいいように書き換えることもできれば、誰かの思いだけに偏ることもある。結局は他人事のように見ることしかできない。

武蔵も自分の過去を見た時、そんなこともあったな程度で。自分のことなのにまるで何処か別の誰かを見ているような錯覚に陥るほど簡潔に、あっさりと言われていた。

あの身も心も焼くような痛みは何処にも見当たらなかった。

「そして今回も恐らく同じような境遇だと私は考えてしまっているみたいです」
「でも逃げ出したいわけでもない」と

「当然です。ここで逃げ出したら提督が死んでしまいますから。それに……」
一度区切りを入れ、真っ直ぐこちらを見て告げてくる。

「武蔵。貴女と戦場を共にする日が来るとは思いもありませんでした」
「何だそれ。これまで何度も出撃してらるだろ」

苦笑しながら返すが、大和の顔は真面目そのもので、茶化していいものではないと悟り、首だけ向けていたのを体ごと正面にした。

「昔のことです。貴方と私が共に出撃することは殆どありませんでした。そしてこの白杵鎮守府でも同じで、私は貴方より先に建造され、暫く一人でした。だから貴方が建造された時は本当に嬉しかった。それと同じく怖かった。また私は残されてしまうんじゃないって」

——何かと思えばそういうことか。

大和が何に対して考え込んでいたのかを理解した。

確かに艦艇である武蔵は大和より先に没している。今もなおシブヤン海の海底に沈んでいるだろう。だがそれは艦艇だ。今ここにいるのは艦娘の武蔵。個人の戦力はあの時の比ではない。

「そうか大和にとつて私はそんなに頼りない存在だというわけか」

「ちがつ、そういうわけじゃ」

「だったら安心しろ。お前の妹は強い」

断言したことに呆気にとられ、だらしなく口を開けていたかと思えば破顔し、煙管を啜えた。

「じゃあ信じる。だから絶対沈まないでね」

「そういうのは現代じゃフラグと言うらしいぞ」

「もう、そうじゃなくて」

「わかつてる。お互い生きてまた帰ってこような」

大和が頷くのを見てから武蔵は立ち上がる。

「もう休む？」

「いやちよつと酒が呑みたくなくなってきたからマミヤに行く。大和だはどうだ？」

「私はもうちよつとここに居るかな」

「そうか、気が向いたらこい」

シガリ口を咥えたまま大和に背を向け、マミヤへと向かう。途中、煙突から出す煙のように空へと紫煙を吐き出しながら。

すりガラス状の扉を開け放ち、マミヤへと入ると、そこには鳳翔と龍鳳がカウンターに座っていた。

「いらつしやい武蔵。お酒にする？」

入るやいなや間宮に酒を勧められ、断る理由が欠片もないためお願いし、手前にいた龍鳳の隣に腰掛けた。

「大和が行ったと思うけれど、会われました？」

龍鳳が煙草を吸いながら開口一番に問うてくる。

「ああ、今別れたところだ」

「何話していたの？ 大和は何か悩んでる節だったのだけれど」

「悪いがそれは教えられん。妹が姉の悩み事をベラベラ喋るわけにもいかないんでな」
「ん〜それもそうですな」

そういつて龍鳳は再度煙草を、メビウスのプレミアムメンソール・オプシヨン8を吹かす。

「はいお待ちどうさま。ヘネシーとチーズに干し肉。他に欲しいものがあれば言ってください」

「ありがとうございます」

札を述べてからグラスを手に取り、隣りにいる龍鳳と鳳翔のグラスに打ち付けた。

「はあ、やっぱこの瞬間はたまらないな」

「ですね。何年経つてもお酒は心を落ち着かせてくれます」

「鳳翔さんもものか？」

「私だつて常に平静でいるわけではないんですよ？」

ポロツと漏らしてしまった本音に窘められる。

よくよく考えずとも相手の数が数なのだ。それも一隻一隻の強さも通常の艦隊の上を行く。こうして普通に会話できるだけで上等なのかも知れない。

「配慮が足らずすまなかつた。そういえば間宮さんは」

「はい、改めて提督に進言しましたがやはり駄目だと」

「そうか。そいつは残念だな」

間宮は基本鎮守府に在中している。

ほかには知らないが、臼杵鎮守府において鎮守府内の管理運営は提督と間宮の両名で行われている。艦娘のことは提督が。衣食住は間宮が。花壇や菜園といった庭仕事の類は二人でといった具合に分担しているが、その実間宮は戦闘においての実力もすこぶる高い。

北上や伊勢には追い抜かれたと嘆いていたが、それでも今の武蔵とではほぼ同等の戦力と言えるだろう。

そんな貴重な戦力を温存するには提督なりの理由があつた。

「結局相変わらずあの答えか？」

「はい。皆さんが帰還したら料理を直ぐに振る舞えるようにしてほしいと。大規模作戦の疲労は計り知れないから、私の料理で出迎えてやってくれると助かると」

「でもそれって私達が帰ってくることを信じているから出てくる言葉ですよね」

龍鳳の何気ない言葉に思わず頷く。

「言われてみたらそうだな」

「あの人はいつだってそうですよ。私達が無事に帰ってくることを祈り、待っていてくれます。ですから間宮さんも、私達の帰りを待っていて下さい」

「ふふ、教え子にまでこう言われちゃいますと、もう何も言えませぬね」

「そうと決まれば間宮さんも呑みましよう。このお酒とか美味しいですよ。ご一緒にどうですか？」

龍鳳が呑んでいた赤ワインを間宮に勧める。

日本酒党である間宮だが、今日は気分でも変えたいのか、自分用にワイングラスを取り出し注いだ。

「それでは皆さんが無事に帰還できることを願って、乾杯」

「「乾杯」」

各々グラスを掲げ、小気味よい音を立ててから液体を喉の奥へと押し込む。

宴はこれからだと言わんばかりに呑み始め、夜が深くなるその時まで続いた。

第五章二幕 明丸

結局昨夜は《タルタロス》が現れることもなく、少々墮落した生活を送ってしまった。今日はその辺りの気持ちを入れ替えて、資料室にある本を幾つか二階にある談話室に持って上がり、コーヒーを飲みながら一人読み耽っていた。

内容は幕末の剣客物ではあり、流派は実在したもののようなのだが、人物は完全にオリジナルだとか。剣術には明るくないため流派の名前を言われてもピンとこないが、読んでいて少々真似したい気持ちにさせられるほどには面白く、気付けば一冊読み終えていた。

「つと、冷めてしまったな」

読み始める前に入れたはずのコーヒーを、最初の一口以降飲んでおらず、舌の上で感じる熱は人肌程度となっていた。

次の本に移る前にもう一度淹れなおそうと喉を鳴らしながら流し込み、インスタントコーヒーを再度お湯で溶かし込んだ。

仄かにしか感じることのなかったコーヒーの残滓が再び部屋に広がり、小さくほくそ笑みながら席に着いたところで扉が音を立てて開く。

「あれ武蔵じゃん。どうしたのさ」

「昨日は日中伊勢や長門と組手をしていたはずですが、今日はやけに大人しいですね」
現れたのは北上と不知火の二人組だった。

「それはこつちの台詞だ。お前達とてここに来ることは珍しいだろ」

「まね。いつも部屋かファミヤにいるし。昨日なんてぬいっちが離してくれなくてさあ」

「ちよ、北上さん！ それは言わない約束です！」

「えゝ事実だし良いじゃん。ねえ武蔵」

「惚気けるなら他所でやってくれ……」

僅かな会話だけでドツと疲れが増した気がし、手の甲であしらうように扱う。

「そう言わない言わない。ところで何って、へえ本読んでたんだ。小説？」

「ああ、幕末の創作だ。剣術の解説とかが適度に挟まっていて面白いぞ。北上さんもどうだ？」

「悪いけどパス。活字だけってどうも性に合わないんだよね」

差し出そうとした本を下げるが特に思うことはない。正直予測できることだっただけに、粘る必要もなく、言葉と一緒にコーヒーを飲み込んだ。

「そういえば剣で思い出しましたが、結局武蔵は明丸を造られませんでしたね」

「まあ、な。どうもイメージができなくて。結局決めきれないままだ」

「優柔不断ですね」

不知火にズバッと言われ、それが最もであるだけに地味に傷ついた。実際武蔵以外全員明丸は持っている。自分より一つ前に建造されている長門もそうだが、全く戦場に出ない間宮ですら所持しているだけに、決断力のなさがここで出てきた。

「難しく考えすぎなんじゃない？ 私なんて持ちたくないから手甲にただけだし」

「手甲と言うかあれはパイルバンカーだろ」

「まあそうとも言う。というかあれって明石さんがどうせならこういうの付けてみない？ って言われて取り敢えず付けただけだしねえ」

「ほお、そいつは初耳だ。そう言われると私は辺に難しく考えすぎでいただけか……」
自分で考えるべきだという脅迫概念に捕らわれていたのか、やや気持ち的に楽になったのを感じる。

「あなたは木曾さんに憧れているのですよ？ なら参考にしたら良いじゃないですか。そのの本だつて気に入ったのなら尚更」

不知火に言われ、先程まで読んでいた本に目が落ちる。

——日本刀か。正直考えなかつたわけではないが、真似しているようで気が引けていたんだが……それも含めて一度明石さんに聞くのが良いかも知れないな。

そうと決まれば即行動だとばかりに立ち上がり、淹れたばかりのコーヒーを飲み干し

た。

「参考になったよ、助かった。早速相談してくる」

持ってきた本も忘れずに抱え、いぎ工廠へ向かおうとした。が、直後に水をさされることに。

「行つてもいいけど、《タルタロス》戦にはもう間に合わないでしょ」

「確かに。明丸はできるまでに暫く時間を要しますし。早くても数週間。失敗する可能性も十分ありますからそうなつてくると数ヶ月かかりますね」

「……………そ、相談だけでもしてくる」

乗っていた気分が一気に急落。

熱された鉄が想定外のタイミングで冷え固められたかのような感覚に陥る。

持っていた本が急に重くなったのを感じながらも、一度思いついた以上はと気力を振り絞り、談話室から出ていった。

気付くのが遅すぎた。

後悔先に立たずなんてことわざが存在するが、正にその通りだと身にしみながらも一階にある資料室に本を戻し、外にある工廠へ向かう。

吐いた溜め息は潮風に流されていく中、重厚な鉄扉を開く。

鉄が擦れる音を響かせながら室内へ入ると、それまで感じていた潮の香りから一変。

機械油や鉄の臭いで充満していた。

工廠の広さはそれほどない。全体では七十平米ほどだが、二十平米を建造スペースに取られており、開発スペースは手前から入り口に向かって物で溢れかえっていることから、実際範囲は三十平米もない。作業机分を加味すると移動できる範囲などたかが知れていた。

「あれ武蔵じゃん。どうしたの?」

奥から顔を出したのは伊勢だった。

「もしかして組手の誘いか? すまないが今は明丸の最終調整で直ぐには時間が取れそうもない」

遅れて長門が顔を出す、残念ながら今日は二人でなく、明石に用があるため、首を振りながら奥へと入っていく。

「よお明石さん。ちよつと相談があつて来た」

明石は作業机の前に座り、支えの上に置かれた飛行甲板を前にしながら目だけをこちらに動かす。

「あら武蔵いらつしやい。悪いのだけど少しだけ待っていてくれる」

飛行甲板の後部辺りを弄っているようだが、丁度切りが悪いのか、手を止めることはない。

「結局どうしたの？」

「ちよつと明丸のことで相談をしようと思つてな」

「ほお、武蔵も遂に明丸を持つ決心がついたか」

「元々欲しかったがイメージが固まらなくてな。先程北上ペアに言われて意外といいアドバイスを貰つてしまつたよ」

心外そうに言うが實際大いに助けとなつているため、嫌味は程々に済ませることに。

「あの二人がか。珍しいな」

「そう？ 何だかんだで面倒見良いよ、北上さん。天の邪鬼なところあるけど、意見求めたら一番やるべきことを教えてくれるし」

「……そう言われると思ひ当たる節が無いこともないな」

まだ武蔵が新人と呼ばれていた頃の確な助言を貰つた覚えがあつた。あの時はいい好かない奴という感情が先行していたが、言われてなるほど頷ける程度には助力してもらっている。

「あの娘も素直じゃないからねえ。伊勢を殴つちやつたこともそうだけど。つてなわけではいい伊勢。これで改良もばつちりだよ」

「有難う明石さん。早速試してくるね」

「いつてらつしやい。使用感教えてね。おかしなところあればまた調整するから」

「は~~~~い」

余程待ちきれなかったのか、気持ちのいい返事だけを残し、伊勢は飛び出していった。「それじゃあ長門のを当たる前に武蔵の話を聞こうかしら。えつと自分用の明丸の話で間違いないか?」

「色々感化されてな。やつと重い腰を上げた感じだ」

「本当に重いよ。流石に今からじゃ《タルタロス》戦には間に合わないよ」

「同じことを北上さんにも言われた……まあその辺は帰ってからのお楽しみだ。取り敢えず戻ってから造ってもらおうと思っっているからその辺は安心してくれ」

「なら良いけど。で、どんな感じのものが欲しいの?」

ここに来るまでの間考えていた物がある。それがまだ纏まりきれていないため、少しずつ意見を出していった。

——日本刀自体は悪くない。欲しいものとしてイメージは近いが少し違う。薙刀や偃月刀といった類も良いが違う。手に持ち、近接戦で使うものであることは間違いない。西洋剣はイメージから離れすぎるか——

思いついたことを片っ端から並べていく。その間明石は小さく頷きながらも黙って聞いてくれ、言い終えた時、遂に口を開く。

「ん〜じゃあさ、野太刀とかどう? 薙刀とかが出てくる辺り小太刀じゃ短いんだろう

し、斬馬刀は薙刀とか偃月刀と一緒の部類だし、となると野太刀くらいしかないかな。っと確かサンプルがああの辺にあったような……」

脳内に長い日本刀を持っている自分をイメージする傍ら、明石が積み上げられた荷物の中から一本の刀を取り出した。

「はいこれ。昔作る前に模造したのだけど、ちゃんと鞘から抜けるし試しに持ってみたら？」

受け渡された模造刀を手に握りしめる。

模造刀の割に重量を感じるが悪くない。長門に鞘を持ってもらい引き抜く。狭い室内であるため激しく振り回せないが、それでも自分のイメージとリーチが重なった気がし、静かに高揚した。

「どう？　って聞くだけ野暮か」

「お前でもそういう顔をするのだな」

「え、何のことだ？」

二人に言われ、疑問に思い尋ねるが、答えよりもっとわかりやすく鏡を渡された。

全てを映す鏡の世界には、だらしなく頬を緩めた自分の顔があり、慌てて口元を覆う。

「何これ、何だこれ。え、え？　私はそんなに喜んでいいのか？」

「その顔で喜んでないなら詐欺師の才能あると思うぞ」

「だね。じゃあ野太刀つてことで、帰ってきたら話詰めよっか」

「あ、ああ……」

トントン拍子に話が進むとはこういう時に使うのだろうか。そんなことを考えてしまふほどすんなり決まってしまう、自分のことながら呆気にとられてしまった。

「で、長門はどうしたいんだっけ？」

「最近握りが甘くなっている気がしてな。それとこの縦の部分が——」

武蔵との案件はこれにて終了と言わんばかりに長門とのやり取りを開始し、これ以上長居しても邪魔になるだけかと思ひ、小さく礼を伝えてから高ぶる心に引かれるようにその場から離れた。

熱された心を潮騒で洗い落としながら水平線を眺めた。

結局この日も《タルタロス》が現れることはなく、平穏が続く。

暦としては明日が本当に満月となる日。

融合棲姫は自分が言ったことを律儀に守ったというわけだ。

まだ来ると確定したわけではないが、それでも明日は絶対に来る。非科学的ではあるが、そういう予感が武蔵の中にはあった。

第五章三幕 太平洋奪還作戦 発令！

三月十五日、夕刻。

山の向こうへと夕日が沈みかけており、もうじき夜が訪れる時間。

空の向こうには既に丸い月が見えていた。

予定であり予想では、今夜《タルタロス》が攻めてくる日だ。

戦の前に最後の食事をすると思いきや入ると、先客に提督と木曾がカウンターに座っていた。

「二人も食事か」

「まあそんなところだ」

返答に含みを感じつつも、木曾の隣へと腰を下ろす。

「へえ、珍しいな」

思わず口にしてしまった。

普段木曾はジャックダニエルないし、テネシーハニーを好んで呑むが、今日は生ビール。しかもツمامミがフライドポテトではなく刺し身に豚キムチだった。おまけとばかりに普段吸っているシガリ口ではなく、紙巻たばこであるピース。

提督が良くしている取り合わせではあるが、木曾がそれをしてるのを初めて目にした。

「ちよつとした気分転換だ」

「緊張でもしているのか？」

「武蔵」

戯けてみると、カウンター越しにいる間宮より釘を刺される。

つまりこれには意味があるのだというように。

「良いよ間宮さん。そうだな。このメニューは伊勢さんの好物だったんだ」

伊勢さん。

艦娘においてさん付けは自分より前に建造された者への敬称。今いる伊勢は例外だが、それでも木曾がさん付けで呼ぶ人は一人しかいない。

「先代伊勢のことか」

「ああ。飯も酒も煙草も。あの人が好きでいたものだ。恐らく今夜奴は来る。こいつは過去を忘れないための儀式みたいなもんさ」

「木曾、何度も言うが」

「わかっているよ剣造。弔い合戦だが、そればかりに拘るつもりはない」

「ならいいが」

そうは言いつつ酒こそ呑まないものの、それ以外は同じものを口にしてる辺り、提督も何か思うところはあるのだろう。

もう少し尋ねてみようか逡巡するが、これ以上深入りするのは二人に悪い気がし、聞かないことにした。そのかわりに、

「間宮さん。私も刺し身と豚キムチ。後酒は生ビールで」

先代伊勢の強さに肖るわけではないが、雰囲気だけでも共にしたく、普段食べることのない物を注文する。

「おいおい、お前まで付き合う必要はないぞ」

「気分の問題だ」

木曾に止められるが突っぱねることに。

こんなことをやって意味があるかと言われたらまず間違いなくないだろう。それでも気持ちとしては幾分違った。

ポーズだけでもと煙草も貰い、一息吹かそうと大きく吸い込む。これで気分だけは最強の艦娘と名高い伊勢。のつもりだったが、舌の上に煙草の葉が零れ落ちてきてしま

い、一気に台無しに。

「うえ、何だこれ」
「慣れないもんを吸うからだアホ。こいつはフィルターのないタイプだ。噛んだり吸い

込みすぎると簡単に葉が落ちてくるんだ」

何だかんだ面倒見が良い木曾は、悪態つきながらも吸い方を教えてくれた。

「はい、こちらお刺身と生ビールです。豚キムチは少し待っていて下さいね」

ぎこちないながらも吸い方を覚えたところで、間宮さんも自分の気持ちを汲んでくれたのか、準備をしてくれ、まずは鯛の刺身を出してくれた。

豚キムチも作り始めているのか、奥で炒めもの特有の音が聞こえてくる。

「ん? この鯛脂の乗りが凄いな。何処のだ?」

「淡路のです。この時期旬ですから。本当は帰ってからの方が良いかと思いましたが、勝ちたい。生きたい。無事に帰りたい。そういうった意味も込めて今日は鯛にさせてもらいました」

武蔵の疑問に丁寧に答えてから奥へと向かった。

この手の場合では勝つために願掛けとして、とんかつを食べることが多いのだと以前提督に教えられたのだが、伊勢との兼ね合いからこの鯛の刺し身に落ち着いたのだろうと、間宮の気遣いが伺えた。

「まあいいだろう。そこまですたからには最後まで付き合ってもらおうぜ」

「覚悟の上だ。儀装同調の件もあるしな」

憎まれ口を乾杯の音頭代わりにジョッキを打ち付け合う。

久しぶりに呑むビールは、これはこれで楽しめる味だと思いつつも、やはりヘネシーの方が好みであることを再確認する。

鯛の刺身は箸先でもわかるほど弾力がすごく、口に入れると香りは勿論のこと、食感が歯に逆らうように絞まっており、噛みちぎるとコリコリとした感触が口の中で踊り始めた。

「見事なもんだな。これは美味しい」

「今回は間宮さんが直々に釣りに行っているからな」

木曾も味において満更でもないのか、小さく笑んでいるのが見て取れた。

「ところでその艦装同調だが、どれほどまで仕上がっているの？」

刺し身に舌鼓をうっている、心配なのか提督が調子を聞いてきた。

「またそれか。昨日も言ったがまずまずだ。こればかりは詳しく説明しろと言われてもわからんぞ」

「私もだな。繋がることはそこまで苦ではなくなつたが、参考にするべきものが殆どない以上、感覚的な話にしかならない」

艦装同調。

これは年末に融合棲姫と戦闘した時に、自分と木曾の間で起きた現象の名だ。最初は再現性がなく、一度きりかと思っていたが、何度か試している内に艦装を全て展開し、同

時に誘導性艦装装甲を使うと同じ状態になれることが発覚した。

一度繋がるると暫くそのままだが、どうも距離が一定以上離れるか、戦闘状態。つまり武装解除や精神的に終わったのだと思うと解除してしまうようではある。

これに関してはまだ研究段階のため、これだ! とハッキリ言えるデータがないため、結局木曾が言った通り、まずまずに落ち着いてしまふ。

「そうか……常用できるのならば戦力として大幅に上がるが、こればかりは仕方ないか」
「お待ちどうさま」

少しばかり肩を落とす提督とは裏腹に、間宮はニコニコと笑顔で豚キムチを提供してきた。

「待ってましたー!」

豚キムチは武蔵としては好みかどうかで言われたらそうでもない。だが、間宮が作っている時点で不味いはずがないため、基礎データの味を思い浮かべつつ、いざ口に運ぼうとしたところで、耳の奥で電子音が鳴り始めた。

それだけではなく、木曾に間宮とも目があい、そして提督の肩に通信妖精が乗っていた。

一様に頷きあい、これから発せられる声に意識を集中させる。

「んっんっ。失礼します。私は大本営所属の大淀型一番艦。軽巡洋艦大淀です。先の

述べておきますと、今回は大多数への通信であるため、これは一方的な通信となっております。その後の返答及び拒否権においては存在しません。これから告げることは全て決定事項であることを肝に銘じて聞いて下さい」

前置きを入れ、小さく息を吸うのが聞こえた。

「この通信は限られた提督及び艦娘にしか繋がっていません。二ヶ月の半前に告げた通り、ア号艦隊と戦う者たちへのみ告げています。そして先程アメリカからの情報により、ア号艦隊がハワイ沖に姿を表したという連絡が届きました。現状まだ動きは見せていないものの、いつどのように動き出すかはわかりません。故にこちらから打って出ます」

姿も見えない、声も聞こえない。それでも同じく通信を繋がられている別の艦娘の緊張が、武蔵には何となく感じ取れた。

「恐らく今作戦にて二度と日本の地を踏むことがない者も現れるでしょう。恐れを抱く者や逃げ出したくなる者も。死は、無駄ではありません、が、逃げは許されません。もう日本に後戻りする余裕はないからです。そして逃げた先に待っているのはあなた方の仕える提督の死です。卑怯だと言う人も言うでしょう。鬼だと罵る人もいるかも知れません。ですがこれは純然たる事実です。オーストラリアやアメリカがどのようななったかを写真で拝見したと思いますが、小さな島国である日本は更にひどい状態とな

ります……ですから私はあなた方をこれより死地へ送り出さねばなりませんっ」

大淀には一度たりとも会ったことはない。声を聞いたのはこれで三度目だ。それでも一つわかったことがあった。それは彼女が優しい存在であることだ。

喉の音がわずかに聞こえた。それは聞き間違いでなければ、涙を堪えている時の音だったから。

「戦場では通信障害により行えません。故にこの場で宣言します——これより太平洋奪還作戦を発令します！ 皇国の興廢、この一戦に有り！ 各員一層奮励努力せよ！

……皆さんの武運長久、お祈りしますっ」

やはり泣いていたのか、最後の辺りは少しばかり霞んでいた。

まだ言いたいことはあったはずだ。伝えたい言葉を考えてもいただろう。演説の中、時折言い淀む場面が少なからずあった。それでも言わず、きつい言葉だけを投げかけたのは、やはり彼女の優しさなのだろう。

「武蔵」

「ちよつと待つてくれ」

間宮さんに作ってもらった豚キムチ。このまま残して行くわけにもいくまい。

口の中へかき込む。

味わう暇はないが、それでもキムチと豚肉のバランスが良く、入れすぎることのない

分量と、食感、味が口の中一杯に詰め込まれた。

それらをビールで流し込み、鯛の刺身も全て食らい尽くす。

「食い意地の張ったやつだな」

「これから長丁場だ。次がいつかわからないんだし食いだめしとかないな。残すのも悪いし」

「言われてみりゃそうだな」

木曾はその考えはなかったとでも言いたげに頷いてから、自分もと残さず全て平らげた。

「そこまで気を使われなくても良かったのに」

「いやこれは武蔵の言う通りだ。ってなわけで祝賀会の準備とでもしておいてくれ」

「それは勿論やつておきますから、その前にはい、これを」

間宮から渡されたのは小さな巾着。

「中には非常食のお餅が入っています。小さく切り分けていますから状況を見て食べて下さい。私達は本来食事を必要としませんが、それでも心を保つためには必要なものはあります」

「はは、これは最高の装備だな」

「全くだ。どんな艤装よりも有り難いぜ」

問題は入れるところがスカートのポケットしかないのだが、そこはシガリ口関連で埋まっている。上着は生憎とサラシだけのためポケットなど存在しない。

やむなしに胸元へ突っ込み保持した。

「お前何処に持ってたんだ」

「他にないからな、仕方ない」

「ああさよか」

口にするのも億劫そうにし出ていく。

武蔵も後を追うと、外は夜が支配仕掛けていた。

波打ち際を見れば他の者は全員揃っており、横一列に並んでいた。

「一番下つ端が最後までか余裕だねえ」

北上が嫌味を言ってくるが、これからのことを考えると少し心地よかった。

「皆さん。こちら非常食となります。必要になったら食べて下さい」

木曾と武蔵以外に間宮は手渡していき、渡し終わると提督の隣へと移動する。

一同は何も言わず、提督へと視線を向け、静かに見守った。

「俺から言うことはもう何も無い。伝えたいことは全て言った。もし言うことがあるとすればこれだけだ。さっさと帰ってこい。以上だ」

少しばかり提督らしからぬ発言に皆が皆微小を浮かべ、

「ああ、ちよつくら行つてくよ。お前達行くぞ！」

木曾の号令の下、順次海へと飛び降りていった。

「相棒、行つてくる」

武蔵も提督に言い残し、闇色に染まりつつある海へと飛び出した。

第五章四幕 空と海の境界線

予定ポイントに到着して早一時間が経過した。

予定とは言うが実際は相手の動きを通信が可能なギリギリの範囲まで聞き続け、そこから算出した場所にいるだけだ。太平洋のど真ん中に目印となるものなど島くらいなものだが、それも南に一〇〇キロ行った先にミッドウエー諸島があるくらいなものだ。

「で、まーだ始めないの」

しびれを切らした北上が愚痴を零すが、木曾からの指示は未だ出ない。

「後続がまだ来ているようだからな。待ってやれ」

臼杵鎮守府の面々は縮地により最速でこの場まで来たが、他はそうもいかない。二万の内縮地が使えるにまで至ったのは艦娘は三千人。

この三ヶ月教え回ったおかげと言えるだろう。

ただ、この中で超長距離移動が可能なのは五百名が精々か。

縮地は高等な技術が必要であり、距離が長ければ長いほど失敗しやすくなる。この場所まで縮地で来れるということは、意識せずとも使える者でなければ不可能であり、更に言えば戦闘中に使用しても問題ないレベルである証拠とも言えた。

その中に中津第二鎮守府所属の陸奥達が混じっていた辺り、あれからそれなりには努力をしていたようだ。視線が合うと直ぐに逸らされてしまったが。

「あれがそうではないでしょうか」

龍鳳が告げた先に月や星とは別の光点が幾つか見えた。それとは別に点滅する光も存在し、それが友軍であることを示すモースル信号であることを気付く。

縮地が苦手な者。まだ使えない者達は輸送機によって運ばれる算段となっていたが、何処かで手違いでもあったのか、やっと到着した。

時折星の影ができる辺り、数十キロ後方にパラシュートで降下しているのだろう。その中に多少なりとも縮地が使える者がちやんといたようで、先行し報告にきた。

「遅れて申し訳ありません。名取第一鎮守府の名取です。白杵鎮守府の方々でお間違いないでしょうか？」

「オレが白杵鎮守府及び太平洋艦隊の旗艦、木曾だ。説明は帰ってから自分の提督にしてくれ。敵はすぐそこまで来ている」

「申し訳ありません！ 直ぐに陣形を」

「——ちよつと待って」

「ここは既に通信障害が発生する範囲内。反転し、口頭で伝えに戻ろうとしたところを明石が止めに入る。」

「急いでるところ悪いのだけどこっちも仕事でね。えっと輸送機に乗る艦娘に欠員がいるかどうか知ってる？」

「そ、そうでした。えっと一人もいません。事前に伝えられていた通りに揃っています」「うん、なら良かった。お互い頑張りましょう」

「はい！ それでは失礼します」

名取は明石と手を振り合いながら別れ、後方からやってくる艦隊へと合流するべく、海上を跳ねていった。

「そっか。欠員はなしか。これは尋常じゃないくらい忙しくなりそう」

ややげんなりしながら明石が独り言を呟いた。

気が滅入るのも致し方ないだろう。

この海域において、ひいてはこの作戦に参加している工作艦は、白杵鎮守府の明石しか存在しない。

他の鎮守府の工作艦は今回の海戦において戦力不十分の烙印が押され出撃が認められていない。後方に待機させる案もあったが、アメリカがそれをやって前衛より先に工作艦が沈められてしまったため、完全に切り捨てる策となっている。

死して屍拾う者なしを時代錯誤と言ってしまうのは簡単だが、今回ばかりは相手が悪すぎるため、致し方ないことだろう。

「あらかた揃ったな」

木曾の言葉にすばやく目を走らせる。

友軍は勿論のことだが、水平線の向こうに敵艦隊がわんさかと……

「気の、せいかな？」

「いや奇遇だね武蔵。多分私も同じこと思ってる」

「伊勢も？ となるとこれ私の目がおかしくなっちゃったかも。ぬいっち目薬とか持つてる？」

「生憎と目薬は……」

「いいえ。あの水平線にいるのは現実です」

現実逃避しようとしていた武蔵達に鳳翔が冷水をぶっかける。ただその鳳翔ですら言葉に緊張が走っていた。

「でも私も少し認めたくない気持ちですね」

「同感だ。あれ程の大艦隊は見たことがない……」

大和に長門も気持ち及び腰になっている。

目の前の光景はそれだけ信じがたいものだった。

幾ら夜でも遮蔽物や人工の明かりがない満月の夜だ。空がわかる。海もわかる。しかし、海と空の境目が消失していた。

見えるは黄色のオーラと青い炎のような揺らめき。それが前方に見える水平線を埋め尽くしていた。望遠機能を使い見るとオーラの後ろに混じって姫クラスも何百何千と見える。

それもまだ敵の先頭を見ているに過ぎない。後方には後どれだけいるのか、十五万という数字が今になって大きくのしかかってくる。

これを見て正気を保てる者など果たしてこの世に何人いるだろうか。

他の鎮守府も同じ。いやそれ以上の動揺が走っているのが伝わってくる。

誰しもが弱腰となり、恐れを抱く中、一人だけは笑みを浮かべていた。

「敵が十で海が0とか面白いな。中々見れるもんじゃないぞ」

木曾は一人シガリ口を咥え、火をつける。

「お前ら喜べ、狩り放題だ。北上、伊勢、お前ら暫く暇なんて言わなくて済むんじゃないか？」

「いやあれとこれとは。ていうか煙草吸ってて大丈夫？」

「アホ。前にも言っただろうが。戦場で煙草も吸えないやつは死ぬぞ」

「うっわ。この人それをここで言うか」

北上が一つ深呼吸をしていた。横顔こそ見えないが、呼吸音が吐き出す瞬間締りを感じるほどに鋭くなる。

「しようがないな。旗艦命令だし、私も吸っちゃおうかな」

それは覚悟の証だったのだろう。ハイプを啜え、マツチケースからマツチを一本取ってから火を付けた。そのまま隣りにいた不知火へマツチを差し出すと、不知火が慌てて自分の煙草、ブラックデビルのチョコレートに火を移す。

それを皮切りに次々と白杵鎮守府の面々は煙草を吸い始める。

「ほら、お前も吸えよ武蔵」

いつの間にか眼の前に来ていた木曾がいつも吸っているシガリ口を差し出してくる。それを断る理由もなく、精一杯に強がって不敵に笑んでみせてから受け取り、火をつけてもらった。

吸い込んだ煙は、心の中にあつた弱腰な自分を絡め取り、吐き出す時に纏めて太平洋の空へと溶かしていく。

「は、こいつはご機嫌だな」

今まで感じていた恐れなどどこ吹く風。むしろいつ始まってもいいほど気持ちが高ぶり始めた。

他の鎮守府から奇異の目で見られるが、それでよかった。

明らかに怯えた雰囲気徐徐に緩和されていくのがわかる。

——木曾さんはこれを狙っていたのか？

少しばかり思案するが十中八九違うだろう。

あれは本気でそう思っているのだ。そして自分がしたいからやっただけの行動だろうというのが、武蔵の中で結論付けられた。

「あの進行速度の遅さだ。どうせあいつらはオレらを誘い出したつもりだろうよ。だがな、誘い出されたからといって素直に負けてやるほどオレらは優しくなんて無いよ。なあお前ら！」

「そのために来てるからね」「勿論です」「当然だよ」「思いつきり楽しんじゃうから」「必ず沈めます」「負けるつもりはありません」「絶対に勝ってみせます」「ビッグセブンの力。奴らに見せつけてやろう」

皆が好き勝手にいう中、武蔵も負けじと声を張り上げて宣言する。

「全員ぶっ潰す！」

するりと出た言葉が自分の耳へと届いた時、不思議と最後の覚悟が決まった。

「は、やればできるじゃねーか。腹もくくれたようだし、そろそろおっぱじめるか。明石さん」

「任せといて。この時のために造ってきた信号弾でつと」

明丸型の信号拳銃を取り出し、闇夜に向かって一つの光弾を撃ち放つ。

空気を切り裂く音が聞こえること数秒。夜空を花火のように明るくする。正しそこ

にあるのは綺麗な花ではなく、呉の文字だった。

呉。つまりは呉落とし。

臼杵鎮守府内でのみ使用されていた行動名で、最大仰角からの砲撃だが、それを参加している艦娘には予めどういう内容なのかは教えている。問題は伝え方だ。通信が封じられているため、メインが直接報告か光や音によるモースル信号となる。それでは遅かったり視認や聞き取りミスが出た時に致命的であるため、シンプルでありながらもわかりやすいものとして、明石がわざわざ造り上げたのがこの文字型信号弾だった。

単発なのは通常の信号弾と同じだが、視認性は高いため上からの許可も下りている。ただ欠点を上げると一文字しか不可能である点か。

それでも二万もの艦娘に確実に伝えるには十分すぎる代物だった。
数万の砲塔が一斉に動く。

騒がしくも何処か纏まりのある鉄の動く音は、宛らオーケストラの演奏前準備のようであった。となると木曾は差詰め指揮者だろうか？

——ここじゃ指揮官なんだし、あながち間違いでもないか。

武蔵がほくそ笑んだその直後、号令が発せられる。

「——撃てえ！」

声とともに木曾が一発目を放ったその刹那、海を揺るがすほどの砲撃音が数重奏にも

なつて響き、水平線の遙か向こうまで駆け抜けていった。
遂に海戦の火蓋が、切つて落とされた瞬間である。

第五章五幕 日本太平洋艦隊VS了号艦隊

鳴り響く轟音はこちらからだけのものではなかった。深海棲艦とて砲撃されているのだから当然撃ち返してくる。

最早それは砲弾の雨などではなく嵐だった。

何十万もの砲弾が武蔵達日本太平洋艦隊を襲う。

体の十センチ前で炸裂する砲弾を全て数えてやろうかとも思ったが即座に止める。こちらと違いタルタロス側は後ろを狙う攻撃は少なく、最前線にいる者達へ集中していた。白杵鎮守府は。特に木曾は旗艦ではあるが、最高の戦力としての戦果を期待されているため一番前に立たされている。

そしてそれは正しい選択だったと改めて思った。

こんな状況で生き残れる艦娘がどれだけいるのか、武蔵にはわからない。把握しようにも、鳴り響く炸裂音と自分達が放つ砲撃音で音は遮られ、視界も炎と煙で十センチから先は何一つ見えない。

「おっと」

時折自分の砲弾が装甲の範囲外に出た直後に敵の砲弾と接触し、至近距離で爆発し、

軽く首が横に動く程度には煽られたりもするが、問題はなかった。

紫煙をゆつくりと肺へ送り、今は次に動くべきタイミングを見計らいつつ耐え忍ぶ。

——木曾さんの拳に比べたら幾ら砲弾が重なったところで敵うわけないか。

衝撃は最低でも改flagshipなだけあつてそれなりにはあつた。ランクは一つ上がるごとに、砲弾の速度も威力も上がるのは艦娘も深海棲艦も同じだが、優れた装甲の使い手を相手にすることに比べたら可愛いものである。近距離からの不意打ちならばさすがに気をつけなければならぬが、来るとわかつているのなら尚更防ぎやすい。

恐らく木曾も今頃のんびりシガリ口を吹かしているところだろうと、いた方向に首を向けると、一瞬だけちらつと見えたが、予想通り暢気に紫煙を吐き出していた。

艦装同調を使えばわざわざ見なくても相手の状況は把握できるのだが、今はまだその時でないため、繋げていない。何度も試した結果限界の使用時間はないようだが、使用時間が長ければ長いほど疲労度が増すため、不必要に繋がらないようにしている。

それから何十発と主砲を放ちふと気になった。

——開戦から何分経った？

絶えず砲撃を続けていた武蔵だが、何時間も過ぎたような錯覚にとらわれたため、一度冷静に時間を確認する。このまま撃ち続けるだけで終わるならば続行するが、それで

殲滅できるほど易い相手ではない。

砲撃数から逆算することである程度正確な時間が割り出せることから、いざ確認してみると、開戦からまだ四十分しか経ってないことに驚く。最低でも一時間は経っていると思っただけに予想外だった。

艦娘の砲弾装填速度は艦艇時に比べて数倍早い。その分砲弾の減る量も早い。調子に乗ると直ぐに撃ち尽くすこととなる。被弾などでも残弾は強制的に減らされることから、昔は何も考えずに撃ち、残弾〇になったことも何度かある。

特に今回は補給らしい補給ができずに戦うため、数の把握は生死を分けると言っても過言ではない。

——弾薬は六十%を切るか。そろそろ動くかな。

武蔵達には予め言い渡されている指示が幾つかあった。

その中で武蔵に言い渡されているのが、敵右翼に攻め込むことだ。

敵の砲撃もやや落ち着きが見え始め、臼杵鎮守府の者に視線を向けると既に何名かは消えていた。旗艦の木曾もだ。

作戦通りについているのなら、今頃木曾と北上、不知火は作戦第二段階である海中にいる敵潜水艦の殲滅に向かってはいるはずである。そしてその間は全権を鳳翔に移されることとなる。

皆の状況を把握しているとたまたま鳳翔と目があい、頷かれる。ここは任せろと言うように。

ならば任せたと武蔵は頷き返し、三本目のシガリ口を携帯灰皿に捨てながら砲弾の薄くなる場所まで航行。途切れた瞬間に一気に縮地で飛び出した。

敵も馬鹿ではない。迫りくる驚異があれば撃ちに来る。だが、高速で動く人型サイズに当てるのは至難の業だ。砲撃が減った代わりに出され始めた艦載機が時折邪魔をしてくるがそちらを相手している暇はない。振り切るように加速し、果敢に敵右翼へと飛び込んだ。

そこは宛ら蟻の巣だった。

わずかに見えたタルタロスの後方は、永遠に続くのではと思えるほど尻尾が見えず、これからそれを相手にしなくてはならないのかと、溜め息が漏れそうになる。

「落ち込んでいても始まらない、かつ」

手始めに近場にいた戦艦夕級の改flagshipを殴り倒し、作戦第三段階へと突入した。

ここまで来ると腹をくくるなどと言ったことは関係ない。やらなければやられる。ただそれだけだ。

作戦通りに進行しているのならば現在海中に木曾達三名。左翼に伊勢と大和。右翼

に長門と武蔵。後方に鳳翔、龍鳳、明石がいることとなっている。

大和は武蔵が出る時まだいたが、砲撃速度はほぼ変わらないため、そろそろ敵陣に乗り込む頃だろう。

「こいつは、暴れ倒すしかないな！」

先に右翼を終わらせたならば伊勢と大和に自慢気に話ができるというもの。

一足再度跳ねて中間棲姫の頭部を握り、全力で敵陣奥に向かって水平に投げつける。

巻き込みを期待しての行動だったが、そう甘くはないのか、二体までしか無理なように、三体目には装甲で弾かれてしまった。

「そう簡単にはいかないよな。ならこれならどうだ」

弾いた相手に向かって縮地で距離を詰めて顔に向かい右ストレート。しかし装甲で反らされる。が、左拳を腹部に叩き込み沈める。

ここにいる深海棲艦が一筋縄でいかないのは知っているため、多少躲されたところで驚きはしない。改flagshipならばその程度よくあることだからだ。内心舌打ちをやりそうにはなるが。

「私を倒せるものはいないのか！」

武蔵は吠え、次の標的へと向かう。

時折飛んでくる敵と味方の砲弾、魚雷を受けつつ戦闘を続ける。

この戦いにおいて一番難しいのは装甲の使う量だ。一度に大量に使うと他に回せなくなるため、走攻守の全てに気を使いながら最適な分を導き出し、使わなくてはならない。ただ考えて使うにも限界があるため大半は直感。残りは過度な場合修正しながらの使用を旨としている。

そのため不足が出てくると、

「ちいっ」

手を捕まれ引つ張られることや、反撃されることもしばしば。

今回は繰り出した拳を掴み取られ、引き寄せられたために自ら跳んで、自分を掴んでいる相手を遠心力にまかせて海へ叩きつけた。

装甲を使っていない、純粋な膂力だけで振り回したため撃沈には至らなかったが、手を緩めるには成功しているため即座にトドメを刺して次へ移行する。

これが駆逐艦や軽巡洋艦クラスならばもう少し自由に装甲が使えるのだが、装甲を一度使用してから再使用まで戦艦だと一呼吸分の間がある。最大値は戦艦の方が高く、未使用分の装甲があれば再使用までのラグはなくせるが、それは完全に使いこなしている場合に可能な手段だ。

木曾曰く、武蔵の装甲の完成度は七割ないし八割程度だとか。

一年での成長度合いとしては申し分なく、練度としては熟練者並だと大いに褒められ

たものの、これほどの規模の戦に身をおくと、完熟しなかつた自分に歯噛みする。

右翼に突撃して早二時間が経過した。

沈めることのできた深海棲艦は精々千隻前後。

通常の艦隊ならば三十分もあれば片付けられる数をその四倍もかけて倒し、そしてまだ後続が尽きる様子は見えない。しかも時折味方の艦載機が援護に來なければ危なかつたことが二度ほどあつた。

元々数において劣勢だつたのは周知の事実。それでもこの状況は些か辛いものがあつた。

——まだ、誰も沈んでないよな。

他の鎮守府の艦娘がどうなっているかはわからないしあまり興味はない。だが、白杵鎮守府の者達は別だ。

もし誰かが沈んだとなれば士気が下がるのは明白。

後方支援している者達が恐れをなして逃げ出してもおかしくない程度には、厳しい戦いを続けている。

幾らか後方に向かつた深海棲艦がいるものの、そちらは支援組にまかせているし、信号弾も上がらないことを考えれば、まだ持ち堪えているとわかるだけ気持ちには幾分楽だつた。

縮地が戦闘に使用できるだけの練度を持つ者達を前に出さないのはそのためであり、もう一つは単純に邪魔になる可能性が高いからだ。

鎮守府間での連携を原則禁じられているため、いきなり戦場を共にしてもお互いに足を引っ張ることは十分に予想されている。そのため今のようなアンバランスな陣形で戦っているわけだが、少しずつではあるものの精神的に辛いものが出てき始めていた。

「絶対に生きて帰ってやる！」

それでも自分を鼓舞し、拳を握りしめた。

第五章六幕 後方の憂い

開戦から五時間が経過した。

太陽光が海を照らし、反射で海も宝石のように輝くが、それを砕くものがあつた。

落下する高速飛翔体が高い水柱を上げ、龍鳳の顔を濡らす。

「第一攻撃隊の皆さんおかえりなさい。第四攻撃隊、発艦」

収納した艦載機を矢筒に入れ、別の物を敵左翼側に向けて放つ。

この戦場だけです。に何度こなしたかわからないローテーションを龍鳳は行う。第一、第三攻撃隊は右翼に。第二、第四攻撃隊は反対の左翼に向かわせている。その際一射目の攻撃隊が戻ってくるまでは三射目で打ち止めとし、四射目は温存という形を取っていた。これは緊急対応用に残しているのは勿論のこと、弾薬の温存としての意味もあつた。

「木曾さん達遅いですね」

「致し方ありません。海中ではいかに木曾さんでも動きに制限がかかります。何より呼吸のために浮上した時、海上のものを数百倒してから戻っていますし」

鳳翔がやや困り顔で呟くが、それでも木曾の行為は大いに助けられていた。

現在右翼と左翼に戦力を割いていることで、中央に集団が後方の龍鳳達までやってくるがしばしばあるが、木曾の攪乱によって何度も阻害されている。結果散発的となり、本隊が一度に攻めてくることは今のところない。

それでも数の差はやはり大きかった。

ア号艦隊の殲滅度はまだ三十%前後と言ったところ。日本太平洋艦隊も同じく三十%。沈んだ数で言えばア号艦隊の方が上。ただ分母が大きいだけ相手側には十分すぎるほど余裕があるものの、太平洋艦隊側はそうはいかない。

三十%。つまり既に六千もの艦娘が沈んでしまっている。

最初から手が足りないと言われていただけあって、援護が徐々にしづらくなってきた。もっと具体的に言ってしまうえば、弾薬やボーキサイトの底がつきはじめた。

「鳳翔、いつまでここに居るつもり？ 私達もそろそろ前に出る頃合いじゃないかしら」
龍鳳の備蓄が無くなっているのなら他もそれは同じ。

以前鳳翔と争った陸奥は、ずっと鳳翔の方をチラチラ見ていたが、遂にしびれを切らしたのか、傍にやってきた。

「まだです」

きつぱりと突き放すように言うが、陸奥は食い下がる。

「でも私は補給用の弾薬も使い切ったわ。うちの他の子らもね。あなた達だって同じで

しよ？ このままじゃジリ貧よ」

陸奥の言うことは最もだった。

残弾が尽き、こうして後ろに立っているだけならば置物と何ら変わらない。

当初の予定ではそろそろ作戦を第五段階へ移行する手筈となつているが、まだ第三段階を継続している現状だ。鳳翔が動けていないのもそれが原因だった。

「木曾がどれだけ強いかは今ならわかる。だから沈んだりはしていないのも、でも、水上艦と違つて潜水艦の数はアメリカ戦時の記録しかないのだから、数に齟齬があつてもおかしくはないでしょ」

敵潜水艦の数は大凡七千というのがアメリカとの戦いでわかつたことだ。その七千を殲滅し、浮上した木曾達が中央を切り崩すのが作戦第四段階目。第五が前線にいる白杵鎮守府の者を奥へ切り込ませ、第六で初めて後方部隊が前に出る予定なのだが、陸奥の言う通り数が増えている可能性は十分にある。

全く想定していなかつたわけではないが、水上艦が殆ど増えていないのだから潜水艦もそうだと、どこか決めつけていたのかも知れない。

そうなれば作戦の繰り上げも考えなければならぬだろう。

鳳翔が思案しているが、あまり時間もあるとは思えなかつた。

「私が海中の様子を見てきます」

そのため、自ら進言する。

敵が前に出て、今ならばまだ耐えられるだけの戦力は残っている。そして木曾達がどのような状況で戦っているかは確認しなければならない。本来ならば他の鎮守府の潜水艦から定期連絡が来るのだが、それも久しく来ていない以上、かなり数を減らされているのは明白。

鳳翔は僅かに目を見開き、口元に手をやって逡巡するのも三呼吸分だけ。次には頷いて命令を下した。

「では龍鳳、海中の様子を見てきて下さい。戦闘は最低限に、報告が第一の任務です。待つにしても三十分が限度だと肝に銘じなさい」

「はい！ では行って参ります」

鳳翔の許可が下りたことで一気に前へと出ていく。戻ってくる艦載機達を受け入れ、敵艦隊との距離が一キロを切ったところで海中へと飛び込んだ。

海の中は陽の光のためあまり暗くはなく、更に敵潜水艦は黄色いオーラが出ているためそれが目印となり、何処にいるか容易に見分けがついた。

——流石に相当減っていますね。この辺りは残り五隻、といったところですか。

ただ見分けが付くのはあくまで敵艦だけ。それも距離が離れると洋上ほど見えないため、目印となるものがない他の艦娘を探すのには骨が折れそうだった。辛うじて何隻

か見えたものの、戦闘中であり、自分は別の任務で行動中であるため、助けに行きたい気持ちを抑え更に奥。敵本隊の下まで向かう。

——んく見当たりませんか。となると敵艦が消えていくのを探すのが手っ取り早い？

問題は敵艦の数が減っているため、消える瞬間を目にするにはそれはそれで偶然だよりと言える。中央と大雑把に言ってもア号艦隊はキロ単位で広がっているのだから見つけるのも容易ではない。

鳳翔は三十分と言った以上それまでに戻らなければ、戦況もわからずに前に出ることとなるだろう。となれば海中と洋上どちらも警戒する羽目となり、いらぬ怪我が増える。最悪沈む者も出てくるだろう。そして優しい鳳翔のことだ。数が減れば減るほど底に行こうとするのが簡単に想像つく。

自分の敬愛する師が不要な危険に晒すなど我慢できない。必ず時間内に見つけ出す。

そう心に誓い、後ろに向けた弓から展開された装甲をブースター代わりに海中を疾走する。

向かってくる敵艦を三隻ほど沈め順調に進んでいたが、敵艦の層が変わったのか途中から爆雷が急激に増え、回避しながら探す羽目となった。

——木曾さん達が遅くなったのはこのせいでしょうね。これは想定より多すぎます。爆雷の数はパツと見ただけで数百は落ちてきている。自分達の味方がいようとお構いなしに。

砲弾の数に比べると少ない数ではあるが、動きに制約のある海中でも厄介でしかない。多少耐える程度の強度で装甲を展開はしているが、迂闊に触れて敵艦に位置を教えるのは愚策。何より敵潜水艦と戦うよりも移動に装甲を割いているため、纏めて来られると都合が悪かった。

ただその中で一つわかったことがある。

時折木曾が浮上して水上艦を倒してから潜っていたが、その理由の一端を垣間見た気がした。

幸い先に進んだところで潜水艦の数は増えていない。壊滅状態に追い込んでいるのは間違いないようだ。

その分探し辛くなっているのは、ある意味嬉しい悲鳴と言ったところだろうか。探し始めて二十分が経過。

——急がないと。

焦りが出始めた頃、視界の端で、黄色いオーラが三つほど消えたのが見えた。それも殆ど間を開けることなく。

これまで何度か似たような現場にあったが、全て他の艦娘だった。ただ他の現場は一隻沈めているだけで、三隻を短時間で沈めているといったことはなく、何よりそれが可能な艦娘は、木曾達を含めても片手で数えられる程度しかないだろう。

今度こそ当たりであつて欲しいと願いつつ、別の場所に移られるよりも先に一目散にその場へ向かつた。

ぐんぐん進み、近付けば近付くほど見覚えのある輪郭に、思わず顔がほころぶ。

「木曾さーん」

運良く視界内に敵艦が見えなかったのか、木曾が辺りを見回しているところに自分を見つけてくれたのか、鋭い目つきが気持ち和らいだ。

「龍鳳か。どうしたこんなところに。上は今どうなっている」

「それなんですけど現在支援組の弾薬が殆ど空になっています。そのため鳳翔さんがこれから作戦を繰り上げようか悩んでいるところです」

「そうか。大分時間をかけすぎたようだな……」

木曾が歯噛みしているがそれも致し方ないだろう。中央は木曾がいるためにと戦力を左右に振っている。必然手数が減るため敵を倒すのに時間がかかるというもの。

敵の増減は不明だが、それでもこの状態である程度倒し尽くしているのだから、称賛されても問題ないレベルだ。

問題は、今それをするほどの暇がないことだ。

「後十分もしないうちに第六段階へ移行すると思われれます」

「十分か。戻る時間も考えるとあまり残されていけないな」

水中の速度は海上ほど早く移動はできない。浮上すれば当然早く戻ることは出来るだろうが、敵を引き連れて戻る羽目となるためそれもする訳にはいかない。いかに木曾でもその全てを倒して戻るにはやはり時間は足りなかった。

龍鳳の見立てでは、仮に第六段階へ繰り上げても暫くは問題ないと思っっている。が、前後で敵戦力を分断できていない以上、相手の物量に押し潰されるのは目に見えていた。

臼杵鎮守府の者達は生存できるだろうが、他全ては沈むだろう。そして融合棲姫がいる。敵残存戦力が多い状態で融合棲姫と戦闘したならば、臼杵鎮守府の者でも木曾以外は生存率は限りなく低いのは明白。

だからこそ第四段階と第五段階は必要な行動なのだが、海中に敵戦力を残すこともまた、洋上戦での不安を抱えることとなる。

木曾が悩んでいる原因はそのなのだろうが、もう時間はあまり残されていない。作戦段階の前後は多少問題ないだろうが、数が数だ。立て直すのにどれだけ時間と、何より犠牲がでるかかわかったものではない。

龍鳳も何かいい案はないかと頭を回していると、高速に近寄ってくる存在に気づく。「イクか。どうした」

近寄ってきたのは巡潜乙型3番艦、潜水艦伊19だった。近寄るのに縮地を利用した移動方を行っていた辺り、恐らくこの伊19は北海道の釧路鎮守府所属だろう。そして、木曾が浮上した後の潜水艦を纏める役を担っている存在だ。

「ん〜何か話し込んでるようだから気になって。もしかして上は芳しくない感じなの？」

「芳しくないのは海中こっちがだな。時間がかかりすぎている」

「それはちよつと申し訳ないの。イク達が足を引つ張つてしまったの」

「オレも結構助けられたしお互い様だ」

「ううんイク知ってるの」

伊19は頭を振り、木曾の言葉を否定する。

「木曾は率先して潜水棲姫や、個体として強いことから沈めてたの。敵艦隊の動きを分断するようにしたのも知ってる。おかげで敵艦の数も減つたしもう良いの。今度は上の人達を助けてあげて欲しいの」

「だが——いや、その申し出、ありがたく受け取ろう」

木曾は一度断りかけ、考え直したのか即座に快諾した。

「うん。任せて欲しいのー！」

伊19は笑顔で大きく頷いた。

後顧の憂いさえなくなれば後は早い。

「ついでで悪いが、他の奴に両翼にいる北上と不知火を浮上させ、中央突破するように伝えておいてくれ。恐らくあいつらもそろそろ終わりがけのはずだ」

「わかったの」

「龍鳳。鳳翔に伝える。作戦を第五段階まで繰り上げる。第六はお前の采配で決めろと」

「わかりました。ご武運を」

木曾は言うだけ言うと緊急浮上していった。

伊19も龍鳳もそれに習うように自分達の役割を果たすべく、その場を後にした。

第五章七幕 湿った笑み

開戦から早十時間が経過しようとしていた。

戦闘は休まることなく依然続いている。

北上と別れてどれだけの時間が過ぎたのか、もう覚えていない。

これ以上の戦闘はさすがに肉体より精神の方がやられると思ひ、不知火は間宮に貰った巾着から一口サイズの餅を取り出し、包んである紙を剥がしてから口にする。

非常食であるためか餅単体の味は質素なもので、普段食べている間宮の味を知ってるだけに物足りなさを感じていると、

「あれ、甘い」

口の中に砂糖醤油の香りが広がった。

どうやら一口サイズという小さな餅の中に一つ一つ入れてあるようで、二つ三つと食べていっても同じ味が口の中に広がっていく。

間宮の気遣いと甘い味に思わず張り詰めていた空気が弛緩し、固く結ばれた口の端が解けた。

戦場において気の緩みは死への直結だが、集中のしすぎもまた疲弊からの判断ミスを

招くため、僅かな安息を得たことに間宮へ感謝を心の内で述べる。

——ごちそうさまでした。本当に、間宮さんには頭が上がりませんね。

一度に全部食べることはせず、半分以上は残しておいた。いつ終わるかもわからない大海戦だ。後のことを考えてここは完食をしないのが正しいと不知火は判断する。

しかし全域は見通せないものの、体感として七割方敵艦隊を沈めている気がしている。単純な話、浮上してからずつとあつた圧迫感がやや薄れていた。

——これが気のせいじゃなければ、の話ですが。

もし本当にそこまで減っているのならば、想定より早く終わらせることができるかも知れない。ただでさえ連続戦闘で精神的に参つてしまふそうなのに、気のせいであつても気休めにはなつた。

気持ちも落ち着いたことで活力が湧き、防戦に専念していた状態から一変し、攻撃に専念する。

手始めに近くにいた駆逐艦を踏み砕き、縮地で海面スレスレを移動。重巡洋艦ネ級の前で海に手首まで突つ込み、そこを起点に反転し、頭部を潰しながら海中に向かつて蹴り飛ばす。蹴つた足が海面に着くと同時に再度縮地で移動。先程までいた場所に向かつて跳び、左右の足に装備してある明丸『グラスホッパー』のブレードを、右だけ翼を広げるように横倒しにし、一閃。二体を纏めて切り倒し、踊るように三体目を左のブ

リードで切り裂く。四体目は拳を振るってきた重巡り級を左腕で反らしてからお返しに右拳を腹部に突き立て、貫いた。その合間を狙われ砲撃が飛んでくるが、崩れ去る前のり級を盾代わりに使用し、縮地でその場を離れた。

駆逐艦の誘導性艦装装甲は高々知れている。

正確に数値化はできていないが、恐らく戦艦の半分程度だと不知火は思っている。そのため戦艦のようにその場に留まって戦うという戦法は不得手であり、逆に高速に動き回ることが得手とする。

無論戦艦でも同じ行動はできるが、細かく調整が必要であり、更には重量や体格の差がある。単純に戦艦は重すぎるのだ。駆逐艦は艦装を含めた総重量でも一三〇キロ前後に対して戦艦は軽い者でも二二〇キロ。大和型クラスならば二七〇キロはある。身長も駆逐艦ほど低いため空気抵抗も少ないことから、必然的にこういう戦い方となっていく。

深海棲艦も縮地を利用して来るため面倒ではあるが、練度が違う。相手より数段、場合によっては数倍も早く動ける不知火が遅れをとるなどそうはない。あつたところでは精々融合棲姫くらいのもだろう。

移動しながら敵艦を沈めていっていると、ふいに開けた場所が見つかった。エアポケットのように、そこだけ深海棲艦が存在せず、囲むように広がっている不思議な空間。

奥まで来すぎて融合棲姫に出会ってしまったかと緊張が走るが、引き返すわけにもいかず、その中へと一人飛び込んだ。

「レ級の flagship……？」

丁度真ん中に位置するところに黄色いオーラを纏った戦艦レ級が、背中を向けた状態で佇んでいた。左右に目を走らせるが、周りの深海棲艦は襲ってくる気配が見えず、それどころか緊張の色さえ見えた。

何が起こっているのか想像がつかない。だがやるべきことは決まっている。

深海棲艦は沈める。

無駄な思考を捨て、拳を握りしめると、真ん中にいたレ級がぐるりと振り返った瞬間、目の前に迫る。

——早いつ。

突き出された手刀を上体を反らして躲しつつ、腹部を蹴り上げるが防がれてしまったのか、遠くへ蹴り飛ばすのが精々だった。

全員改 flagship だけと聞いていたのにこれはどういうことだと、体制を整えつつ考え、即座に放棄。

元々レ級の強さは他とは一線を画する。eliteですら他の改 flagship レベルの個体も存在するほどだ。それが flagship になっているのならばここ

にいてもおかしくはない。

何よりそれを考える余裕は存在しない。

——これは全力で戦わないと不味いですね。

明らかに同等程度の実力があることが一合だけでわかった。そして相手はこちらを獲物と認識したのか、粘性のある笑顔で着地と同時に攻め込んできた。

目くらましのためか砲撃で水柱を立て、その隙について今度は引つ掻きにくるが抑え込む。膂力でも装甲でも駆逐艦では戦艦に劣るため、余裕など殆ど無い。おまけに、
「な、魚雷!」

自分がいるにも関わらず魚雷を放つという無鉄砲さはかなり厄介だ。

慌てて距離を取るも、気付くのが遅かったために僅かながらも爆風に巻き込まれた。

舌打ちをしながらも分析する。恐らく相手が無傷であること。魚雷は装甲に反応するのだからそれを解除しておけば素通りできる。引つ掻きの圧力が凄かったのも本來回すべき装甲を攻撃に振つたせいだろうと。

他の深海棲艦が放つた可能性もあるがそれは無い。でなければ今砲撃が飛んでこないのはおかしいからだ。

着水を狙って攻めてくるレ級の二度目の引つ掻きをしゃがんで躲し、タツクルを行う。今不知火に必要なのは集中力を高めることであるために、突き放しにかかる。

運良くレ級との装甲出力が同じだったのか、互いに反発しあい、強制的に間ができた。これ幸いにと不知火は深く息を吸い、吐き出した。

今まで自分は暴走状態になった方が強かった。これは自分でも何となくわかつてはいたが、どうも技の冴えが鋭いらしい。

普段の装甲の使い方が棍棒のようなものだとしたら、暴走状態になると針のように鋭くなるのだとか。

深い呼吸は冷静な心と思考を与え、回りだす。

敵レ級との実力は現状殆ど差はないことを確信する。

そして最悪なことに、先程の魚雷の影響で足の裏。つまり船底に穴がいてしまった。普段艦娘は重油を利用して浮いている。浮くための機関が内部にあるとかどうとか言われているらしいが詳しくは知らない。ただ浮くためには装甲の力も最小限だが使われている。装甲と重油の二つが揃って初めて艦娘は海上に立つことができるのだ。が、問題は今まで半ば自動で——呼吸をするように——使われていた分では浮力が確保できないため、ただ海の上に立つためにも装甲を意識して使用しなければならぬ。

無駄な労力はその分自分を追い詰める。

これまでレ級のflagshipに出会わなかったのは純粹に個体数が少ないのは

容易に想像ができる。つまりこいつさえ短時間で倒せば驚異は取り除けるのだ。

再び息を深く吸い込み、圧縮するように口をきつく締めた。

エアポケットの広さは直線で二〇〇メートルほど。動き回るには十分な広さ。不知火は全力で前へと跳んだ。

レ級の粘性のある笑顔のまま攻め込んでくる。

二人の距離が零になったのは空中だった。

レ級の右拳を不知火は左頬をこするようにして反らし、ショートアッパーを繰り出す。顎を上げることで避けられ、更に右膝が来るのを脇腹で抑えて、掴んだ。

レ級の目から笑みが消えたがもう遅いとばかりに、不知火は右足を左側頭部に向けて振り上げた。

やや捨て身の攻撃ではあるが、拮抗するのならば不要に戦闘時間を伸ばすより、こちらの方が結果的に少ない被害で済むと思つての行動だ。左の肋骨にはヒビが入つたろうが、こればかりは仕方ないと割り切つての渾身の蹴り。

それは別の感触によつて阻まれた。

「腕……くっ——」

頭部を蹴る直前にレ級の左腕が防ぎ、切断はできたものの頭部は健在。

歯噛みしながらも反撃を恐れ、連撃へと移る。

右足のグラスホッパーのブレードを回転させ、首を切り落とすにいきつつ、左のブレードを海面に当てて軸とし、体を捻りながら今度は下から上へと切るように蹴り上げる。

十字を描く斬撃。

並の相手ならばこれだけで数度は死ぬる高速の連続攻撃は、いずれも空を切った。それだけではない。

——何処に行った!?

回避はされた。それは間違いない。だからこそレ級から反撃が来ると思ったが、着水しても来る気配がないどころか、見失ってしまった。

ハイキックからの体に捻りを加えた隙に海中へ逃げられたかとも警戒するが、特別なにかが起ることもない。もしかしてと周囲。それも遠方へ目を向けるよりも先に、喧騒のようなものが耳に届く。

「な、んですか、あれは……」

耳に遅れて不知火の双眸が捉えたのは、確かにレ級だった。今や周囲を囲んでいた他の深海棲艦の中に混じり、そして仲間であるはずの他の深海棲艦を貪り食っているレ級の姿がそこにはあった。

そんな深海棲艦など不知火は見ただこともなく、呆然と立ち尽くす。

これに対して何をやったら正解なのか、その答えが見つからず、ただ見続けた。

これが北上や木曾ならば即刻沈めに行っているのだろうかと、頭の何処かが考えハツとする。木曾曰く、融合棲姫も同じく他の深海棲艦を沈めたり食ったりしていたのだということを。

このレ級は同じことをやっているだけではないだろうかと結論付ける。

時間にして十秒にも満たない時間だが、完全に出遅れた不知火は慌てて駆ける。

力が増大するのは融合棲姫だけで、レ級はただ真似しているだけ。本当は全く意味のない行為だった場合折角敵の数を減らしてくれているのを勿体なく感じるが、確実性がないため沈めることを決意。

近寄るとわかるその異様さに思わず顔をしかめた。

食われているにも関わらず逃げない深海棲艦。しかし悲鳴は上げており、顔も悲痛そうに歪めていた。そんな中で情け容赦なく食らっていくレ級の存在はあまりにも浮きすぎていた。

「化物め」

本音を零しつつ拳を固める。

レ級は食べるのに夢中になっているのか、背を向けたままこちらに気付く様子はない。これならば奇襲として行けると思い、後一足で届くところまで近付き、ふい

に背中を走る寒気。それが何なのかわかるより前に急ブレーキをかけた。

本能が言う。これ以上前に出るなど。

融合棲姫が現れたのかと視線だけを左右に振るが、何処にも見当たらない。

ではこの寒気は何処から。

考えど答えが出ない中、レ級がゆらりと立ち上がり、振り向いた。

「な、んで……」

口の周りどころか足元までが濡れそぼっており、食べ散らかしたようで醜い様だが、そんなことはどうでも良かった。

「どうして……」

左右にあるレ級の眼。その片方に青いオーラが出ていた。

レ級の改flagship。

flagshipの段階で不知火とほぼ同等だった存在が、更に一段階先へと進化した。

自分が怯えているのがわかる。喉の奥から声が漏れそうなのも。

何より直感が警鐘を鳴らしていた。逃げろと。こいつには勝てないのだと。

だが逃げることは許されない。こいつがこの後どのような行動を取るかなどわからない上に、もし北上の下へ向かったならばと考えると、到底できようはずもなかった。

こいつは今ここで沈めなければならぬ。たとえ格上であつてもだ。最悪手傷の一つでも負わせられるならば十分。

そう思い踏み込もとしたところで、

「オソイ」

粘性のある笑みが真横に存在した。

「——つつつ！」

慌てて拳を繰り出すよりも先に、脇腹を何かが撫でた。その直後、膝から力が抜け落ち、前に倒れる。

「……………あ、れ？」

何が起きたのかわかるより前に、脇腹から何かが零れていく感覚に気付く。

遅れて自分がやられたのだと悟るが、痛みも、戦う気力も消失していた。

「オマエモクツテヤル」

髪を捕まれ持ち上げられるが、最早反撃するという気持ちは、不知火の中には欠片もない。

「北上さん……申し訳、ありません」

口を開くレ級が最後の光景になることに悔やみながらも、静かに目を閉じ、自分の最後を受け入れた。

第五章八幕 世界で一番大切なもの

人には大切なものがある。

それは艦娘も同じで、北上もまた大切に思うものはあった。

基本的には物だろうと者であろうと頓着しないが、例外は何事においてもあるということだろう。

艦娘において提督は完全に一番上となるようにできているため除外するが、それ以外だと木曾が大切なのだと最近北上自身も気づいた。

融合棲姫との一戦で木曾が片腕を失い、出血多量で青白い顔をして帰ってきたのを来た時は、頭に血が上ったのを覚えている。結果伊勢を殴り飛ばしてしまっただが、ご愛嬌と言うものだろう。

それ意外で好きなものと言われてもあまりパツとは思いつかばない。自堕落な生活が望みであるだけに体を動かす行為は嫌いではないが率先してやろうとは思えない。嗜好品の類いは美味しければ問題ない。パイプを吸っている理由も、木曾や明石がシガリ口であり、間宮や鳳翔が煙管という特種なタイプを吸っていたがために、意外性のあつるものかと思つてのものだ。そのため多少好みはあるが吸えるなら何でも良いという

のが本音である。

だからこそこれは大いに以外だった。

「やっほー不知火。まだ起きてる」

「きたか、みさん？」

背後で倒れ伏している不知火。脇腹から出ていく液体が海を赤く染めていつている。装甲で体全体を浮かすことさえ難しいのか至る所が海水で濡れており、反対に瞳は乾いていた。

——ああ、何でなのかなあ。

自分の我儘と不甲斐なさがこれほど身に沁みることがこれまでであったらどうかと、強く歯噛みする。

本来ならば北上と不知火は行動を共にしているのが正しい。

作戦では第五段階以降は木曾以外ツーマンセルでの行動をするように言われていたが、気かけながら戦うのが面倒だった自分の我儘を不知火に伝え、別行動をしていた。その結果がこれである。

——大切なものは失ってから気付くって言うけどさ。これはあんまりだよ。

スカートと腹部の間に雑に差し込んでおいた信号拳銃を取り出し、空に向かって放つ。

これは文字が撃てるタイプのもではなく、白杵鎮守府の者だけが使える救難信号。日本太平洋艦隊最大戦力である白杵鎮守府が深手を負った際に、優先的に治療を受けることが許されている。

つまりこれは明石を呼ぶための代物だ。

「ナンダソレハ」

「へえ喋れるんだこのレ級」

唐突ではあるが意外には思えない。姫クラスならば話は通じなくても喋るのだから、他にいてもおかしくはないだろう。

ただ愉快そうに答えるが、目は笑えてないのが自分でもわかった。

それだけ今の自分に余裕が無いのだと。

「まあ簡単に言えば増援のためのやつかな」

少しでも平静を保とうと口を動かす。

「ゾウエン？　へエ、モットタバサセテクレルンダ」

「悪いけど不知火を食べて良いのは私だけだから」

「オマエモクウノカ？」

「まあ食べるの意味が違うだろうけどさ」

「イミガチガウ？」

「不知火は私のもんだ。他の誰にもやるつもりはない」

口が回る。回るたびに自分の中にある怒りを自覚し、更に誘爆していく。

「だからさあ。あんたの薄汚い手で触られると虫唾が走るんだよねえ」

だがまだ戦う訳にはいかない。不知火の安全が確保できていない今始めるのは、自分は兎も角不知火の身が危ないため、やれない。

そこまで考え、自分が誰かのために自分の身を差し出している状況に軽く驚く。

——最初は暇つぶしだけだったはずなのにさ。いつからこんなになったのさ。

愉快そうに思うも、やはり笑えはしない。

他の何よりも大切だと言える存在を傷つけられて平然としているほど、壊れた心はしていないからだ。

今直ぐにでも殺してしまいたい衝動を、手を握りしめて堪える。少しばかり強く握りしめて、爪が皮膚を突き破ってしまったようだが、今はそれさえどうでも良かった。

どれだけ待てば良いのだろうか。

自分達はそれなりに奥まで切り込んでいるため、後方をメインにしている明石では来るのに時間がかかるのは目に見えている。

それまで戦い始めない保証は何もない。

今待つてくれているのが不思議なレ級は勿論のこと、自分が待ち続けられる自信は毛

ほどもない。

故にそれは僥倖と言えた。

「北上、何があつたの!」

視界の端に現れたワイヤーに遅れて明石が隣へと跳んできた。

もう十分なし二十分は覚悟していただだけに、本当に助かつた。

「レ級の、改flagship!」

明石が驚くのは無理もないだろう。だが今はそんなことさえ惜しいと言える状況のため、手短に話を勧めた。

「悪いけど明石さん。不知火を治してやってももらえないかな」

「……わかつたわ。でも無茶だけはしないように、つて言つても無駄そうね」

慣れているのか深くは尋ねず、手短に診察を始めた。

「ナンダ、マダハジメナイノ」

「楽しみは取つておけつて言うじゃん」

レ級が今直ぐにでも戦いたいのだとウズウズしているのが嫌という程わかる。それは北上も同じだけに抑え込むのが難しいが、不知火のためならばそれもなんとか耐えられた。

「で、何してるのさ、明石さん」

唐突に人の足元に来たかと思えば、人の足に何かをつけ始めていた。

視線だけを下に向けると、そこには不知火が装備していた明丸《グラスホッパー》がつけられていた。

「不知火からお願いでね」

「つたくもう。こんな時にまで……レ級、ちよつと待つてな」

レ級に背を向け、不知火に近寄りポケットを探る。

「こいつは預かつとくよ」

取り出したのは不知火が吸っている煙草、ブラックデビルのチョコレート。それを箱ごと奪い、一本啜えてマツチで火を灯す。幸い湿気ていなかったようで、火が移るのは早く、砲煙とは違う細い筋を揺らめかせ始めた。

——ああ、やつぱり甘いな。

苦手なものは少ないが、こればかりはあまり好きになれない味だったが、それでもお構いなしに肺へと吸い込む。

潮と硝煙に甘い匂いが交じる。

「北上さん。負けない、で、下さい」

「誰にももの言ってるのさ。北上様だよ？ 《ステインガー》があるだけでスーパー北上様なのに不知火の《グラスホッパー》まであるんだ。さしずめハイパー北上様ってところ

か。そんな私が負けると思う？」

不知火は疲弊しているためか、言葉は出なかったが、静かに微笑んだ。

「なあ明石さん。治せるの」

嘘など必要ない。本当のことだけ話せと言外に押し付ける。自慢ではないが、これまで戦場で明石の世話になったことなどないため、どの程度まで治せるかなど知らないのだ。

だからこそ、それが意外でしかなかった。

「そうね。戦線復帰させられる程度かしら」

「……本当に？」

「工作艦の誇りにかけてね。工作艦明石の名は伊達じゃないのよ」

それは紛れもなく朗報だった。

後顧の憂いが無くなったと言っても良い。

「それから先輩艦として一言。怒ってるときこそ冷静になりなさい」

最後に言葉を残し、遠のいていく明石を見送ると、近くまで龍鳳も来ていたのがわかった。これならば帰りも安全だろうと最後の不安が消え失せ、レ級へと向き直る。

「待たせたね」

「ゾウエンデハナカッタノカ」

「増援なのは間違いない。けどもつと沈めたいなら私をやったらできるよ」

紫煙を空に向かって吐き出し、眼球だけをレ級へと向ける。

「ただあんたが私に勝てたら話だけどね」

「オマエモナ」

不知火をあんな目に合わせただけでなく、物怖じせずを受け流すレ級の態度は、北上の神経を逆なです。血液は沸騰し、今直ぐにでも血管を突き破りそうになっているほどだ。折角明石に助言されたが、冷静などなれそうにない。

「さあ、殺し合いを始めようか」

ダムが決壊したかのように後方に激しい高波を発生させ、レ級に向け北上は一直線に突き進む。

元々相手との距離は一〇メートルも離れていないため、肉薄するのは一秒もいらな
い。

今まで溜め込んだ怒りをぶつけるように最初から全力の拳を繰り出す。が、

「サツキノヨリハ、スルドイコウゲキヲスルンダネ」

片手で受け止められた。

しかし驚くことは何もない。

相手は戦艦でこちらは重雷装巡洋艦。装甲を一度に使える量は相手の方が上なのは

わかりきっていること。何より最近成長した不知火を相手に、傷も負わず一方的に倒したのだから強さはある程度わかるといふもの。

だからこそ最初から全力なのだ。

殴りかかった腕に装備された杭打機パイルバンカーを打ち出す。射程は約七〇センチ。レ級の顔を貫くには十分な長さだった。にも関わらずレ級は初見で首を動かし躲す。

僅かに頬を切ったようだが、その程度ですんでいることに舌打ちをする。

更に連撃で脚部ブレードを振るい胴を切りにいくが、肘打ちで弾き返されてしまった。

「へえ、中々やるじゃん」

距離を取り、軽口を叩くが内心穏やかではない。

相手の実力は手を合わせて更に深く理解はしたが、理性がそれに追いつかない。当たらないというのはストレスとしかならないのだ。不知火をあんな目にあわせた奴をただ殴りたいだけなのにそれが叶わない。

怒りに苛立ちが合わさり、本能さえ置き去りにし、前へと出続ける。

がむしやらに殴りに行くが、当たることはない。

始めこそは笑みを浮かべていたレ級もしだいに影を落としていくが、それにさえ気付くことなく。

「あんたさあ、いい加減大人しく沈めよ！」

突き出した左腕。

レ級の右頬へ叩き込むように軌道を描いていたはずの拳は、

「ツマンナイ」

まるで蠅でも落とすように叩き落とされた。

「なっ」

「モウイイヤ。シズンデ」

返す刃のように振られるレ級の左拳。それは吸い込まれるように北上の腹部へと刺

さる。

「うぶっ」

意思とは別に体が勝手に後ろへ跳んでいた。だからこそ深くは刺さらなかったが、それでも臓器を的確に捉えられ、啜えていた煙草が海へと落ちる。

「キタイシテタケド、ガツカリダナ」

レ級がため息混じりに悪態をつく。だがそれに反応する余裕はない。

——なんでだ。なんで。なんで勝てない！ 実力はそこまで無いはずなのに！

自尊心が崩れていくのがわかる。

自分という存在がポロポロと砂の城のように。吹けば消えてしまいそうなほどに。

どうしてこうなった。

それが何一つわからない。

最早怒りよりも苛立ちのほうが勝ってしまった。

——これじゃあ不知火の仇だつてっ！

そこまで考えてふと気づく。誰を何と呼んでいるかを。

「は、はは。そうか……そういうことか」

明石が冷静になれと言っていた本当の意味をやつと理解する。

自分のことをつくづく嫌いになりそうな日だ。

眼の前を先程まで吸っていた煙草がぶかぶかと泳いでいる。それを掴み取り、口の中へと放った。

「ナンダソレハ。クエルノカ？」

トドメを指しに近づいていたレ級だが、いつの間にか足を止め、問いかけてくる。

どうやら食べられるものへの関心が強いらしい。

「ああ？ 食えるわけ無いじゃん。こんなクソ不味いもの。それに私ら艦娘なら問題ないけど人間なら速攻病院行きだし」

咀嚼しながらしつかり受け答え、そして飲み込んだ。

「でもさ、うちの提督が海には捨てるなつてうるさくてね。それにぬいつちの煙草でポ

イ捨てした日にはあの娘に悪いわけさ」

言っている意味がわからないのだろう。北上も理解して欲しくて言ったわけではないため、欠片も気にしていない。

全ては自分へ言い聞かせるためのものだから。

「悪いねレ級。ここから真面目にやらせてもらおうわ」

「イマサラナニヲイウツ」

砲撃が飛んでくるが装甲で弾く。その間に背後へと回り込まれるが、前転しながら手で海を掴み反転すると、レ級が目の前まで迫っていた。海面にうつすら魚雷も見えたために上空へと逃げると更に追いかけてくる。

「ニゲルノガオマエノホンキカ」

避けようのない空中で行われる砲撃だが、今度は防ぐことなく反らした。

「ああ本気だよ」

殴りに来たレ級の拳を受け流し、勢いの差から背後を取る形となった。その隙を逃さず背中に向けて左手を突き立てる。

生憎と装甲に阻まれ貫通できなかつたものの、追撃の杭打機があった。

見せる横顔に焦りを浮かべたレ級は、今まで砲撃以外で動くことのなかつた尾角が遂に動き出す。

北上の放った杭打機がレ級の体に突き刺さった瞬間、腕を弾き飛ばされてしまった。「は、やっぱそれ動くか」

攻撃に回していただけに腕周りは殆ど装甲を張っていないなかった。が、軽く腕を回してみるが問題はないようで、どうやらレ級もギリギリだったことが伺える。

肌がピリピリする。

お互い殆ど同時に着水するが動く気配はない。相手の出方を待っているのが嫌というほど伝わってくる。

とはいえこのまま硬直していても意味はない。

北上は遠慮なく攻めていった。

相手の砲撃を警戒し、縮地を小刻みに行いながらジグザクに移動する。傍から見れば雷を連想しそうなほどの高速移動を繰り返し、殴りかかる距離まで近付くと、レ級が背を向けてきた。

何のためにと考えるよりも先に前方宙返りを行い、やってきた尾角を回避しつつ振り返りながら左の杭打機を射出。射程ギリギリだったためか簡単に避けられ、更には掴み取られた。ニタリと笑いながら引きに来るが、蹴り上げるように右足のブレードを振るうことで離させることに成功するものの、体勢が崩れてしまっていた。

レ級もそれを見逃すことなく砲撃を行いつつ飛び込んでくるが、再装填した左腕の杭

打機を海面に向かつて放ち、そこを起点に右へ跳躍。レ級は更に追いかけてくるが、跳躍の最中にブレードを海面に触れさせることでブレイキをかけた。

唐突に止まったことで驚愕に顔を歪めるレ級の顔めがけて全力の拳を振るった。

顔の前で両腕を交差されてしまったが、装甲の出力が足りなかったようで、北上はレ級の装甲を打ち抜き、殴った右腕に確かな感触を覚えつつ、吹き飛ばした敵へ果敢に攻めていく。

後一足で届く範囲にまで近寄り脚部ブレードを海中につけ、ローキックをするように振るう。そこへ装甲も合わせレ級に向けて横広の高波を発生させ、視界を奪った。

レ級が慌てて砲撃を行ったのか、腹の底に響く音が聞こえるが、既にそこにはいない。北上は縮地の勢いを殺すことなく蹴りを放ったため、前方に向かつて倒れようとしていた。

失敗したからではない。

初めから体が決まっていたかのように自然に動いた結果だった。

海面スレスレまで倒れ、そこから更に縮地により前方へと飛び出す。高波を突き破り、驚愕するレ級の腹部めがけて体ごと拳を押し上げた。反撃が来ることもお構いなしに。

レ級が装甲で防ぎに来るがそれさえも貫き、腹部さえもぶち抜く。

そのつもりでいた。が、その直前でレ級の体が横へとズレた。

「今のはいい線いったと思っただけど、器用なことするもんだ」

胴体を貫く予定だったレ級は目の前にいない。三〇メートルほど離れた位置にいた。

北上自身はつきり見たわけではないが、恐らく尾角で移動したであろうことが予想付けられる。現に今も尾角だけが海に浸かっており、足は宙に浮いていた。

しかし完全に避けられたわけではない。

苦痛に歪む顔の下。脇腹の部分が抉るように削ぎ取られているからだ。

そしてそれは北上も同じことが言える。

レ級は避ける際に振るった引つ掻きが、北上の右頬を削り落とし、血がこぼれ落ちているのがわかる。薄っすら呼吸が漏れ出ていることも。

普段の北上ならこれ以上戦闘はせずに、面倒で背を向けてしまうような傷。

昔木曾と本気でやりあってボロ負けをして以降、勝ち負けへの拘りなどなくだったからだ。

だが、今は違う。

こいつは。こいつだけは絶対に自分の手で沈める。

自分の心境の変化に薄っすら笑い、不知火の煙草を啜えて火をつける。

「でもさ、そんなことが出来るのはあんただけじゃないんだよねえ」

ブレードを動かし海中へと潜らせ、そこを起点に体を空へと押し上げる。ブレードの長さは一メートルとちよつとあるため、その分視界は上昇し、一気に視界は広くなった。

普段と違う視点のため、正に竹馬気分なのだが、

「つとこれじゃあ高すぎるか」

折角レ級が数センチしか浮いていないのだから、自分も同程度になるのがお約束だろうとブレードの角度を調整。前に降りるように動かす。

「どうよ。こいつは半球状に動かせるから中々便利なものだと思わない？ まあ肝心の持ち主であるぬいっちが器用じゃないから、できないこと多いんだけどさ」

ブレードの動きは全て装甲によって行われる。従って、戦闘中でも至る可能性を考えながら戦う不知火ではどうしても一歩遅れて動かすため、結果として大雑把な動きとなってしまう。

「戦いなんて思考は二割程度で良いんだよ。後は感覚に任せればそれだけでいいのに、なんで皆しないのかな？」

北上はそれが正しいと思っており、そして実践できるだけに浮かぶ疑問。

昔木曾に「それができるのはお前だけだ」と一蹴されたが、当時も、そして今も納得がいつていない。

「レ級もそう思わない？」

まるで友達に話す感覚で語りかける。

「ナンデイキナリツヨクナツタ」

会話には乗ってこず、代わりに疑問をぶつけてきた。途中視線が脇腹へ行つた辺り、余程不服な結果だったようだ。

「さてね。愛のなせるわざかな?」

「アイ? ナニソレハ」

「色々知恵はついてるけど、なんだそんなことも知らないのか」

苦笑してから煙を吸い込む。

まさかそんな簡単なことも知らないとは思ひもしなかっただけに、そして自分の意外な思考に、苦笑はそのまま肩を揺らすにまで至った。

笑ったことで吐き出すはずの紫煙を、再度吸い込みそうになるのを気をつつつ吐き出す。

「ナニガオカシイ」

「いや別に。ただ私ら艦娘は愛でできてたんだって、ガラにもないこと思いついちゃつてさ」

「マタアイカ……ダカラアイツテナニ!」

気に入らないのか、駄々っ子のように叫びだすレ級。声が広がるのに合わせて殺気を

撒き散らせたからか、周囲の深海棲艦が怯えるのがわかるが、今の北上にはそよ風程度の代物だった。

「ああいいよいいよ知らなく」

煙草をゆつくりと吸う。

特別深海棲艦に思い入れがあるわけでも期待しているわけでもない。

「どうせこれから私に沈められるんだからさ」

紫煙を吐き出し、口角を釣り上げる。

頬がえぐれている状態での笑みだ。さぞ凶悪な見た目をしているだろう。しかも相手を確実に亡きモノにするという意思が乗っているのだ。

凶気か、もしくは狂気と言った方が正しいかもしれない感情は、自然と心を落ち着かせた。

「クツテヤル。オマエモ、ソノアイツテノモ、ゼンブ！」

代わりにレ級は反比例するように激情し、吠えた。

ノーモーションからの縮地で一気に距離を詰めてくる。砲撃に合わせたの右の手刀が飛んでくるが、北上は冷静にカウンターを合わせに行き、止めた。

「ほんとそれやつかいだ」

レ級の影から振るわれる尾角を左膝を立てて防ぎ、ブレードを回転させて切り落とす

に行くが避けられた。おまけとばかりに左膝が腹部めがけてやってくるのを肘打ちで迎え撃ち距離を離れたかと思えば、尾角を起点にぐるりと一回転してから大規模な回し蹴りを放ってくる。

迎え撃とうと拳を握りしめるが、寒気を感じ取りブレードの角度を調整しつつ前に倒れに行く。

後頭部を高速で過ぎ去るケリの風圧は髪の毛をはためかせるだけに終わらず、装甲の範囲内に僅かに入っていたのか、海面に叩きつけられそうになるのを煙草の火が消える直前で堪え、手のひらを使って縮地を行い距離を取る。

後頭部がかすめたことでグラグラする脳を無理やり押さえ込んでいる間に、レ級は追撃へとやってきた。

悪態を吐く暇もなく、再び殴りかかってくるレ級に拳で応える。ように見せかけ、足を右斜め前へとスライドさせた。

重心を前でなく後ろに置いての高速航行。装甲を合わせたその動きはレ級の拳を仰け反るように回避し、更には後からやってくる尾角までもを避けた。そして、

「ワンパターンなんだよお前」

すれ違いざまのレ級の左足を掴み取り、自分の体を引き寄せるようにしながら右のブレードを振るい上げる。

間一髪で本体は避けられはしたが尾角を切り落とすに成功する。が、掴んでいた手を装甲で弾かれ、北上が着水するよりも先にレ級は振り返るのが早かった。

ここが勝負どころと感じ取ったのだろう。

レ級の動きのキレが増したのを本能が読み取る。

さしもの北上も体勢を崩した状態では分が悪く、煙草を啜えていることも忘れて歯噛みした。

勝負を決したのは一瞬だった。

「はは、なんて大したやつだ」

北上の口から煙草がこぼれ落ちる。

甘い香りは海へと溶け込み、消えていく。

「オマエモナ」

北上は呆れ、レ級は笑みを浮かべる。

最後に繰り出されたレ級の右の手刀は、北上の左耳を切り裂いた。

そして北上の右腕の杭打機は、レ級の腹部を貫通していた。

北上が杭を抜くと、支えを失ったようにレ級は後ろへと倒れ込んだ。

「あんたの尻尾に負けじとこの《グラスホッパー》凄いでしょ」

最後の紙一重の回避。体より先に海に触れさせたブレードにより横移動だった。も

う少し動かせれば完全に回避できただろうが、そうすると今度は攻撃へと装甲が足りなかっただろうと、北上は終わって気付く。

「ソウダネ……アア、デモタノシカッタ」

「呑気なことだ。こっちはこれからだつてのに」

周りを見渡せば、他の深海棲艦はどう動いたら良いのか困惑しているようにも見える。

「まあでも、割と楽しめたかも」

「クヒヒ。ナラヨカッタ」

レ級の体は徐々にヒビが走り、腹部から崩壊していく。

「アイ……タベテミタカッタナ……」

最後に言葉を残し、完全にレ級は消え失せた。一片さえも残さずに。

「だから食べるものじゃないって」

残滓としてこの世にあるのは、北上の体に刻まれた傷。ただそれだけだった。

第六章一幕 続・継承の鋼

ミッドウエー諸島から北に一〇〇キロの地点で行われている日本太平洋艦隊とあ号艦隊との争いは、二十八時間経過した今も続いていた。

辺りを包んでいた闇は徐々に消えていき、二度目の朝日が顔を出し始めている。

目覚ましよりもうるさい砲撃音が今尚を後方で響き、海を揺らしていた。それでも開戦直後に比べると散発的といえ、深海棲艦側でも弾切れが起きているか、それとも数が減ったかのどちらかだろうと木曾は予想する。

この時間までで木曾も一万は深海棲艦を沈めたため、後者であつて欲しいのが本音だ。

あまり気に病むことを考えてもしょうがないことから、気分転換にシガリ口を取り出し、一服を始めた。

「オソカッターナ」

「これだけの数で歓迎されてりやそらそうだろ」

煙を吹かした先には融合棲姫がやや呆れ顔で立っていた。

「アタシノトコロマデマツスグキタラヨカッターダロ」

「こちとら大艦隊を預かる身でな。何度か後方まで戻って指示出したりと忙しかったんだよ。おまけにお前はご丁寧に最後方にいるし」

ここはあ号艦隊を抜けた先。

融合棲姫は距離にして五〇〇メートルほど離れた場所で何もせず、静かに木曾を待ち続けていたようだった。

「ココナラバ、ホカノジヤマガハイラナイトオモツテナ。ソレニアイツラハ、アタシガイクサキヘカツテニツイテクルダケダ」

「ああ通りで。全員好き勝手動いてるようだったのはそういうことか。姫クラスですら他を指示してる雰囲気も素振りもなかったし、不思議だとは思ってたが」

ここにやって来るまでのことを思い出し、一つ納得がいった。

——結局実力はあれど、烏合の衆だったわけか。

それでも数が数だけに。実力が実力だけに天災地味たことがオーストラリアとアメリカを襲ったということだ。

そして今は日本を……。

「でもこの前は一人だったな」

「アノトキハコサセナイヨウニ、イトテキニヤツタカラダ。ソレデモイクツカハ、カツテニツイテキタガ」

前回にもいたのかと少しばかり感心する。

あの時は他に気配など感じなかっただけに、気配を消すのが上手かったか、もしくは距離があつたということか。

しかし今回大群で来た辺り、要は露払いをしたかつたのと、恐らく面倒だつたのだらう。

伊勢を食つたと言うだけあつて、言動だけでなく行動にまで現れていることに、思わず頬が緩んだ。

「ドウシタ」

「いや何、お前が想像以上に人間臭くてな」

「トウゼンダ。ワレワレハニンゲンヲモトニデキテイル。シラナカッタノカ？」

「完全に初耳だな。そうかだから人型が多いのか」

最終決戦とでも言えばいい局面において新事実が発覚し、シガリロが口からこぼれ落ちた。途中掴み取り再度啜えるが、驚きは隠せそうもない。

「ワレワレハヒトノ……ソウダナ、フノカンジョウヲエサニシテイル。ソレニヨツテイキナガラエ、ソシテウマレル」

「つまり何か、お前たちにも生存限界があるってことか？」

融合棲姫は静かに頷く。

これまで人類は受け身でいた。そしてまともなやり取りのできる相手がいなかったのだからしょうがないとも言える。

それでもまさか始まりが人間側に原因があつたとは思つてもいなかっただけに、帰つて創造にどう伝えたいのかが悩ましい。

負の感情など簡単に対処も制御もできる代物ではないだけに、対策も難しいだろう。

「モットモサイキンハフノカンジヨウガヘツテイルノカ、ウマレルカズガヘツテキテハイルガ」

「良いのか？ そんなことをオレに教えても」

それは確かに朗報だった。

人々がそれだけ幸福な生活を遅れているという事実と、長きにわたる戦争に終りが見え始めているということだからだ。

それと同時に自分の。自分達艦娘が頑張ってきた甲斐が遂に実を結び始めたのだと知らされたようで、内心嬉しく思う。

「ベツニカマワナイ。アタシガタノシメレバソレデ。ソレニ……」

海中にでも隠していたのか、融合棲姫の背後半球状の艦装が浮上した。ここから先に必要なのは、言葉でなく拳であるかのように。

「オマエヲシズメレバ、キニスルヒツヨウモナイ」

「それはこつちの台詞だ。お前ら全員沈めれば、どういう理由で生まれてこようが関係ない」

木曾も仕舞っておいた船体部分を出現させ、両腰に備え付けてある軍刀と日本刀を引き抜いた。

「祭りが終わるのは残念だが、何事にも最後までのはある。いい加減幕を引かせてやるよ、融合棲姫！」

「コイキソツ。アタシヲゾンブニタノシマセテクレ！」

約八年もの間交わることのなかった因縁が、遂に激突する。

第六章二幕 右翼戦線

「武蔵生きているか？」

「当然だ。そう簡単にくたばってたまるか」

背後にいる相棒に声を投げかけると、ぶつきらぼうに返されてしまった。

だが、雑ではあるがまだ気力を感じ取れるだけ長門は安心し、深く呼吸を入れる。

「それよりお前はどうかんだ。怪我とか負ってないだろうな」

「人の心配する余裕があるとは恐れ入ったよ」

戦闘が続きすぎて気持ちの昂ぶりが抑えられないのか、皮肉で返した。あんまりな言
い方に自分でも口にしてからしまったと思うが、存外に武蔵は気にしていないようで、

「耳が痛い、そいつは後で纏めて聞くとしよう」

僅かに乱れていた呼吸を整えることに集中しているようだった。

「長門さん。あんたはどれだけ沈めたか覚えてるか？」

武蔵に言われ、数秒考え込むが、流星に数など全て覚えているわけがない。

「大雑把でいいならば」

「構わん。しよせん戯れ言だ」

気分転換の世間話といったところなのだろう。

何十時間と戦い続けているのだからそれも当然かと内心頷く。

声を出さなければ言葉を忘れてしまったのではという錯覚は、長門にも覚えがあるだけに、否定する要素などどこにもない。

「恐らく一万と五千といったところだろう」

「やはりか」

「そういう武蔵はどうなのだ」

「まあ似たようなものだ。一万三千か四千辺りで間違いはないだろう」

「ならば二人合わせて二万八千辺りか」

そう考えるとかなりの数をこれまで倒してきたことになるが、それでも敵は全部で十五万。同じ数を左翼と中央で沈めたと仮定しても、九万未満。やつと折り返しを超えたと言ったところだ。

そこまで考えに至り、登っていく朝日とは逆に沈みそうになった。

「まだまだ先は長そうだ」

他の者達があつと多くの数を沈めていると期待して、小休止から戦線に復帰する。

近場にいた姫クラスの集団に真正面から向かう。

休憩しながらも敵からの攻撃は止んでないため、依然戦争は続いている。

上空には敵艦載機が飛行しており、時折爆撃を行ってくる。精密な砲撃も行われているため、防衛を疎かにしていない時が瞬きほどもない。

臼杵鎮守府において建造初期は全員誘導性艦装装甲で防ぐことばかり教えられる。長門も同じく防衛ばかり教育され、納得の行かない感情に駆られていた時期もあったが、今この瞬間ほど感謝したことはない。

呼吸を行うように最適の量を導き出し、防ぐ。

両腕に装備された明丸《鉄腕》は手甲型だ。それも北上の攻撃するためのものとは違い、防ぐためのもの。

《ステインガー》についていた杭打機のある部分には、西洋の盾を縦長にしたようなものがついていていた。

長門は迫りくる凶弾達に盾を向け、広げた。

長門の腕の倍程度にしか横幅のなかった盾は、羽を広げるように左右へ拡張され、次々と砲弾を表面で滑らせそらしていく。

それら砲弾は後方へと離れていき、逆に長門は敵に向かって一歩一歩確実に進んでいく。

長門の戦い方は単純だ。

最短で近づき、殴る。

そのため昔の被弾率は相当に酷いものだったが、自分が竹を割ったような性格であることを理解しているだけに、細かい技を取り入れながらの戦いというものを不得手としていた。武蔵が建造されるまでは。

それまでは長門以外は実直なものなどいないため、客観視というものができなかった。他にも木曾が近い存在ではあったが、レベルが違いすぎて参考にもならない。そのためどれだけ自分がおかしいことをしているか気付けないでいた。映像で見てもピンとこずにいたものの、武蔵の戦い方を見てからというもの、自分の不格好な行いにやつと気付けたのだ。かと言っていきなり戦闘スタイルを変えられるほど器用でもない。故に繰り返し鍛え続けたのが、最初は嫌がっていた受け流すという術だ。ただいきなりやれと言われてできるほどの柔軟性もないため、よりやりやすいようにと造られたのがこの《鉄腕》だった。

始めは使い方が雑で全て防ごうとしていたが、今ではそらすことの難しい攻撃のみを選定し防ぐ、というより高度な状態にまで至る。

奇しくも、自分が嫌がっていたものが一番の武器になるのだから皮肉なものだ。

両腕を最適な角度に合わせ、倒すべき敵艦まで最速で近づく。

ターゲットになったのは重巡棲姫。

理由など何も無い。この乱戦下において一番近かったから。ただそれだけ。

近寄られた重巡棲姫は焦りを見せつつ自身も、白い大蛇——人類側では白蛇（びゃくい）と呼ばれている——も操り砲撃の手を休めない。それは回りも同じだったのだが、重巡棲姫が前に出た瞬間、僅かな空白ができた。

確かこのような間を天使が通ると西洋では言うのだったかと、以前読んだ本の内容が脳裏を掠めつつ、更に一步踏み込んだ。

砲撃の残響だけが周囲に広がる中、砲台の役割を担う白蛇と重巡棲姫も大きく踏み込み、喰らいつくように上下で攻めてくる。

巨大な顎門（あぎと）となつてくる二つの存在に、長門は下からやって来る白蛇の上顎を掴み取り、振るい上げた。

鞭のようにしなつた白蛇は重巡棲姫の体を激しく打ちつつも崩壊。重巡棲姫は真上へと強制的に方向転換させた。

重巡棲姫は苦悶に歪むよりも先に、この後自分が待ち受けている未来に絶望してか、悲痛な表情を浮かべていたが、長門は容赦なく落下速度に合わせて拳を振るい、腹部をぶち抜いた。

腕に装備していた《鉄腕》が遅れて重巡棲姫の胴体を押しつぶしながら両断。上下に分かれた体は海に落下しながら液体へと変わっていった。

休む暇もなく長門は反応の遅れた戦艦ル級の頭部を鷲掴みし、近くにいた他の深海棲

艦目掛けてぶん投げまとめてなぎ倒しつつ、近場にいた軽空母又級を投げたモーシヨンの振り返りざまに裏拳で頭部を消し飛ばす。

背後を見せたことで縮地で攻めてきたeliteのレ級の拳を首の動きだけで避けてから、腕をへし折りながら腹部に膝を入れ、ひるんでいる間に尾角を掴み、やってきた砲弾の弾除け代わりに振り回して防いだ。レ級はダメージから装甲が使えなかったのか、全弾被弾し、振り終える頃には手元から消えていた。

全体的に砲弾数が減っていることから自然と長門の攻撃の手数が増えていき、敵艦を削ぐ速度が加速していく。

五〇メートルも離れていない武蔵の方へ軽く視線を投げると、胸元のさらしとスカートの一部が焦げてはいるが、それも敵の攻撃の層が厚かった十数時間前の話。今は攻勢に出られているからか表情に陰りは見えず、脆さを感じさせない。

長門としても思い通りに戦えることがこうまでストレスに影響するのだと、初めて自覚しただけに、思わず顔がほころぶ。

途中白杵鎮守府専用の信号弾が上がったりして不安なことは何度かあったが、現状安定しており、このまま押し通せるのでは。

そう思った直後のことだった。

「武蔵！」

寒気を覚えた長門は名を叫ぶと同時に、脳に直接杭を刺されたかのような頭痛が襲いかかる。

あまりに唐突なことに膝を付きそうになるのを懸命にこらえ、奥歯を噛み砕きながら両腕の盾を腹部の交差させ、全力の装甲を展開する。

寒気と頭痛の因果関係など調べるよりも先に、一つの結果を長門は知った。

「……く、そ」

両腕の装備された盾。

交差された鋼鉄の塊は迫りきた飛翔体を、鈍い音を響かせつつ形を歪めながらも防ぐことに成功した。が、

「長門さん！ おい長門！」

防いだものは跳弾し、長門の左太ももを打ち抜き、大穴が空いていた。

武蔵がふらつきながらも跳んでくるのが視界の端に映しつ、膝が崩れ落ちる。

——頭痛の原因はなんだ？ それに今の砲弾。《鉄腕》で防ぐどころか装甲を貫いて

……。

思考が結論に至るよりも先に、幾つもの砲身が自分を狙っていることに気付き、吹き出る脂汗と一緒に歯噛みする。

少なく見積もっても五十は飛んでくる砲弾。

先ほどまであつた防御への自信など、既に消え失せていた。

瞬間、走馬灯でもないのに急に視界のすべてが遅くなっていた。

だがそんな些細なことに気を止める暇はない。

迫る砲弾が目の前を通過し終えるかどうかの瀬戸際。

伸ばされた腕。否、指先の十センチ先で砲弾に触れた。但し横に振れる程度の接触のため防ぐには至らず、僅かにそらすのが限界だった。

恐らくこの後長門が被弾するコースだろうがそれでも致命傷は避けられる程度はズラせたはずである。一つ目は。

まだ砲弾は幾つも飛んできており予断は許されない。何より着水からの折返しの際の砲弾の対処もできないのだ。

感傷を捨て置くように即座に反転。全神経を集中させ、迫り来る砲弾を弾くでもそれすらすでもなく、叩（はた）くように腕を、足を、体全体を動かす。

後方からの砲撃がないのは幸いだったが、左右と前からやって来るものを飛び込んだ姿勢のままやるのは至難の業だった。

愚痴を言う暇などどこにもない。

使えるものは何でも使った。

間に合わないと思えば自らの船体を割り込ませて受け止め、敵の砲弾をそらして別の砲弾に当てる等といった無茶なことまでも。

そこまでやって第一波はなんとか退けたが、着水すると同時に第二波がやってくる。おまけに今度は生身の敵艦も添えて。

しかし第二波までの間は武蔵が長門の正面に立つには十分な時間だった。やってきた敵艦三隻のうち二隻を手早く片付け、一隻は鳳翔に習った合気道で投げて壁代わりに砲弾を受け止めさせる。

まだ続くかと警戒するも第二波は思ったより早く終わりを見せた。

これまで深海棲艦側もかなりの数の砲撃をしてきたからか、撃つ気配が殆ど見られない。それでも自分を狙っていた集団も加わったことで厚めの層が出来上がったが、まだ対処できる範囲だった。

背後に視線を流せば、やはりうまく装甲が扱えてなかったのか、長門の体に幾つか被弾した後が見受けられる。

「武蔵。私のことは良いから早く退避しろっ」

「そんなくだらないことを言う暇があるならさっさと信号弾を上げろ！」

まだ敵艦は砲撃に空爆を止める気配はない。初めほどではないにしろ頭痛はまだ治まっておらず、最初に長門を負傷させた砲弾の理由も不明な以上、速やかな対処が求められている。

長門もそれがわかっているからだろう。それ以上何か言い返すことはなく、うめき声

を漏らしながらも信号弾を打ち上げた。

「たまには守らせろよ、先輩」

「……はあ、悔しいがお守りをして貰うしかなさそうだな、後輩」

赤色の軌跡を描きながら青空へと飛んでいくのを確認し、大きく息を吸う。

海上でありながら潮の香りよりも硝煙の臭いが鼻をつくが、それでも気合を入れ直すには十分だった。

砲撃の空いた僅かな間に、武蔵は声を張り上げた。

「私は大和型戦艦二番艦、武蔵だ！ 沈みたい奴から前へ出ろお！」

空気が震える瞬間を自ら作り上げられたことへの関心よりも、怒りが身を焦がす。

長門は木曾に次いで二番目に手合わせの数が多い。

それだけ多くの拳と共に言葉も交わしている。

同じ戦艦であり一つ前に建造されているということも相まってか、特別な親近感というものを感じていた。

故に、そんな長門が負傷させられたという事実は、武蔵の心を一気に燃やした。

猛る思いとは別に思考は冷静で、飛翔体をしっかり視認、判別ができるほど。

その中の一つを掴み取り、向かって投げ返す。

そんなことができるとは思いつかなかったのか、本来ならば防げるであろう投擲を前

に反応できず、重巡ネ級の胸部を安々と貫いた。

それを見た深海棲艦達の間で動揺が走ったのがわかる。

あからさまに砲撃の数が減り、代わりに生身で迫りくるようになった。

武蔵としては狙ってやったことではないが、それでも好都合であり、握る手に力がある。

——こんな時に野太刀があればな。

ふと思いつく。

手にしつくり来る感触と重量。

肉体の更に先まで届くリーチ。

誰かを守りながらだと尚の事その長さが重要なのだと思いつく。

長門を狙った最初の一発は野太刀さえあれば防げただろうにと、抉られた長門の左肩が頭にこびりつく。

無い物ねだりをしつつも、跳んでくる敵艦を一つ一つ丁寧に潰していく。

拳で突き、時には潰し、そして蹴る。時折思い出したかのように飛んでくる砲弾に向かつて敵艦を投げ飛ばし、とどめを刺す。

少し前よりも更に洗練された動き。

頭痛さえなければもつといい動きができるのではと思えるほどに、戦いの中で自分が

成長していつているのを体がわからせてくれる。

これならば持久戦になったところで数時間は耐えられる。そう思っていた矢先に朗報が飛び込んできた。

第六章四幕 軽巡棲鬼・亜種

「武蔵、あなたは大丈夫？」

背後から長門とは別の声が聞こえてくる。

相手が明石であることは振り返らずともわかるため、正面を向いたまま返答した。

「ああ。まだそこまでの外傷はない。それよりも長門さんを頼む」

「ええ、任せておいて」

「長門の左太もも、完全に貫通しちゃってますね。艀装もボロボロだし、体のあちこちがえぐれています」

後ろを見ていなかっただけに、もう一人いるとは思わず、意識が後方へ釣られ一瞬だけ振り向いた。そこにいたのは明石と同じく後方にいるはずの龍鳳だったが、問うよりも先に、正面に向き直った直後、目の前まで飛翔していた砲弾を慌てて裏拳で弾き飛ばし、続いて海面を割るように進んできた駆逐艦十級を下突きで脳天をぶち抜く。

更にと左右から襲ってきた重巡二隻のうち、左を肘打ちで胸部を穿ち、右からの拳を右手でいなしながら空いた左手の掌底を顎先へと打ちにいき、顎から先を消し飛ばす。

チャンスとみたか正面から南方棲姫が飛び込んでくる。

手先を使ったそらしをするにはまだ殴った直後の武蔵では引き戻すには時間が足りない。そのため一瞬で覚悟を決め、短く息を吸い込んだ。

南方棲姫は武蔵の横つ面目掛けて腕を振るいに来る。それに合わせ、武蔵は殴られかけた左頬を後方に向かって素早く背ける。足の裏で装甲を展開し、その場で一回転できるほどの勢いをつけて回り、相手が通り過ぎるより前に右の肘を後頭部へと突き刺した。

——い、今のは流石に肝を冷やしたぞ……。

想定外とはいえ注意が散漫になった結果であるため、誰にも文句は言えない。

少なくとも今ので負傷したものはいたため結果オーライとばかりに周囲に視線を投げながら状況整理に入る。幸い、こちらの戦力が増えたからか、敵艦隊の動きが慎重になっていた。

「龍鳳さんがここまで来てよかったのか？」

龍鳳は軽空母なこともあり、後方で伝令や局地的な支援に向かうのが主なはずだが。

「これも支援の一環ですよ。明石さんの護衛です」

「後も一個伝令があつてね」

「それは私がいいますから明石さんはそのまま長門を治して上げてください」

はいはいと小さく肩をすくめてから明石は治療を初めた。

それをしつかり確認し満足したのか、龍鳳はわざとらしく一つ咳を落とす。

「もう一つ私がここまで来た理由があります。その前に、私達が来るの早くありませんでした?」

「言われてみればそうだな。我々はかなり奥まで切り込んでいたつもりだが、気付かないうちに後退していたのか?」

「残念ながら不正解です。正解はあちらを見てください。望遠機能を使えば丁度見えるはずですよ」

指を刺された先へ視線を動かす。軽く見回したところで深海棲艦しか見えずつからかっているのかと視線を戻しかけたとき、何かが視界内で動いた。

「あれは……陸奥達か」

「はい。後方支援の方々です。凄いですよあの人達。この戦場の中だけでぐんぐん成長していつていまして、今ではあの通りです。まだ詰めの良いところは多いですが、複数で動いていますのでそれもちやんとカバーできています」

「あいつらあんなに戦えるようになったんつくう!」

突如始まる激しい頭痛。

この状況を作るきっかけを作った痛みが再び武蔵を襲う。

「つん、む、武蔵これはなんですか!」

「わからん。これの影響もあつてか長門さんがやられた」

「どうやらゆつくりできる時間はこれまでのようで、周囲にいた深海棲艦が動き始めた。」

「二人は後方に戻つて長門さんを治してくれ。この辺りは私一人で受け持たせてもらおう」

「行けそう?」

「明石さんよ。その無駄口を叩く暇があるなら」

「そうね、わかつたわ。遅くても二十分もあれば復帰させられるからそれまで勝手に負傷しないように。後潜水艦の生き残りがまだいるようだから気をつけて」

返事代わりのその場から離れ深海棲艦の注意を引きつけた。

二度の頭痛でわかつたことがあるのは恐らく連発できないこと。それから、頭痛を起す謎の現象には波長があるようで、

「誰だか知らないが場所はもう割れているぞ!」

隠れていても波長でいる方向はほぼほぼ掴めた。

おまけとばかりに深海棲艦が守るように密集したが、それらを突進して突き破り、その奥にいたものを掴み上げた。

「お前か犯人は」

丁度首を掴んでいたようで、全身がハッキリと見える。

頭部は軽巡ツ級のものに近いが、全体的なシルエツトは軽巡棲鬼のものだった。パッと見ただけでは軽巡棲鬼と見間違えてもおかしくはないが、紛れもなくイレギュラー。

「なるほど特姫か。どおりでこんなことができるわけだ」

どういった原理でできているのか不明だが、融合棲姫に比べたらまだわかりやすく助かる。自分が首を押さええられている時点で強さの程度がしれたのは大きい。

「悪いがお前に構つてる暇はないんでな」

掴んでいた首に装甲を集中させて潰そうとした瞬間、両足が海に食われるように吸い込まれていった。

「な——っん」

思考の外からやってきたことだけに咄嗟の判断が遅れ、海中へと引きずり込まれ、更には海水を幾らか飲み込んでしまった。

艦娘ならばどれだけ飲んだところで害はないが、問題が別にある。

——っそ、息が。

周囲に装甲を張るよりも早く全身が海の中へと入ってしまったため、本来呼吸用の膜を全身に作れなかった。

艦娘は毒物などを吸収したところで勝手に浄化されるようになってはいるが、呼吸だけ

は人と同じく必要としている。故にこれは最悪な状況だった。

足を見ればまだ生き残りがいたのか、二隻の潜水艦が自分の足を片方ずつ握りしめていた。

蹴るように足を動かすも振りほどけず、焦る気持ちの中、足に集中して装甲を展開。弾き飛ばす。

急いで明かりの見える海面向かって進もうと上を向いた瞬間、何か背後にいる気配を感じ取る。が、不慣れな海中。しかも呼吸ができない影響で反応が遅れてしまった。

しかし相手はお構いなしとばかりにするりと、周囲にある海水よりも絡みつくように首と胴に触れたと思った瞬間、一気に締め上げてきた。

「——がつ」

肺の中にあつた数少ない酸素が吐き出され、目の前を通過していく。

眼球だけをなんとか後ろへ動かすと、そこには少し前まで首を締め上げていた特姫だった。

優位に立てたからか、それともやり返せているからか、口元が笑みを浮かべているのは、些か癩に障つたがそれも少しの間。

先ほどまであつた頭痛とは別の痛みが脳をかき乱し、鈍化する。気にしているほどの余裕がないのだと、脳が無意識のうちに除外する。

浮上しなければという思いと、ここで倒したいという願い。

残された時間は僅かであるため、迷う時間はほぼゼロに等しかった。そんな折である。何かが聞こえた気がした。

「……がほ……か」

いや、確かに聞こえた。部分的ではあるが聞こえたところは雑音の混じらない確かな声。しかしそれが何を言おうとしているのか、徐々に明滅し始めた意識の中では継続して聞き取ることも、聞き返すこともできそうにない。

ただ一つ救いがあった。

それは一瞬だけ現れた思考の正常化。

酸欠の影響でヘドロが溜まっていくように鈍くなっていった思考が、コンマ一秒にも満たない間だけで綺麗になった。

何でなのかなど考えるより前に、全周囲に向けて全力で装甲を展開。装甲で引きちぎるように掴んでいた深海棲艦を離し、急速浮上をした。

「つつつぱん。ぱん、ぱん」

勢いが強すぎたのか、空中に飛び上がりながら体内に入り込んだ余計な海水を吐き出し、揺らぐ視界を抱えたまま受け身を取りつつ着水。即座に短距離の縮地をランダムに行いながら思考が落ち着くのを待つ。

意識しなくても縮地が行えるほど木曾には世話になったのだと今更ながら気付くが、今は感謝する余裕さえなかった。

十度ほど深く呼吸を繰り返すと、体の機能の大半は元の状態に戻り、それを見計らって再度海中へ、今度はしつかり膜を作って潜り込んだ。

「じゃーん行った」

潜水艦は勿論のこと特姫もだ。先程海上を動き回っていた時には見当たらないため、まだ海中にいるはずだが、どこにも見当たらなかった。

取り逃がしたかとも思ったが、潜水艦の方が *flagship* だったので覚えているため、嫌でも目立つはずなのだが、それも見当たらない辺り、先程の装甲で倒してしまつたのだろう。

「確かに腕とかは引きちぎつた感触はあったか」

無意識に近い行動だっただけに確証はないが、それでも深手を追わせた自信はあったために即座に切り上げ、海上へと戻つた。

浮上し即座に周囲を警戒すると、何千といいたはずの深海棲艦が消え失せ、静寂が場を支配していた。何事かと望遠機能を使いつつ水平線まで見ていくと、後方の部隊に向かつて大群が移動しているのが見える。

ぎよつとしつつも一度縮地を使って向かおうとし、足が止まる。

「後方も気になるが、木曾さんはどうなってる」

物は試しにと通信を試みるが、やはりどこにも繋がる気配はない。

「恐らくもう融合棲姫と戦っている、よな……」

遠目で見ただけだが、後方は着実に力をつけて成長しているのがわかる。そして何より鳳翔や龍鳳がいるのだから問題ないはずだと願いつつ、最奥。長門を負傷させた砲弾が来た方角へ足を向けた。

第六章五幕 鋼の誓い

来る拳を受け流し、サーベルを下から上へと切り上げていく。

しかし相手の方が装甲の総量が上か、防ぐために上げた膝に阻まれ、代わりに頭部へ回し蹴りが飛んでくる。

しゃがんで躲すように見せかけつつその場で一回転して踵落としを繰り出すを受け止められた。が、それは誘いだった。二本の刀剣を相手の首筋めがけて振り下ろす。

流石に三ヶ所同時に防ぐのは避けたいのか一気に距離を取られてしまう。

着水しながらも次はどう攻めるべきか思案するよりも先に、巨大な黒い物体が目の前まで迫ってきていた。

慌てて防ぐものの相当な威力だっただけに即座に切り替え、蹴りながら黒い物体を踏み台に、自分から距離を取ることにした。

「フ、ヤルジャンナイカ、キソ」

「は、まさか艦装を蹴って武器に変えるとはな。恐れ入ったよ」

自動で戻る機能でもついているのか、黒い半球状の艦装は元々そこにあつたかのように融合棲姫の背後に存在する。

融合棲姫特有の行動や現象は幾つもあったが、これもまた特殊なことかと思うものの、翌々考えれば艦娘でも不可能ではないことを思い出し、久しぶりに長めの息を吐き出す。

——駄目だな。疲労かどうかは知らんが、少しばかり思考が鈍くなってきたか？

融合棲姫との戦闘は始まってから既に二時間経過していた。

お互いにまだ決定打はない。

それどころかまともな外傷など与えるには至っていない。

完全なる平行線が二時間の間ずっと続いていた。

——とはいえだ、あいつはまだ砲撃の一発も行っていない。前も一回使っているんだ。

あの玉から伸びてる砲塔が飾りなわけ無いだろうし、弾薬が付いているなんてこともないだろう。要はまだあいつにとっては遊びの範囲内つてところか。

普通の砲弾ならば木曾にとって目くらましにもならないが、相手はイレギュラーな存在。大和型の倍の火力があっても不思議ではないだろう。

これだけ使ってこないのだからこれ以上警戒するのは注意散漫にもなりうるが、無警戒でいい程生易しい相手ではないため、結局は意識を割かずにはいられなかった。

そしてそれは、この後功を奏することとなる。

再び縮地を使って接近してきた融合棲姫は直前で一回転する。踵落としをするには

早すぎ、二回転するならば隙だらけすぎた。

わざとだろうと木曾は右へ避けると、融合棲姫は自分の艤装の砲塔を掴み鉄球のように振り下ろす。だけではなかつた。

立ち上る水しぶきは視界を覆い、その奥から真横に切り裂くように何かがやってきた。

とつさの判断で柄頭を当てて軌道をそらすと金属音を奏でたが、そんなことはどうでも良かった。

背筋を走る寒気。

切り裂かれた水しぶきの向こうでニタリと笑みを浮かべる融合棲姫。

木曾は軌道をそらしている体勢のまま縮地を使い離れるが、完全に狙われているのがわかつた。

消えない寒気がその証拠。

どうするか悩むよりも先に、融合棲姫の口が開かれる。

「シズメー！」

木曾の耳に届くと同時に内蔵までもを揺らす轟音が鳴り響く。

縮地の影響でまだ空中にいる木曾では行動に制限がかかりすぎていた。故に思考よりも先に反射が機能した。

右手に持っていた日本刀で海を斬りながら再度縮地を行いつつ、左手のサーベルで飛翔体を切り払いに行く。

経験上これで切り抜けたことは何度かあった。何千何万と経験した訓練や戦場の中で幾度か実際に行ってきた行為。

経験に裏打ちされた反射だったが、融合棲姫はあっけなく先をいく。

「なっ」

——んだとお！

切り払いに行つたサーベルは飛翔体。砲弾に触れる直前で弾かれてしまった。そして砲弾は止まることなく進み、木曾の左肩を削り取りながらも勢いは止まらず、遙か後方まで突き進んでいった。

——馬鹿な、今のは砲弾だったはずだ。なのに弾かれただと！

肩にある痛みよりも驚きが大きく、海中に落としたサーベルにも意識は行かなかつた。寧ろ痛みが思考を回し、一つの結論を導き出す。

「まさか、お前の砲弾は」

「アアソノトオリダ。アタシノホウダンハナキソ、オマエタチノイウ、ソウコウガハレルンダヨ」

自分の艦装の上で胡座をかきながら自慢気に話す。

「トウゼンソウコウガナクテモ、イリヨクモソクドモ、オマエタチヨリウエダガナ」
「は、はは。やばいやばいと思つてはいたがそれほどはな」

相手が相手だけに想定外を想定してはいたが、それ以上のものが飛んできたために、動揺が走る。

「ダガ、イマノガヨケラレルトハオモワナカツタゾ。コイツトイツシヨニ、ハジヨウコウ
ゲキヲシカケタンダガナ」

融合棲姫は左腕を突き出す。その先には刀が。否。

「野太刀か。つくづく猿真似が好きなやつだな」

先程波しぶきを切り裂いたものが何なのかがわかったものの、状況は好転するどころか悪化していた。

相手の手の内は恐らく殆ど出せたはずだが、それだけに限界に気付く。

無理だと。

どう分析しようにも分が悪すぎるのだ。

仮にまだ無傷だったとしても、恐らく刺し違えるつもりで戦わなければ勝つ見込みは薄いだらう。

——まさか防御不可能な攻撃とか有りかよ……。

そこまで考えると同時に、かつていた伊勢の最後を思い出す。

———「そういや伊勢さんも頭部を負傷してたな。なんか砲弾にカラクリがあるとかどうとか。なんでオレはそんな重要なことも忘れちまってたんだろうな。」

右手に握られたものに視線を落とす。そこにはその伊勢が残した置き土産。折れた野太刀を打ち直し、日本刀として蘇らせた明丸《鋼》があつた。

これは木曾にとつて誇りであり、誓いであり、何より生きる意味だ。

———「ああ、そうだな。何度も。そう何度もだ。これまで窮地に立たされることなんてあつた。死物狂いでここまで来たんだ。自分より強い相手だつてこれまでいたが、それでもまだオレはこうして生きている。そしてオレは誓つたはずだ。剣造に、この刀に、最強の艦隊を作つてみせると。だつたら負けるわけにはいかない。無理だろうがなんだろうが食らいつき、最後には勝つ。これまでも、これからも。」

「そうだよな、伊勢さん」

第六章六幕 神速の刃

小さく笑みを浮かべ、片手で納刀し、ポケットに入れておいたシガリ口のケースを取り出す。装甲を使って蓋を開けて一本だけ空中に跳ね上げ、啜えた。続いてシルバーのオイルライターを使い火をつけ、胸が浮くほどにゆっくりと吸い込む。肺に入れる必要はないが、今だけはと呼吸器官にまで送り込み、シガリ口を啜えたまま緩やかに吐き出す。

「マタソレカ。ナニガタノシインダ？」

「楽しいんじゃないかって美味しいもんだ、これは」

「アタシニハソウハミエナイガ」

「なんだやったことないのか。まあそりやそうか。なんだつたら一本やろうか？」

吸いかけのものを目元まで上げてどうだと誘うが、首を横に振られてしまった。

「チガウヤツガイイ」

「生憎とこれしか持ち合わせがないな」

肩をすくめながら煙を吐き出す。

違うやつと言われひよっとしたら伊勢の吸っていたPEACEのことを言っている

のではと勘ぐるが、どうやらのんびりするのでは終わりのようだ。

「モウオチツイタダロウ。ソロソロサイカイシヨウカ」

「まあ気付くわな」

最後に大きく吹かし、まだ殆ど吹かしていないシガリ口を携帯灰皿に押し込む。

現在木曾の左肩はえぐれてはいるものの、出血は無くなっている。これは艦娘の特性の一つに出血を抑える機能がありそれを活用しているだけのことだ。但し傷が深ければ深いほど神経が必要となるため、今の会話のおかげで出血を抑えることに成功していた。

痛みも麻痺させているため特に問題はない。

ただ左腕が使えないのに左腰の鞘へ刀を収めたため、取り出すのは難しかった。そのため納刀している状態で装甲を使い刀を射出し、先まで出たところで峰部分に触れつつ装甲で軌道修正しながら空に跳ね上げ、回転しながら落ちてきたところを右手で掴み、構える。

「待たせて悪かったな」

「モンダイナイ。タノシミハトツテオクモンダ」

「そいつはありがとう、よっ」

艦装から飛び降りている融合棲姫に向かって縮地を使い、一気に接近する。

横薙ぎに振るった刀に向かって融合棲姫は野太刀をぶつけてきた。

この戦場で初めての鐙迫り合いが起きた瞬間だった。

「なんだもう素手は止めたのか?」

「コイツヲツカウノモ、オモシロソウダカラ、ナ!」

膂力も装甲も相手が上のため安々と弾かれてしまう。

左腕がぶらりと垂れ下がっているため、重心バランスも崩されやすいのを考慮しつつ、着水。向かってくる融合棲姫の斬撃を避けてから斬りに行こうとして再度縮地による高速移動を行う。

次の瞬間に鼓膜を揺らす轟音が再び響いた。

どうやら砲撃も完全解禁らしい。

反動に期待して海面すれすれを跳躍し、足首を切断しに行くが、艦装によって阻まれてしまった。

しかし装甲の展開には遅れたのか、確かに艦装の一部に切り傷はつけられたのは大きい収穫だ。以前武蔵が融合棲姫の艦装に傷つけはしたが、あれはあくまでも不意打ち。一対一でもそれが可能であることがわかっただけで、前向き思考になるには十分というもの。

——出し惜しみは無し、だな。

覚悟を決め、刀を握る手に力を込める。

突進するように跳んできた融合棲姫はそのまま突きを放ってくるが、刀で受け流すものの、跳んでいる状態のまますれ違いざまに膝を立ててきた。日頃の癖で左腕で流そうとし、動かせないことを思い出すよりも先に融合棲姫の膝が胸元に突き刺さるのが先だった。

寸でのところで装甲が間に合ったものの、完全には消しきれず、装甲も半端だったよ
うで、衣服と船体が一部破損したのがわかる。

しかし後悔するよりも先に目の前のことに全神経を集中させた。

膝蹴りがある程度緩和できた影響で同じ方向に飛ばされたしまった結果、融合棲姫の
攻撃はまだ終わっていない。

柄頭を落としてくるのに対し、右足で蹴り上げてみせた。

更に刀を海面に触れさせブレーキをかけつつ、刀を支点に体を倒し目の前を通過させ
ようとする直前に、融合棲姫は艦装を切り離し、落下させてきた。

見た目から察するに数百。下手したら一トン近くありそうな物体をそのまま下敷き
になるわけにもいかず、左足で艦装の斜め下を蹴りつけ、艦装ではなく自分の体を無理
矢理に軌道修正かける。

反動で海面に背中から叩きつけられる前に、水切りするように装甲で一度跳ね、二度

目が起きる前に刀を海に突き刺し、そこを支点に足から着水する。

融合棲姫は再度跳ねると思っていたのか先回りしていたが、生憎とそこにはいない。背を向けていた融合棲姫に向き直ると、既に跳躍した後だったようで、丁度野太刀振り下ろすところだった。

明らかにただ振り下ろすだけの斬撃は、構えの時点で軌道がわかるため、体を斜めにするだけで容易に避けられた。

お返しにと横薙ぎを振るうが受け止められる。が、それも予定通り。

右足で顎を蹴り上げにいき、そちらは顎先をかすめるだけで避けられたものの、更に放った左足の蹴りが見事腹部に突き刺さった。

「ブフウッ」

空気を吐き出すようなうめき声を上げつつ吹き飛んでいる融合棲姫を追いかける。

しかし体勢を整えるのは思いの外早く、表情に痛みや苛立ちはなく、寧ろ今日一番の笑みを浮かべていた。

そんな融合棲姫相手に木曾は怯むことなく日本刀を振るう。

「タノシイ。タノシイヨキソ！」

互いに切り結びながら短距離の縮地を繰り返す。

何度も行いう毎に止めていた肩の痛みはぶり返し、出血し始めていた。そして何より融

合棲姫との速度差が如実に現れだした。

左肩をやられていている影響で特に左反転にラグが発生し、徐々に押し込まれていく。そして遂に、

「バア」

弾かれた反動で崩れた姿勢を整えるよりも先に、融合棲姫は目の前までやってきていた。

歯噛みしながらも振るわれる野太刀をなんとか刀で防げたが、踏ん張りが一切効かない状態での衝撃は殺すことができず、着水ができたときには再び融合棲姫が目の前まで迫っていた。

不味いと理性が叫ぶ。

本能が好機だと背中を押す。

刹那で覚悟は決まった。

振るわれた横薙ぎをしゃがんで躲し、起き上がりながら刀の峰を自身の船体部分にぶつけ、一気に振り抜いた。

確かな感触。

空気さえも切り裂いたのか一瞬だけ静寂が訪れた。が、その空気を味わうことなく反転。

「キイイソオオオオオオ！」

叫ぶ融合棲姫に向かって跳ぶ。

焦ったのかやや上に跳びすぎたが、上段から振り下ろしに行く。

しかし融合棲姫もそのままやられるつもりはないのか、野太刀を下からすくい上げていた。

瞬時に切り替え、木曾は柄頭を使つて斬撃をそらし、そのまま柄頭を融合棲姫の額を撃ち抜くように振り下ろした。

斬撃よりも手に残る感触をしびれとして感じ取りながらも、振り向きざまに首を切り落とすにいき、手が止まった。

「な、んで、だ」

絶好の機会だった。

恐らくあのまま振り抜けていれば首を切り落とし、この長かった戦争に終止符を討てるはずだった。

「なんでだ……」

それでも木曾の切っ先はそれ以上動かさなかった。振り切ることができなかった。

今瞳に映るモノは、融合棲姫の能力なのかと疑いながらも動けない木曾に、ソレは話しかけてきた。

「——よお、久しぶりだな、木曾」
「なんであんたがそこにいるんだ、伊勢さん！」

第六章七幕 記録の中の住人

あれだけ激しかった戦場は今自分の手の届く範囲内に存在しない。

遠くを見れば後方に戦線が移動しているのだから、向かえば再び砲火と拳を交える中に戻るのだが、今はそれよりも気になることがあり、武蔵は海面を蹴り続ける。

途中視界の端に映る影に気付き、敵かと一瞬身構えたが、そこにいたのは鳳翔だった。「鳳翔さん。なにがあつたんだ」

「私にも何がなんだか。ただ敵の動きがおかしくて気になって私自ら様子を見に来ました。それに……」

「それに？」

歯切れの悪い物言いにどうしたのかと顔を横目で見ると、どうやら本人もどう言葉として発したら良いのか悩んでいる様子だった。

「いえ、なんと言ったら良いのでしょうか。奇妙、なのですが、何やら懐かしい？ そんな気持ち今胸の中にあります」

「懐かしい？ 昔こんな戦場を経験したとかそんな感じのか？」

「そこまでは。ただ懐かしいのは間違いない気がします」

間違いないのか気がするなのか、やはり鳳翔にしては言葉遣いがおかしい。

曖昧なことを口にしながらも、鳳翔としてはそれが正しかったのか、それ以上訂正することはなかった。

遠くで鳴り響く轟音。遅れて鉄と鉄がぶつかり合うような音が耳に届く。

「なんつーか出鱈目だなあの二人」

「ええ。あそこに私がいても確実に足手まといになるでしょう」

望遠機能を使えば簡単に見えるところまで接近したが、異次元のような高速戦闘に目眩がおきそうになる。

以前自分があればに等しい戦いをしたというのだから、思わず笑いそうになった。

「あ、決着がつき——え？」

何があった。

そう問うより前に鳳翔は加速し、置いていかれる。

慌てて加速しつつ意識を前方に集中すると、木曾がトドメを刺そうとしている状態で硬直しているのが見える。が、そこから動く気配はなかった。

代わりに感情が漏れ出るように声を荒げた。

「なんであんたがそこにいるんだ、伊勢さん！」

——伊勢？ 今伊勢と言ったか？

だがそれで叫ぶ理由がわからなかった。

確かに臼杵鎮守府には伊勢は所属している。

北上の後ろに不知火がいるように、鳳翔の後ろに龍鳳と大和がいるように、伊勢もまた木曾の後ろを、自分が建造される前はよくついて回っていたそうだ。そのためこの場で伊勢の名を口にしてもおかしくはない。が、

——いやちよつと待て。今伊勢さんと言ったか。木曾さんが伊勢に敬称を付ける理由なんてないはずだ。じゃあ一体……。

そこまで考えて思いつく。過去に別の伊勢が所属していたことを。

まさかと否定しながらも冷や汗が流れ出る。

脳と体が乖離したかのように逆の反応を示しつつ、先に行った鳳翔の隣に着水した。

どうやら他の臼杵鎮守府の艦娘も気になって来たのか、明石と長門を除いた全員が揃っていた。

「へえこれが、お前が率いている艦隊か？」

「そんなことより答えてくれ伊勢さん。なんであんたはまだ生きてるんだ。どうして融合棲姫の中にいたんだ」

「あたしとしてはそんなことじゃないんだけど」

「悪いけれど伊勢。それは私も気になるわ」

「明石さん」

そこにはまだ後方で治療を受けているはずの長門を連れて明石がやってきていた。

「長門の容態は」

「大丈夫とは言えないけれど、取り敢えずこれ以上酷くならない状態にはしたから安心して」

その言葉に気がかりの一つが消え安堵する。

明石は口を開きながらも木曾のそばに寄り、肩に触れる。そこで木曾が負傷していることに気付くが、現在明石がいるからと取り敢えずは思考から外した。

「その前に一つ聞くことがあったんだ。あなた、私達を知る伊勢で間違いない？」

「ああ、臼杵鎮守府所属。航空戦艦伊勢だ」

「所属していた艦娘と提督の名前は」

「あーっと、順番がいいか。電さん、明石さん、間宮さん、あたし、綾波、神通、木曾、鳳翔だな。それ以上は知らん。んで提督は剣造。池上剣造だ。どう、間違いないだろ？」

「どう思う？」

「私は融合棲姫の可能性も捨てきれないかと」

「まあ鳳翔らしい答えね」

完全に武蔵達は蚊帳の外状態だったが、鳳翔の言い分も否定できないのも事実。

現在伊勢らしき存在は顔の部分だけが、何かのガワが剥がれ落ちて露出しているような状態だった。つまりそれ以外のところは全て融合棲姫の体そのままなのだ。

それがかつての仲間と言われても正直ピンとこない。

だが木曾は違つたようだ。

「オレはこの人が伊勢さん本人だと思う」

首元にやっていた刀を納め、張り詰めていた空気を緩めた。

「その根拠は？」

「ない。完全に感だ」

「おいおい木曾、簡単に信じるなよ。正直あたしが融合棲姫であることに変わりはないぞ。今だつてお前達を襲うの必死に抑えてるんだからな」

「えつと、つまり主導権は融合棲姫が？ それ以前に本当に伊勢さん自身、自分であると自覚があるのですか？」

「ん？ ああ、あるぞ」

「ちよつと待つて。じゃあ伊勢。あなた今までの記憶はあるの？ そんな風になつた時から今までの記憶」

「どうかな。ちよつとまってくれ」

思案しているのか、伊勢は空を見上げていた。

質問した明石も明石で、「ひよつとして……もしかしたら……」などとぶつくさ言っているが、武蔵としては傍観する他ない。

そうこうしているうちに、伊勢も記憶の掘り出しが終わったのか、そうだなと前置きを置いてから言葉が続けた。

「ないな。全く無いわけじゃなさそうだが、それもおぼろげだな。あーでも前にも木曾と戦ったような気はする」

「戦ったようなじゃなくて実際戦ったぞ。今日だけじゃなくて三、四ヶ月前にも」

「へえ。それでも生きてるなんて強くなったじゃん」

「おかげさまでな。こちらら主力がいなくなつて大変だったんだぞ」

「悪いね。世話かけたようだ」

二人のやり取りは事情しか知らない武蔵でもハッキリと見て取れた。それどころか木曾が不貞腐れたような素振りなど始めてみただけに、小さな嫉妬心が生まれるほどだった。

「じゃあ伊勢。あなたはずっと生きていたということでもいいのね？」

「あー多分。確証はない」

「そう。因みにあなた、今自分の体があるかどうかわかる？ この際なんとなくでも良

いわ」

「それくらい……ちよつと時間が欲しい。言われるまで気付かなかつた」

明石が何を聞こうとしているのか、置いていかれないように懸命に思考を回す。伊勢への質問と反応も加味し、一つの仮説ができた。

——ひよつとして伊勢の肉体は全て融合棲姫の中にある？

その仮説は荒唐無稽に近いものだつた。武蔵もバカバカしいと思った。しかし結果はそれが正しいことなのだど軽く飛んできた。

「なんとかわかる、な。ただ装甲でふつ飛ばそうとしても無理だ。全部融合棲姫の肉体に現れる」

「なるほど。じゃあつまりその融合棲姫の、そうね、被膜とでも呼ぼうかしら。その被膜を全部剥ぎ取ればあなただけになれるんじゃない？」

「本当か、明石さん！」

「待つて待つて。あくまでも仮説よ仮説。でも顔の被膜が取り除かれてから伊勢の意識がハッキリしたのは事実のようだし、可能性にかける価値はあると思うわ」

「そうか。そうか！」

かつてないほどに喜びを見せる木曾。

本当に嬉しいのだと武蔵にも痛いほど伝わってくる。

そんな折に、鳳翔が冷水をかけてきた。

「ちよつと待つてください。電さんはどうされたんですか」

「電がどうかしたの？」

「……そうか。そういや電さんも融合棲姫に取り込まれてたんだつたな」

言われて武蔵も思い出す。確か過去の資料に上半身だけとなった電が融合棲姫に取り込まれたというものがあつたことを。

伊勢が取り込まれてこの状態にいるならば電も同じくいなければおかしいはずだつた。

それがどういふことか、答えが直ぐに返つてきた。

「電さんか。それはあたしにもわからない。もしかしたら完全に取り込まれる前に死んでしまったのかもな」

「その証拠は——艦娘に証拠の提示なんて不可能でしたね。すみません……」

自分で言っておきながら証明する手立てがないことを思い出したのか、鳳翔は申し訳無さそうに俯き、衣服を握りしめる。

艦娘は死ねば霧散するようにしていなくなる。千切れた衣服や艦装の破片、髪の毛を遺品として残すことは一部の例外を除いて絶対にできない。

「いいっていいって、何を言つても信じられないのはあたしだつてわかつてる。だけど

本当に電さんのことは知らない……ただこれだけは言える。あたしの名に誓って。何より剣造に誓ってあたしは何一つ嘘をついちやいない」

誰も何も言えなかった。

武蔵たちは勿論、鳳翔も、明石も、木曾でさえ。

ただ傍観者に近い武蔵でも一つわかったことがある。それはこの伊勢があまりのままに喋っているということ。

「あーつとわかつてもらえたってことでいいのかね」

「え、ええそうね。その前にあなたの皮膚も全部剥いでしましましょうか」

「すまんがそれは無理だ」

「どういう——」

ことだと木曾がつなげるよりも先に、伊勢は腕を振るい木曾に襲いかかった。

「悪いね木曾。もう抑えるのは限界っぼいわ」

「の、ようだな。どうせオレと明石さん以外があと少しでも前に出てたら抑えることもできなかつたろ」

「流石だね。あたしが目をつけただけはある」

「そいつはどう、もー！」

木曾は防いでいた伊勢の拳を弾き飛ばし、間合いを取る。

距離を取ったからか、伊勢は即座に襲ってくる様子はなく、時間はできたようだ。しかしそれも制限時間が僅かであることを伊勢の表情が教えてくれていた。

「鳳翔！ 今すぐ他の奴らを連れて残党を全部沈めてこい」

「でも、皆で戦ったほうが」

「馬鹿野郎！ 相手は伊勢さんだぞ。お前、勝つ自信はあるか」

「それ、は……」

鳳翔ほどの実力を持ってしても言い淀む。

正直思いう補正なのではと言いたかったが、融合棲姫の時の実力を知っているだけに、否定できる要素など何もない。

運良く下方修正されていれば御の字と言ったところだろう。

「明石さん。傷は」

「超特急で治しといた。激しく動いても支障はないはず」

「ありがとうよ。明石さんはそのまま長門と北上を治してやってくれ」

「ええ、そうさせてもらうわ。木曾。あなたも気を付けて。なんだったらその寝坊助を引き連れてきてね」

「勿論だ……武蔵！ お前だけは残れ」

今まさに反転し、後方に任せつきりだった場所へ向かおうとしたのだが、木曾から呼

び止められる。

「なんで私だけが？」

「忘れたのか？ 艦装同調だ。この人相手に加減しながら一人で戦うとか無謀すぎるからな。悪いが手伝ってもらおうぞ」

「なら私も！」

「くどいぞ鳳翔。お前には無理だ。特に今のお前にはな」

「わかり、ました」

苦悶に表情を歪め、顔をそむけるように背を向けた。そこへ木曾は更に声をかける。

「お前には苦労ばかりかけちまつてるな。ただ今回は本当に油断できない。一発の砲弾が他所から飛んできただけでやられる可能性もある」

「はい、了解しました。ご武運を」

悲痛な表情を残し、跳んでいく鳳翔。そんな彼女を慕う龍鳳と大和もオロオロしつつ、慌てて後を追いかけていった。

「武蔵、木曾さんのこと頼んだよ」

「こちらも珍しくボロボロだった北上が肩に手を置き、横目で見てくる。

「できるだけのことはやってみせる」

「ま、それだけ言えるならまだマシか。ぬいっち、伊勢。私達も行くよ」

肩の温もりが離れると同時に、静かに離れていった。最後に見た北上の表情はどこか寂しそうで一瞬呼び止めかけたが、するべきではないと理性が働き、視線を融合棲姫。否、伊勢へと向け神経を集中させる。

木曾の存在を意識しながら装甲を引き出していく。

曖昧で、雲を掴むような感覚に遅れ、一つの気配を感じ取る。それを引きつけ、指先から徐々に交わっていった。

「木曾さん、いつでも行けるぞ」

「そのようだな。いくぞ伊勢さん」

「なるほど。そいつがお前のお気に入りか」

「そんなところだ。うちじや一番若いけど、油断すると痛い目見るぜ」

伊勢に目を合わせながら投げてきたのは日本刀。木曾が使っている明丸《鋼》だった。

「いいのか？ 大事なものなんだろう」

艀装同調しているため、わざわざ口にしなくても通じているが、それでも聞かすにはいれなかった。

「いいんだよ。なあ伊勢さん」

「ああ。それはあたしのだけど、取りに戻るのが遅くなったからもう木曾のもんだ。持ち主の好きにすればいい」

「だ、そうだ」

気にするなという意思が武蔵に流れ込んでくる。

ならばと遠慮なく鯉口を切り、刃を日の下へさげ出す。

「いいか武蔵。皮膜をそいつで切り落とせ。まあ多少下の肉体まで斬つても構わん。その痛みで目が覚めるかもしれないしな」

言っていることは些か物騒ではあるが、本人はまるで悪戯つ子のようにニヤリと笑いながら告げてくる。

伊勢も伊勢でそれをわかっているのか、焦ることもなく平静に返してくる。

「おいおいあんまり傷つけてくれるなよ。痛みで暴れるかもしれないぞ」

「そうしなくてはなれば自分の体の回りを装甲で防ぐように意識しとくんだな」

言い終わるが否や、木曾は一気に距離を縮めて切り込んだ。

予め艤装同調でわかつていた武蔵も背後へ回し込み、自分が発生させた水柱が落ちるよりも先に刀を振り切った。

第六章八幕 届かぬ過去

腕を振るった。

手に握られた薙刀。明丸《夜桜》が目の前にいる深海棲艦を纏めて両断する。

向かってきた軽巡級の胸を穿ち、突き刺した状態で薙刀を振るい戦艦夕級に投げ飛ばす。手元が狂い足元へ落としてしまったが、夕級に隙が生まれているところへ飛び蹴りを行い頭部を消し飛ばす。

縮地による飛び蹴りのため勢いは止まらず、着水するまでの間、乱雑に薙刀を振り回す。

その行為でどれだけの戦果が上げられ、そしてどれだけの迷惑をかけているかも、鳳翔はまるで気付いていない。

「次！」

ただがむしやらに戦う。泣くことでしか表現の仕方を知らない赤子のように。

そして事実鳳翔は涙を浮かべていた。

当の本人も気付くことなく。

薙刀を振り回しながら、それでも頭の中にあるものは戦場のことではなく、全て伊勢

にまつわるものだった。

確かに間宮や綾波達という時間のほうが長かったが、それでも彼女と過ごした時間がないわけではない。そしてその実力も身にしみてわかっている。

それでも一緒に戦いたかった。取り戻したかった。何より、助けたかった。

自分が成長すればするだけ伊勢の功績に気付かされる。

たった一人で日本全てを守っていたのだから、容易なはずなどない。

そんな人をつかかく救える機会の側にいながら、手が出せない。出させてもらえない自分の弱さに嫌悪する。

当然これまで努力はしてきた。

何度も何度も死地をくぐり抜け、今日まで生きてきたのがその証だ。

でも、それでも、届かない域があるのだと木曾に突きつけられた。

「あああああああ！」

鬱憤を晴らすように叫びながら、目の映る存在を切り刻む。

どうしてと。

どうして自分をもっと。それこそ木曾のように生と死の境界を目指さなかったのかと、今になって悔やむ。

故に鈍っていた。

故に見落とした。

目の前にいる存在が艦娘であることを。

「避けて！」

誰が叫んだかわからない。

鳳翔も気付いたときには既に薙刀の軌道を変えられないところまでいつていた。

思わず目をつむる。現実からそむけ、未来を閉ざすように。

しかし、最悪の事態は訪れなかった。

「赤城。怪我はありませんか？」

「は、はい。おかげさまで……」

声が聞こえ、恐る恐る目を開くとそこには大和が和傘型の槍、明丸《桜桃》にて受け止めていた。

周囲を見れば、いつの間にか集団を抜けていたのか、数百メートルも戦場から離れていた。

「大和。鳳翔さんを頼みました。私は念の為赤城を安全なところまで一旦連れていきま
す」

「頼みました」

龍鳳の指示に従い、赤城がこちらを見ながら離れていく。

その怯えた目を見てやっと自分が何をしでかしたのかを思い出し、目が泳ぎ、体が震えだす。数ヶ月も前、赤城に偉そうなことを言っておきながらのこの体たらく。愚かしいにもほどがある。

動揺から手に持っていた明丸も落としてしまったが、大和が海面に落ちる寸前に掴み取ってくれた。しかしそこに安堵はなく、寧ろ後悔が募るばかりだった。

「鳳翔さん」

大和は片手だけで薙刀を畳み、《桜桃》を消したことで空いた手を、思いつきり振り抜いた。

砲撃音がまだ聞こえるこの戦場に不釣り合いな乾いた音。

後からやってきた頬のじんわりとした痛みを感じ取り、やっと自分が平手打ちをされたのだと気付く。

次の瞬間には抱きしめられており思考が追いつかず、驚愕も困惑もできなかつた。

ただ一つわかったことがある。それは、
「どうして一人で抱え込むんですか！」

この子に迷惑をかけたということだ。

「私じゃ頼りないですか！ 不安だとか悩みだとか、言う価値ありませんか！」

身長差から彼女の胸に包まれる形となっているため、表情は見えないが、声に湿りつ

気を帯びているから泣いている。いや、泣かせてしまったのだとやつと気付く。

胸の奥から聞こえてくる鼓動の音が、自暴自棄になりかけていた自分の心を穏やかにしてくれる。

私は今ここで生きているのだと教えてくれているようで、心の荒波が、風へと徐々に変わっていくのを感じ取れた。

「ごめんなさい」

だからこそすんなりと謝罪の言葉が出た。

「これは貴女のせいじゃないの。私が勝手に思い込んで、自分で自分を追い込んでしまっただけ」

「でもだからって——」

「そうね。私は今の今になって焦ってしまったようね。ごめんなさい。でももう大丈夫。貴女のおかげで、私はいつもの私でいられるわ」

「本当、ですか？」

抱きしめていた力を弱め、顔を見下ろしてくる。その目元にはやはり涙が溢れており、申し訳無さに心が痛む。

「私のために心配してくれてありがとう」

温もりから離れる寂しさに後ろ髪を引かれながらも、半歩だけ下がり、袖の下に入れ

ておいたハンカチを取り出して顔を拭いてあげた。

「当然です。私にとつて鳳翔さんは提督の次に大切な人なんですから」

今し方癩癩を起こした幼子のようなことをやっておいてなんではあるが、やや唇を尖らせながら言うその姿は少し子供っぽくて、それが愛らしかった。

涙を拭い終えた辺りで、大和がポツリと呟いた。

「あの人。先代伊勢はそんなに強いのか？」

大和の悩みか自分がそれに起因して自棄になったからか、どちらかはわからないが、ただ一つ揺るがない真実を伝える。

「ええ。とてつもなく」

こればかりは変えようのない現実だ。

融合棲姫とは戦ったことがないため比較は殆どできなかつたが、中身が伊勢とわかれば容易だった。

——木曾さんクラスで同等でしょうね。

冷静になればなるほど木曾の指示がいかに正しかったかを思い知る。

そして重く言ってしまったからか、大和が言葉を失ってしまった。

「そんなに動揺しなくても大丈夫ですよ。寧ろ貴女なら勝てるかも知れません。私の攻撃受け止めるまでに成長してましたし」

「いいいいええ。あれはただ体が勝手に動いただけで。それに鳳翔さんの動きがかなり荒かったのもあります」

無論そんなことはわかっていた。

それだけ戦い方が雑だったのは反省すべき点であり汚点でもあるが、大和の心が動いたのがわかっただけ、情けない自分をほじくり返した甲斐はあるというもの。

「やってみないとわかりませんよ?」

「もう、鳳翔さん。わかっていて言っていますよね」

「あら、もうバレちゃいましたか」

「当然です。普段からどれだけ一緒にいると思っっているんですか」

ぷりぷりと怒っている様が可愛く、身長は大和のほうが高いのに幼く思えるのは先輩の特権なのだろうか。

そんなことを思いつつ手を差し出す。

「さあ大和。木曾さんに言われた通り、全て沈めますよ」

「はい。イキましよう」

手に感じる重量。

渡された薙刀の重さは責任の重さ。

振るう覚悟を決め、本来の姿へと戻す。

これは深海棲艦どころか艦娘さえも容易に屠ることができると改めて自覚し、決意の下、戦場へと戻っていった。

第六章九幕 濡れた刃

三名しかいない海域。

それ以外のものは存在せず、仮に割り込みうものならばミキサーの中に指を突っ込むが如く粉微塵にされる。それほどまでに苛烈な戦場。

そう三名しかない。

四キロほど離れた海域では別の戦いが繰り広げられているが、ここには確かに木曾と伊勢、そして武蔵しか存在しなかった。

だが、縮地を行う際に発生する水柱は、憂に三十を越えて発生していた。

武蔵が一息に距離を詰め斬りかかるが、避けられたため反撃を嫌い即座に離れ、その間に木曾は伊勢の懐へ潜り込み足元へサーベルを振るう。しかし大きく踏み込む姿勢での斬り込みだったため、頭頂部へ手を置かれ回避され、おまけとばかりに装甲で頭部に衝撃が走る。

幸い装甲である程度防いでおり、来るとわかっていただけに回避運動に入っていたことから軽傷にもならない痛みで済んだ。寧ろその勢いを利用してサーベルを放り投げつつその場で一回転。踵落としてサーベルの柄頭を蹴りながら腕に突き刺しにいった。

さしもの伊勢も嫌ってか、受け流さずに縮地によるサイドステップを取る。が、それを狙って武蔵が再度斬り込みに行く。しかし伊勢の反応が早く、腕に動きに合わせて片手で腕をつかみ取り、空いた手で後頭部辺りを押して投げ飛ばす。

それは合気道の技の一つ、正面打ち回転投げだった。

本来はその場で叩き落とすような投げ技だが、幸い武蔵の突進力もあつてか放り投げるような形で失敗していた。

追撃はさせまいと木曾は肉薄し、サーベルを伊勢に向かって突きを繰り出す。仰け反って回避されることを予期し、背後から即座に復帰した武蔵に皮膜を切り取らせに行く。特に移動されるのが厄介なため、先に足を剥ぎ取ろうと画策していたのだが、これでも上手くないかなかった。突き出したサーベルの刀身を捕まれ、跳躍と同時に側頭部を蹴られそうになる。

慌ててサーベルを離し、蹴りを反らしながら手刀で脹ら脛の皮膜を落として行くものの、追撃の蹴りに断念し距離をとった。

畳み掛けるように武蔵が切り込むがサーベルでいなされ、木曾に行った蹴りの動作のまま、伊勢は海面を蹴ることで縮地を行い間合いが開く。

「いい動きしてるな新人。今のお前なら昔の木曾より強いじゃないか」

「そいつはどいつか」

軽口を叩いているが隙がないのが憎たらしい。

伊勢としての面が顕になってからの動きは段違いだった。

今までは恐らくその殆どを融合棲姫自身の力でやってきたのだろう。それが今や融合棲姫の力と伊勢の戦闘センスが合わさっているせいで出鱈目に強くなっている。

——オレの記憶にある伊勢さんより更に強くなってるしな。

伊勢に掴まれたままのサーベルを一度虚数に送り、再度手元に出現させる。

「おいおい手こずり過ぎじゃないか？ こっちは一人なんだぞ」

「馬鹿言うな。こっちだって多少は加減して戦ってるんだから当たり前だ。というか装甲の出力がおかしいだろ」

「あくまあそれには同意だ。こいつあたしより総量多いぞ」

「だろうな」

わかっていたことだが、明言されるとそれはそれで来るものがある。とはいえやることはかわらないのだが、距離を取ったことで余裕でもできたのか、伊勢の口が回る。

「なんとなく覚えてるが艦装を斬ったときのやつはやらないのか？ あれならいけるだろ」

現在伊勢の背後に艦装は存在しない。

出していないのではなく出せない。

あの時木曾によって両断されたことにより完全に破損させられたようだ。

確かにあの技を使えば多少光明が見えてくるかも知れないが、

「簡単に言ってくれるな。あれは加減が効かないんだ。いくら伊勢さんでも手足を斬り落とす可能性が十分にある。それに二度もあれがあんたに通用するとは思えない」

「まあ出る瞬間もうわかつてるし、多分防げるだろうなあ」

避けるとは言わない辺り、どういうタイミングでやるかもバレている。

「あれって本来艦娘同士で起こる反発現象を自分だけで起こしてやるんだろ？ よくそんな芸当でできるようになったな」

しかも種まで知られているようではやる理由などない。

「そこまで気付かれてはいさそうですか？ やるやつがいるか」

「そんなもんはやり方次第、だろ？」

「簡単に言ってくれ……」

本当に気安く言ってくるのだからたちが悪い。

恐らく伊勢は誰かを沈めるくらいならば、両足切り落としても構わないと言っているのだろう。

当然腕は自由なためある程度は動けるが、時間さえかければ追い詰められるだろう。だがその前に出血多量で死ぬ可能性の方が高い。つまりそうであったとしても、今は賭

けに出るべき時じゃないのかと問いかけられているのだ。

確かに木曾自身その考えはあった。

このままではいたずらに精神をすり減らしていくだけ。精神の疲労は肉体へと影響を及ぼす。現に武蔵はこの十分足らずで、疲れが表情に現れていた。

——どうする木曾さん。

武蔵から今後どう動くべきか聞かれるが、即答ができない。

——私はこのままでも構わないぞ。救えるならば確実な方が良い。もしくは刀を返す。

——そうなったらお前は どうする。素手で剥ぎ取りに行くのか？

——いや、囹役だ。あの感じじゃ直ぐに気付かれるだろうが、それでもほんの僅かな隙が生まれるだろう。そこを木曾さんについてもらう。どうだ？

逡巡する。

武蔵も覚悟の上で言っているのだろうが、それでもかなり厳しい。いや、実現不可能と言いつつたほうが早いかも知れない。それほど賭け。

超ハイリスクではあるが超ハイリターンでもある。

両足切断するのも同じくらいにはリスクは高いがリターンがあまりにも低い。

そして現状維持はハイリスクではあるがリターンも十分ある。

どうするか。

悩む時間が欲しいがそれも許してくれそうもない。

ならばと木曾は選んだ。

——このまま継続だ。お前が困りになった瞬間野太刀を出されたら対処できないだろ。

——そうだった。悪い忘れてくれ。

サーベルを左右に何度か持ち替え、右利きではあるがやはり感触として左が持ちやすいからと左手に持ち直し、握りしめる。

「なんだまた同じことを繰り返すのか？」

どうやらこちらの意図に気付かれているようで、呆れた顔をされるが確実性がないのだから仕方ない。

「そう思うなら少しはじつとしいてくれ」

「そうやりたいのは山々なんだけど、あたしに主導権殆どないんだわ」

わかりきっているだけにシヨックもなにもない。

殆ど反射に近いレベルの動きなのだろう。反撃への移りなど反則じみて早い辺り、伊勢の反応速度は人間は疎か艦娘のそれを越えていた。

そこまで考えふと思う。

艦娘を艦娘足らしめるのは、自分がそういう存在なのだど理解できる脳があつて初め

て成立する。そして艦娘も深海棲艦も同じく首を切り落せば死ぬ。何万とやってきたのだから間違いない。

融合棲姫は違うといえればそれまでだが、まだ伊勢の体は顔の部分しか露出できていないが、もし仮に頭部を露出しないしまだ残っている角を破壊することができれば融合棲姫より体の所有権を奪える。もしくは融合棲姫をここで仕留めることができるのかだろうか？

——いいなそれ。狙って見る価値はあるんじゃないか？

所詮仮説に過ぎなかったが、武蔵は乗ってきた。

目標が明確になればなるほどやる気はできるもの。

考え直すのは試してからでいいと木曾も一歩足を前に出した。

直後に行った縮地で突きによる突進を行った。

「馬鹿の一つ覚えか」

伊勢が右手一本で流されるが、直後に虚数へ送り右手へと持ち直す。不味いと思つたのか伊勢がその場を離れるものの武蔵が後を追う。

背後に伸びる融合棲姫の白髪をつかみ取り、引き倒すように力任せに引つ張つた。

背面から倒れかけていたところへすかさず武蔵が日本刀を切り落とす。頭部を狙つた一撃は、ハンドスプリングの要領で体を起こしながら刀身を蹴られたことで外し、手

で海面を掴み太ももで武蔵の首を挟んでこちらに向かつて投げてきた。

反応にワンテンポ遅れはしたが、艀装同調している強みで即座に対処する。

互いに出力を合わせ、姿勢制御しながらやってきた武蔵の船底を殴り、反発現象によつて加速させて放つた。

伊勢も立て直しにはまだ時間が足りない、完璧なタイミング。

この一撃で全てが終わらせられるかも知れない。それほどに非の打ち所のない一瞬の判断だった。

だが、伊勢はその上をいった。

武蔵は腕の一本は切り落としても構わないと覚悟を決め振るい、二撃目に決めるつもりだった。しかしその一撃目は伊勢が手にした野太刀で防がれ、二撃目を行うよりも腹を斬られた。

これならばまだ生存する可能性があるからまだいい。艀装同調しているためある程度のダメージも把握できる。どのような状況下なのかも。

それでも十分追い込まれていた木曾達だが、まだ足りないとばかりにふらつきながらも着水したはずの武蔵の足は、何者かに寄つて掴まれていた。

生き残りの潜水艦がまだ残っていたのだ。

武蔵の一瞬の葛藤が木曾の中へと流れ込んでくる。

縮地で距離を取れる可能性と潜水艦をここで仕留めるといふ二者択一。

瞬きをするよりも早く武蔵は決め、潜水艦を仕留めることを選んだ。

「やめろおおおおおお！」

伊勢か武蔵か。それとも両方にか。

どちらに言っているのかもわからないままに木曾はただ叫んだ。

武蔵が潜水艦を仕留めると同時に伊勢へ対応しようとして動いたが時既に遅し。野太刀が根本まで貫通し、刀身を紅く濡らしていた。

木曾へフィードバックするように腹部へ幻痛が走るが、それ以上に武蔵の言葉が心へ伝わってきた。

——すまない、と。

次の瞬間には野太刀を捻じり、横へ振り抜く伊勢の後ろ姿があった。

今すぐに斬りに行きたい葛藤と、冷静になれという思考がせめぎ合い、齒を食いしばって踏みとどまった。

「悪い木曾。やっちまった」

「ああわかつてる。伊勢さんが悪いわけじゃない。結局は覚悟を決めきれなかったオレが悪いんだ」

最初から伊勢を諦めると決めておけば、こうはならなかったろう。もしくは他の手段

を用いればと。

幾つもの可能性に縋りそうになるのを、手を強く握りしめて潰す。

後悔先に立たずとは言いが後何度同じことを繰り返せば良いのだと、自分の不甲斐なさに吐き気がする。

「木曾。覚悟を決めな。もうこれ以上犠牲者を出さないために、あたしを斬れ」

伊勢に。本当は助けたかった自分の師に言われ、虚勢を張ろうとしていた心に、一本の剣ができあがった。

「ああ、これからはもう遠慮はしない。悪いな伊勢さん。本当は……本当に助けたかった」

「気にするな。どうせあたしは死んでた扱いなんだろ」

「それでもだ」

「だからいいって。でも正直他の誰でもない、あんたに殺されるならあたしは嬉しいよ」
思わず涙が流れそうになるのを奥歯を噛み砕いて自制し、睨みつけながら大きく踏み込んだ。

第六章十幕 マリオネット

すまない。

そう心から思う。

先程沈めてしまった大和型はもう助からないだろう。故に謝るしかない。

謝罪したところで何も変わらないのはわかつているし、自分のやったことならば最後まで責任を持つ代わりに、ここまで申し訳なく思うこともなかっただろう。

—— 剣造にまた背負わせてしまっているのか、あたしは。

常にむすつとしたような顔が脳裏に浮かぶ。

まるで自分は喜びを感じてはいけなくても言いたげな顔を年がら年中しており、誰かを救うために躍起になる男だ。正直日本全域を一人で回るように言われた時は正気を疑ったが、途中からはなんだかんだで楽しめていたのだから、あたしもあいつの性分を嫌つてなかつたのがよくわかる。

もう会えないと思つていた。

最後に融合棲姫と相對した時、既にその覚悟はあつた。

あの時負傷した頭部は、縮地の反動に殆ど耐えられず激痛が走り、運良く勝つても戻

るにはかなり厳しかっただろう。

そう、あの時の最後は覚えている。

正確には今思い出した。大和型を沈めた時に細部まで。

絶好のタイミングで胸部を撃ち抜ける。そう確信のもとに繰り出した右ストレート。しかし殴ろうとした胸元に突然電の顔が出現した。

あの時あの場にいなかった時点で既に死んでいるとは思っていたが、まさかあのような形で再会するとは思ってもいなかった。融合棲姫の胸部にいた電に「伊勢ちゃん」と呼ばれ、柄にもなく動揺し、結果そのまま喰われてしまった。

なんと無様だろう。

なんと疎かだろう。

それまで偉そうにご高説を垂れ流していた者の最後がそのような形で終わることは、傍から見れば腹を抱えて笑うことしかできなかつただろう。

——ああそういうえば少し嘘を吐いてしまったのか。

細部まで思い出したことで過去の出来事が脳内で再生される。電は顔が出現し、また融合棲姫が体内へと戻そうとした時、吸収されずに消えてしまったことを。

そう、白杵鎮守府に所属していた初期艦電は、間違いなくあの海域で死んでしまった。

——あの世に創造が来たら謝らないといけないこと、増えてしまったな。でもあいつ

のことだ。どうせ気にするな。全て俺の責任だとも言いそうだな。いや、確実に言うな。

そこまで考えて、はたと気付く。何当たり前のように、人間らしく死ぬると思つていいのだろうか。艦娘に魂の概念があるかもわかつていないのに。

……所詮これは戯言だ。あるかどうかなんてのは些細なこと。簡単に言うなれば気持ちの問題だ。

しかしそれが伊勢としてはおかしくて、思わず笑つてしまった。

目の前で鬼気迫る表情で切り込んでくる木曾に目もくれず、涙が出そうなほど笑い声が抑えられなかった。

「……何が可笑しい」

鏑迫り合いをしながら苛立ちを隠そうともせず木曾が問いただしてくる。

それもそうだろう。自分の部下を。愛弟子を沈められたのに、沈めた元凶が笑つていれば嫌でもムカつくものだ。自分が木曾の立場ならば確実に、間違いなくぶつ飛ばしていいだろう。

「すまん。あたしも存外弱かつたんだなと思つてな」

「馬鹿言うな。だつたらこんな苦勞するかよ」

「実力の話じゃない。まあなんていうか、心だよ」

「は？　心？」

それまで木曾の眉間に寄っていた皺が消え、間の抜けた顔をした。

わかる。自分でも柄でもないことを言ったことは十分承知している。だからこそ少し言い淀んだんだ。だが、

「避ける木曾！」

今は殺し合いの最中。しかも体は伊勢の意思とは別に動く状態。そこに義理人情などは一編たりとも無く、殺意がたまたま人の形をしていた程度のもの。

木曾もそれがわかっているのか一瞬で切り替え、振るわれた左腕から離れるように跳躍して勢いを殺し、接触ダメージを最小限に抑えていた。

「本当に昔のお前じゃ考えられないくらい強くなったもんだ」

「そいつはありがたいが気の抜けるようなことだけは言わないでくれ」

「これが最後なんだからおセンチなことくらい言ってもバチ当たらないんじゃないか？」

「センチメンタルとか伊勢さんに全く似合わないな」

最もなことを言われてぐうの音も出ない。

事実ショックらしいショックも受けてないのだから自分の中ではとっくに割り切れているのがわかる。

「そーいや聞き忘れていた。剣造に……提督に伝えておきたいことつてあるか？」

——剣造、か。

昔の木曾ならば剣造のことを提督と呼んでいた。わざわざ言いなおさなければいけない程度には呼び慣れているのだろう。

自分と呼んでいたのだから別段おかしくはないのだが、どこかそれを不愉快に感じていた。

理由は不明。

自分が特別に思われたいからだろうかとも勘ぐったが、どうやら少し違うらしい。

ならばと考えるよりも先に、言い残すべきことを伝えようと口を開きかけたところで体が勝手に動き出す。

「おわつ。空気読まないなこいつ」

「あんたの体だろうが」

「だったらここまで苦勞しないんだよなあ」

ぼやきを入れても特に変わることはない。寧ろ前よりも戦いに貪欲になっているのを肌で感じとる。

木曾は確かに強くなった。下手したらかつての自分よりも。

だがこの体の戦闘力はかつての自分よりも更に強い。万全な状態で挑んでも確率的

に負けるほうが高いだろう。

そんな相手にここまで善戦できているだけで木曾の実力は本物であり、努力の賜物だ。そこまで至るのにどれだけのことをやったのかはわからない。自分自身努力などとは無縁だったために尚更。

そんな重要な戦力をここでなくさせるわけにはいかない。

どうにかならないのかと左右に目を振るが、ここは海のだ真ん中。打開策になりそうなものなどどこにも転がっていない。

体に力を込めてもやはりと言うべきか自分の意思では動いてくれず、自動で反応していた。体の感覚はあるかも知れない程度のため、露出している顔以外は動いていても無理やり引つ張られるような感覚さえもない。

そのため再度木曾と正面からぶつかるために行った突進でも、顔に風圧が少しあるだけだった。

何度考え直しても最悪だ。

何かをやった感触はなくても今は見れてしまう。これで木曾まで殺してしまつたら自分は果たして耐えられるかわからない。剣造に次いで木曾が最も深い付き合いをしてきたのだ。正直どうなるかなんて自分でも想像できなかつた。

——誰か助けてやってくれ。

初めて他人に助けを願った。これまで全て自分の力でねじ伏せてきたが、この状況は打破しようもない。だからと強く。声に出さなくとも強く願う。木曾が生還できるようにしてくれと。

無様にも誰かに救いを求めつつ、そんなこと知るかとばかりに体が木曾と切り結びかけた。

あと一秒にも満たない時間あれば再び激しい戦闘が繰り返される。そう思った瞬間、互いの位置の丁度真ん中で爆発でもあったかのような大きな水柱が立ち上る。

木曾は咄嗟に離れていくのを感じ取るも、この体はお構いなしに飛び込み、水柱を切り払うように野太刀を振るった。

水以外何もないはずの空間。そこで何かが擦れる音に遅れて腹部へ衝撃が走る。

痛みは皮膜側で持ってくれているのか特別なにもないが、それでも驚きだけは隠せそうもなかった。

「お前は、武蔵、か？」

「おお、そうだけ先輩」

第六章十一幕 掲げた旗をおとした日

何が起きたのだろうか。

明滅する思考と視界が、自分という個を壊していく。

ごぶりと口元から何か溢れ、それが紅く反射した気泡であることに気付くのに、数秒かかった。

——ああ、私は沈んでいるのか。

今日だけで三度目となる海中は、日が上がったことで一番温かくなっているはずなのに、寧ろ冷たく感じ、何もかも吸い込んでしまいそうなほど深かった。

——最後どうなったんだ？

伊勢にやられたことは覚えていた。あまりにも鮮やかで一瞬だっただけに直ぐに思い出せそうもない。艦装同調も切れており、木曾の存在も感じ取れないでいた。

そこまで思い出し、少しだけだが記憶が掘り返さえる。

——そうだ。逃げるか潜水艦を倒すかで、潜水艦を選んだんだつたな。

最後の一瞬。自分が生きながらえることをほんの一欠片分考えたが、ジリ貧だったあの戦場ではどれほど役に立てるか。何よりあそこで仮に逃げられても負傷は免れな

かっただろう。

木曾のお荷物になるくらいならば、木曾の邪魔になる潜水艦を沈めることの方が重要と判断し、自らの命の放棄したのだ。

勿論万に一つの賭けで生存するべき行動は取るには取ったが、やはりと言うべきか間に合わず、腹部を貫かれてしまった。

視界に映る景色は明るい青と赤で彩られていたが、徐々に光が遠くなっているのか、少しずつ薄暗くなっていく。

血の臭いに誘われ、鮫までもやってくるが、もうじき肉体は消えてしまう以上、どうでも良かった。

ただ一つ心残りがあるとしたら、

——《鋼》持ってきてしまったな。

右手に握られたままの日本刀、明丸《鋼》。元は先代伊勢のものであり、それが木曾へと継承され、そして今日自分へと貸し与えられた。

そんな重要なものと共に海底へ落ちていくことに、申し訳無きで心が溢れそうになる。

これは間違いなく木曾と伊勢を繋ぐものであり、木曾にとって大事なもの。宝剣といつても差し支えないだろう。そして恐らくは提督にとつても。

そのようなものを抱えたまま沈む。それだけは絶対に避けたかった。

だが沈みゆく体に力は入らず、意識は更に遠のきそうになる。そんな時、いつか聞こえた声が再び耳に届いた。

【力が欲しいか？】

今度は完全に、一言一句聞き取れたその声。

怪しいことこの上ないはずなのにどこか気を許してしまいそうになる声。

未だ通信が封鎖されていることを踏まえても明らかにおかしかった。

摩訶不思議で片付けられない現象だが、武蔵としてはどうでも良かった。

——ああ、くれるなら寄越せ！

声に出す気力はなくとも、心の内で叫ぶ。

——私はどうなつても構わない。だから！

神だろうが悪魔だろうが、この刀を届けられるならばこの身がどうなろうとも関係ない。

——くれるものなら貰つてやる。今すぐ私に力を寄越してみろ！

吼えた。

誰にも聞こえない声を。

どこにも届かない声を。

それでもと心の中で叫び続けた。

【良いだろう。これが最後だ】

二言目が聞こえた瞬間、気配を感じ取ると同時に、何か体がの中に入ってきた。まるでそこから入りやすいとでも言うように斬られた腹部から熱を伝わり、全身。ひいては艤装に至るまで伝播していくのを感じる。それらが何なのかは依然不明ではあるが不愉快さはなく、警戒心を抱くこともなかった。

唯一気付いたことがある。

しかしそれを心の内であつても言葉にするのは躊躇われた。もし単語としても思い浮かべてしまえば、これが全て夢幻の如く消えてしまいそうに思えたから。

だからジツと待つ。

また動けるようになる瞬間を。

目指すべき先を睨みつけながら。

もう意識と思考は、正常に戻っていた。

海面に向かって拳を振るう。

装甲によって伝わる衝撃波が波となり空へと打ち上がる。それに合わせ浮上すると殺気を感じ取った。即座に反応し、手に持つ刃で受け止め、隙をついて腹部に蹴りを入れた。

相応な威力が込めていたからか、いきなり襲ってきた存在、伊勢の腹部回りの被膜がポロポロと剥がれ海へと落ちていっていた。

「お前は、武蔵、か？」

「おお、そうだぜ先輩」

伊勢が驚いているからか、それとも体の主導権を持つ融合棲姫が警戒しているからか、直ぐには襲つてこず、珍しく緩やかに後退していた。

「武蔵、本当にお前なのか？ それにその格好……」

代わりに木曾が側に寄ってくる。奇異の目を向けながら。

それもそのはずだ。衣服に至るまでの艤装全てが変わっていた。

元々かけていた眼鏡は薄くなっており、サラシとスカートだけだった衣服は黒の上下で統一された軍服のようなものへ変化し、背後に陣羽織のような外套を棚引かせ、船体部分も更にゴテゴテしくなっていた。

「まあなんか知らないがこんなことになってしまっていた。恐らくこれが木曾さん達と同じ改二というものののだろう」

「馬鹿な、あれは剣造の許可がおりて大量の資材を使いなるものだぞ。しかも工廠じゃないとできない」

口早に反論はするが、武蔵の見た目が変わっている以上木曾もわかっているはずだ。そのためか、言うだけで否定する言葉に力はない。

何より武蔵には確信があつた。これが改二であることに對して。

「私もわからん。ただ素材だけならあつた」

先程伊勢の斬撃を防いだものを掲げる。

そこには刃渡り一六〇センチの刀。所謂野太刀と呼ばれるものが握られていた。

「すまん木曾さん。せっかく借り受けた《鋼》だが、どうやらあれに使つた資材を私の改造に使ってしまったようだ。そのせいで無くなつてしまった」

今武蔵が握っている野太刀は明丸でもなければ借りていた《鋼》でもない。恐らくは武蔵の深層心理に反応し、あの声が特別にくれた艷装なのだろう。虚数との出し入れできるのがその証拠だった。

「いや、お前が無事なら問題ない。また明石さんに打ってもらえばいい。だよな、伊勢さん」

木曾が顔を向けた先で、伊勢が困った顔を浮かべていた。

「まいったな。びつくり箱がすぎるぞ」

「そいつには同意だ。だが仕切り直しさせてもらおう」

「そんな気はした。ああもう好きにしてくれ」

伊勢もどう言ったらいいのかわからず、投げやりに返す。

もし自分は傍から見ているのかわからず、もしくは困惑してまともな判断ができる気がしないだけに、当事者で良かったと思う。おかげでそういうものだと勝手に、理屈抜きで理解してくれた。

「だがまあチャンスかもしれないぞ。どうやらこいつ怯えているようだ」

伊勢が視線を落とす。腹部が剥がれ落ち、その先には伊勢の衣服と思わしき黒いインナーが見えた。あの格好には見覚えがある。同じ鎮守府に別の伊勢がいるのだから間違えるはずはない。

融合棲姫の全身が白かっただけに尚更目立つ。

「もしかしたらお前に怯えているのかもな、武蔵」

冗談っぽく言ってくるが、一喜一憂することもなく平静に受け止める。今するべきことはそんなことではないからだ。

「いけそうか？」

「ちよつと待つてくれ……とつ……ん……これだ。捕まえた」

艀装が變化したからか同調に時間がかかったものの、話している間になんとか繋ぎ直すことに成功した。

これによつてハツキリ確信を持たた。

融合棲姫は最大の好機を今全て失つたのだと。

——なんだお前、見た目は変わつたくせに弾薬ゼロなのか。

——どうやら気前が悪いようだな。見た目しか変えてくれなかつたよ。

——アホ抜かせ。装甲の総量更に上がつてるだろうが。

艀装同調しているためバレバレだつたようだ。

改だつた時を基準に言つても二割から三割増しと言つたところだろうか。木曾との総量を合わせればほぼほ伊勢に肉薄する量にまでなつたはずである。

——これなら先程より役に立てるだろ？

——役に立たないなら端からここに残さねーよ。

中々に嬉しいことを言つてくれる。そして同調越しに伝えてくれた。伊勢を助けるのには自分の力にかかつていると。

そこまで師に期待されて気分が乗らない弟子はいない。

伊勢に視線を合わせたまま武蔵は左手を。木曾は右手を突き出し拳をぶつけ合う。

——行こうか。

——ああ。俺が揺動をやつてやる。

真つ先に木曾が動き出した。

一息で近寄り左下から切り上げる。

伊勢は右手に持つ野太刀を振り下ろして迎撃しようとするが、途中で木曾がサーベルを虚数へ送り回避。右手に持ち替え今度は右下から切り上げた。しかし伊勢は読んでいたのか反射だけでか、左手の人差し指と中指だけで挟んで防ぐ。

斬撃モーシヨンの途中ではあつたが、伊勢からしてみたらがら空きの胴が見えたのだろう。蹴りに来るのに合わせて木曾は膝を立てて防ぐ。衝撃は殺せずに来た方向へと戻されるように吹き飛ばされるが、怪我を負うほどではないのは同調で把握済み。

ならばと吹き飛ばされる木曾の影から躍り出て脚部を狙い斬撃を行う。

少し前までは日本刀だった。

刃渡り八〇センチの短いリーチ。

故に近寄るまでの時間分振るうタイミングが遅かった。

だが今は違う。

八〇センチ分早く斬撃へと移れる。

そのため今までは悠々と防がれていたものも、

「へえ、こいつはいけるかも」

伊勢が驚く程度には早く、そしてギリギリ届かないところまで迫った。

確かに剥ぐには足りない。それでも剣先で薄っすらと切り傷を入られた。

つまり今まで紙一重足りなかったものが、ついに紙一重に傷つけるにまで至ったのだ。ならば後はそれを両断するだけ。

木曾もそれがわかつてか果敢に攻め込む。

武蔵もそれに合わせて防がれた切っ先をそのまま、金属同士が擦れる異音を奏でながらズラして海面へつけ、そこを起点に旋回して円を描きながら足払いをやりに行く。軽い跳躍で容易に避けられたが、一瞬だけ木曾から意識がそれたならばそれでいい。

空中ではできることに限界がある。

野太刀で死角から迫りくる木曾を突きに行くが、サーベルでいなされながら回転。肘を突き立ててに行く。

伊勢の体である融合棲姫はそれを嫌って蹴り上げに行くが、使わなかった足を武蔵はつかみ取り、思いつき握りしめながら引っ張った。

互いに体勢が崩れた状況での行動だったため、伊勢の体は軸がずれて蹴りは空振りし、木曾の肘打ちは見事胸部へと突き刺さった。

「くソガアアアああああア！」

融合棲姫の意思がまだ残っているのか、伊勢の口を無理やり借りて吠えながら攻撃を止めなかった。

体勢を完全に崩していた武蔵へ野太刀を突き立てに行く。それを木曾が切り払い二人して即座に離脱後再度接近。サーベルを投げつけるが切り払われる。どころか折られてしまった。しかし木曾は気にすること無く、野太刀を振るった後の遅れを利用して懐へ潜り込み、右太ももへ拳を振るう。

そこへ柄頭で頭部をかち割りに伊勢が動くが、その隙を武蔵は逃さなかった。刀身への装甲が減った瞬間を狙い、一閃。

体の融合棲姫どころか伊勢が気付いたときには、野太刀は半ばから折れていた。

しかしそれでも攻撃は止まらず、木曾は左太ももの一部を剥ぎ取るのに成功したが、代わりに側頭部を柄頭で殴打され吹き飛ばされる。

今回ばかりは無茶をしたようで、武蔵にもダメージを殺しきれなかったのが伝わる。本来は艦装にダメージを逃がす誘導性艦装装甲もフル活用していたため、ダイレクトに近い形で受け止めてしまっていた。

幸いなのは伊勢側が自分の存在と肉体を防ごうとした部分も合わさり、思いの外威力が下がったことで、まだ戦闘続行可能な範囲内で抑えられていた。

「……が正念場だ。畳み掛けるぞ」

側頭部から血を流しながらも木曾はあえて口にし、鼓舞する。

今引くべきときではないのは武蔵も承知しているためそれ以上口は挟まない。

互いに何度も交差するように跳ねながら接近。最後の瞬間に木曾の手を掴み、反動でおきた回転を利用しぶん投げた。

伊勢は折れた野太刀で迎撃しに来るが、反応が何テンポか遅れ、更に斬撃が外れた。

本来正面からぶつかるはずだった木曾も、伊勢の異変。いきなり前のめりになったことで飛び越えてしまう。

何があつたかなどわかりきっていた。胸部から腹部にかけてすでに伊勢の体が露出している。そのため主導権が代わり始めていたのだろう。

そうとわかればと勢いを殺すことなく斬り込んだ。が、折れた野太刀で防がれ、更にはアツパーカットの要領で腹部へ拳を突き立てられた。

装甲の総量が上がっていたため特にダメージを負うことはなかったが、攻め込んだ勢いと殴られた反動で木曾を飛び越えそうになるも、出された木曾の手を掴むことで素早く着水し、構える。

「き、キイキ曾オ。む、ムツム、む。ムサシいいいいイイイイ！」

ここまで来ると最早本能か執念か。

再び融合棲姫は伊勢の口を使い吼えながら突っ込んでくる。

それに対し立ちふさがるように木曾は自分の前に立ち、縮地を行った。わざと大きな波を作つて。

武蔵もやつて来る波に向かつてそれ以上の波は発生させてぶつける。一瞬だけできる水の高台（アクアロード）。武蔵の身長と艦装であつても隠れるほどの大きさ。それに目掛けて一気に突き進む。

木曾に気を取られていた伊勢の上部からの強襲。

しかし流石と言ふべきか、伊勢は反応してきた。

構造上人も艦娘も左右には強いが上下の警戒は弱いのだが、どうやら通じないらしい。

伊勢は折れた野太刀で突きにくるが、木曾が手をかざして防ぎに行く。だがそれさえも貫通しやつてきた。上等だとばかりに武蔵も柄を握りしめたその瞬間、伊勢は体のバランスを崩したかのように傾いた。

数合前に武蔵が握りしめた足。その周囲の被膜が剥がれ落ち、完全に伊勢の足へと戻っていた。そして、伊勢が脚部の装甲を解除することで沈んでいたのだ。

「終わりだ融合棲姫！」

武蔵が叫ぶとともに、こちらを向いていた角目掛けて柄頭を振り下ろした。

本来使い分けしながら行使する装甲。その全てをこの瞬間にぶつける。

それを知ってか知らずか、伊勢は抱きとめている木曾の後頭部を二度叩きこよう言つた。

「でも頑張つたな、木曾。ありがとうさん」

木曾はそれに何も答えなかった。

きつと何も答えられなかったのだろう。泣いているのがバレてしまうから。

武蔵は気付かぬふりをし、やつと長い長い戦いが終わったのだと手をかざしながら空を見上げた。

そこには正午を示すように、眩しい太陽が頂点へと登っていた。

遠くで響いているはずの砲撃音は消え、代わりに海鳥の鳴き声が聞こえだす。それに遅れて誰かが呼ぶ声が聞こえ、武蔵は野太刀を静かに納刀した。

エピローグ

戦いが終わり、通信も復活したことにより勝利を告げたのが数時間前。

全員弾薬も重油も使い切っていた。それは生き残った艦娘全員に言えることだが、それでもあれだけの戦場を生き抜いた時点で装甲の扱いは一人前。そのためわざわざ送ることもなく各々の鎮守府へと帰宅していった。

白杵鎮守府へと武蔵が辿り着いたのは夕日が見える時間帯だった。

緯度の関係からどれだけ時間がかかったかは全員考えないようにし、一人ずつ陸へと上がつていく。

約二日ぶりに見る鎮守府のはずが、とても長い間留守にしていたような気持ちになるほど懐かしく、そして癒やされた。ここが自分たちが帰ってくる場所なのだと教えてくれるように。

それでも足は海でも恋しいかのようにフラフラする。

軽く顔を見渡せば全員陸酔いをしていよう、落ち着くまで待つっていると間宮がやってきた。

「おかえりなさい」

「ああ、ただいま」

間宮は目元に涙を浮かべながらもゆっくり一人ずつ持ってきたグラスを渡していく。中に入っているのは何でももないただの水だが、大変ありがたかった。

一口水を含むと、雑味のない液体が疲れた体に染み込むように、じんわりと重さを感じながら喉の奥へと消えていった。

二口、三口と同じように飲んでから、最後は一気に流し込んだ。戦闘状態を切つてから数時間は経過していたが、水を飲み干して初めてまだ自分が警戒状態にいたことを知る。

このまま芝生の上に寝転がりたい気持ちになるがそれをぐつと抑え込み、礼を述べてから間宮にグラスを返した。皆が一息ついていている間にグラスを戻しに行った間宮を待つてから、全員で鎮守府内部へと向かう。予め提督には執務室で戦勝報告をすると言っておいたからだ。

先頭は旗艦であり秘書官である木曾が歩き、その後を全員が続く。そして執務室の前についたことで歩みを停止、二回ノックをした。

「入ってくれ」

中から聞こえた声に応じるように木曾は扉を開いてから中へと入り込む。続いて鳳翔、北上、伊勢、不知火、龍鳳、大和、武蔵、明石、間宮と続いた。

デスクの前に横一列に並び、提督が立つのを待つてから木曾が敬礼し、一步前に出て口を開く。

「我々日本太平洋艦隊。一九八六五名もの艦娘を失ったものの、見事ア号艦隊。タルタロスの撃滅を成功したことをここに報告します」

普段は絶対にやることのない形式じみた戦勝報告。

あまりにも大きすぎる戦果だからか、普段無事に帰るだけで喜ぶ提督だったが、どこか吹っ切れたような表情をしていた。

「ご苦労だった。お前たちのおかげで深海棲艦の脅威を大規模に削ぐことができた。これは世界中の人に称賛されるべき功績だ。俺はお前たちを誇りに思う。そしてありがとう。世界を代表してとまではいかないが、先に礼を言わせてもらう」

提督は帽子を取りながらデスクを迂回し、皆の顔を順に見てから深々と頭を下げた。我々艦娘は提督の配下になるのだからそこまでする理由などないのだが、それでも悪い気など一つもしなかった。

寧ろ提督の頭を見ると、自分たちの存在も負担になるのではと思うことがあるほどだ。

髪一本存在しないきれいな頭。

とある日を堺にストレスですべて抜け落ちたと言われるその頭皮。本当は三年ない

し四年前から生きてきたが、戒めとして剃っているのだと、帰る途中に話題となり初めて知ったのだが、そんな頭に向かって木曾は更に続けた。

「ところで此度の戦場で鹵獲したものがありません。そちらをご覧になつて頂いても宜しいでしょうか？」

わざとらしい口調に下げていた頭を上げつつ訝る。

敵艦は倒せば残らず全て消えてなくなるのだからドロップ艦だろうか？ などと提督が考えているのがなんとなくわかるだけにニヤケ顔を抑えるのが実に大変だった。

しかし木曾はそんなことお構いなしに素知らぬ顔で開けっ放しだった入り口へと腕を向ける。

途端に提督の表情が張り付いたのが目に見えてわかった。呼吸も止め、まるで時が止まったかのように静止し、遅れて体が振るえだしていた。

「よお、剣造。久しぶりだな」

「お、前は。伊勢、なのか……？」

声をかけられたことで呪縛が解けたかのように反応するが、声が体と一緒に振るえてくる。

「なんて顔してるんだ。それにその頭。何があつたんだ？」

「——つ悪いか」

「いや、悪くない」

恥ずかしいからか焦ってからか、提督は急いで頭を隠すように帽子を被り伊勢から背を向ける。自制心が強いのか、もう震えてなどはいなかった。

そんな提督に伊勢は遠慮なく近くまでより、背を向けた提督に自分もと背中を合わせ、体重を預けた。

「なあ、タバコ持つてるか？」

「ん？ ああ、あるぞ」

「サンキュ。誰もPEACE吸ってないからやつとこれで吸える」

タバコの箱とライターを借り、一本だけ取り出して鼻先で香りを楽しんでから啜え、火をつけた。伊勢はこれまで吸えなかった分を取り戻すようにゆつくりと煙を吸い、後頭部を提督の背に当てながら天上に向かって緩やかに吐き出す。そして吐き出した煙をか、それとも火のついたタバコの臭いか。はたまた執務室の香りを嗅ぐためか、鼻でもう一度大きく息を吸い込んでいた。

そこで異変に気付く。震えが止まっていたはずの提督が、再び振るえだしたことに。

そんな提督にいち早く気付いたのは背中を合わせていた伊勢だった。

「なんだ泣いてるのか？」

「泣いちゃ悪いか」

「いや、それも悪くない」

茶化すように言つたかと思えばお互いわかり合つているかのように、ごく当たり前のように返す。

艀装同調している時の自分と木曾のようなやり取りに、どこか羨ましさを感じ取つた。

「俺も吸つていいか？」

「ほれ……つてライターがなくちゃ吸えないだろ」

「そこにあるだろ」

そう言つて提督は振り向き、伊勢の肩を掴み正面に向けた。

そして肩に手を置いたままタバコとタバコの先をつけ合い、お互いの存在を確かめ合うように息を吸い火を灯す。

——シガーキス。

「なんだお前も泣いているじゃないか」

「……悪いか？」

「いや、悪くない」

再び静かに背を向けあつた二人を前に、武蔵はブーツと見ていると、耳元で明石に声をかけられた。「行きましよう」と。

確かにこのままこの場にはおじやま虫以外の何物でもないため受諾し、隣の大和にも告げるとそこから連鎖し木曾まで伝わり、全員音を殺して出ていった。

最後に出てきた木曾は音を鳴らさないように戸を締めてから、おもむろに首へと手を取り、そこにネックレスのようにつけておいた指輪を戸へと引っ掛けた。

その際床を濡らす雫に気付いたが、武蔵は再び気付かないふりをし、自室へと向かう。もし今の伊勢のように、木曾にいい人ができた時、同じように自分は大人しく祝福できらるだろうか。そんなことを考えながら。

あとがき

終わりました。遂に終わりました継承の鋼シリーズが。

途中メンタルの影響で執筆を止めかけた時もありましたが、なんとか完結まで漕ぎ着けました。

読んでくださった方々は本当にありがとうございます。ブックマとかつくだけでも大変励みになりました。

さてもう書くことはありません。

細かい設定とかは後々に年表と一緒に全開放する予定なので書いても……といった感じです故。

後日談とかも一応構想は簡単にあります、現状書く予定はありません。

ああこれだけは言えるか。

深海棲艦との戦争はまだ終わっていません。終わるのはこの後の作品予定だった、仮題「澄清の世（ちようせいのおよ）」にて終戦させる……はずでした。

内容は太平洋奪還作戦から一年後の日本。羽黒が主人公で継承の鋼ほど誘導性艦装装甲は使われない。というかほぼ使えない内容なのですが、まあ現状は書くかどうかは

わかりません。多分書かない、かな？

書いても長さが文庫本一冊分くらいの予定なので、また長編となるので完結させられる自信がありません。継承の鋼2はもうちよつと短くなる。それこそ5章で考えていましたが思いの外長くなってしまったし……。

それで思い出しましたが今回誰も沈めませんでした。白杵鎮守内では。初期構想だと長門が被弾した辺りは武蔵を庇って被弾し、その後武蔵が長門を守るも、振り返ったときには消えていたって感じだったのですが、今回はハッピーに行こうと生存させました。

伊勢も伊勢好きの方の熱に当てられ、初期構想だと継承の鋼の最後で本当に沈んでいた扱いでした。それが気付けばこんな有様です。

武蔵の下りはご都合主義と言われたらその通りなのですが、書き始める前に設定とシナリオを作り込むきらいがあり、途中改二が実装されちゃったのでねじ込むならどこだと考えた末にあそこでぶち込みました。

殆ど活躍させられませんでしたが、あれ以上長くなると助長かなと思ひ、スパツと終わらせちゃいました。

とまあ乱雑に並べましたがそんな感じです。

最後になりますが、本当に読んでくださりありがとうございます。まだ読んでない

方は p i x i v とハーメルンに上げているので好きな方で読んでみてください。そしてよければ感想をください。お待ちしております。

それでは長々と失礼しました。

ついで終わりたかったのですが、ハーメルン限定で1000文字越えないと投稿できないという事に今気づき、文字数を稼いでします。

ただこのまま文字数だけ稼ぐのも癪なので、ハーメルン限定ですが、先に白杵鎮守府限定の強さランキングでも書いちゃいます。

木曾>北上>武蔵>鳳翔>長門>伊勢>明石>間宮>不知火>大和>龍鳳

これは継承の鋼2が終わった段階時の平均的強さをベースに書いてます。武蔵が3番目なのは北上がレ級との戦闘の最中に成長して、木曾に肉薄するレベルまで達したからですね。んでもって武蔵は艦装同調が切れるとまだ装甲の扱いにムラがあるため。その分ゴリ押し可能なまでに総量が増えたのでこの位置。

長門は堅実に努力した結果。不知火は安定性がないのが原因。暴走状態であれば伊勢クラスまでは繰り上がります。

先代伊勢をこの中に入れると北上とほぼ同列。

とあることを二つほどこなすと自動で木曾と同列かそれ以上になってしまふ。勝手に。

つとまあこんな感じのを後々にあげます。

それでは。

闘争の鋼

人は誰しも争い、時として傷つけ合う。それが心か肉体か、はたまた両方かは場合による。

そして今木曾たちが行おうとしているものは、まず間違いなく肉体が傷つくことだった。

「本当にいいんだな伊勢さん」

「もう何度目だそれは。アタシがいつて言ってるんだから遠慮なんてするな。こっちは鈍った体をさっさと戻したいんだし」

肌に触れる優しい潮風とは裏腹に、二人の間ではビリビリと空気が振るえ始める。

もうこれ以上問答をしてもしょうがないと、両腰にさしている刀剣を一気に引き抜く。

左手に持つは軍刀、サーベル状のものを。

右手には新たに打ってもらった木曾専用の日本刀型の明丸《鋼・改（あらため）》。

元々持っていたものは武蔵が改二になる時に材料として使用してしまったため、突貫で明石に作ってもらったものだ。問題は正式明丸と違って強度が脆いのだそうだが、基

本装甲を纏わせて使うのだから問題はないだろう。

伊勢は伊勢で、そちらも突貫で作つてもらつた野太刀型の明丸《鋼》の鯉口をいざ切つてみせた。

縦真つ直ぐに立てた野太刀を親指だけでツバを弾き、野太刀をまるつと上方へ飛ばさうとする。その際に刃先がかけた瞬間に鞘で弾くことで回転させ、落ちてきたところを掴み取る。

昔は見ることもどうやっているかもわからなかつた行動だが、今では手に取るようになる。なんだつたら再現まで可能だ。

「は、存外この辺くらいならまだ鈍つてなかつたみたいだ」

だが所詮お遊びにすぎない。

やろうと思えば白杵鎮守府の者ならば全員再現は可能だろう。

伊勢も伊勢であくまで装甲や体の感覚を確かめるのが目的なのだろう。その程度と見余つていい相手ではないからだ。

「それじゃあそろそろ行くかうかね」

「ああ、だな」

二人して自分たちの提督である池上剣造へ視線を送り、合図を寄越せと目配せをする。

「お前らに無茶をするなど言っても無駄だろうからそれ以上は言わん。他の者もいるのだ。致命傷を負っていようと即ドッグ行きだ」

提督の左右には白杵鎮守府の艦娘がずらりと並んでいる。見学兼剣造の護衛目的だ。念の為砲撃は禁止のルールが課せられてはいるが、戦いに夢中になり忘れることを考慮してのこと。

「伊勢、木曾。お前達二人は新旧でのエースだ。気の済むまでやってしろ」

本当に人をやる気にするのが上手い人だと木曾はつくづく思う。伊勢も同じ気持ちなのか、懐かしそうに笑みを浮かべている。

「では準備はいいな。それでは——初め！」

剣造の掛け声とともに木曾は縮地を行い接近する。

元々鎮守府湾内のためあまり距離は取れず、精々一〇メートル程度しか離れてない。となれば接触するまで一秒さえも不要だった。

「——ふうっ」

息を短く吸い込み左右の刀剣を上段から一気に振り下ろす。

伊勢はまだ一步も動いてはいなかったが、来るとわかつていたのだろう、安々と野太刀で受け止めていた。

木曾も木曾で伊勢との戦闘など何万回とシミュレートしてきた。簡単に勝てる相手

ではないことは百も承知である。

木曾は受け止めさせる体勢のまま伊勢の顎先へと蹴りを放つと首の動きだけで避けられ、お返しとばかりにハイキックが飛んでくる。肘打ちを合わせて間をかせせてから再度斬り込みに行く。

サーベルを投げ飛ばし避けさせてからの日本刀で胴を斬りつけるが防がれる。直後にやってきた拳が顔を狙っていたため首だけの動きで避け、投げたサーベルを一度虚数へ送り再度手元へ出現さ、腕を狙って切り上げた。が、寸でのところで伊勢が足の裏に装甲を展開したのだろう。独楽のように回って避けつつも柄頭で側頭部を打ち付けに来た。

どうするかと悩むのも刹那。咄嗟に前転して野太刀と腕の間に足を通し、伊勢の左腕に絡みついた。

戦艦の膂力ならば重雷装巡洋艦の木曾の総重量、二〇〇キロ未満など屁でもないだろう。

それでも動きを抑制するには十分だった。

左腕を切り落として行きながら右腕は心臓部へと突きを放つ。

もし戦艦の装甲をフル活用して吹き飛ばそうとしても、足は腕を掴んでいるため離れることはない。

防ぐための手段など本当に限られている。両方だと尚更。

大体のものがこの状況だと心臓を躲すか防ぐかをして腕を捨てるのだ。だというのに伊勢は両方を守ってみせた。

「マジかよ」

「マジだ」

切っ先が触れる場所へピンポイントで装甲を出現させていた。

木曾は木曾で今装甲は切っ先にだけ集中させていたため、もし伊勢が装甲を分散させていたならば、装甲の総量の差を越えて斬りつけることができたのだが、その上を伊勢は行く。

こうなると絡みついていた足が仇となる。

伊勢は離れようとした自分の足を右手でつかみ取り、まるでタオルでも振り回すように振りかぶってから海面に叩きつけようとした。

戦艦の臂力に装甲の力が加味される。おまけとばかりに人が散々練習して得た技である自分だけの反発現象をやったのけたため、更に加速。こうなると艦娘は対処できなければ大破は確定。木曾でも例外ではない。

ならばと木曾は両方の刀剣を握りしめ、海面に叩きつけられるよりも早く、海を切り裂いた。

叩きつけられる海面がなければただ振り回しているだけ。しかも叩きつける際に投げる予定だったのか、拘束から開放された木曾は海底につくまでの間に姿勢を整えて見事着地してみせる。逆に伊勢の足場をなくしたことでバランスを崩し、落下させることにも成功した。

とは言えつてもあの伊勢だ。切り裂いた海の側面を蹴つて上がるだけかと思いきや、わざわざ海底まで降りてきて、一緒に波に揉まれていく。

装甲から先の視界全てが深い青色で満たされた海中で二人は歩み寄り、このままやり合うのかと思いきや、上に行こうと指を刺され、断る理由もないことから了承した。

「あの泣きべそがここままでやるようになっているとはね」

「ちよつと待て、血反吐は何度も吐いてきたが泣いてなんかないぞ」

「そうだったけ？」

普段どおりの会話。

このまま何もなかったように終わって酒でも飲むのはありだろう。

だが、木曾も伊勢もそれを選ばなかった。

至近距離からの斬撃。

互いにぶつけ合った重い一撃は両者の明丸が堪えきれず、根本から折れてしまった。

でも木曾にはサーベルがあるとそちらで斬りつけようとして、目元に何か飛んでく

るのを咄嗟に回避する。それが折れた刀の破片を伊勢が握りつぶして投げたのだと知るのは終わってからのこと。

躲しつづ斬りつけたサーベルは伊勢が手の平で受け止め、握りつぶした。

その合間を縫って木曾は拳を叩き込む。

初めてのクリーンヒットが伊勢の頬へ突き刺さった。

体勢が崩れた伊勢に畳み掛けようと接近仕掛け、再び何かを投げられ横へズレると、待ってましたと言わんばかりに伊勢が蹴りを放ってきた。ギリギリで装甲により防げたものの完璧とはいいい難く、鼻血を流すには十分だった。

邪魔くさいと親指で拭き取り腰を低くすると、伊勢も懐かしい構え、ファイティングポーズを取っていた。

いつかの思い出。

伊勢と行った修行の数々。

その中には必ずあの構えが存在した。

越えたい壁。越えられなかった壁。もう届かないと思っていた壁。

それが今、目の前にあった。

——師匠を越えるのが弟子の努め、だよな伊勢さん。

絶対優勝。

何が何でも。

細く鋭い呼吸とともに、伊勢はかつての願いを踏み越えるように一歩足を前に出した。

棚引く外套を置き去りにするような高速の縮地を連続で行う。

伊勢は背後に回つても首を動かすことはなく、じつと前を見たまま構え続けていた。舐めているわけではない。

下手に動くと逆手に取られるのをわかっているから動かないだけなのだ、今の木曾にならばわかる。そして背後こそ最大に警戒していることも。

ならばとあえて火中の栗を拾いに行くように、背後から攻め込んだ。

右ストレートで背骨を狙いに行くと、伊勢は軸をズラしながらも反転。自分の拳へ左腕を合わせるように突き出してくる。

装甲の差で本来ならば負けることが必定だが、誘いで放った右拳を開き、受け止めるようにしながら左の掌底を伊勢の伸びた肘に叩き込む。

苦痛に歪む伊勢。

それもそのはずだ。いまで確実に骨を折ったのだから。

でもさすがは伊勢と言うべきか。

かつて最強の名を欲しい物にしていただけのことはあった。

木曾の攻撃に合わせて反撃として膝を突き立てていたのだから。

モロに受けた木曾は肋骨が三本程折れたことを自覚しながらも、その場で高速回転し、受け流しに使用した右腕で裏拳を放ち、お返しとばかりに肋骨を二本ほど頂いた。負けじと伊勢が右拳を振るうが、木曾は即座に距離を取り、最接近する。伊勢が対処しづらい左側から。

伊勢は持ち前の反応速度で足刀蹴りを放ってきたが、木曾はそれを支え代わりに利用してドロップキックを決める。が、ダメージは浅く隙だらけの肋骨にアッパーカットが決まってしまった。

「がっつ」

左右両方の肋骨をやられたことでただ歩くだけでも激痛が走るが痛覚を抑え込み、やられた体勢のまま伊勢の頭を蹴り飛ばした。

「があ、くっそがああ！」

しかし空中での身動きを取るには制限がかかりすぎ、海面に足をつけている伊勢の方が早いのは道理。

着水するよりも前に接近し、がら空きの腹部へ拳を突き立てに来る。

万事休すかと木曾自身も思ったが、体は自然と動いていた。

来た伊勢の左拳を両手に集中していた装甲で受けずに反らしつつ、腕を支点にして回

り、伊勢が通り過ぎるよりも前に背中へと肘を突き刺した。

空中での攻撃の影響で受け身がお互い取れなかったが、装甲の再使用は重雷装巡洋艦である木曾の方が早い。故にと一気に攻め込んだ。

しかし伊勢はそれさえも読んでいたのか、接近直後の木曾に左腕を繰り出す。今更止まれるものかと木曾も拳を突き出した。首をひねりながら。

突き刺さったのは、木曾の拳だけだった。

頬を擦り耳は持つていかれたが、伊勢の拳は木曾へダイレクトに当たることはなく、木曾の拳は逆に伊勢の頬を確実にとらえていた。

「やるじゃないか、木曾」

そう言つて、伊勢は海面に腰を落とす。

もう闘志のようなものは感じられず、穏やかな表情をしていた。

「あんたの勝ちだよ」

ゆつくりと伝えられた敗北宣言にわけも分からず、周りを見回し、剣造の顔を見ると頷いており、それでやっと自分が伊勢に勝ったことを理解した。

「やったあああああああああああああ!!」

柄にもなく叫び声をあげ、ガッツポーズまでもを取っていた。

でも今だけは許して欲しい。

たどり着きたかった域へ。
隣に立ちたいと思っていた人の側へ行けたのだから。